山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第114集

甲ッ原遺跡 II（第3次・第4次調査）

―一般県道須玉・八ヶ岳公園線建設に伴う発掘調査―

1996. 3

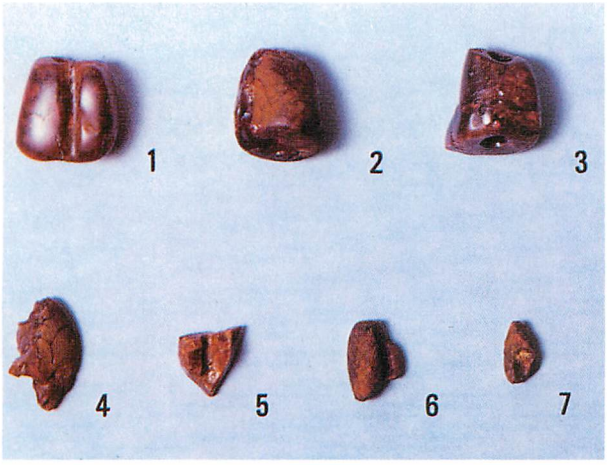
山梨県教育委員会

山梨県土木部

甲ッ原遺跡 II（第3次・第4次調査）

―一般県道須玉・八ヶ岳公園線建設に伴う発掘調査―

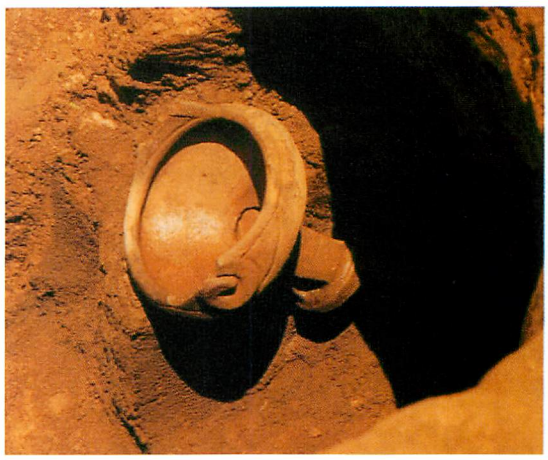
1996. 3



250号土坑(2 ～ 7)302号土坑(1)　出土琥珀製品(1/2)

250号土坑琥珀製垂飾(3)出土状況

248号土坑出土特殊脚付鉢



248号土坑　土器出土状況

漆彩文土器

(上)天神Ｃ遺跡　出土遺物

(下)甲ッ原遺跡Ａ区（第５次調査）出土遺物

図 1　漆彩文土器外面　30×

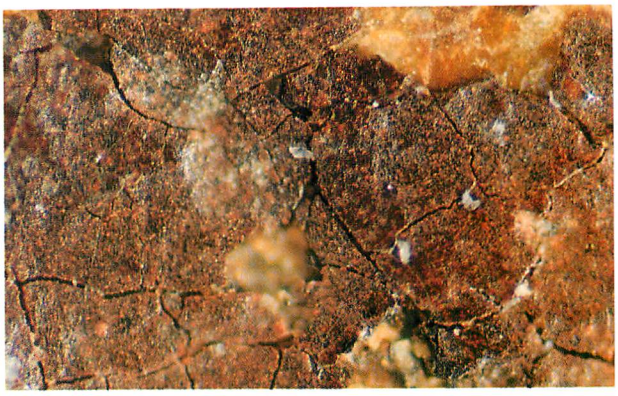


図 2　漆彩文土器赤色漆　120×

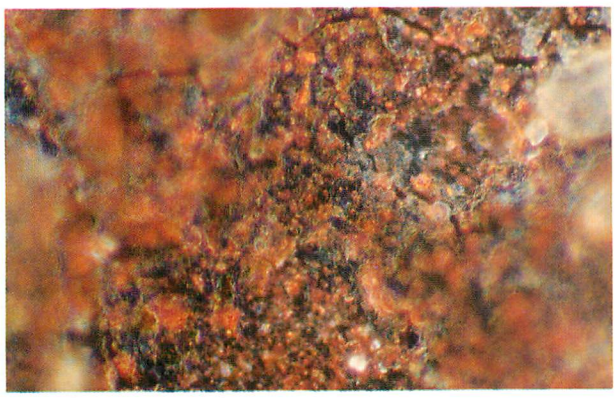


図 3　漆彩文土器赤色漆　600×

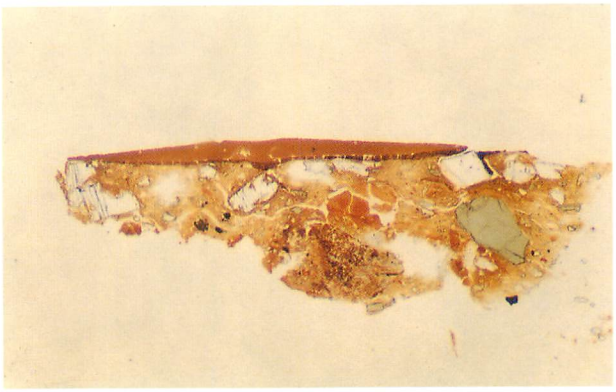


図 4　漆彩文土器漆線文様部横断面　60×

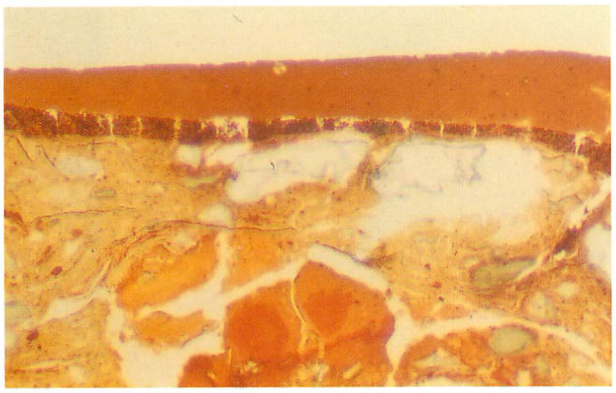


図 5　漆彩文土器漆線文様部横断面　240×

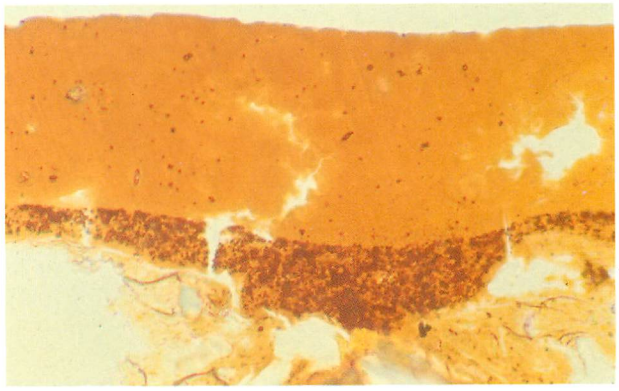


図 6　漆彩文土器漆線文様部横断面　600×

図 7　特殊脚付鉢外面赤彩　2.4×

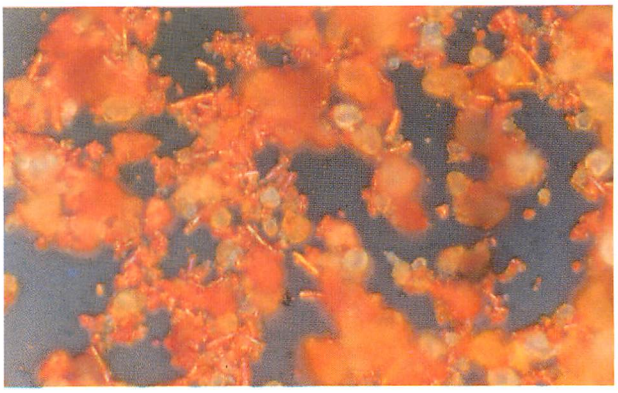


図 8　特殊脚付鉢外面赤色顔料　600×

序

本報告書は、一般県道須玉・八ヶ岳公園線建設事業に先立ち発掘調査が行われた、山梨県北巨摩郡大泉村西井出地内で調査し、先に報告致しました『甲ッ原遺跡　Ⅰ』に続くものであります。

今回の報告は、1991年度および1992年度に実施しました３区画のうちの、Ｃ区の調査成果をまとめたものであります。しかしながら、県道建設事業ということでありますから、南北に長い調査区域のためにＡ・Ｂ・Ｃ区と３区画を設定せざるをえず、1989年度の第１次から1995年度の第６次まで発掘調査が行われ、また各地区では未調査部分が残されており、1995年度以降も調査は継続される予定であります。

甲ッ原遺跡は、縄文時代と平安時代との主に二つの時代を中心とした遺跡でありますが、山梨県内でも特に大泉村は縄文時代の宝庫と言われていますように、本遺跡では特に濃密な集落跡を検出し多彩な遺物が出土しました。また平安時代につきましても、同時代の住居跡から判読可能な墨書土器が２点出土しております。

発掘調査では、今回報告するＣ区の一部を除く調査範囲内において、縄文時代前期後半から中期後半までの50軒を越える（拡張及び重複住居跡を含めると）住居跡群と300基を越す土坑群が発見されました。この遺構配置状況をみると、住居跡群が土坑群を取り囲む環状集落を形成するものであることが推定され、山梨県の環状集落の一例となるものと考えられます。

しかし、甲ッ原遺跡は広範囲に集落が形成された遺跡であり、その中の大集落のほんの一部分を調査しているに過ぎず、まだまだ不明な点が残されています。緩やかな南傾斜地につくられた遺跡は、現在畑地として作物がつくられており、また遺構確認面までは非常に浅いため、住居跡の大部分は壁が見つからず、ある住居跡によっては炉も破壊されているものも存在しています。元来、遺跡周辺は表土（耕作土）が浅く、30～50㎝で遺構が確認されるばかりでなく、現地表面でも遺構の存在を知ることも可能な土地で、土器片や石器片等が多数散布している状況であります。

最近では別荘や他県から移住されて来られる方々の住宅地も増えてきており、地元の大泉村教育委員会によって調査が進められてきております。自然環境のよい、そして風光明媚な大泉村ですから、これからも個人宅地が増えてくることは十分予想されるわけであります。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、多くの皆様方のご協力を戴いてきたところであります。特に調査にあたっては、地元の皆様やそして夏場の調査中、遺跡内に水撒きのために快く水を下さった近所の方、別荘の方等の影の力をお借りいたしました。そして大泉村教育委員会を始めとして多くの機関・諸氏からご指導・ご協力を賜りましたことを、末筆ではありますが厚く御礼申し上げる次第であります。

1996年３月

山梨県埋蔵文化財センター

所長　大　塚　初　重

例　　言

1．本報告書は、1991年度と1992年度に、一般県道須玉・八ヶ岳公園線建設事業に伴って発掘調査された、山梨県北巨摩郡大泉村甲ッ原遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、山梨県土木部から山梨県教育委員会が依頼され、山梨県埋蔵文化財センターが実施した。

3．発掘調査および整理作業は、山梨県埋蔵文化財センターが行い、1991年度（第３次）は同機関の山本茂樹・今福利恵が担当し、1992年度（第４次）は同機関の山本茂樹・五味信吾が担当した。

4．本報告書の執筆・編集は、山本が行った。執筆は第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章　第１・２・３・４・５・６節は山本、第７・９節は山本・五味が分担した。尚、分析を委託した部分については、文頭に記した。

5．写真撮影は、遺構を山本・今福・五味が行った。遺物の写真撮影は山本が行い、土器の展開写真は小川忠博氏に依頼した。尚航空写真については、㈱シン技術コンサル及び㈱東京航業研究所に依頼した。

6．テフラ分析については、山梨文化財研究所の河西学氏に依頼し、結果は附編の中に掲載した。また漆塗土器の塗装技術については、国立歴史民俗博物館の永嶋正春氏に依頼し、結果は附編の中に掲載した。

7．本書にかかる出土品・記録図面・写真などは、一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

8．発掘調査および報告書作成にあたっては、文化庁の原田昌幸氏を始として関係諸機関・地元の多くの研究者の方々からご指導・ご協力を賜った。厚く感謝申し上げる。

凡　　例

1．図版の縮尺は、住居跡1/60・土坑1/40・土器実測図1/4・土器拓本1/3を基本としているが、一部変更している箇所があり、図版に明記した。

2．また土偶については、1／2を基本とし、小遺物についても1／2で行っている。焼土部分については　のスクリントーンがかけてある。

3．土器実測図で（　）内は住居跡番号を意味しており00の二桁で、土坑番号については、000･･･と三桁で明記した。また図版中で数字が羅列されているのは、ｐｉｔの深さを意味する。

4．第Ⅲ章　第２節　土坑で規模の／は不明を表わす。

目　　次

序

例　言

凡　例

第Ⅰ章　発掘調査経過

第１節　調査に至る経緯と調査経過 …… 1

第２節　調査組織 …… 2

第３節　調査方法 …… 3

第Ⅱ章　環　境

第１節　地理的環境 …… 3

第２節　歴史的環境 …… 4

第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　住居跡 …… 12

第２節　土　坑 …… 44

第３節　住居跡出土遺物（実測図） …… 82

第４節　土坑出土遺物（実測図） …… 100

第５節　住居跡出土遺物（拓本） …… 110

第６節　土坑出土遺物（拓本） …… 148

第７節　特殊土坑 …… 165

第８節　土　鈴 …… 169

第９節　平安時代の住居跡と出土遺物 …… 170

附　編

附編１　テフラ分析について

附編２　漆塗土器の塗装技術について

第Ⅰ章　発掘調査経過

第１節　調査に至る経緯と調査経過

甲ッ原遺跡は、山梨県北巨摩郡大泉村に所在し、八ヶ岳の南麓の緩やかに傾斜した尾根上に立地しており、東に油川、西には甲川によって挟まれたやせ尾根上にある。

本遺跡は、昭和46年度に遺跡分布調査が行われ、当時の記録によると、『東西150m、南北600mという規模で、範囲も広く出土遺物も多いことから代表される遺跡である』、と記載されている。遺物としては、『石斧・石皿・石棒』が表採されている。

このような遺跡地に、一般県道須玉・八ヶ岳公園線建設事業計画が開始され、工事に先立って遺跡の範囲確認のため、1989年度には発掘調査と並行して、表面採集による分布調査が困難であるために八ヶ岳東南麓遺跡ほか分布調査事業による分布調査が実施され、これによって南北の遺跡の範囲が明らかにされるに至った。発掘調査は、第１次調査から第６次調査までの６ケ年にわたって発掘調査が行われ、今後も更に継続される予定である。

第１次調査　1989年11月6日から12月12日　調査面積は、約1000㎡が対象であった。重機による表土の排土作業の後、確認作業を行い、住居数９軒・土坑５基・配石遺構と思われる石組が確認された。その結果、遺構密度及び冬季の関係で約500㎡の調査で終了し、次年度のために埋め戻し作業を行った。
調査担当者　山本・森原

第２次調査　1990年5月14日から12月27日　県道建設のため調査範囲は南北に長く、調査の進行上便宜的に北からＢ区・Ａ区と調査区を分割して行った。調査面積は、約3000㎡を対象とし、昨年度の残り（Ａ区）約500㎡の調査を行い、次にＢ区の設定の後、調査が行われた。発見された遺構は、Ａ区では縄文時代前期の住居跡３軒、中期の住居跡13軒、土坑110基、掘立柱建物跡４棟、および旧河道で多くの縄文土器片のほか石鏃、打製石斧、磨製石斧、石匙、石皿、土偶などが見つかっている。

Ｂ区では、縄文時代中期の住居跡５軒、平安時代の住居跡２軒、旧河道、溝状遺構、土坑などが見つかり、縄文土器片のほか、土師器、須恵器や打製石斧、土偶などが発見された。
調査担当者　山本・今福

第３次調査　1991年５月20日から12月27日　調査面積は、1800㎡を対象とし、Ａ区の設定箇所より更に南へ調査が行われる関係で、区切りのよい現道路で調査区をわけＣ区を設定した。また道路が緩やかに東へ曲がっていくことも考慮した。今年度の調査は、Ａ・Ｂ区及び今回新たに設定を行ったＣ区である。Ａ区の調査区域南側とＣ区は確認面まで浅く、耕作による撹乱が著しい。

Ｂ区では、旧河道がほぼ北から南に傾斜をもってＡ区に及んでいる状態が認められた。Ａ区は、昨年度の引き続き部分及び南側部分で、縄文時代前期前半の住居跡１軒、前期後半の諸磯ｂ式期１軒、中期12軒の計14軒の住居跡が確認された。また中期後半と思われる掘立柱建物跡１棟及び土坑約150基の調査を行った。

Ｃ区は、縄文時代中期の住居跡が８軒確認され、掘立柱建物跡１棟が含まれている。土坑総数170基で、耕作による撹乱が激しく、住居跡の壁や床面が認められないものも存在している。
調査担当者　山本・今福

第４次調査　1992年４月20日から10月30日　本年度は、調査面積1720㎡を対象とし、Ｃ区の調査を行った。表土から確認面までは浅く、撹乱が著しい。なかには床面にまで達する撹乱が入り込み、炉が破壊さ

れている住居跡が数軒存在する。このような状況のなかで発見された住居跡は29軒で、縄文時代前期後半の諸磯ｃ式期が６軒、中期初頭の住居跡２軒、中期中葉15軒、後半３軒、平安時代の住居跡１軒である。土坑は、約130基が調査された。

今回の調査では、県内でも発見例の少ない琥珀玉が検出され、更に縄文時代の遺跡からの出土は極めて珍しいものである。また248号土坑からは、特殊脚付鉢が出土し、脚部には３ケ所に三角形の透かしが施され、口縁部には漆と思われる赤彩が施されている。175号土坑からは、坑底より土偶の頭部が出土している。

調査担当者　山本・五味

第５次調査　1993年６月１日から10月８日　本年度はＡ区の調査を行い、調査面積は1000㎡である。住居跡は11軒で、その内訳は縄文時代前期後半の諸磯ｂ式期６軒、中期初頭３軒、中期後半２軒である。また土坑は、72基である。遺物として特筆すべきものには、漆彩文土器の破片出土である。また炭化種子が出土し、ドングリ・栗・クルミ等が見つかっている。

調査担当者　山本・野代

第６次調査　1995年９月20日から11月28日　本年度はＣ区の調査を行い、２ケ所の調査面積は820㎡である。縄文時代前期後半の住居跡が４軒、中期前半から中葉が７軒で、拡張された住居および時期不明２軒である。土坑は、10基前後である。

調査担当者　山本・川手

今回の報告は、Ａ・Ｂ・Ｃ区の３区画のうち、Ｃ区を中心として行ったもので、１部分未調査区域を含んでいるもので、1991年の第３次調査及び1992年の第４次調査が主体となっている。

第２節　調査組織

調査主体　山梨県教育委員会

調査機関　山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者　第１次調査（1989）　山本茂樹、森原明廣
第２次調査（1990）　山本茂樹、今福利恵
第３次調査（1991）　山本茂樹、今福利恵
第４次調査（1992）　山本茂樹、五味信吾
第５次調査（1993）　山本茂樹、野代幸和
第６次調査（1995）　山本茂樹、川手昌英

作業員・整理員　浅川たみ子、浅川美千代、浅川八千子、浅川茂子、浅川千代子、浅川久代、浅川もとじ浅川保代、浅川ちづ子、相吉よし江、相川一江、秋山松義、秋山半蔵、秋山満州朗、秋山蕉治、出月満寿江、出月遊亀子、出月多津子、井富保仁、伊林佳子、飯寄貞子、伊藤順子、石原はつ子、梅林はなの、閏間俊明、宇野文子、宇野和子、長田くみ子、長田和子、長田久江、長田てる美、長田可祝、大村昭三、越石　力、小宮山きよ、小清水清隆小林よ志子、斉藤かずみ、斉藤律子、進藤キクエ、塩島冨美子、須賀富雄、田中恒子、高坂博子、平重蔵、平美与枝、平真寿美、千野三男、千野松代、千野町子、千野あやめ千野仙三、千野富造、千野雅志、千野金子、土屋ふじ子、名取洋子、中込よしみ、内藤安雄、野中はるみ、長谷川巌、平嶋弘子、日向たまの、平井あさえ、菱山喜美子、藤森

房子、藤森秀子、藤森さち子、藤森里美、藤森かねよ、藤森ます子、藤森佐喜子、保坂典子、保坂実香子、細田絹代、三井種子、三井光恵、宮坂晴幸、望月和佳子、守屋敏子矢崎米子、山口淑江、山本　潔、八巻久子、八巻知子、若林初美、米山八重子、大森仁美、中澤敏雄

岸崎浩実、下平博行、加藤憲子、黒石亜矢子、藤倉美登理、水本和美（国学院大学）

協　力　機　関　　大泉村教育委員会

第3節　調 査 方 法

一般県道須玉・八ヶ岳公園線建設に伴い、1989年度から1995年度まで実施され、第１次調査の継続事業として設定された５ｍ×５ｍを１区画とするグリッド方式をそのままもちいた。1989年度第１次調査で500m²にグリッドを設定した関係から、第２次調査においてＢ区の設定を行わなければならず、南から北へ数字の「1.2.3･･･」を付すことで補った。また遺跡内における集落の存在からも、このような設定が望ましいものであると判断したことによるものである。Ａ区の集落は、グリッドの０設定から北では認められず南へ広がるものであること、Ｂ区の集落は、Ａ区よりさらに離れた場所に存在していることである。このような理由によりＡ・Ｂ区は、地区分けされている。またグリッド番号は、南北方向に数字の「1.2.3･･･」、東西方向にアルファベットの「A.B.C･･･」を付した。なおＣ区については、Ａ区の集落の密度が南へ下るにしたがい希薄となり、また東へ緩やかにカーブを描く関係上、現在の道路で分断されているところを基本として地区分けを行い、Ａグリッドより東に位置するものについては「Z.Y.X ･･･」と逆方向に設定を行った。

一連の事業のなかで、調査が点々とされてきたことによって、集落が数カ所にわたって存在していることが明らかとなり、結果としてこのような３区画の設定がなされている。

調査は、伐採・伐根の後重機による排土作業が行われ、その後遺構確認作業およびグリッドの設定を行った。遺構確認面までは非常に浅く、排土内にも遺物が混入していることが十分予想されるため、時期を見計らって排土内の遺物収集も行った。

また排土置場については、畑の所有者の了解を得てご協力をいただき、調査終了後早急に埋め戻し作業を実施した。

第II章　環　　境

第1節　地理的環境

甲ッ原遺跡は、甲府盆地からほぼ北西に位置する山梨県北巨摩郡大泉村字大林と和田に所在し（第１図）、大泉村は、八ヶ岳の南部の赤岳、権現岳、編笠山などの主峰群と、火山体斜面および火山山麓線上地、韮崎火山岩屑流の地形から構成される八ヶ岳山麓と、八ヶ岳火山泥流によって形成されたところに位置している。

火山山麓は開析されて台地化しており、特に富士川、須玉川に沿っては急崖が続き、前者による崖は〝七里ケ岩〟と呼ばれてきた。八ヶ岳火山地では、山頂から放射状に水系が発達しているが、一方火山麓扇状地では水系の発達は鈍くなる。特に火山扇状地の扇頂近くでは河川水は伏流することが多く、それらが再び湧泉するところが山麓に連なり、歴史時代以前から八ヶ岳山麓の集落の立地や土地利用に影響を与えてきた。

その中でも大泉村は、標高1000m付近に自然湧水帯を持ち、これらの湧水から流出する河川によって細長い尾根上に多くの遺跡が存在する結果となり、甲ッ原遺跡もまた例外ではなかったと考えられる。

このような環境にある本遺跡は、東に油川、西に甲川に挟まれ、南へ緩く傾斜した所に立地している。遺跡の

標高は、800m前後である。遺跡の周囲は、畑、山林となっており、一段低い西側では圃場整備事業によって稲作が行われている。

第2節　歴史的環境

大泉村も含めて周辺の八ヶ岳南麓では、縄文時代と平安時代、中世の遺跡が突出して多く知られ、弥生時代、古墳時代の遺跡は極端に少なくなる。甲ッ原遺跡の周辺においても同様で、多くは縄文時代と平安時代、中世の遺跡が知られている。

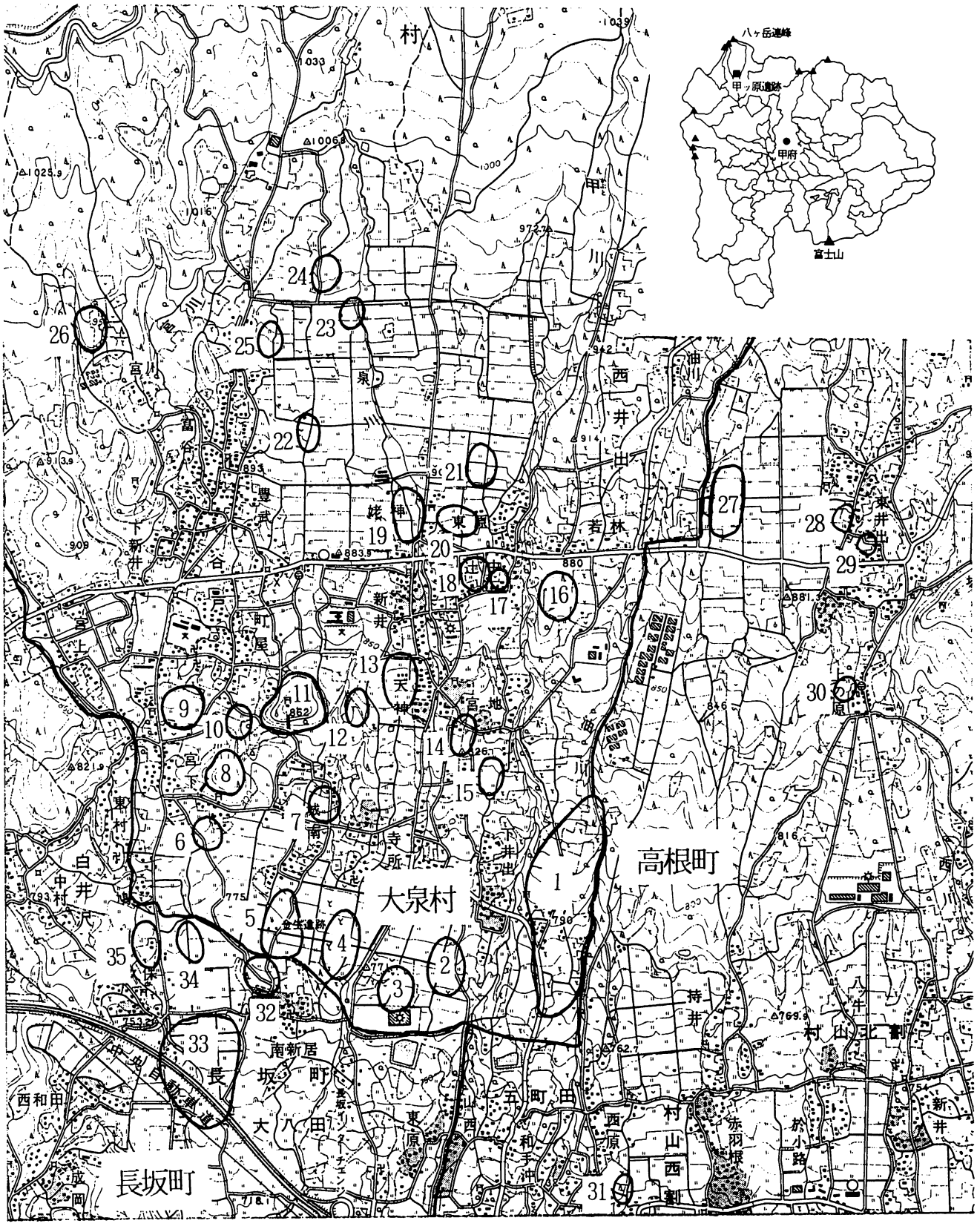
周辺の発掘調査では、甲ッ原遺跡の北西約1kmの天神遺跡（第1図No.13）で縄文時代前期の諸磯期の住居跡49軒、土坑400基以上の環状集落が調査されている。また西1kmの寺所遺跡（第1図No.4)では諸磯期の住居跡2軒が調査されているほか平安時代の住居跡が31軒検出されている。このほか前期の住居跡が確認されているのは、原田遺跡（第1図No.2)がある。縄文時代中期では、北西約2.5kmの小坂遺跡(第1図No.26）があり、標高は約950mの高所に五領ケ台期の集落跡が調査されている。また北西約500mに宮地第2遺跡(第1図No.14）、宮地第3遺跡（第1図No.15）が調査されている。特に、甲ッ原遺跡の北に位置する古林第4遺跡(第 1図No.16）の発掘調査が大泉村教育委員会で実施され、その際縄文時代中期中葉の住居跡からヒスイ製の笛が出土したことで関係者を驚かせた。曽利期では、姥神遺跡（第1図No.19）や方城第1遺跡（第1図No.22）などの集落が調査され、特に甲ッ原遺跡の西約1kmには、昭和58年に国史跡に指定された縄文時代後晩期の配石遺構を伴う金生遺跡（第1図No.5)が存在している。

平安時代の遺跡としては、先に記した寺所遺跡（第1図No.4)のほか、原田遺跡（第1図No.2)では3軒、城下遺跡（第1図No.7)では20軒、宮地第2遺跡(第1図No.14）では3軒の住居跡が確認されている。

中世の遺跡として代表されるものには、大泉村谷戸城跡（第1図No.11）があり、国指定史跡にされている。

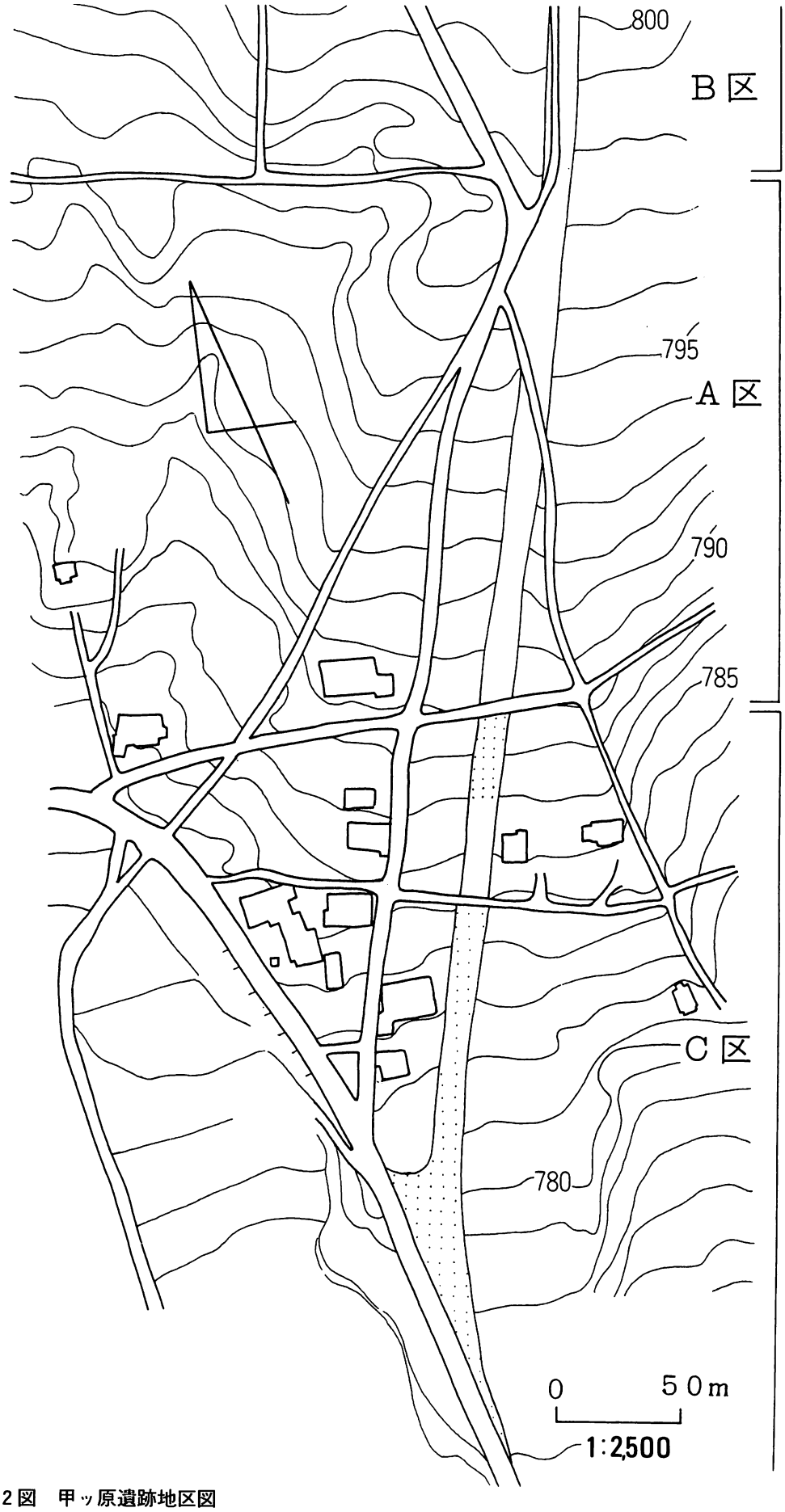
さらに甲ッ原遺跡の南端部に位置する箇所では、大泉村教育委員会によって東側に隣接する約1800m²の調査で、諸磯b、c期の住居跡2軒と土坑約100基、平安時代の住居跡1軒が調査され、中でも諸磯c期の住居跡は径8mを越える大形住居跡で、該期のものとしては異例で注目される。

また近年では、大規模開発や宅地等に伴い本遺跡の周辺において大泉村教育委員会（1994　大泉　10集）によって発掘調査が実施され、甲ッ原遺跡の規模が明らかにされつつあり、集落の研究の上でも重要な遺跡となることと思われる。



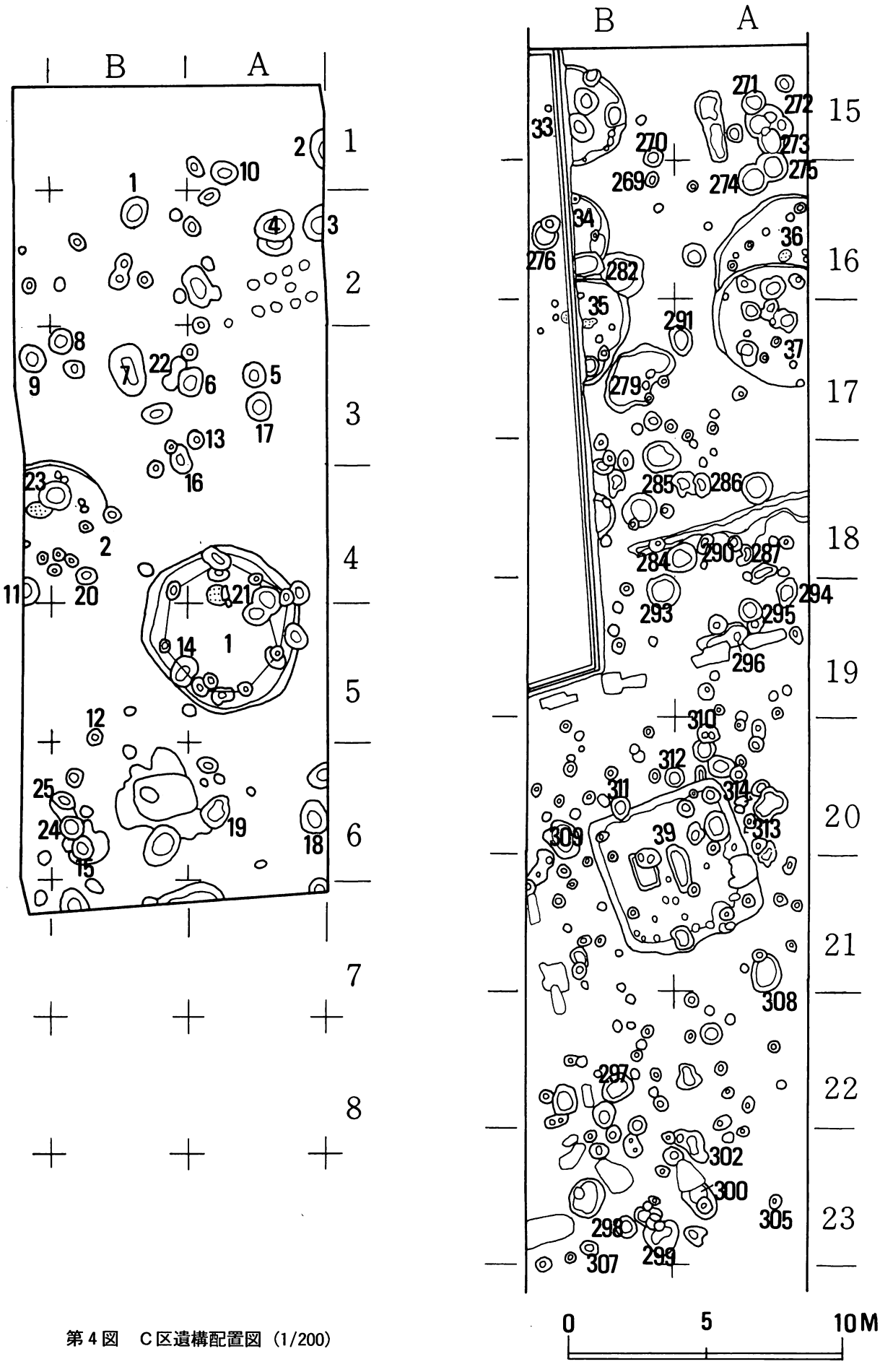
［大泉村］1．甲ッ原遺跡　2．原田遺跡　3．木ノ下・大坪遺跡　4．寺所遺跡　5．金生遺跡　6．豆生田第3遺跡　7．城下遺跡　8．前林山十三塚　9．谷戸氏館跡　10．御所遺跡　11．谷戸城跡　12．山崎第4遺跡　13．天神遺跡　14．宮地第2遺跡　15．宮地第3遺跡　16．古林第4遺跡　17．中村第2遺跡　18．中村遺跡　19．姥神遺跡　20．東姥神遺跡　21．東原遺跡　22．方城第1遺跡　23．大和田第2遺跡　24．大和田第3遺跡　25．大和田遺跡　26．小坂遺跡　［高根町］27．石堂B遺跡　28．石堂A遺跡　29．野添遺跡　30．山の神遺跡　31．西原遺跡　［長坂町］32．深草館跡　33．小和田館跡　34．別当十三塚　35．別当遺跡

第1図　遺跡位置図および周辺の遺跡図（1/25000）

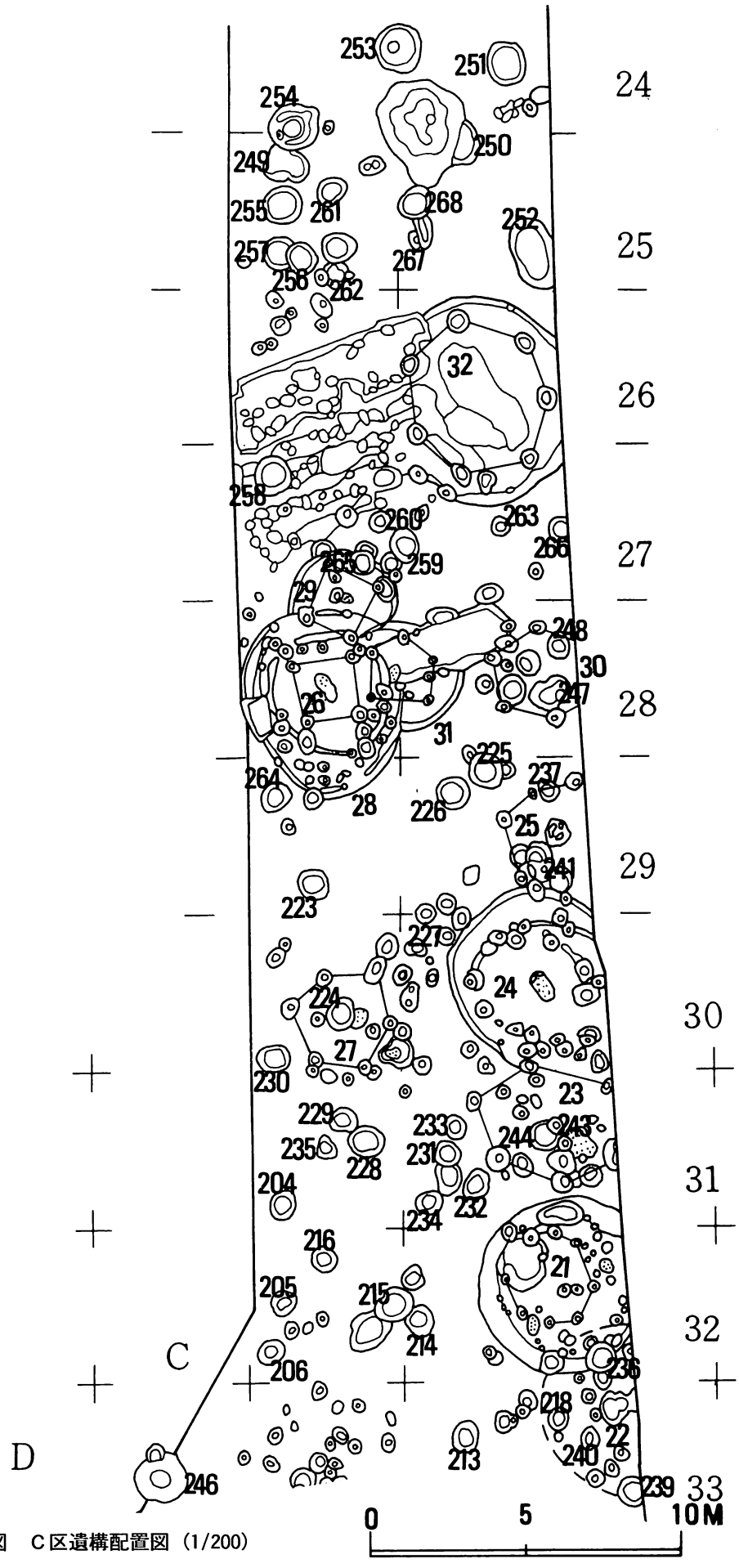


第２図　甲ッ原遺跡地区図

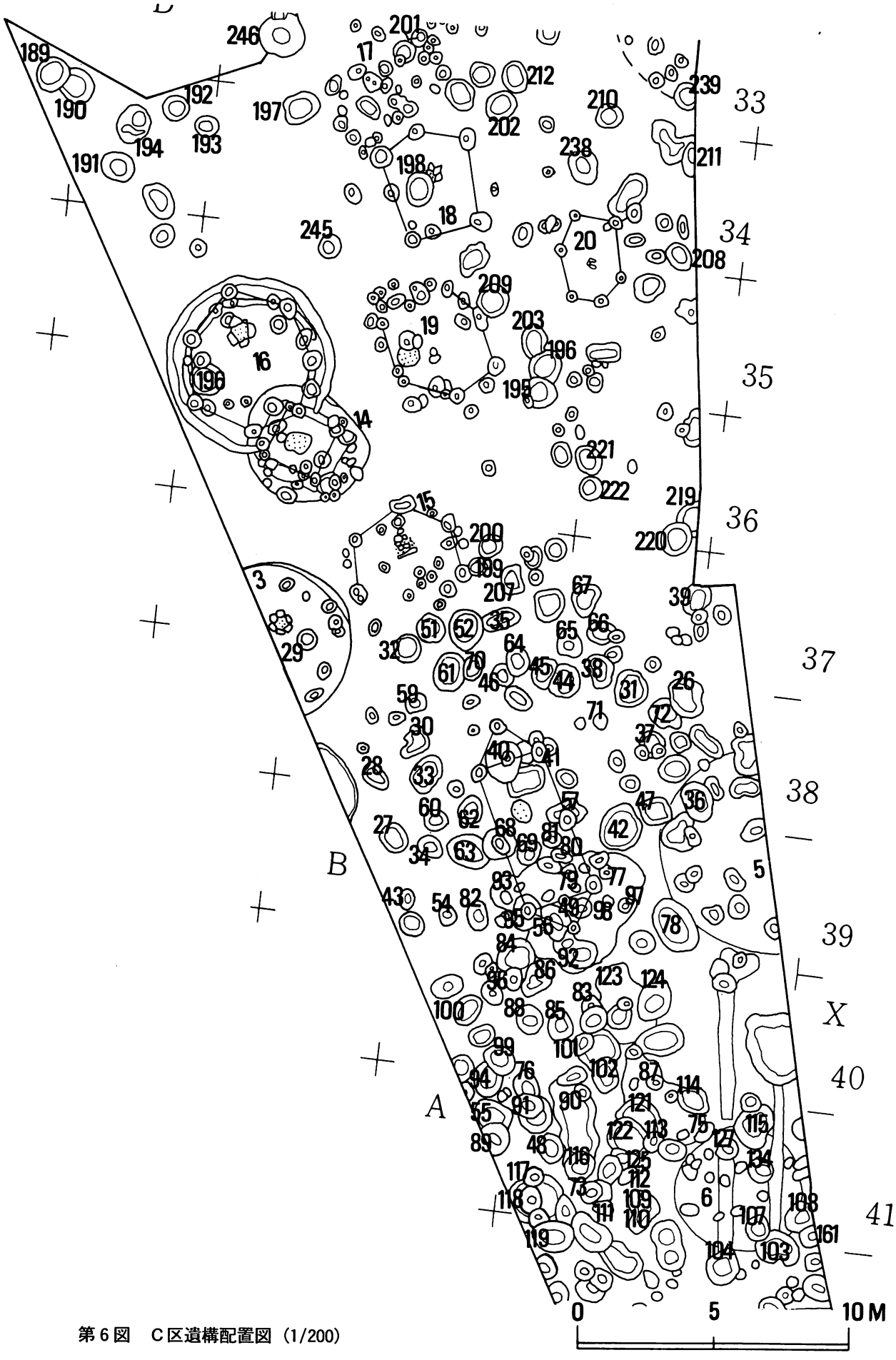
第３図　甲ッ原遺跡全体図（1/600）



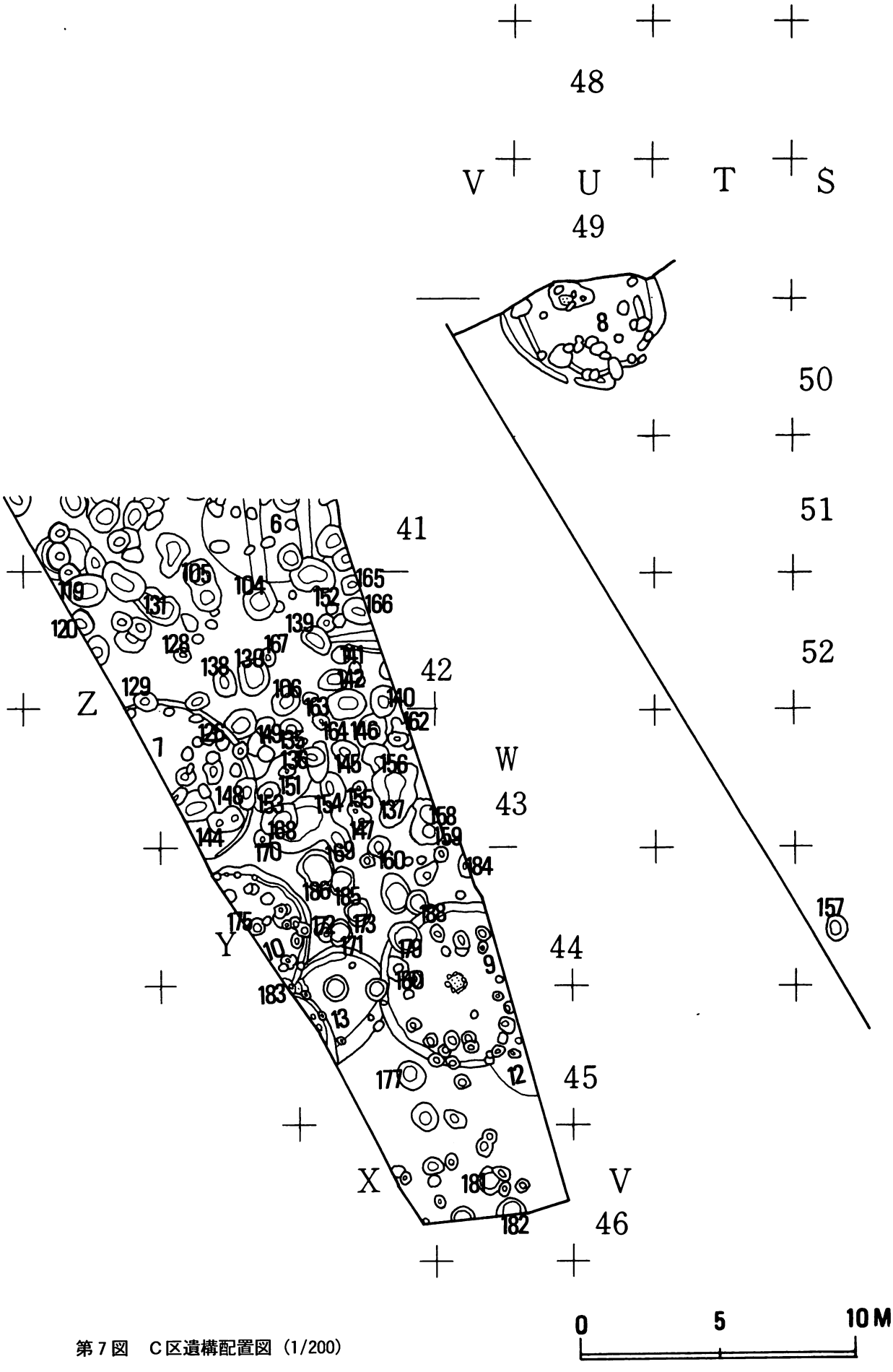
第４図　Ｃ区遺構配置図（1/200）



第５図　Ｃ区遺構配置図（1/200）



第６図　Ｃ区遺構配置図（1/200）



第７図　Ｃ区遺構配置図（1/200）

第Ⅲ章　遺構と遺物

第1節　住　居　跡

1号住居跡（第8図）

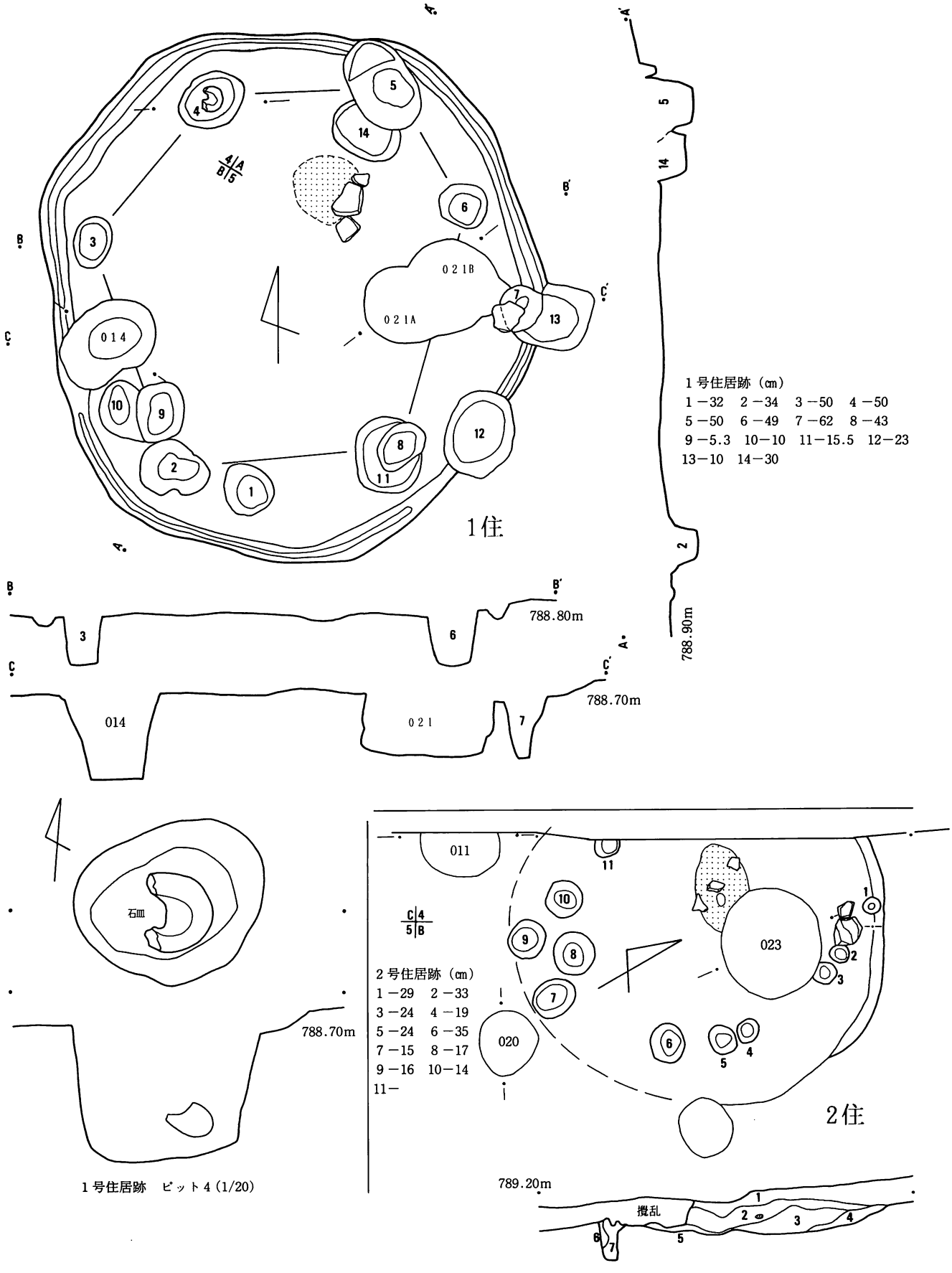
調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　A・B－4.5グリッド
平面形　多角形を呈すると思われる。
規　　模　炉を中心として5.80m×5.70m
周　　溝　全周し、幅は13～32㎝で、深さは2.5～16㎝である。
炉　　石囲炉
柱　　穴　2－8－7－6－5－4－3の7本と思われる。
埋　　甕　存在しない。
時　　期　井戸尻式期
備　　考　確認面から床面までは浅い。炉は、住居中央より北側の奥壁よりに設置され、破壊される。焼土の範囲は、76㎝×72㎝である。掘り込みは、床面から4㎝前後掘り込まれる。炉の位置より入口部は、南側の1辺に存在するものと思われる。
pit4は、深さが50㎝で底より7㎝上で石皿の皿部を上に向け、半欠けの状態で出土する。
土器片の出土は、少ない。
柱穴は、それぞれのコーナー部付近の内側に主柱穴が存在する。

2号住居跡（第8図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　B・C－4グリッド
平面形　円形ないし楕円形と思われる。
規　　模　推定4.20m
周　　溝　存在しない。
炉　　地床炉で、23号土坑によって破壊される。　95㎝×55㎝
柱　　穴　住居内に柱穴は11本存在しているが、主柱穴は不明である。
埋　　甕　存在しない。
時　　期　五領ケ台式期
備　　考　確認面から床面までは浅く、壁は北側のみ存在が認められ、8㎝～12㎝前後である。柱穴の配列には、規則性は認められない。出土遺物は、極めて少ない。
土層説明　1－耕作土　2－暗褐色土(暗茶褐色土粒子混入:3より明るい)　3－暗褐色土(褐色土粒子混入)　4－暗褐色土(3より暗い)　5－暗褐色土(ローム小ブロック混入)　6－褐色土(暗褐色土粒子混入　7－褐色土(暗褐色土粒子混入:6より暗い)

3号住居跡（第9図）

調査年度　1991・1992年度（第3・4次調査）
位　　置　B・C－38グリッド
平面形　円形と思われる。
規　　模　推定6.10m
周　　溝　住居の東側で認められる。幅10～30㎝、深さ2.7～13.7㎝
炉　　円形を呈する石囲炉で、住居のほぼ中央に設置され、6ケの礫で構築される。また礫は、全て



第8図　1・2号住居跡（1/60）

0　3m

平坦面が上に向けられ、炉石の１ケは石皿が転用される。

柱　　穴　住居の壁寄りに存在する。

埋　　甕　存在しない。

時　　期　井戸尻式期

備　　考　確認面から床面までは浅く、壁は北側から東側にかけて認められる。1.8～10.6㎝である。住居の約半分は、調査区外である。炉のほぼ中央部には土器が埋められた様な状態で出土している。

4号住居跡（第9図）

調査年度　1991年度（第３次調査）

位　　置　Ｚ・Ａ－39・40グリッド

平面形　掘立柱建物跡

規　　模　長軸東5.35m・西5.40m、短軸北2.42m・南 .54m

周　　溝　存在しない。

炉　　地床炉　住居の中央より北側に設置される。

柱　　穴　３本×２本の柱穴で構築され、北と南の短軸の中央及び外側に柱穴を有する。

埋　　甕　存在しない。

時　　期　不明

備　　考　耕作が著しく、立ち上がりは確認されない。短軸のそれぞれの中央にやや小規模の柱穴をもつ中央の張出部では7.94mを計測する。床面は、他の遺構との切り合い関係や、凹凸で軟弱のため確認されない。

5号住居跡（第10図）

調査年度　1991年度（第３次調査）

位　　置　Ｙ・Ｚ－39・40グリッド

平面形　形態は不明である。

規　　模　不明

周　　溝　存在しない。

炉　　住居のほぼ中央に設置される。

柱　　穴　多数存在する。

埋　　甕　存在しない。

時　　期　不明

備　　考　耕作が著しく、立ち上がりは確認されない。

6号住居跡（第10図）

調査年度　1991年度（第３次調査）

位　　置　Ｘ・Ｙ－41・42グリッド

平面形　形態は不明である。

規　　模　推定4.50mである。

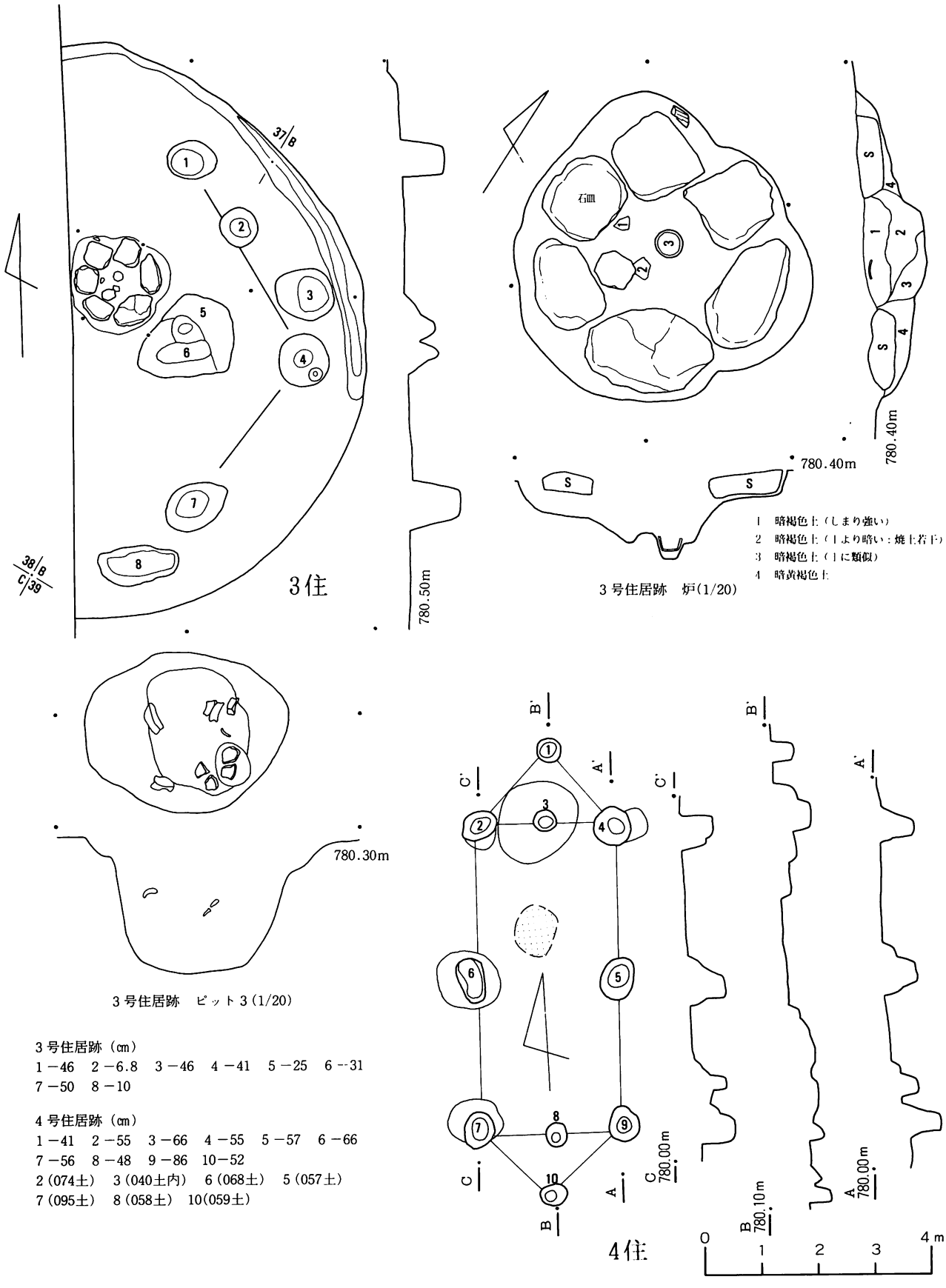
周　　溝　存在しない。

炉　　石囲炉　耕作によって１部破壊され、大形の礫が３ケ認められる。どの炉石も平坦面が上に向けられる。

柱　　穴　多数存在する。

埋　　甕　存在しない。

時　　期　井戸尻式期



3号住居跡（cm）
1－46　2－6.8　3－46　4－41　5－25　6－31
7－50　8－10

4号住居跡（cm）
1－41　2－55　3－66　4－55　5－57　6－66
7－56　8－48　9－86　10－52
2(074土)　3(040土内)　6(068土)　5(057土)
7(095土)　8(058土)　10(059土)

第9図　3・4号住居跡（1/60）・（1/100）

0　3m

備　　考　耕作が著しく、立ち上がりは確認されない。

7号住居跡（第10図）

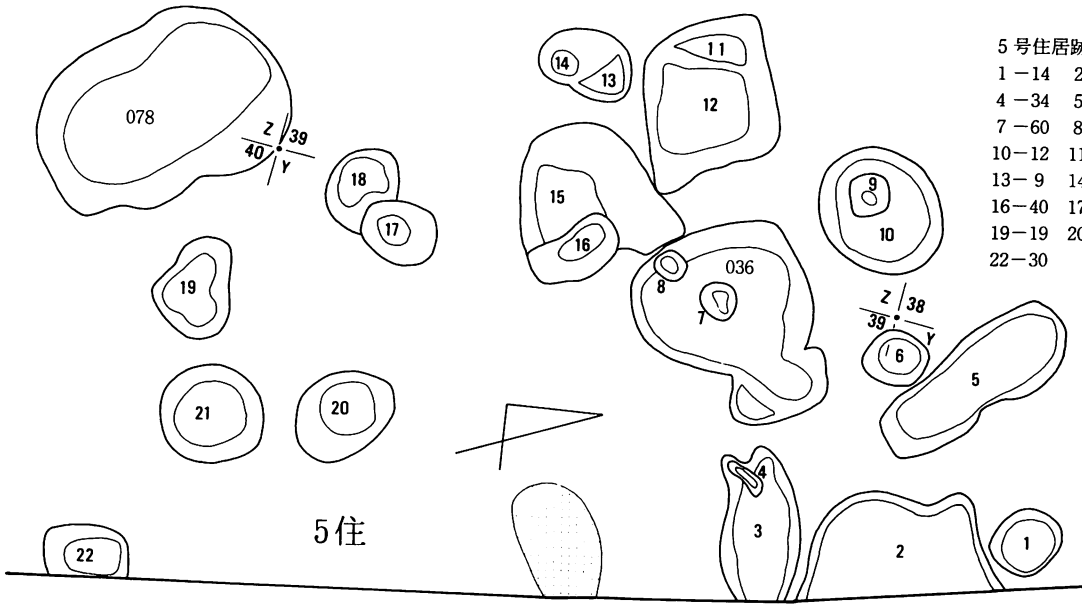
調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　Y・Z－43・44グリッド
平面形　円形
規　　模　現存で6.00mである。
周　　溝　存在していない。
炉　　炉は調査区外に存在するものと思われる。
柱　　穴　主柱穴は5本と思われる。
埋　　甕　存在しない。
時　　期　中期中葉から後半
備　　考　耕作が著しく、壁の高さは、13～30cmを計測する。

8号住居跡（第11図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　U－49・50グリッド
平面形　円形
規　　模　現存で5.60mである。
周　　溝　南側で部分的に存在し、二重に巡らされる。
炉　　石囲炉　炉石には、石棒が再利用される。
柱　　穴　柱穴は多数存在する。
埋　　甕　存在しない。
時　　期　井戸尻式期
備　　考　水路によって住居の北側半分は破壊される。また周溝は、内側と外側に同心円状に広がることから、拡張されたものと思われる。炉石は、北側では平坦面を上に向け、南側では斜めに設置されている。

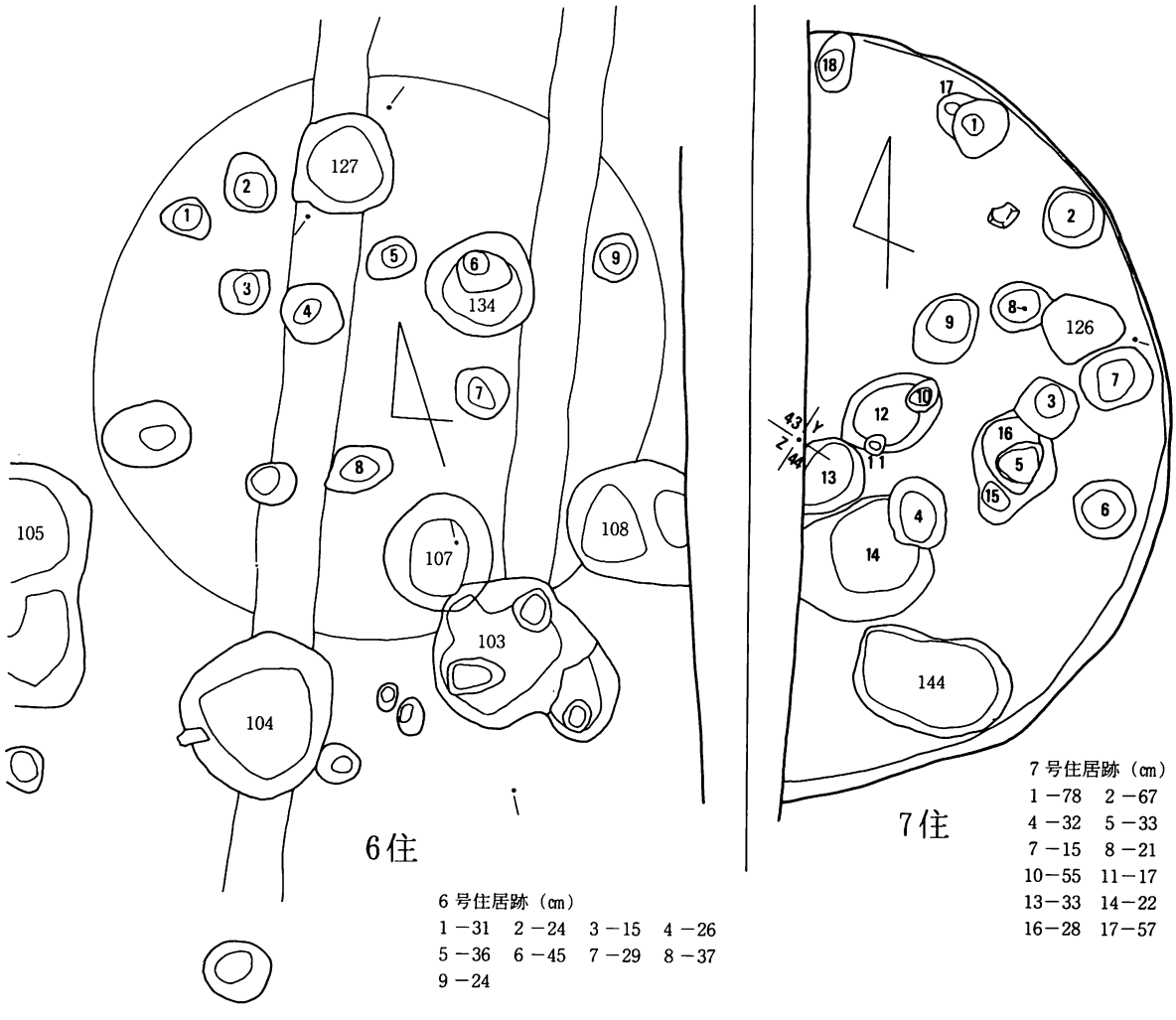
9号住居跡（第12図）

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　W・X－45グリッド
平面形　円形と思われる。
規　　模　現存で6.00mである　壁高は、1.5～25cmである。
周　　溝　北・西・南側に存在し、東側約半分調査区外のため不明である。
炉　　石囲炉で石皿（完形）が転用される。
柱　　穴　柱穴は6本と思われる。1－2－9－4－5－18（新）
8－11－23－4－27－25（旧）
埋　　甕　存在しない。
時　　期　井戸尻式期
備　　考　調査時点において1軒と思われたが、柱穴の位置・壁の立ち上がり・周溝及び段差が確認されたことから、2軒と判明した。炉は1基しか確認されない。炉石は、小礫が使用され、大形のものについては平坦面を上に向ける。12号住居と重複関係にある。また覆土中より完形の石皿1点が出土する。



5号住居跡（cm）

1－14	2－20	3－13
4－34	5－27	6－67
7－60	8－63	9－57
10－12	11－19	12－26
13－9	14－27	15－31
16－40	17－30	18－22
19－19	20－26	21－33
22－30		



6号住居跡（cm）

1－31	2－24	3－15	4－26
5－36	6－45	7－29	8－37
9－24			

7号住居跡（cm）

1－78	2－67	3－68
4－32	5－33	6－13
7－15	8－21	9－39
10－55	11－17	12－12
13－33	14－22	15－29
16－28	17－57	18－21

第10図　5・6・7号住居跡（1/60）

0　3m

10号住居跡（第11図）

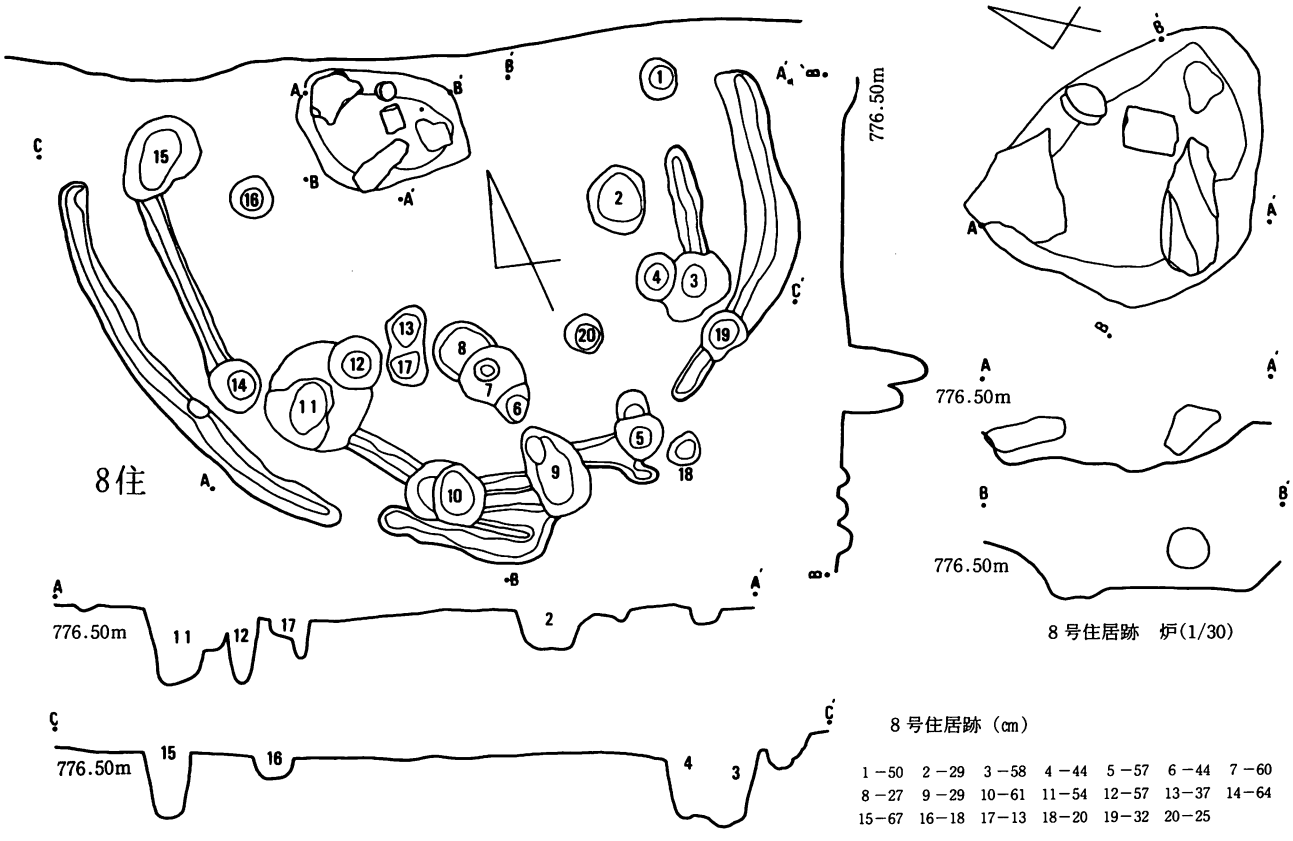
調査年度　1992年度（第４次調査）
位　　置　Ｙ・Ｚ－43・44グリッド
平面形　円形と思われる。
規　　模　現存で5.10mである　壁高は、10～39㎝である。西側半分は調査区外である。
周　　溝　南・東・北東側で認められ、北側では存在しない。
炉　　形態は不明　175土坑によって壊される。
柱　　穴　主柱穴は、２－７－１２の３本と思われる。
埋　　甕　存在しない。
時　　期　藤内式期から井戸尻式期
備　　考　壁際には、小柱穴が認められ、北壁側に多く見られる。
土層説明　１－耕作土２－暗褐色土(焼土粒子及び炭化物少量混入）3－暗褐色土(2よりしまりあり:炭化物は2よりやや多い）４－暗褐色土（2より明るい:ローム粒子混入）5－暗褐色土（2より暗い:ローム小ブロック混入）6－暗褐色土(炭化物及び焼土粒子混入）

12号住居跡（第12図）

調査年度　1992年度（第４次調査）
位　　置　Ｗ－45・46グリッド
平面形　楕円形と思われる。
規　　模　現存で5.50mである　壁高は、西側で13㎝である。東側半分は調査区外である。
周　　溝　存在しない。
炉　　地床炉
柱　　穴　主柱穴は３本と思われる。
埋　　甕　存在しない。
時　　期　諸磯ｃ式期
備　　考　９号住居に壊される。土製円盤が出土している。完形の石皿１点が出土する。

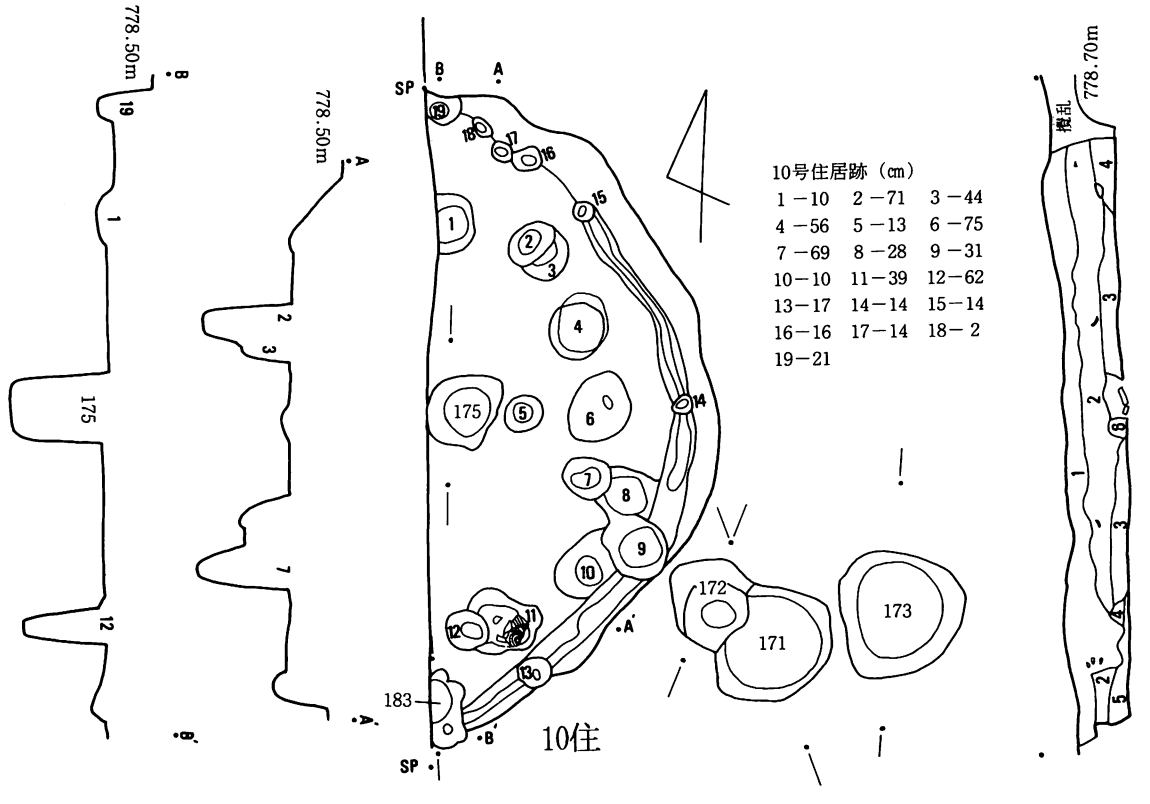
13号住居跡（第13図）

調査年度　1992年度（第４次調査）
位　　置　Ｘ－45グリッド
平面形　楕円形と思われる。
規　　模　現存で4.30mである。壁高は、19～23㎝である。
周　　溝　北壁側に存在する。床面には、別の住居の周溝と思われる溝が存在する。
炉　　地床炉
柱　　穴　本住居に伴うものは４本と思われる。
埋　　甕　存在しない。
時　　期　諸磯ｃ式期
備　　考　炉の下に旧い土坑が存在する。
土層説明　1－暗褐色土(ローム小粒子・炭化物混入）2－暗黄褐色土(褐色土粒子混入・貼ってある状態）（炉・土坑）3－暗褐色土(ローム小粒子混入）4－暗褐色土(ローム小ブロック・炭化物混入）5－暗褐色土（炭化物混入）６－暗褐色土(ローム小粒子混入）７－焼土８－暗褐色土(ローム ブロック及び焼土粒子混入）９－暗黄褐色土(暗褐色土 粒子混入）10－暗黄褐色土(焼土小ブロック混入）



8号住居跡（cm）

1－50	2－29	3－58	4－44	5－57	6－44	7－60
8－27	9－29	10－61	11－54	12－57	13－37	14－64
15－67	16－18	17－13	18－20	19－32	20－25	

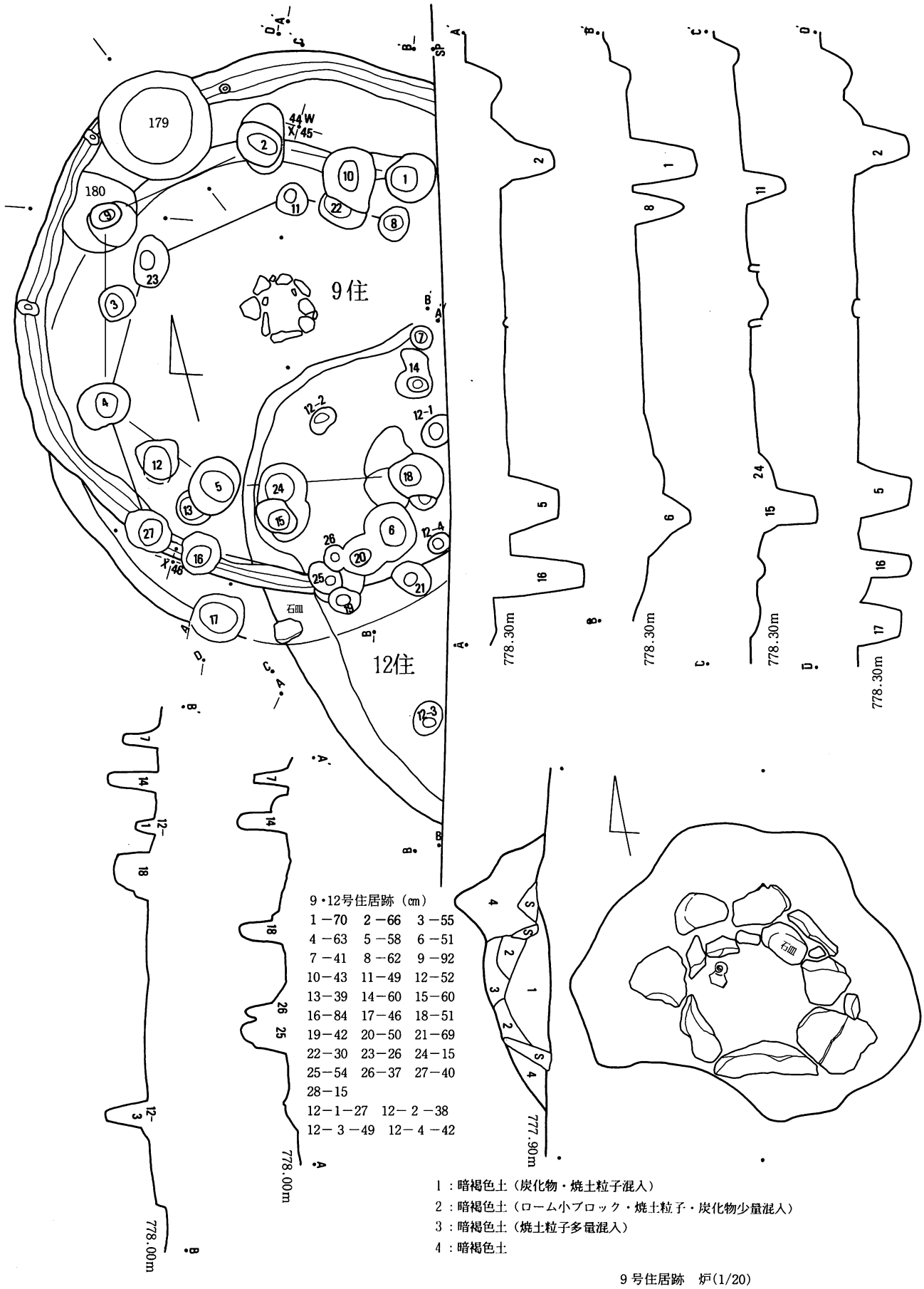


10号住居跡（cm）

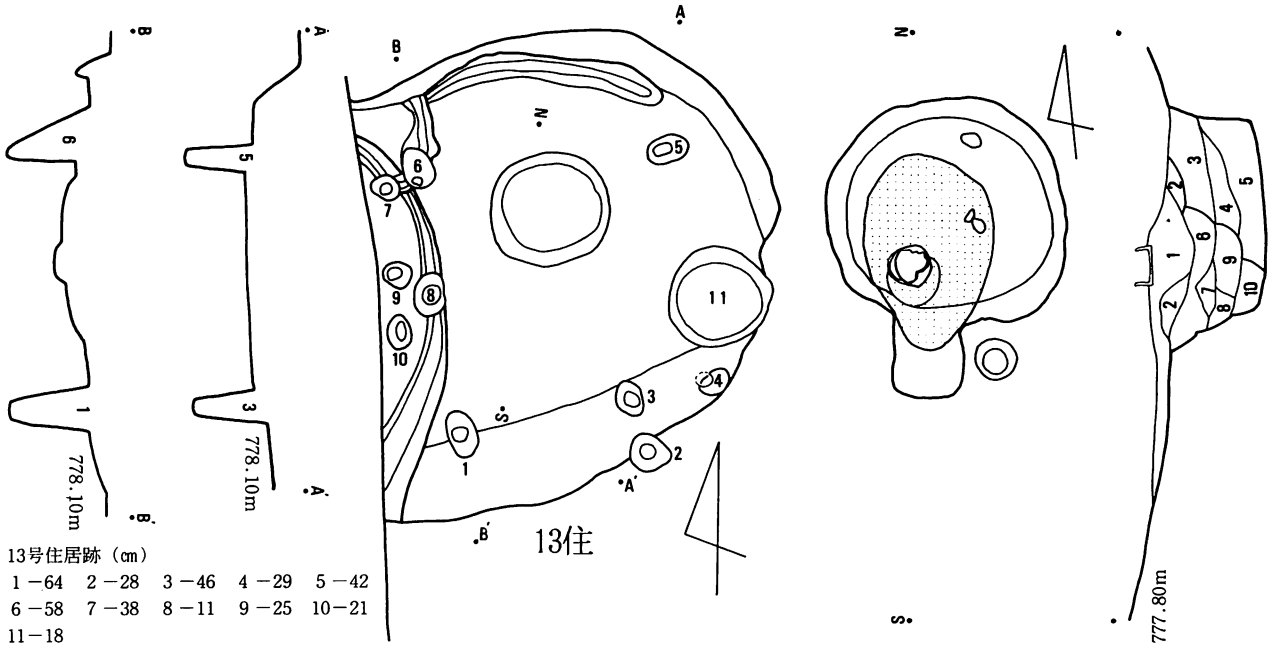
1－10	2－71	3－44
4－56	5－13	6－75
7－69	8－28	9－31
10－10	11－39	12－62
13－17	14－14	15－14
16－16	17－14	18－2
19－21		

第11図　8・10号住居跡（1/60）

0　3m



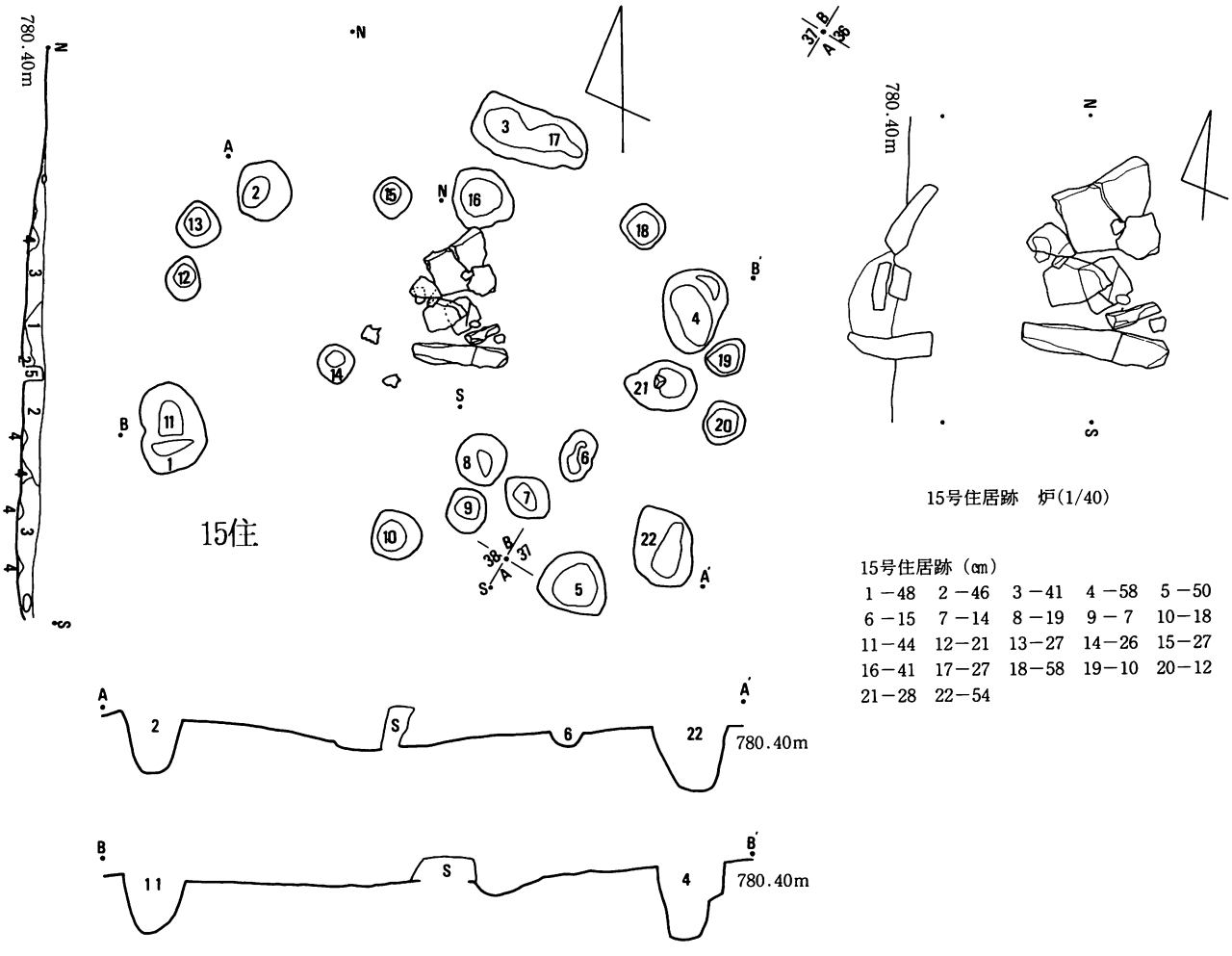
第12図　9・12号住居跡（1/60）



13号住居跡（cm）

1 −64	2 −28	3 −46	4 −29	5 −42
6 −58	7 −38	8 −11	9 −25	10−21
11−18				

13号住居跡　炉・土坑(1/30)



15号住居跡　炉(1/40)

15号住居跡（cm）

1 −48	2 −46	3 −41	4 −58	5 −50
6 −15	7 −14	8 −19	9 − 7	10−18
11−44	12−21	13−27	14−26	15−27
16−41	17−27	18−58	19−10	20−12
21−28	22−54			

第13図　13・15号住居跡（1/60）

0　3m

14号住居跡（第14.15図）

調査年度　1992年度（第4次調査）

位　　置　B・C－36・37グリッド

平面形　楕円形

規　　模　外周4.88m×4.20m・壁高1.9～10.4㎝、内周3.06m×2.94m・壁高0～6㎝

周　　溝　外周の住居跡では、東側に部分的に存在し、深さは6㎝前後、深さは10～33㎝である。内周の住居跡では、認められない。

炉　　地床炉

柱　　穴　拡張・建て替えによるものか柱穴の数が非常に多い。

埋　　甕　存在しない。

時　　期　藤内式期

備　　考　大形の土器片は、住居の中央付近で出土する。16号住居と重複し、本住居の方が旧い。

土層説明　1－暗褐色土(ロームブロック混入) 2－暗褐色土(ローム粒子混入:1より暗い) 3－暗褐色土(2より暗い) 4－暗褐色土(焼土粒子混入:炭化物少量混入) 5－暗褐色土(炭化物少量混入:3に近い) 6－褐色土(ローム粒子混入) 7－暗黄褐色土 8－焼土 9－ロームブロック

15号住居跡（第13図）

調査年度　1992年度（第4次調査）

位　　置　A・B－37・38グリッド

平面形　耕作による撹乱が著しく、不明である。

規　　模　推定5.20m

周　　溝　存在しない。

炉　　大形の平たい礫を使用した方形の石囲炉

柱　　穴　主柱穴は1－2－3－4－5と思われる。また主柱穴の内側には小ピットが存在し、古い住居跡の存在が考えられる。

埋　　甕　存在しない。

時　　期　曽利V式期

備　　考　床面まで浅く、耕作による撹乱のため出土遺物は少ない。
炉石は耕作のためか、住居の廃棄にともなって抜き取られたものかは不明である。

土層説明　1－暗褐色土 2－暗褐色土(暗茶褐色土粒子混入) 2'－暗褐色土(焼土粒子少量混入) 3－暗茶褐色土 4－ロームブロック

16号住居跡（第14.15図）

調査年度　1992年度（第4次調査）

位　　置　C－36グリッド

平面形　円形に近い多角形を呈すると思われる。

規　　模　外周　6.50m（新）　内周　5.50m（旧)の拡張住居

周　　溝　新旧の住居跡に認められ、同心円上に広がる。また南側では耕作によって不明であり、14号住居と重複する。

炉　　平坦面を上に向け方形を呈する石囲炉である。奥の炉石の下に、旧い柱穴が存在する。

柱　　穴　主柱穴は6本ないし7本と思われる。内周する旧住居跡の主柱穴は、6本と思われる。支柱穴は、新旧ともに周溝内に存在する。

埋　　甕　存在しない。

時　　期　井戸尻式期

備　　考　旧住居の主柱穴は、炉によって１本壊される。住居の主軸方向に、主柱穴と炉が一直線状に並ぶ。床面は、新旧ともに同じレベルにある。西側では、周溝が直線的であり、南でも直線を呈するものと思われる。14号住居と重複し、本住居のほうが新しい。

土層説明　１－暗茶褐色土 2－暗褐色土 3－暗褐色土(2よりやや明るい) 4－暗褐色土(焼土粒子混入) 5－暗褐色土(ローム粒子混入) 6－暗褐色土 7－暗黄褐色土 8－暗黄褐色土(ローム粒子多量混入)

17号住居跡（第16図）

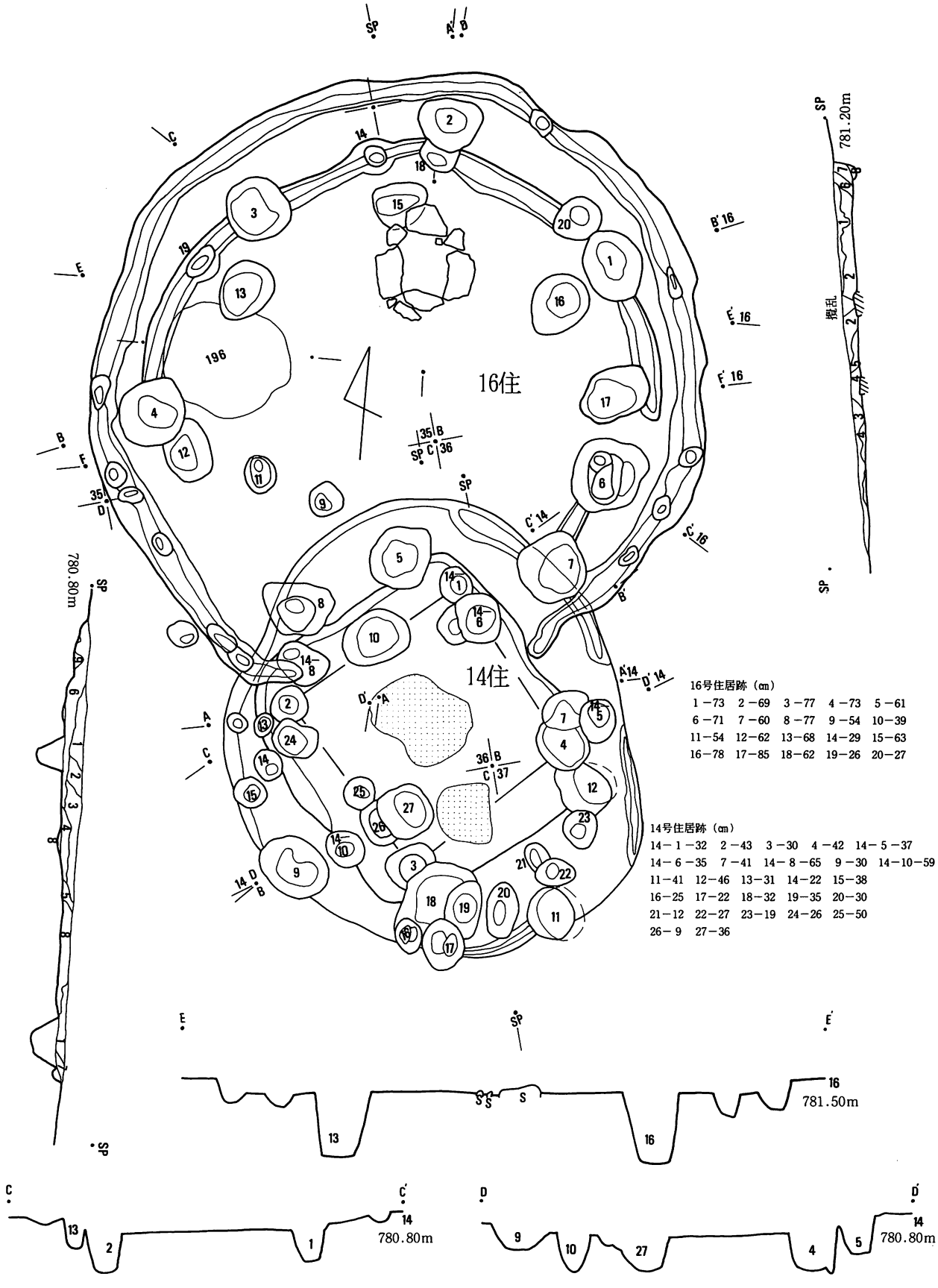
調査年度　1992年度（第４次調査）
位　　置　Ｂ－33・34グリッド
平面形　不明
規　　模　推定5.20m
周　　溝　存在しない。
炉　　地床炉　50×45㎝
埋　　甕　存在しない。
柱　　穴　合計で22本存在する。炉を壊す柱穴が存在する。
時　　期　不明
備　　考　表土から確認面まで浅く、また耕作が著しいため形態は不明である。
柱穴の位置より炉は、住居のほぼ中央に位置するものと思われる。
柱穴の規模は、北側では深く、南では浅い。

18号住居跡（第16図）

調査年度　1992年度（第４次調査）
位　　置　Ｂ－34・35グリッド
平面形　不明
規　　模　推定5.00m
周　　溝　存在しない。
炉　　石囲炉と思われる。
埋　　甕　存在しない。
柱　　穴　主柱穴は５本である。
時　　期　井戸尻式期に属するものと思われる。
備　　考　表土から確認面まで浅く、また耕作が著しいため形態は不明である。
柱穴の位置より炉は、住居のほぼ中央に位置するものと思われる。
主軸はほぼ南北にとり、主軸線上に柱穴と炉が設置され、入口部は、南に存在するものと思われる。また本炉より古い土坑（198)が存在する。

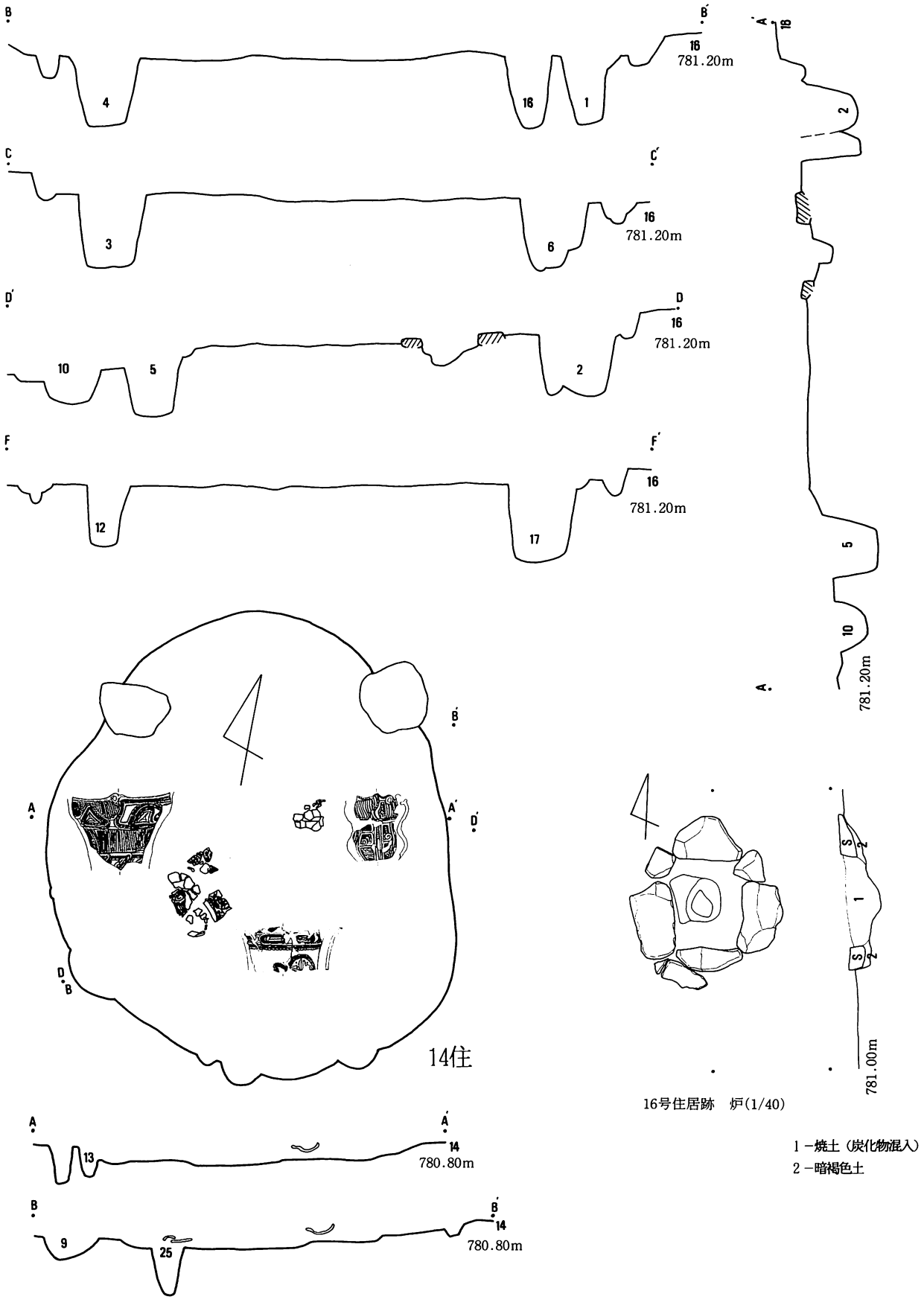
19号住居跡（第17図）

調査年度　1992年度（第４次調査）
位　　置　Ｂ－35・36グリッド
平面形　不明
規　　模　推定5.20m
周　　溝　存在しない。
炉　　埋甕炉
埋　　甕　存在しない。
柱　　穴　多数存在する。

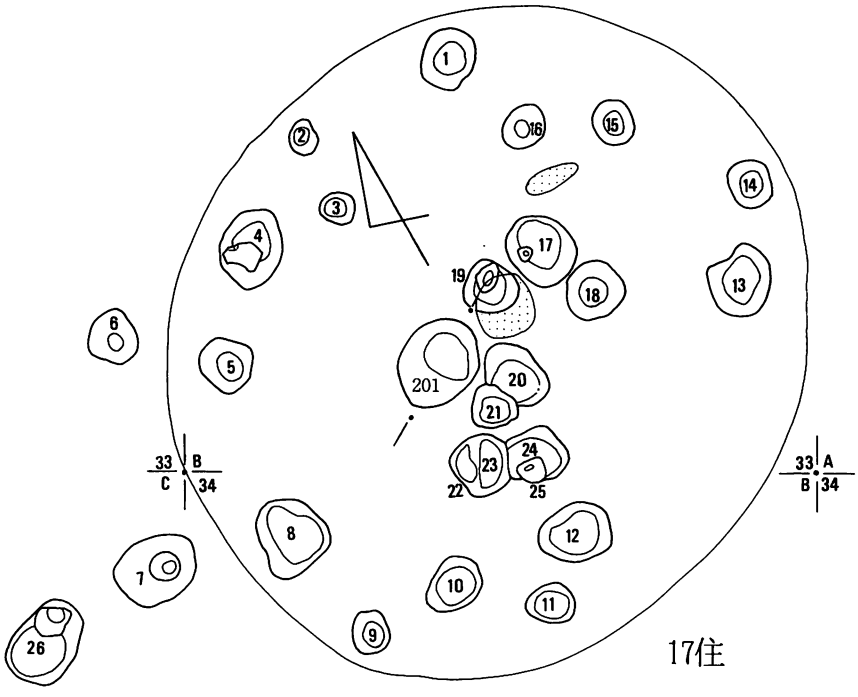


第14図　14・16号住居跡（1/60）

0　3m



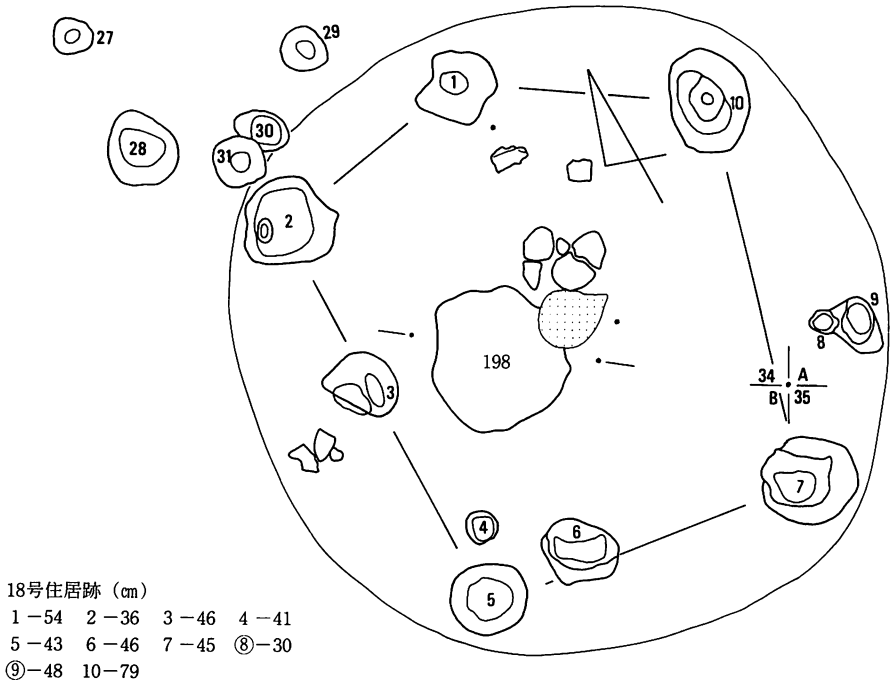
第15図　14・16号住居跡（1/60）



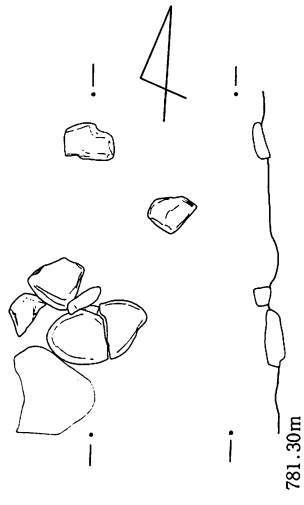
17住

17号住居跡（cm）

1 −71	②−45	③−39	4 −27	⑤−58
6 −57	7 −54	8 −34	9 −15	10−19
11−15	12−29	13−42	14−60	15−19
16−22	⑰−27	18−25	⑲−49	20−15
21−28	22− 8	23− 6	24−21	
25−62	26−17.7	27−33	28−43	
29−29	30−40	31−15		



18住



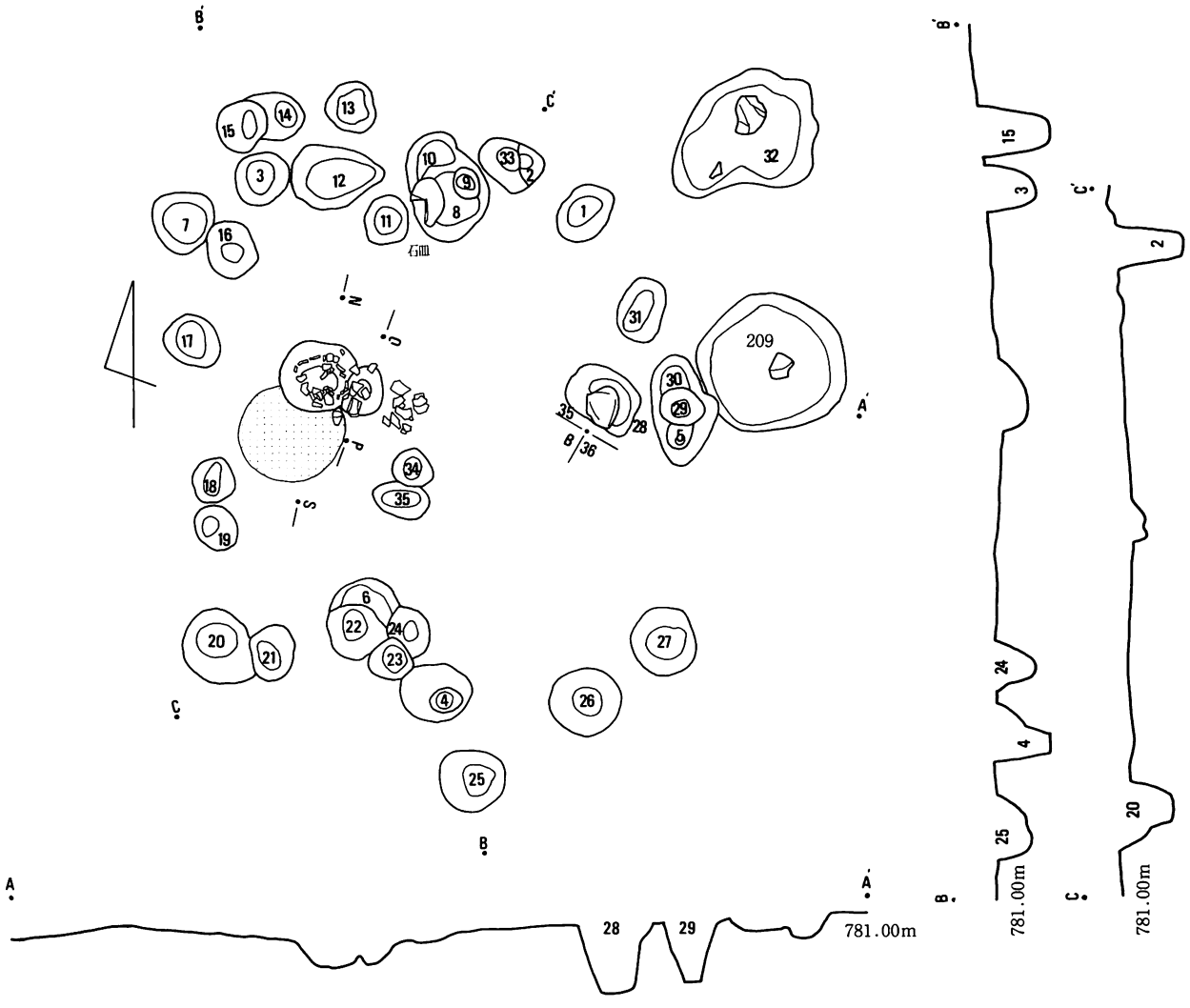
18号住居跡　炉(1/30)

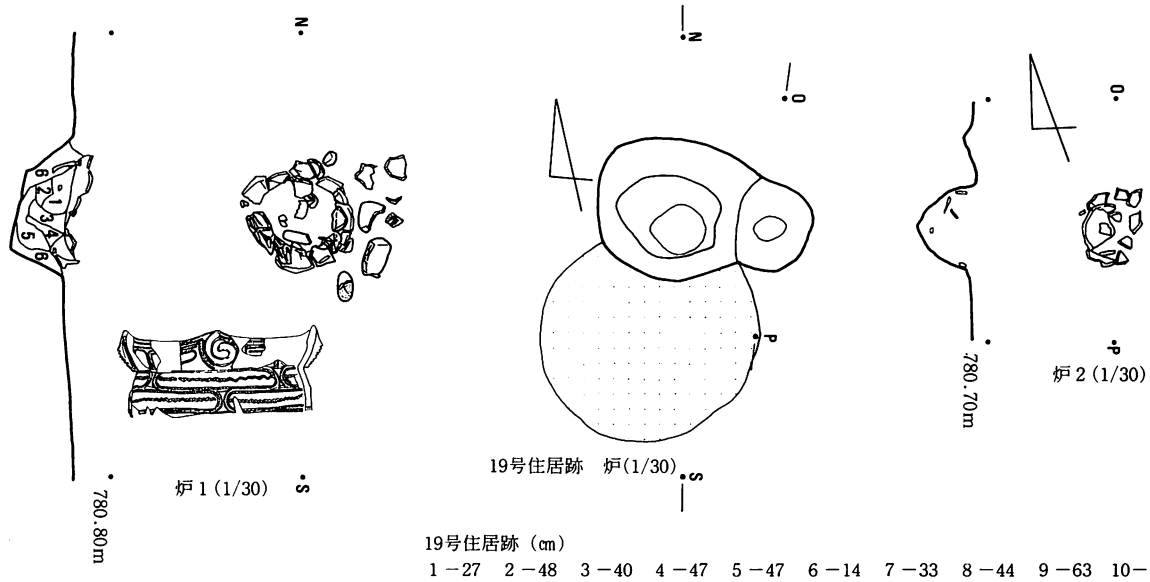
18号住居跡（cm）

1 −54	2 −36	3 −46	4 −41
5 −43	6 −46	7 −45	⑧−30
⑨−48	10−79		

第16図　17・18号住居跡（1/60）

0　3m





炉1 (1/30)

19号住居跡　炉(1/30)

炉2 (1/30)

19号住居跡（cm）

1－27	2－48	3－40	4－47	5－47	6－14	7－33	8－44	9－63	10－19	11－19
12－28	13－14	14－39	15－56	16－32	17－14	18－18	19－43	20－40	21－34	22－45
23－53	24－36	25－29	26－34	27－29	28－56	29－52	30－20	31－56	32－15	33－56
34－40	35－17									

第17図　19号住居跡（1/60）

0　3m

時　　期　　狢沢式期
備　　考　　埋甕炉は２基認められ、東側のものは建て替えのために壊され、そのすぐ西側に新しい埋甕炉が設置され、南側に焼土が認められる。この焼土は、よく焼かれている。
Ｐ－８は、張り床され、古い住居の柱穴と考えられる。

20号住居跡（第18図）

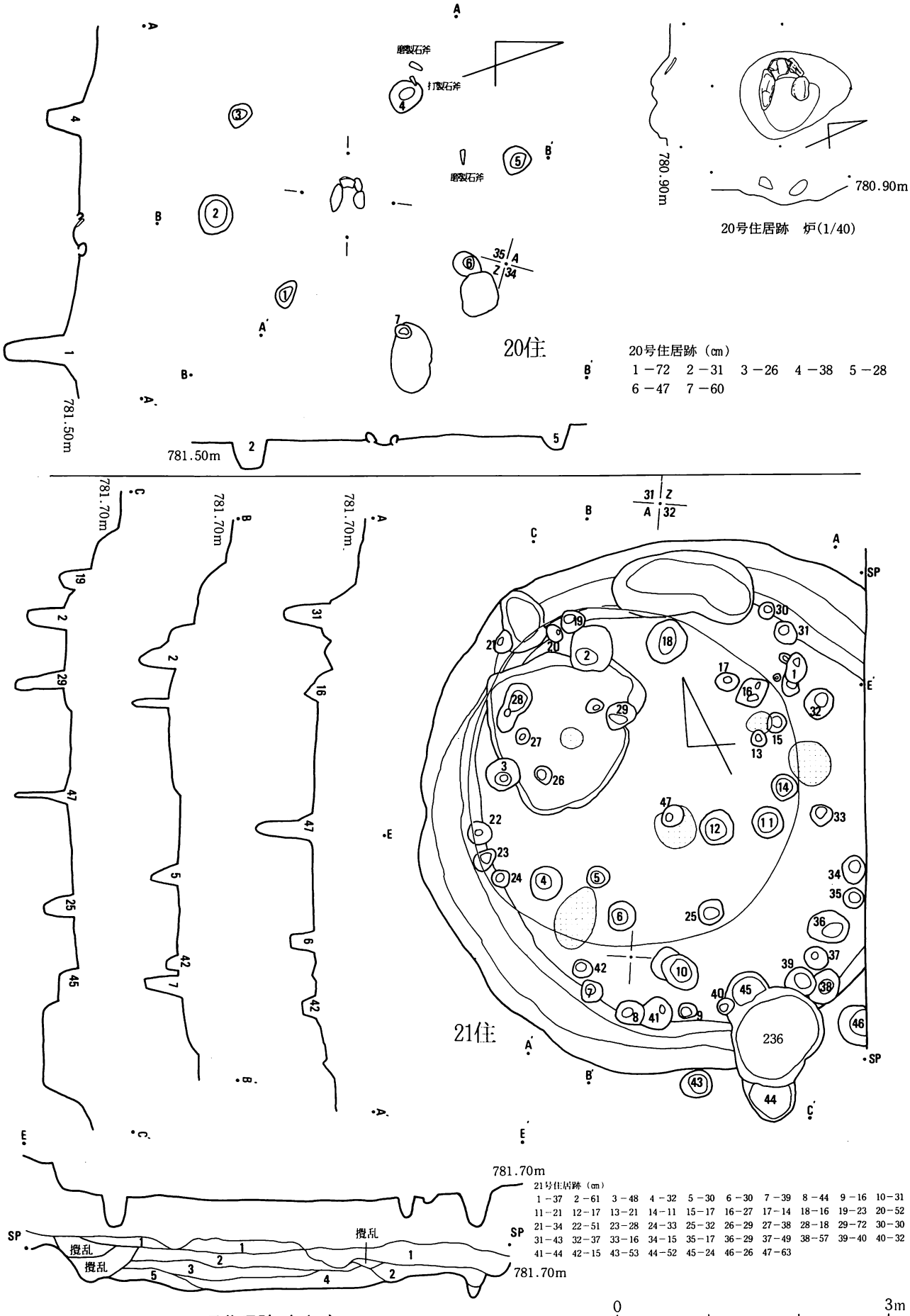
調査年度　　1992年度（第４次調査）
位　　置　　Ａ・Ｂ－33グリッド
平面形　　円形と思われる。
規　　模　　推定3.50m
周　　溝　　存在しない。
炉　　石囲炉　40×36㎝ 深さ11㎝
柱　　穴　　主柱穴は７本である。
埋　　甕　　存在しない。
時　　期　　藤内式期
備　　考　　主軸は、北西－南東にあり、炉の形態から、入口部は東に存在すると思われる。炉の掘り方は、南北に長く掘られ、炉石はほぼ東西に長軸をとる。また炉石は左右に使用されるが、奥については、土器片で炉が形成される。炉は、柱穴より住居のほぼ中央に設置される。耕作による撹乱のため、壁は確認されず、遺物の出土は少ない状況でありながらも、磨製石斧が２本出土しており、炉を中心として右奥に石斧が分布している。

21号住居跡（第18図）

調査年度　　1992年度（第４次調査）
位　　置　　Ｚ・Ａ－32グリッド
平面形　　円形
規　　模　　6.00m×5.65mで、深さは13～40㎝である。
周　　溝　　ほぼ全周する。
炉　　地床炉
柱　　穴　　多数認められる。
埋　　甕　　存在しない。
時　　期　　諸磯ｃ式期
備　　考　　焼土が３ケ所で認められ、住居中央より北壁よりに貼り床が認められ、その下に焼土が存在する。柱穴の存在から、拡張または重複が考えられる。周溝のほぼ内側に小柱穴が存在する。未製品と思われる完形の石皿が、１点出土する。
土層説明　　1－耕作土 2－暗褐色土(ローム粒子混入) 3－暗褐色土(ローム粒子多量混入) 4－暗褐色土(炭化物混入:3より暗い) 5－暗褐色土(ローム粒子混入)

22号住居跡（第19図）

調査年度　　1992年度（第４次調査）
位　　置　　Ｚ・Ａ－33グリッド
平面形　　不明
規　　模　　推定5.40m
周　　溝　　存在しない。
炉　　不明
柱　　穴　　主柱穴６本存在する。



第18図　20・21号住居跡（1/60）

埋　　甕　　ｐｉｔ－６が埋甕と考えられる。
時　　期　　曽利II式期
備　　考

23号住居跡（第19図）

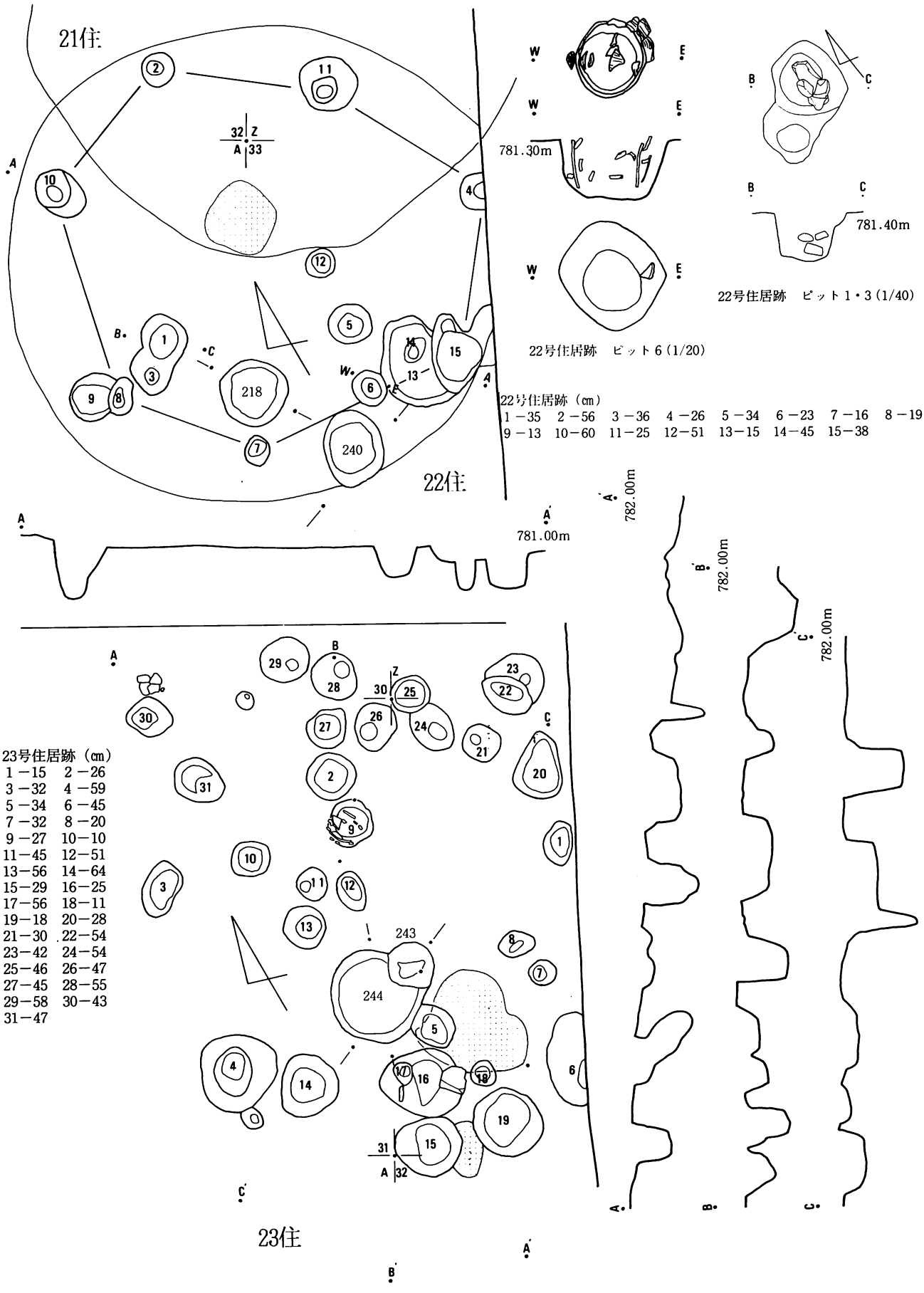
調査年度　　1992年度（第４次調査）
位　　置　　Ｚ・Ａ－31グリッド
平面形　　不明
規　　模　　不明
周　　溝　　存在しない。
炉　　焼土が認められるが、形態は不明である。
柱　　穴　　６本か
埋　　甕　　存在しない。
時　　期　　中期と思われる。
備　　考　　焼土が２ケ所で認められる。

24号住居跡（第20図）

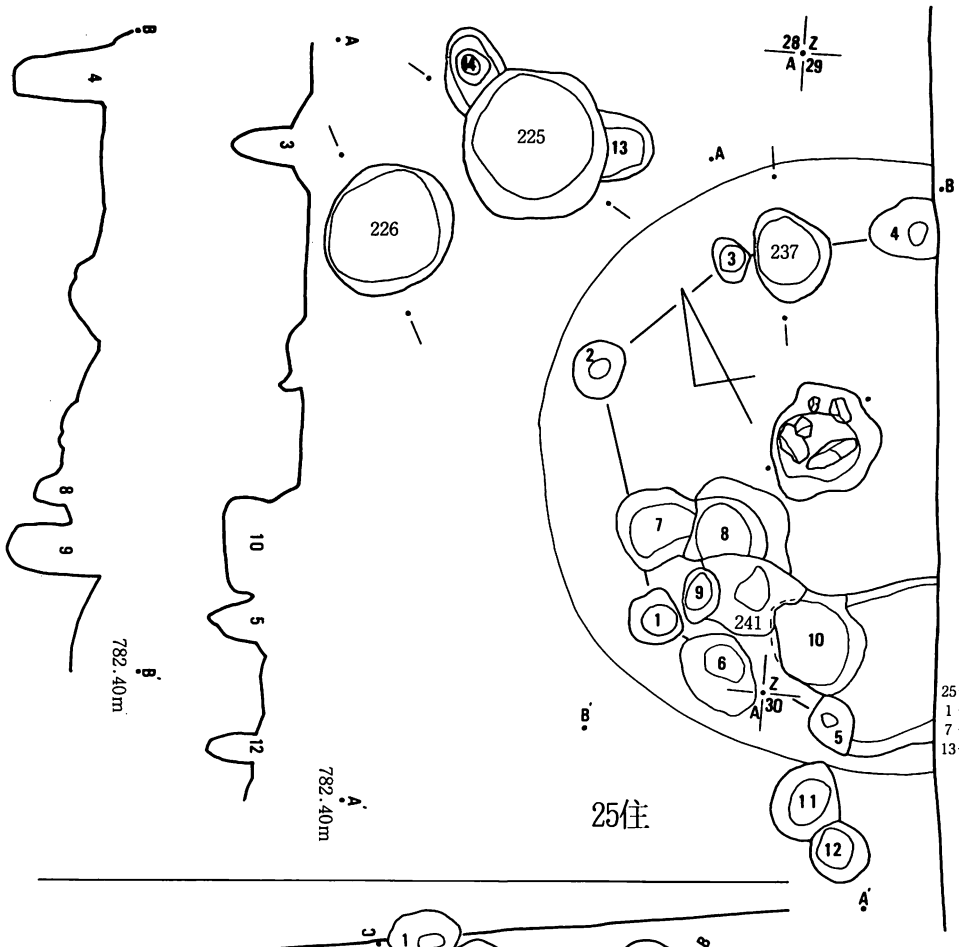
調査年度　　1992年度（第４次調査）
位　　置　　Ｚ・Ａ－30.31グリッド
平面形　　円形
規　　模　　炉を中心として約6.00m×5.65m　深さ8.4～17㎝
周　　溝　　北壁から東壁にかけて認められ、幅は10～30㎝ 深さは5.2～12.9㎝である。
炉　　長方形を呈すると思われる石囲炉で、破壊されている。規模は70×51㎝である。南側の落ち込みの周囲まで、よく焼かれている。落ち込みの規模は、70×42㎝である。
柱　　穴　　多数認められる。
埋　　甕　　存在しない。
時　　期　　藤内式期
備　　考　　周溝の存在及び柱穴の本数、炉のすぐ南側に旧住居の炉の跡と思われる落ち込みが存在していることから、２軒ないし３軒の重複が考えられる。覆土中より石皿片２点が出土する。

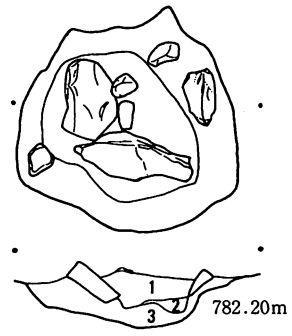
25号住居跡（第20図）

調査年度　　1992年度（第４次調査）
位　　置　　Ｚ・Ａ－29グリッド
平面形　　不明
規　　模　　推定4.80m　東側約半分は、調査区外である。
周　　溝　　存在しない。
炉　　石囲炉　規模は95×82㎝で、住居のほぼ中央に設置される。
柱　　穴　　確認された主柱穴の本数は、５本である。
埋　　甕　　存在しない。
時　　期　　中期と思われる。
備　　考　　確認面まで浅いため、耕作による撹乱を受ける。



第19図　22・23号住居跡（1/60）



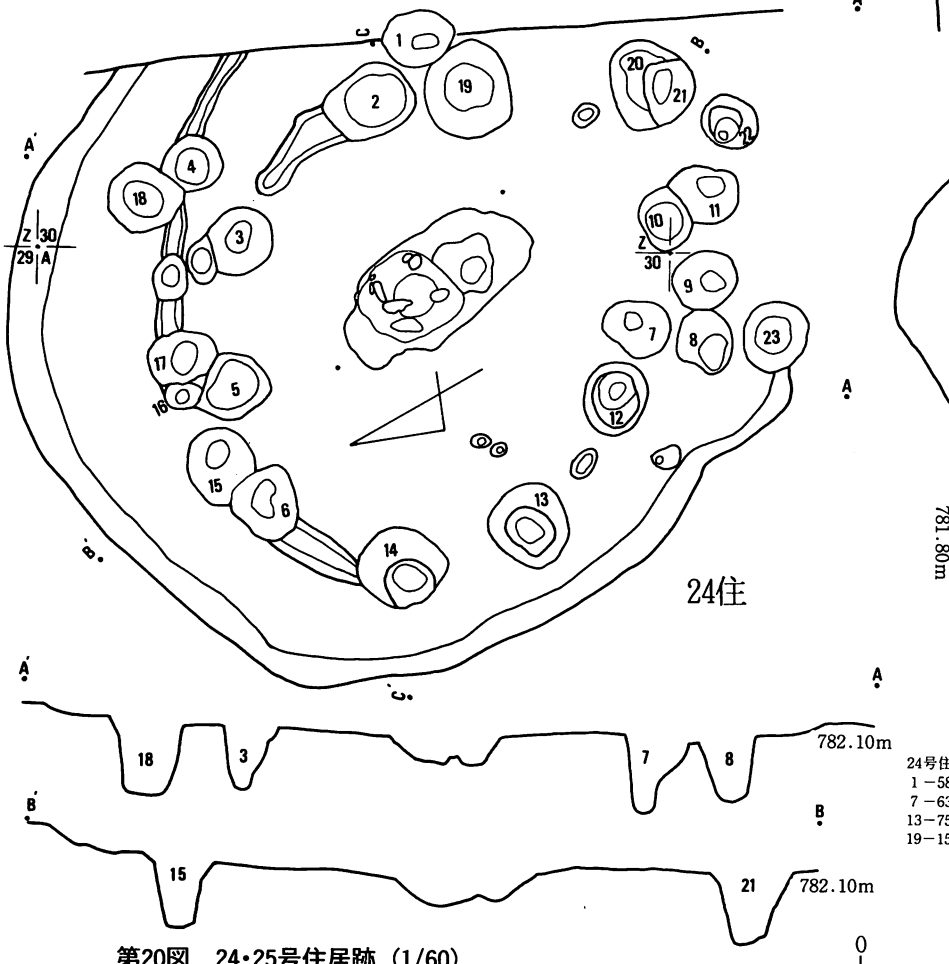


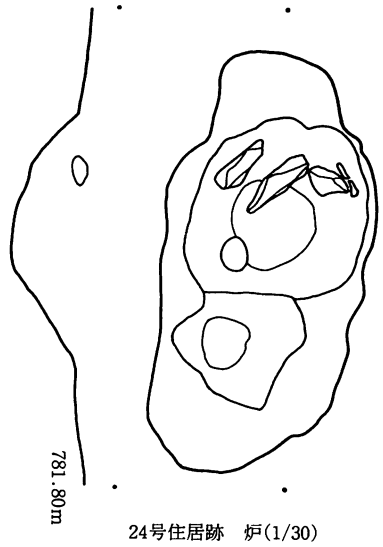
25号住居跡　炉(1/30)

1－暗褐色土（焼土粒子混入）
2－褐色土（ローム粒子多量混入
　　：焼土粒子少量混入）
3－褐色土

25号住居跡（cm）

1－70	2－61	3－51	4－70	5－51	6－15
7－21	8－30	9－40	10－59	11－57	12－49
13－25	14－55				





24号住居跡　炉(1/30)

24号住居跡（cm）

1－58	2－46	3－46	4－48	5－51	6－55
7－63	8－49	9－52	10－50	11－49	12－64
13－75	14－71	15－51	16－38	17－51	18－67
19－15	20－39	21－53	22－25	23－32	

0　3m

第20図　24・25号住居跡（1/60）

26号住居跡（第21.22図）

調査年度　1992年度（第４次調査）
位　　置　Ｂ－28グリッド
平面形　ほぼ円形
規　　模　4.40m×4.20m　深さは、31～55㎝
周　　溝　北壁側の一部を除いて、ほぼ全周する。
炉　　石囲炉で破壊される。規模は105×50㎝で、住居のほぼ中央に設置される。
柱　　穴　主柱穴は４本である。
埋　　甕　存在しない。
時　　期　藤内式期
備　　考　奥壁よりに本住居に伴うと考えられる袋状土坑が、存在する。28・29・31号住居を壊して構築れる。覆土中より完形の石皿１点が出土する。
土層説明　1－暗褐色土(暗茶褐色土ブロック混入）2－暗褐色土(焼土粒子・炭化物混入）3－暗褐色土(2より暗い・ローム小ブロック少量・炭化物混入）4－黒褐色土(焼土粒子・炭化物混入）5－暗褐色土(3より明るい）6－暗褐色土(ローム粒子・炭化物混入）7－黒褐色土(焼土粒子・炭化物混入）8－暗褐色土(褐色土粒子混入・しまりあり）9－暗褐色土(褐色土粒子混入・3より明るい)10－暗褐色土(ローム小ブロック混入・6より暗い）11－暗褐色土(黒褐色土粒子混入）

27号住居跡（第23図）

調査年度　1992年度（第４次調査）
位　　置　Ｂ－30.31グリッド
平面形　不明
規　　模　炉－１の住居の推定4.00m　炉－２の住居の推定2.80m
周　　溝　存在しない。
炉　　地床炉
柱　　穴　炉－１の住居の主柱穴は６本で、炉－２の主柱穴は５本である。
埋　　甕　存在しない。
時　　期　炉－１から藤内式期の土器片が出土している。炉－２は藤内式期である。
備　　考　炉－１は、224土坑に壊される。炉－２は土坑の上に構築されるが、炉－１と炉－２の新旧関係は不明である。
主柱穴は、炉－１が２－13－４－７－10－12、炉－２が９－８－17－18－11である。

28号住居跡（第21.22図）

調査年度　1992年度（第４次調査）
位　　置　Ｂ－28.29グリッド
平面形　楕円形を呈すると思われる。
規　　模　6.85m×5.55mで、深さは4～30㎝である。
周　　溝　全周しないが所々で確認される。
炉　　26号住居によって壊されたものと思われる。
柱　　穴　壁際に小柱穴が認められる。
埋　　甕　存在しない。
時　　期　26号住居より古い。
備　　考　柱穴の本数より、建て替えられた可能性がある。

29号住居跡（第21.22図）

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　B－27.28グリッド
平面形　円形を呈すると思われる。
規　　模　現存で3.70m
周　　溝　存在しない。
炉　　埋甕炉
柱　　穴　主柱穴は4本である。壁際に小柱穴が認められる。
埋　　甕　存在しない。
時　　期　埋甕炉より狢沢式期に属する。
備　　考　覆土中より完形の石皿出土。

30号住居跡（第23図）

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　Z・A－28グリッド
平面形　不明
規　　模　推定4.00m
周　　溝　存在しない。
炉　　不明
柱　　穴　東側一部調査区外のため現存では4本である。（6本の可能性がある）
埋　　甕　存在しない。
時　　期　井戸尻式期
備　　考　248号土坑に壊される。住居中央より北側に焼土が認められ、これが炉跡と思われる。

31号住居跡（第21.22図）

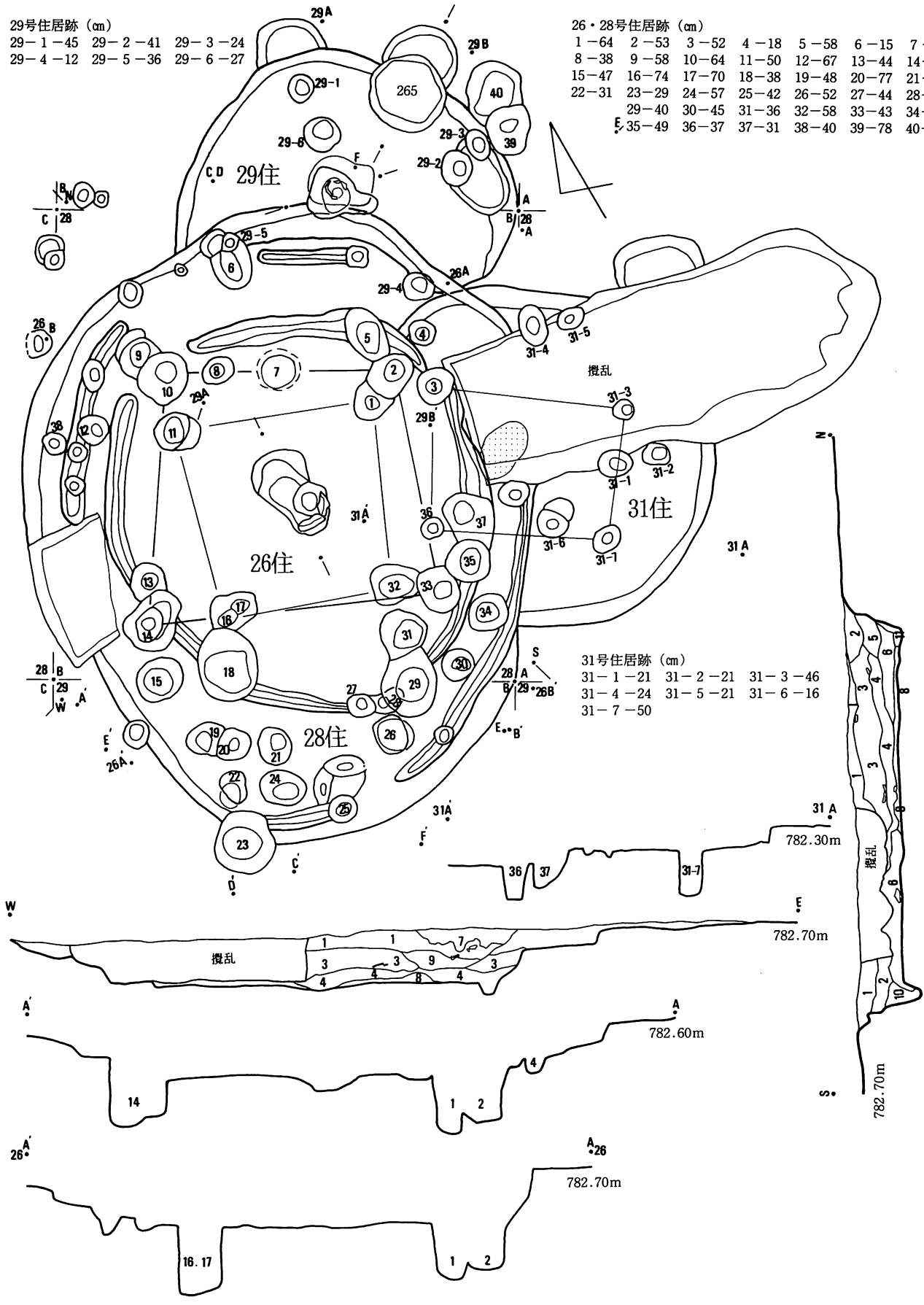
調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　A・B－28グリッド
平面形　円形と思われる。
規　　模　現存で3.85mである。壁高は、16～22.4㎝である。
周　　溝　存在しない。
炉　　地床炉と思われる。規模は、70×40㎝である。
柱　　穴　本住居に伴うと思われるものは9本で、主柱穴は5本である
埋　　甕　存在しない。
時　　期　出土遺物より、狢沢式期と思われる。
備　　考　26・28号住居に壊される。29号住居との新旧関係は不明である。

32号住居跡（第24図）

調査年度　1992年（第4次調査）
位　　置　A－26グリッド
平面形　円形と思われる。
規　　模　主軸で7.15mで、短軸は推定6.45mである。
周　　溝　全周するものと思われる。幅17～35㎝、深さ1.4～19㎝である。
炉　　住居の中央部に大きく撹乱を受けているため不明である。また撹乱の覆土に若干の焼土が認められる。
柱　　穴　7本の主柱穴で、南側では柱穴間5－6に埋甕が設置される。

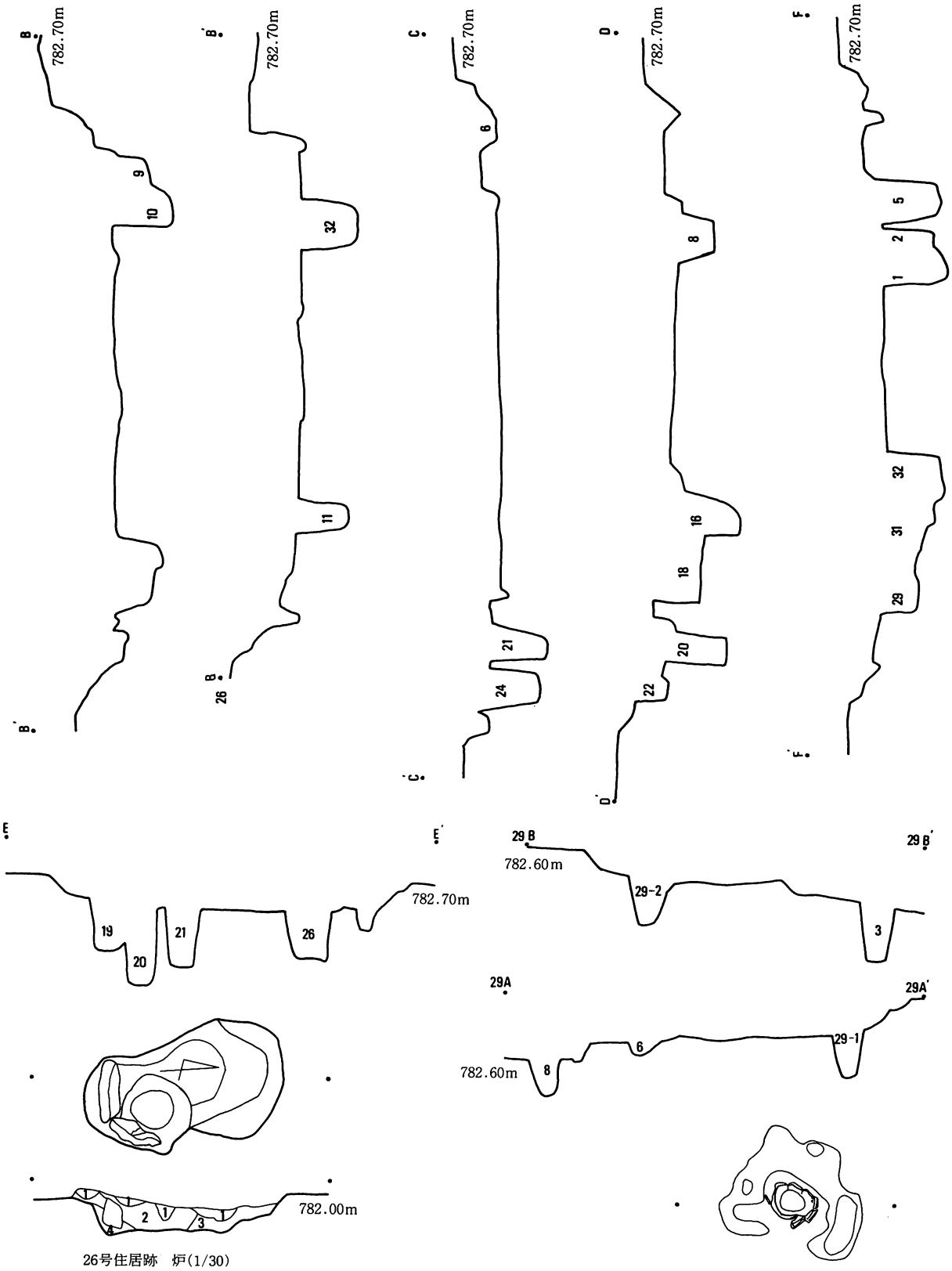
29号住居跡（cm）
29－1－45　29－2－41　29－3－24
29－4－12　29－5－36　29－6－27

26・28号住居跡（cm）
1－64　2－53　3－52　4－18　5－58　6－15　7－54
8－38　9－58　10－64　11－50　12－67　13－44　14－50
15－47　16－74　17－70　18－38　19－48　20－77　21－61
22－31　23－29　24－57　25－42　26－52　27－44　28－49
29－40　30－45　31－36　32－58　33－43　34－42
35－49　36－37　37－31　38－40　39－78　40－36



第21図　26・28・29・31号住居跡（1/60）

0　3m



26号住居跡　炉(1/30)

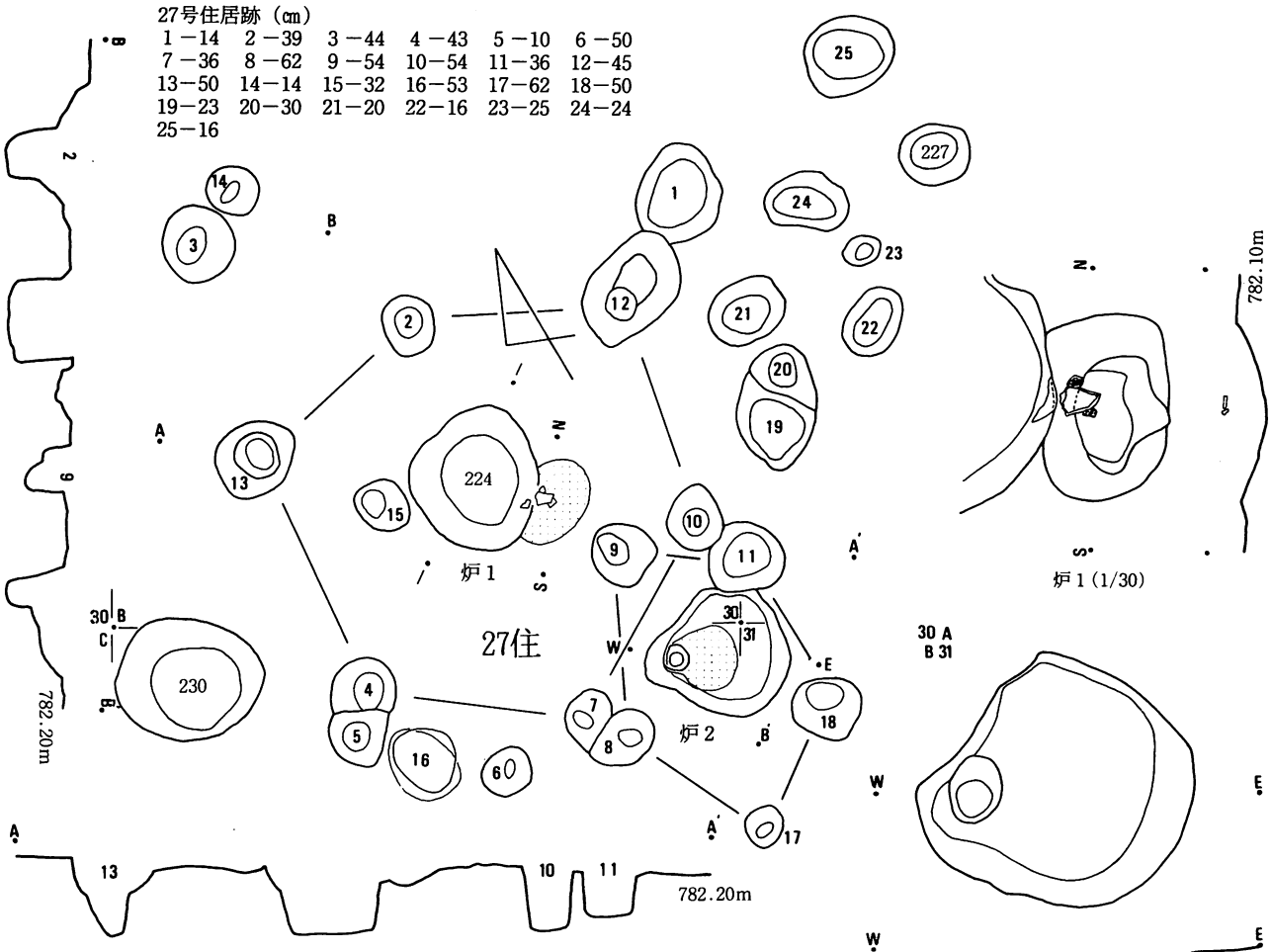
1－焼土
2－暗褐色土（ローム粒子・焼土粒子混入）
3－暗褐色土（ローム小ブロック混入）
4－褐色土（ロームブロック混入・ロームは焼成を受ける）

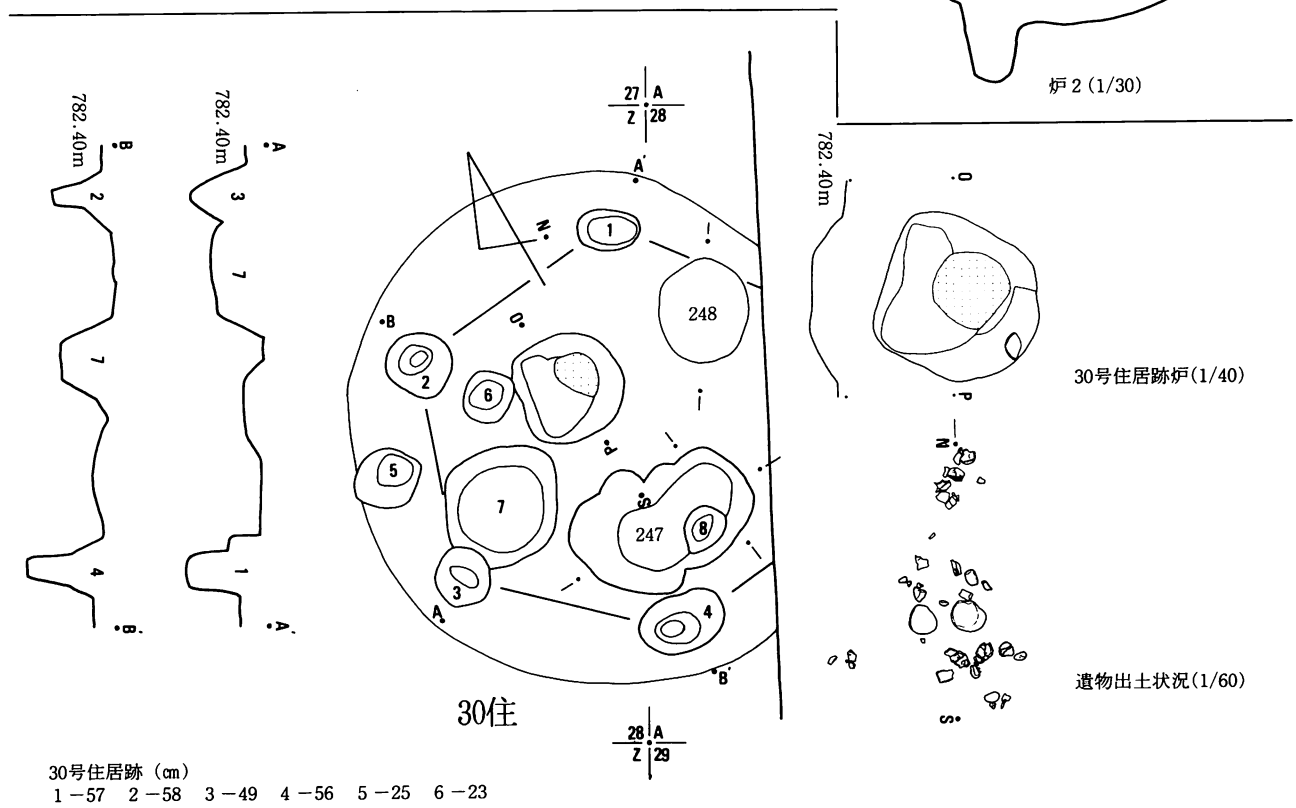
29号住居跡　炉(1/30)

第22図　26・29号住居跡エレベーション図（1/60）・炉（1/30）

0　3m

27号住居跡（cm）
1－14　2－39　3－44　4－43　5－10　6－50
7－36　8－62　9－54　10－54　11－36　12－45
13－50　14－14　15－32　16－53　17－62　18－50
19－23　20－30　21－20　22－16　23－25　24－24
25－16

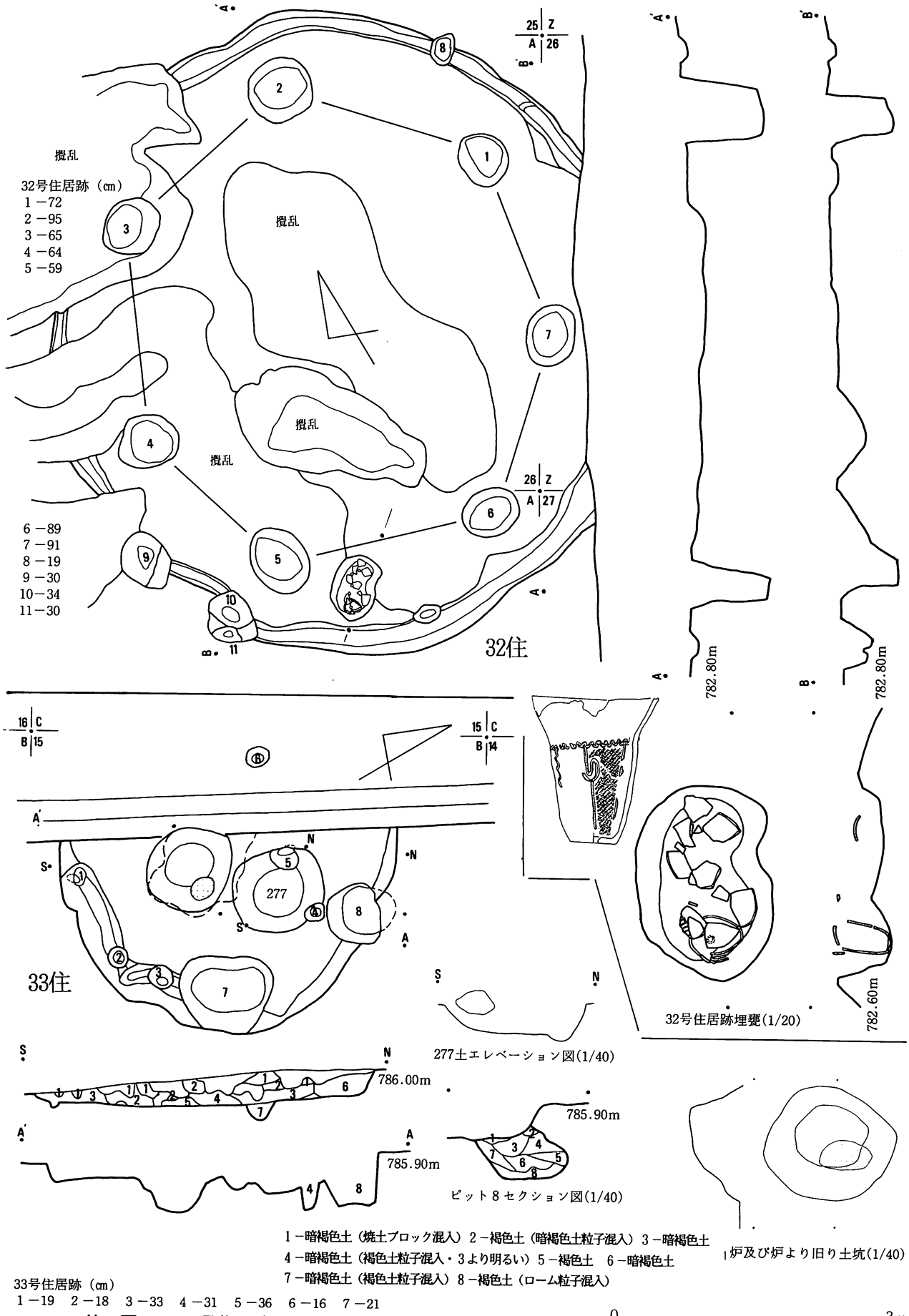




30号住居跡（cm）
1－57　2－58　3－49　4－56　5－25　6－23
7－38　8－38

0　3m

第23図　27・30号住居跡（1/60）



第24図 32・33号住居跡（1/60）

埋　　甕　住居の入口部と思われる周溝よりに存在する。底部穿孔
時　　期　埋甕より、曽利II式期
備　　考　主軸は、ほぼ南北にある。埋甕の上部は、耕作によって壊される。

33号住居跡（第24図）

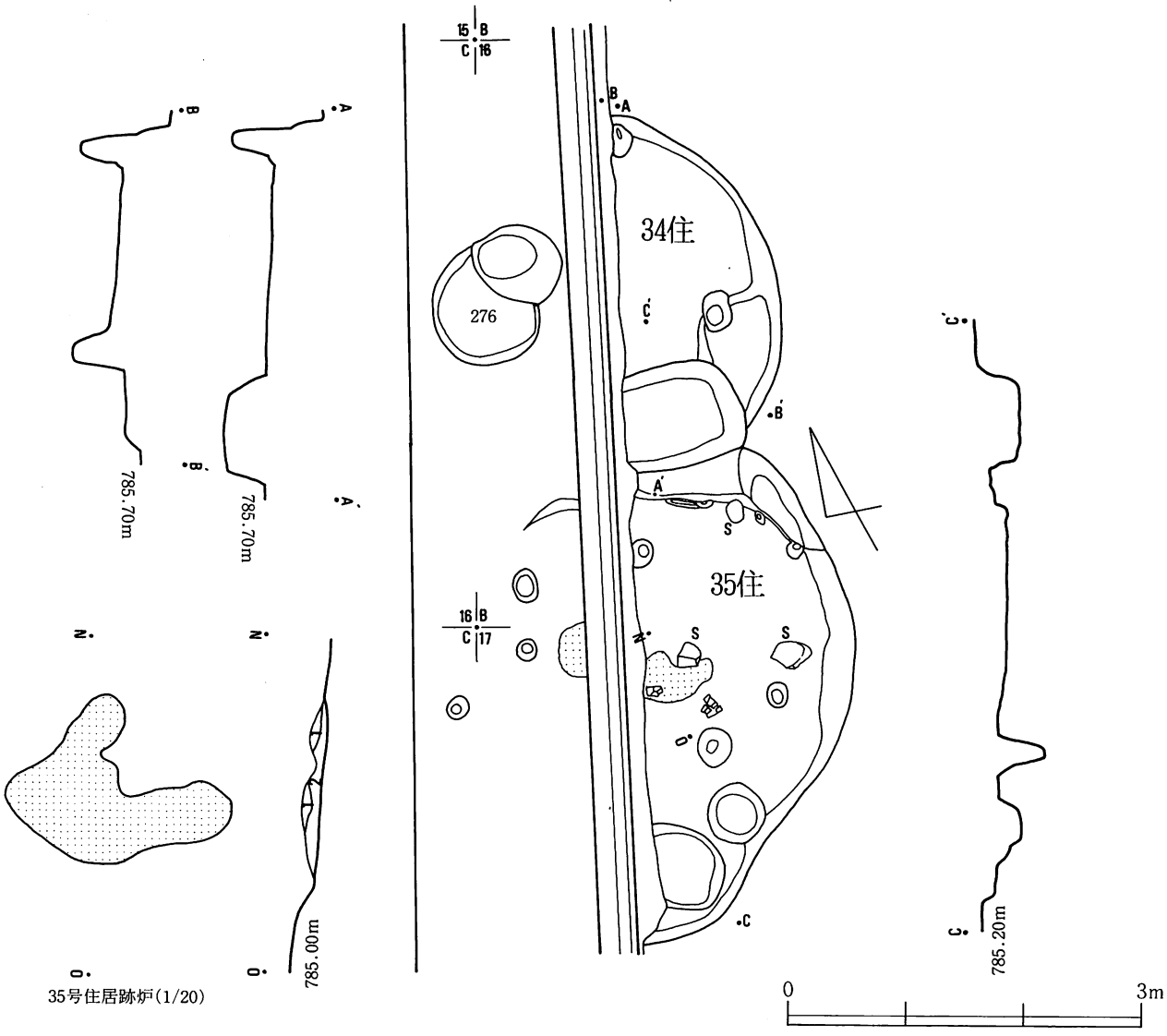
調査年度　1992年（第４次調査）
位　　置　Ｂ－15グリッド
平面形　円形と思われる。
規　　模　確認面で3.73m、住居の西側半分は、撹乱される。壁高は北で27.9㎝、東17.1㎝、南で8.8㎝である。
周　　溝　南壁際に一部存在する。幅25～40㎝、深さ13～16㎝である。
炉　　地床炉　住居の中央よりやや南側に設置される。
柱　　穴　６本認められる。
埋　　甕　存在しない。
時　　期　諸磯ｃ式期
備　　考　地床炉の下に住居より古い土坑が存在する。
土層状態は、自然堆積とは考えがたく、埋め戻されたと思われる。
北東壁に袋状の土坑が存在し、住居より新しい。
土層説明　1－暗茶褐色土 2－暗褐色土）3－暗褐色土（焼土粒子・褐色土粒子混入）4－暗褐色（土焼土粒子は３より多い・３よりやや暗い）5－暗褐色土(焼土粒子多量混入）6－褐色土 7－暗褐色土(ローム粒子混入)

34号住居跡（第25図）

調査年度　1992年（第４次調査）
位　　置　Ｂ－16グリッド
平面形　円形と思われる。
規　　模　確認面で3.15m、住居の西側半分は、撹乱される。壁高は12～32㎝である。
周　　溝　存在しない。
炉　　地床炉　フェンスによって破壊される。
柱　　穴　２本認められる。
埋　　甕　存在しない。
時　　期　諸磯ｃ式期
備　　考　床面はほぼ平坦で、北から南へ緩く傾斜する。

35号住居跡（第25図）

調査年度　1992年（第４次調査）
位　　置　Ｂ－16・17グリッド
平面形　円形と思われる。
規　　模　確認面で4.35m、住居の西側半分は、撹乱される。壁高は16～43㎝である。
周　　溝　存在しない。
炉　　地床炉　フェンスによって破壊される。
柱　　穴　７本存在する。
埋　　甕　存在しない。
時　　期　諸磯ｃ式期
備　　考　床面はほぼ平坦で、北から南へ緩く傾斜する。

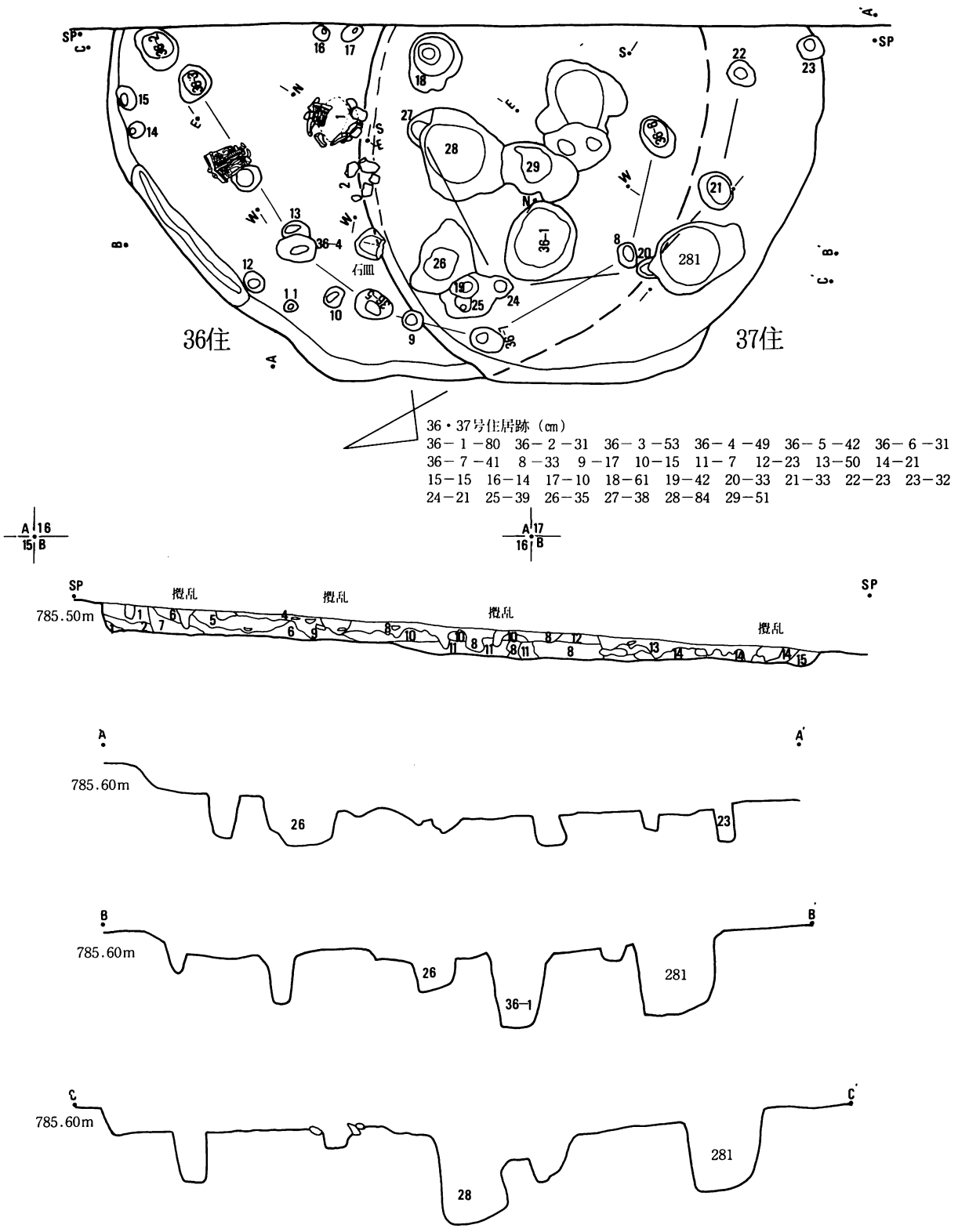


第25図　34・35号住居跡（1/60）

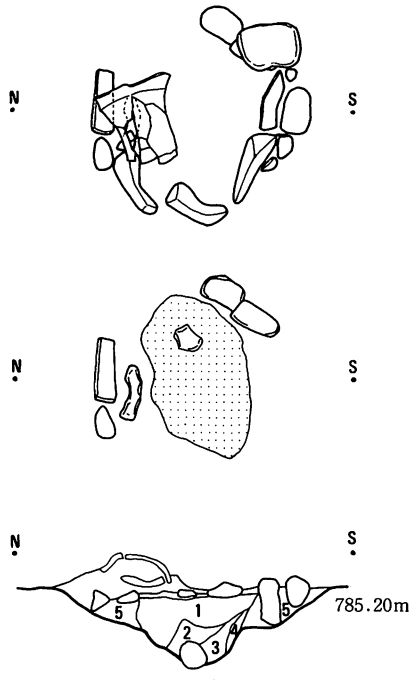
焼土は２ヶ所に認められ、１ヶ所は住居のほぼ中央に設置される。もう１ヶ所は、東側部分を壊される。

36号住居跡（第26.27図）

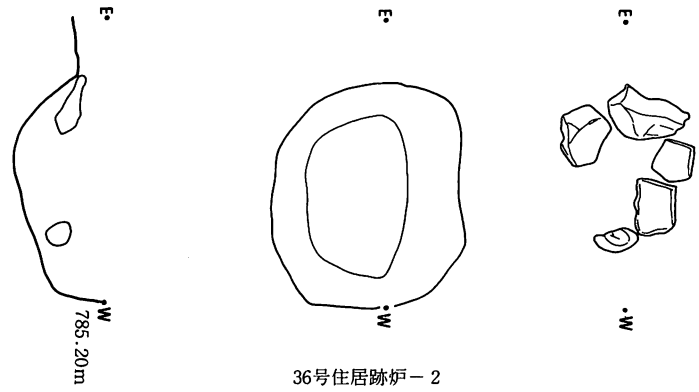
調査年度　1992年（第４次調査）
位　　置　A－15.16グリッド
平面形　円形と思われる。
規　　模　不明
周　　溝　一部存在する。
炉　　小形の石囲炉が２基存在する。炉石の残存状態から、炉－１の方が新しいと思われる。
柱　　穴　６本存在し、調査区外にも存在している可能性がある。
埋　　甕　存在しない。
時　　期　藤内式期
備　　考　諸磯ｃ式期の土製円盤が出土している。耕作により撹乱され、貼床部については確認が困難で



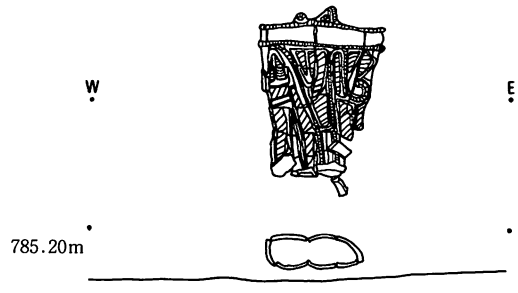
第26図　36・37号住居跡（1/60）



36号住居跡炉－1

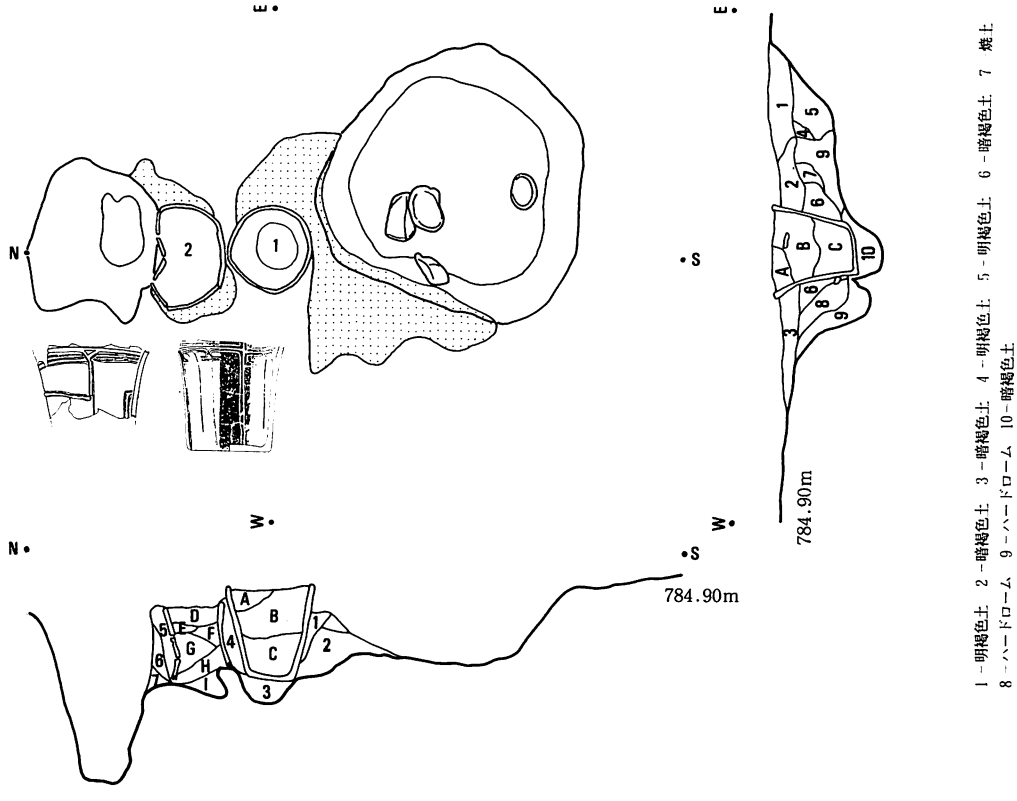


36号住居跡炉－2



36号住居跡遺物出土図

1－暗褐色土　2－褐色土　3－暗褐色土　4　褐色土　5－褐色土



37号住居跡　炉　1－暗褐色土　2－ハードローム　3－暗褐色土　4－暗褐色土　5－明褐色土　6－暗褐色土　7－暗褐色土

A－暗褐色土　B－暗褐色土　C－焼土　D－暗褐色土　E－暗褐色土　F－明褐色土　G－暗褐色土
H－暗褐色土　I－暗褐色土

1－明褐色土　2－暗褐色土　3－暗褐色土　4－明褐色土　5－明褐色土　6－暗褐色土　7　焼土
8－ハードローム　9－ハードローム　10－暗褐色土

0　1m

第27図　36・37号住居跡炉（1/20）・遺物出土平面図及び断面図（1/20）

あった。覆土中より石皿片１点が出土する。

土層説明　炉　1－暗褐色土(焼土及びローム粒子を多く含む) 2－褐色土(焼土粒子少量) 3－暗褐色土(1に類似・1よりしまり弱い) 4－褐色土（焼土・暗褐色土少量混入) 5－褐色土(ロームブロック少量混入)

37号住居跡（第26.27図）

調査年度　1992年（第４次調査）

位　　置　Ａ－16.17グリッド

平面形　円形と思われる。

規　　模　不明

周　　溝　存在しない。

炉　　埋甕炉　炉体土器は、２個体存在する。

柱　　穴　５本存在し、調査区外にも存在している可能性がある。

埋　　甕　存在しない。

時　　期　五領ケ台式期

備　　考　36号住居の下に存在する。

土層説明　1－褐色土(暗褐色土粒子混入) 2－暗褐色土 3－褐色土 4－暗褐色土 5－暗褐色土(ローム小粒子混入) 6－褐色土(暗褐色土粒子混入) 7－褐色土(6より明るい：ロームブロック混入) 8－暗褐色土(5と同じ) 9－暗褐色土(8より明るい) 10－暗褐色土(褐色土粒子混入) 11－褐色土(暗褐色土粒子及びローム小ブロック混入) 12－暗褐色土(8より暗い：しまりあり) 13－暗褐色土(炭化物及びローム小ブロック混入) 14－褐色土(ローム小ブロック混入) 15－褐色土(ローム粒子多量混入)

第2節　土　　坑

（位置はグリッド：規模は長×短×深さ㎝）

1号土坑（水糸レベル＝789.70m）（第28図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　B－2
平面形　楕円形
規　　模　111×94×56
坑　　底　平坦で円形を呈する。
立ち上がり　丸く立ち上がる
時　　期　加曽利E4・5
備　　考　平坦な石が認められ、中央に向かって傾斜する。平坦な石どうしは接合されるが、一枚石を割って入れられたような感じである。

2号土坑（水糸レベル＝790.00m）（第28図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　A・Z－1
平面形　不明
規　　模　／×／×74
坑　　底　平坦
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　半分以上、調査区外のため平面形及び規模は不明である。
土層説明　2.3号土坑
1－暗褐色土（褐色土ブロック混入）2－暗褐色土（褐色土粒子少量混入：1より暗い）3－暗褐色土（褐色土ブロック混入）4－暗褐色土（3より暗く、1より暗い）5－暗褐色土（褐色土小ブロック混入）6－褐色土 7－暗褐色土（しまり強い）8－暗褐色土（ローム小粒子混入：炭化物少量混入）9－暗褐色土（8よりやや暗い）

3号土坑（水糸レベル＝789.50m）（第28図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　A・Z－2
平面形　不明
規　　模　／×／×81
坑　　底　不明
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　半分以上、調査区外のため平面形及び規模は不明である。

4号土坑（水糸レベル＝789.60m）（第28図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　A－2
平面形　（新）楕円形　（旧）不明
規　　模　150×140×94　／×120×81
坑　　底　平坦で丸い
立ち上がり　丸く立ち上がる
時　　期　不明
備　　考　重複する。土器片・礫が認められる。
土層説明
1－暗茶褐色土　2－黒褐色土（褐色土粒子混入）3－褐色土 4－暗茶褐色土 5－黒褐色土 6－褐色土 7－黒褐色土 8－暗褐色土 9－暗褐色土 10－黒褐色土（しまり強い）

5号土坑（水糸レベル＝789.20m）（第28図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　A－3
平面形　楕円形
規　　模　82×65×77
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に立ち上がる
時　　期　不明
備　　考　筒状につくられており、自然堆積を呈する。土器片は、土坑の中央部に集中する
土層説明
1－褐色土 2－暗茶褐色土 3－暗褐色土（ローム小ブロック混入）4－暗茶褐色土（ローム小粒子混入）5－暗褐色土 6－暗褐色土　（ロームブロック混入）7－暗褐色土（ロームブロックを含まない）8－褐色土（暗褐色土粒子混入）

6号土坑（水糸レベル＝789.30m）（第28図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　A・B－3
平面形　円形を呈する袋状
規　　模　130×110×80
坑　　底　平坦
立ち上がり　東では直に立ち上がり、西では袋状
時　　期　井戸尻式期
備　　考　土坑状面から坑底まで遺物は散布する。また遺物は土坑中央から南側で多く出土

土層説明

1－黒褐色土(ローム小ブロック及び炭化物混入) 2－暗褐色土(ローム粒子混入) 3－ローム 4－暗褐色土(2より明るい) 5－褐色土 6－暗褐色土(ローム小ブロック混入) 7－褐色土(ローム混入) 8－褐色土(暗褐色土粒子混入:炭化物少量)

7号土坑（水糸レベル＝789.30m）（第28図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　B－3
平面形　楕円形
規　　模　185×125×91
坑　　底　平坦で長方形
立ち上がり　直に近い
時　　期　現代か
備　　考　覆土は自然堆積を呈するがしまりはなく、野菜等を貯蔵した穴と思われる。西側では外に張出、足を置く階段状のものと考えられる。遺物は認められず、時期は不明である。

土層説明

1－黒褐色土 2－暗茶褐色土 3－褐色土(黒褐色土粒子混入) 4－黒褐色土 5－褐色土(ローム粒子混入) 6－暗褐色土 7－褐色土(ローム粒子・ローム小ブロック混入)

8号土坑（水糸レベル＝789.40m）（第28図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　B－3
平面形　円形
規　　模　91×89×33
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　礫の出土は、北側に多く認められる(北から南へ傾斜する地区であることを考えると南側から礫を入れたものと思われる)。

9号土坑（水糸レベル＝789.40m）（第28図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　C－3
平面形　楕円形
規　　模　112×90×38
坑　　底　平坦
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　東側に土器片の散布が認められる。

10号土坑（水糸レベル＝789.80m）（第28図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　A－1
平面形　円形
規　　模　87×85×48
坑　　底　平坦でほぼ円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　井戸尻式期
備　　考

11号土坑（水糸レベル＝788.90m）（第28図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　C－4
平面形　円形を呈するものと思われる。
規　　模　85×／×62
坑　　底　平坦で袋状
立ち上がり　直に近い
時　　期　中期
備　　考　半分は調査区外である。覆土中位に焼土が認められ、意識的に埋められたと考えられる。ただし6・7層は自然堆積と思われる。

土層説明

1－暗褐色土(ローム小ブロック混入) 2－暗褐色土 3－暗褐色土(ローム小ブロック及び焼土粒子・炭化物混入) 4－暗褐色土(ローム小ブロック混入:しまりあり) 5－暗茶褐色土 6－暗褐色土(褐色土粒子混入) 7－暗褐色土(6より明るい)

12号土坑（水糸レベル＝788.70m）（第28図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　B－5
平面形　円形
規　　模　93×87×55
坑　　底　平坦
立ち上がり　直に近い
時　　期　曽利式期
備　　考

13号土坑（水糸レベル＝789.20m）（第28図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　A・B－3
平面形　円形

規　　模　74×65×61
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　井戸尻式期
備　　考　坑底より10㎝上で礫が認められる。また礫は中央より南壁際で出土する。

14号土坑（水糸レベル＝788.60m）（第28図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ａ・Ｂ－５
平面形　楕円形
規　　模　112×72×94
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　曽利Ｉ式期
備　　考　１号住居と重複する。また土坑中央中位に石棒が存在する。

15号土坑（水糸レベル＝788.50m）（第28.29図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｂ－６
平面形　楕円形
規　　模　102×76×60
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　礫は壁際(中央から)にかけて認められる。坑底近くで有孔土器出土(土坑ほぼ中央で)。

16号土坑（水糸レベル＝789.10m）（第29図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ａ・Ｂ－３・４
平面形　楕円形
規　　模　110×76×20
坑　　底　ほぼ平坦で楕円形
立ち上がり　緩やかに立ち上がる
時　　期　不明
備　　考　礫が認められ、坑底より５～12㎝上に存在する。

17号土坑（水糸レベル＝789.20m）（第29図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ａ－３
平面形　楕円形
規　　模　102×90×26
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考

18号土坑（水糸レベル＝788.30m）（第29図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ａ－６
平面形　楕円形
規　　模　115×87×42
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　すり鉢状
時　　期　不明
備　　考　大形の礫が土坑中央に存在し、蓋をしたような状態が認められる。

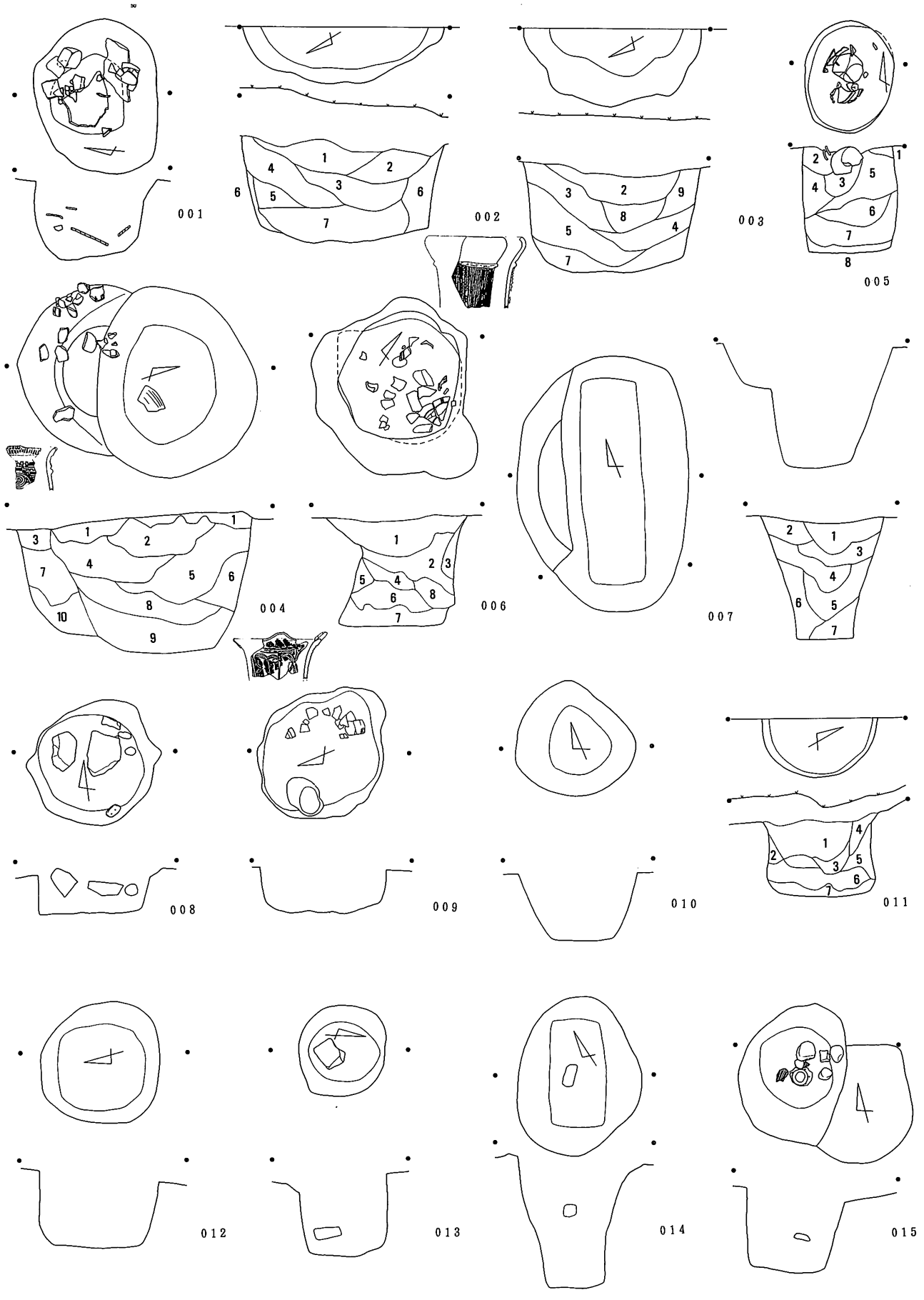
19号土坑（水糸レベル＝788.30m）（第29図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ａ－６
平面形　不整円形
規　　模　92×88×52
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　藤内式期
備　　考
土層説明

1－暗褐色土(ローム少量混入) 2－暗褐色土(ロームブロック少量混入:1よりやや暗い：炭化物及び焼土粒子少量混入) 3－暗褐色土(ローム小ブロック及び炭化物少量混入:1よりやや暗い) 4－暗褐色土(ローム小ブロック及び焼土粒子少量混入:2より暗い) 5－暗褐色土(ローム小ブロック及び炭化物少量混入:2よりやや暗い) 6－暗褐色土(ローム小ブロック及び炭化物少量混入:4よりやや明るい) 7－褐色土(ローム小ブロック及び炭化物少量混入) 8－暗褐色土(ローム小ブロック及び炭化物少量混入:6.7よりやや暗い) 9－暗褐色土(ローム小ブロック混入)

20号土坑（水糸レベル＝788.90m）（第29図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｂ－４
平面形　円形
規　　模　71×65×14
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　タライ状



第28図　土坑（１）（1/40）

時　　期　不明
備　　考　浅い土坑であり、礫は確認面から坑底まで入っている。

21号土坑（水糸レベル＝788.60m）（第29図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　A－4・5
平面形　瓢箪形
規　　模　154×86.95×66.77
坑　　底　平坦
立ち上がり　箱形を呈する
時　　期　曽利Ⅰ式期
備　　考　重複関係にある。確認面に礫・土器が認められる。

22号土坑（水糸レベル＝789.40m）（第29図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　A・B－3
平面形　不整形
規　　模　74×40×31
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　東側は直に近い
時　　期　井戸尻式期
備　　考　6号土坑と重複する。土器は確認面から坑底近くまで認められる。

23号土坑（水糸レベル＝788.90m）（第29図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　B・C－4
平面形　円形
規　　模　121×108×27
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　皿状
時　　期　中期中葉ー後半
備　　考　土坑の中央やや東に礫が集中する。2号住居の炉を破壊する。

土層説明
1ー暗褐色土(ローム小ブロック及び炭化物少量混入)2ー暗褐色土(褐色土粒子混入:1より明るい) 3ー暗褐色土(2よりやや明るい：しまりあり)

24号土坑（水糸レベル＝788.50m）（第29図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　B－6
平面形　円形を呈する袋状
規　　模　75×70×75
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　袋状
時　　期　藤内式期
備　　考　坑底近くまで礫が認められ、中央にかたまって存在する。

25号土坑（水糸レベル＝788.50m）（第29図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　B－6
平面形　楕円形
規　　模　90×52×55
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　五領ケ台式期
備　　考

26号土坑（水糸レベル＝780.10m）（第29図）

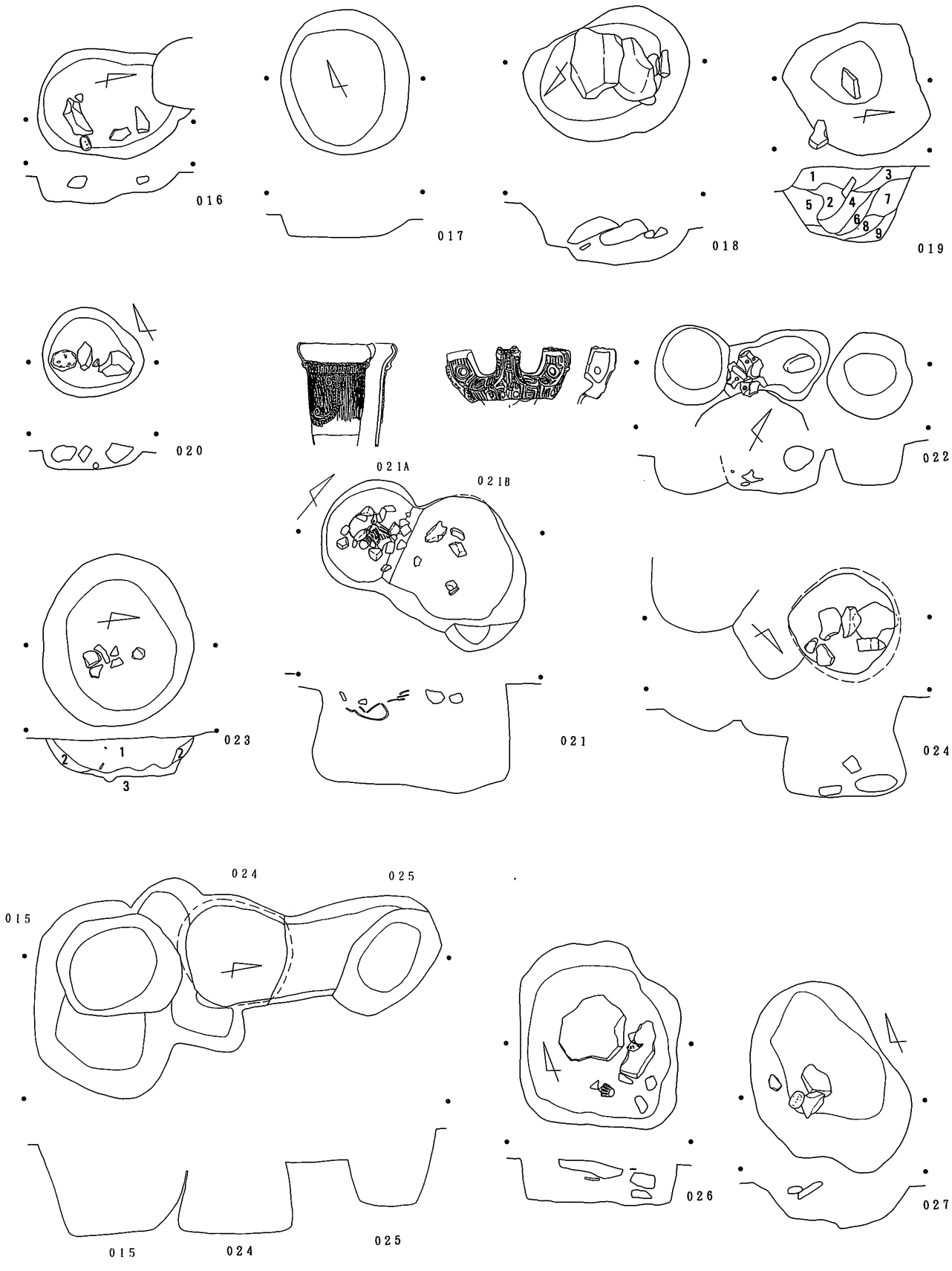
調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　Z－38
平面形　不整方形
規　　模　130×110×29
坑　　底　平坦で不整方形
立ち上がり　タライ状
時　　期　藤内式期
備　　考　大形の礫が土坑中央に存在し、礫の下に土器片が認められる。

27号土坑（水糸レベル＝779.90m）（第29図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　B－39
平面形　楕円形
規　　模　140×97×32
坑　　底　丸底を呈する楕円形
立ち上がり　すり鉢状
時　　期　藤内式期
備　　考

28号土坑（水糸レベル＝780.00m）（第30図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　B－39
平面形　楕円形
規　　模　112×75×17
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　皿状
時　　期　不明
備　　考　土坑中央に礫が配される。礫のみの出土



第29図　土坑（２）（1/40）

0　2m

30号土坑（水糸レベル＝780.10m）（第30図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　A・B－39
平面形　楕円形
規　　模　115×80×24
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　緩やかに立ち上がる
時　　期　藤内式期
備　　考

31号土坑（水糸レベル＝780.10m）（第30図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　Z－38
平面形　楕円形
規　　模　183×112×36
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　皿状
時　　期　不明
備　　考　土器は坑底より10㎝上で、土坑中位に存在する。

32号土坑（水糸レベル＝780.30m）（第30図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　B－38
平面形　円形
規　　模　105×／×39
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　緩やかに立ち上がる
時　　期　不明
備　　考

33号土坑（水糸レベル＝780.00m）（第30図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　A・B－39
平面形　楕円形
規　　模　151×120×31
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　藤内式期
備　　考　北東隅で半分欠損した土器が、内面を上に向けて出土し、坑底より8㎝上に存在する。

34号土坑（水糸レベル＝779.80m）（第30図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　A－39
平面形　楕円形
規　　模　102×72×31
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　西側の隅に礫が1ケ、坑底より5㎝上に存在する。

35号土坑（水糸レベル＝780.40m）（第30図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　A－38
平面形　不明
規　　模　／×80×12
坑　　底　平坦
立ち上がり　皿状を呈する
時　　期　不明
備　　考　東側壁で大形の礫が、確認面より上で認められる。

36号土坑（水糸レベル＝779.90m）（第30図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　Y・Z－39
平面形　楕円形
規　　模　138×110×30
坑　　底　平坦で不整楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　土坑中央に土器が存在し、その周りを礫で囲っている。土器は、礫より低い位置にある。

37号土坑（水糸レベル＝779.95m）（第30図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　Z－38
平面形　不整円形
規　　模　110×／×18
坑　　底　不整円形
立ち上がり　皿状を呈する
時　　期　狢沢式期～新道式期
備　　考　土坑のほぼ中央と思われる位置に礫が認められ、その上に土器片が散乱する。

38号土坑（水糸レベル＝780.20m）（第30図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　Z－38
平面形　楕円形

規　　模　121×93×27
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　緩やかに立ち上がる
時　　期　新道式期
備　　考

39号土坑（水糸レベル＝780.20m）（第30図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　Z－37
平面形　楕円形
規　　模　／×93×37
坑　　底　中央が凹む楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　諸磯c式期
備　　考　約半分は調査区外に存在する。坑底より5～11㎝上に土器および礫が存在する。また47号土坑の遺物と接合する。

40号土坑（水糸レベル＝780.00m）（第30図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　A－39
平面形　楕円形
規　　模　155×90×42
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　4号住居内に存在し、柱穴と重複する。

41号土坑（水糸レベル＝780.00m）（第30図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　A－39
平面形　楕円形
規　　模　／×60×21
坑　　底　平坦で楕円形を呈すると思われる
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　他の土坑と重複し、規模は不明である。またほぼ坑底で礫が3ケ認められる。礫は土坑のほぼ中央に位置する。

42号土坑（水糸レベル＝779.90m）（第30図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　Z－39
平面形　楕円形
規　　模　／×／×40
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　土坑中央に礫が2ケ存在し、坑底より28㎝上で出土する。

43号土坑（水糸レベル＝779.70m）（第30図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　A・B－40
平面形　ほぼ円形
規　　模　75×60×12
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　皿状を呈する
時　　期　新道式期
備　　考　土坑が浅かったためか、土器は内面を上に向けて出土する。また土器は、土坑確認面から坑底より10㎝上で出土する。

44号土坑（水糸レベル＝780.20m）（第30図）

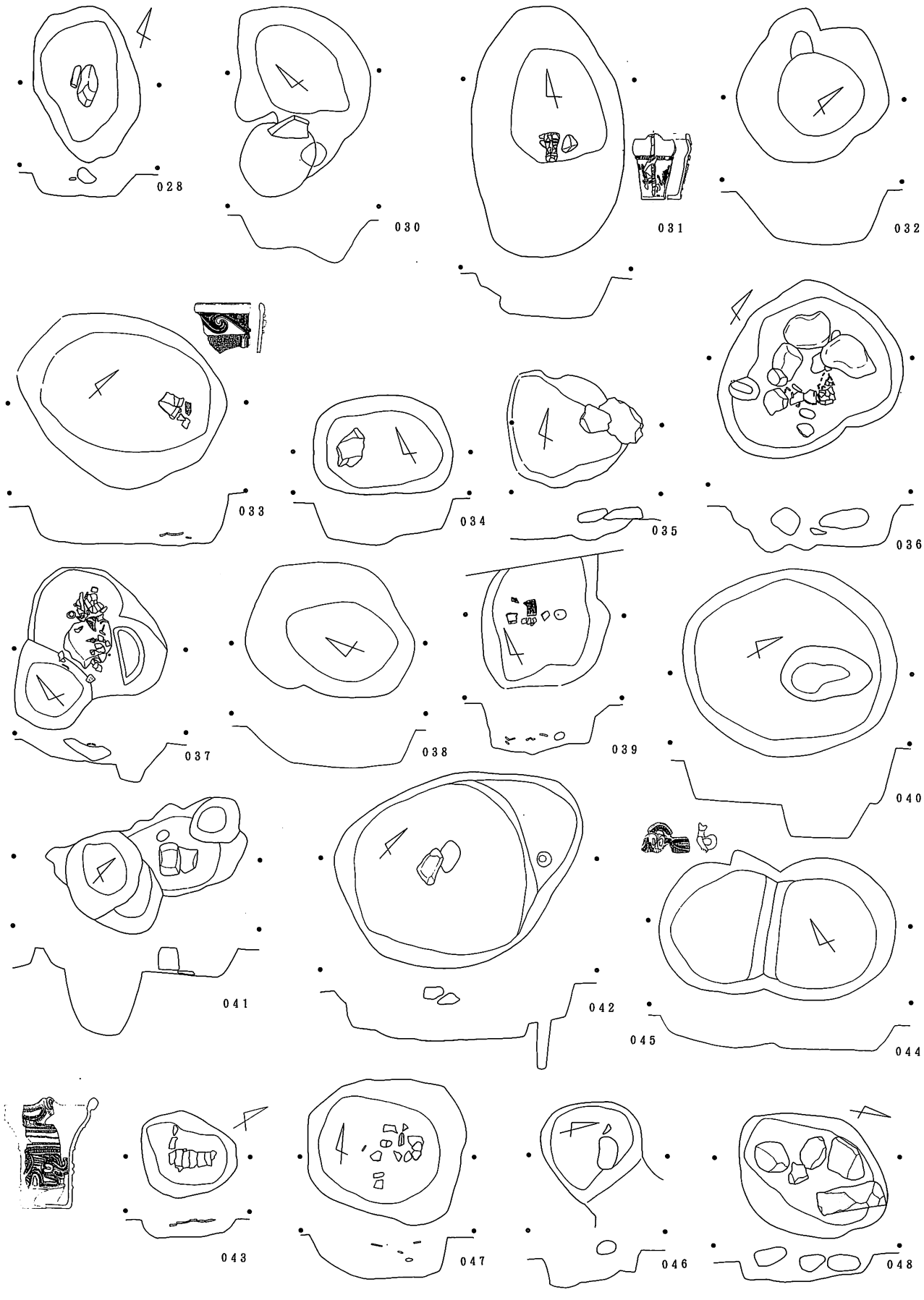
調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　Z・A－38
平面形　円形か
規　　模　径100前後×20
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　45土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

45号土坑（水糸レベル＝780.20m）（第30図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　A－38
平面形　円形か
規　　模　径100㎝前後×22
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　中期中葉
備　　考　44土坑より浅い。

46号土坑（水糸レベル＝780.30m）（第30図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　A－38
平面形　円形
規　　模　径72×20
坑　　底　ほぼ平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明



第30図　土坑（３）（1/40）

0　2m

備　　考　64土坑に切られる。東よりに礫が存在する。

47号土坑（水糸レベル＝779.80m）（第30図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｚ－39
平面形　ほぼ円形
規　　模　116×103×32
坑　　底　丸底で円形
立ち上がり　西側では緩く、東側では直に近い
時　　期　諸磯ｃ式期と思われる
備　　考　39土坑の遺物と接合する。

48号土坑（水糸レベル＝779.20m）（第30図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｚ－41・42
平面形　楕円形
規　　模　120×93×17
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　タライ状
時　　期　不明
備　　考　土坑のほぼ中央に大形の礫が認められ、礫は坑底より3～9㎝4上に存在する。

49号土坑（水糸レベル＝779.70m）（第31図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｚ－40
平面形　不整楕円形
規　　模　106×77×37
坑　　底　ほぼ平坦で不整楕円形
立ち上がり　緩やかに立ち上がる
時　　期　中期中葉
備　　考　土坑中央に礫が存在し、坑底より4㎝上で認められる。

50号土坑（水糸レベル＝779.80m）（第31図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ａ－40
平面形　不整楕円形
規　　模　142×87×38
坑　　底　丸底でほぼ円形
立ち上がり　緩やかに立ち上がる
時　　期　井戸尻式期
備　　考　土器は東壁よりで、土坑上面で出土し、坑底より24㎝上に存在する。
土層説明
1－暗褐色土（ローム小ブロック混入：炭化物少量混入2－暗褐色土（ローム粒子少量混入：1よりやや明るい）3－暗褐色土（ローム粒子少量混入：2よりやや暗い）
4－暗褐色土（炭化物少量混入：2よりやや明るい）
5－褐色土（ローム粒子混入：しまりやや弱い）

51号土坑（水糸レベル＝780.30m）（第31図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ａ・Ｂ－38
平面形　楕円形
規　　模　122×95×50
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い。南東は、緩やかに立ち上がる
時　　期　不明
備　　考　53土坑に切られる。

52号土坑（水糸レベル＝780.30m）（第31図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ａ－38
平面形　円形
規　　模　140×136×25
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　北は皿状で、南は直に近い
時　　期　藤内式期
備　　考　大形の礫が６ケ認められ、東壁よりに存在する。また礫の１ケは、坑底に存在する。

53号土坑（水糸レベル＝780.20m）（第31図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ａ・Ｂ－38
平面形　円形
規　　模　／×／×14
坑　　底　ピットに切られ不明
立ち上がり　緩やかに立ち上がる
時　　期　不明
備　　考　南よりに凹石および土器片が認められる。また礫は、確認面より上に存在し、礫の下に土器片は存在する。

54号土坑（水糸レベル＝779.70m）（第31図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ａ－40
平面形　円形
規　　模　75×70×25
坑　　底　ほぼ平坦で円形
立ち上がり　直に近い

時　　期　不明
備　　考　土坑中央より西側で平たい石が１点認められ、坑底より５㎝上に存在する。

55号土坑（水糸レベル＝779.30m）（第31図）
調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ａ－41
平面形　隅丸長方形
規　　模　140×112×17
坑　　底　平坦
立ち上がり　皿状を呈する
時　　期　中期中葉
備　　考　89土坑とと重複する。土坑の西側で石皿が出土し、石皿は確認面に存在する。また礫は、確認面よりやや上で認められる。石皿の下に石斧が1点出土する。

56号土坑（水糸レベル＝779.70m）（第31図）
調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｚ－40
平面形　不整楕円形
規　　模　111×90×51
坑　　底　平坦部はほとんどなくほぼ円形
立ち上がり　北西側は緩やかで、南東側は直に近い
時　　期　不明
備　　考　礫は土坑のほぼ中央に存在し、坑底より20㎝上で認められる。

57号土坑（水糸レベル＝779.90m）（第31図）
調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｚ－39
平面形　楕円形
規　　模　67×45×57
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　３基の重複が認められ、４号住居の東側中央の柱である。土坑の中位に礫は存在する。

58号土坑（水糸レベル＝779.70m）（第31図）
調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｚ－39
平面形　円形
規　　模　39×35×30
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　別の遺構と重複する。

59号土坑（水糸レベル＝780.20m）（第31図）
調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｂ－38
平面形　楕円形
規　　模　90×75×／
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　藤内式期
備　　考

60号土坑（水糸レベル＝779.90m）（第31図）
調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ａ－39
平面形　円形
規　　模　50×40×42　85×77×22
坑　　底　不明
立ち上がり　緩やかに立ち上がる
時　　期　不明
備　　考　２基の土坑と思われる。

61号土坑（水糸レベル＝780.20m）（第31図）
調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ａ・Ｂ－38
平面形　円形
規　　模　径110×17
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　藤内式期
備　　考　70号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

62号土坑（水糸レベル＝779.90m）（第31図）
調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ａ－39
平面形　楕円形
規　　模　120×100×27
坑　　底　ほぼ平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考

63号土坑（水糸レベル＝779.80m）（第31図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ａ－39
平面形　楕円形
規　　模　132×110×23
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　藤内式期
備　　考

64号土坑（水糸レベル＝780.20m）（第31図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ａ－38
平面形　円形
規　　模　径88×29落ち込み部で34㎝
坑　　底　不明
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　46号土坑と重複し、本土坑のほうが新しい。

65号土坑（水糸レベル＝780.20m）（第31図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ａ－38
平面形　楕円形
規　　模　104×80×23
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考

66号土坑（水糸レベル＝780.20m）（第31図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｚ－38
平面形　円形
規　　模　径100×23
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　緩やかに立ち上がる
時　　期　不明
備　　考

67号土坑（水糸レベル＝780.30m）（第31図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｚ・Ａ－37.38
平面形　楕円形
規　　模　100×80×14
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考

68号土坑（水糸レベル＝779.80m）（第31図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ａ－39
平面形　楕円形
規　　模　／×93×27
坑　　底　中央に落ち込みを持ち楕円形を呈する
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考

69号土坑（水糸レベル＝779.80m）（第31図）

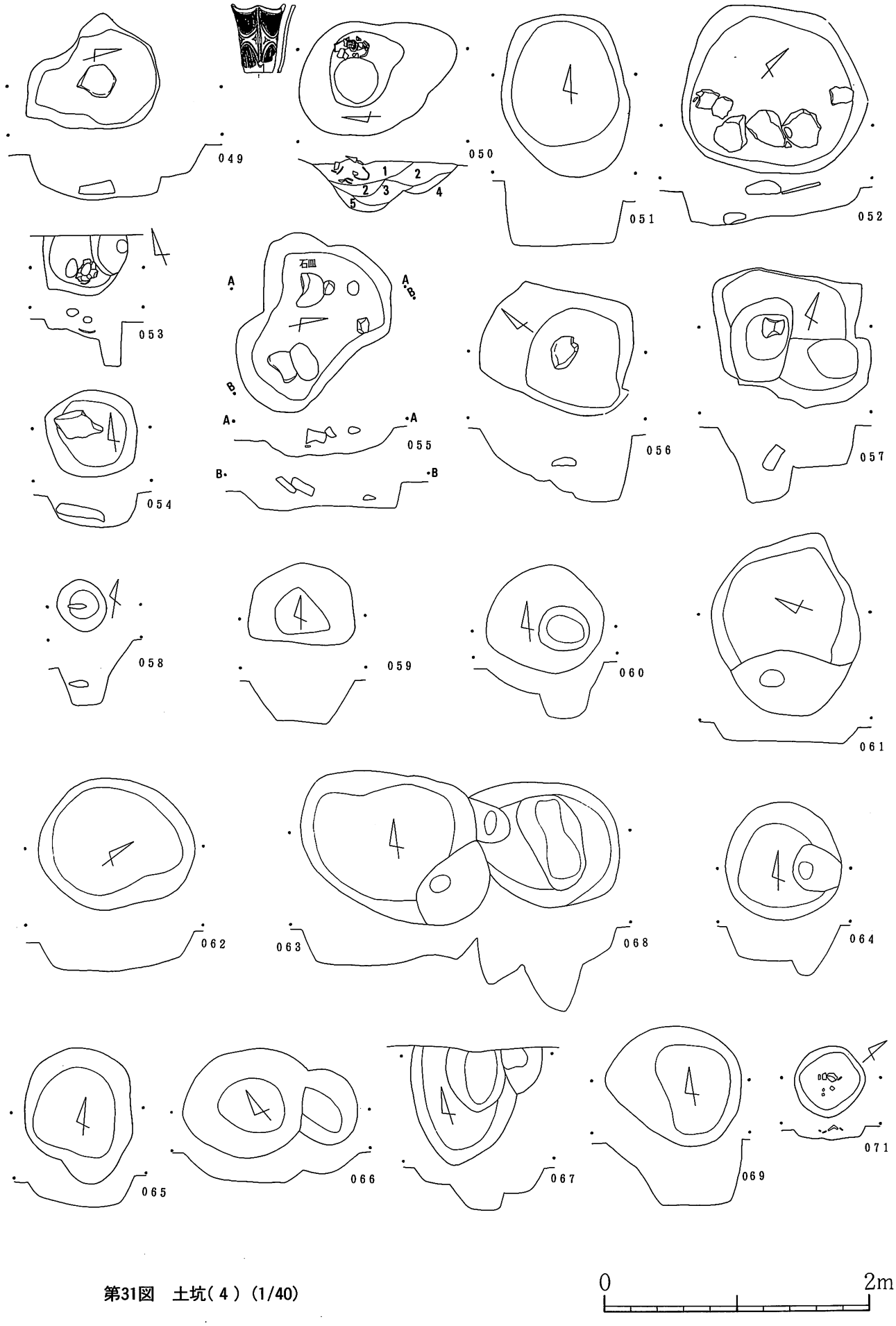
調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ａ－39
平面形　楕円形
規　　模　104×92×51
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　西側は緩やかで、他は直に近い
時　　期　不明
備　　考

71号土坑（水糸レベル＝780.00m）（第31図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｚ－38
平面形　円形
規　　模　53×50×9
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　皿状
時　　期　中期中葉
備　　考　土坑中央に遺物が認められ、土器片は坑底より5～8㎝上に存在する。

72号土坑（水糸レベル＝780.00m）（第32図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｚ－38
平面形　円形
規　　模　／×95×10
坑　　底　凹凸で円形
立ち上がり　皿状
時　　期　藤内式期の浅鉢１点出土
備　　考　26号土坑に切られる。礫は、坑底より7㎝上に存在する。


049
050
1
2
3
4
5
051
052
053
石皿
A
B
055
056
057
054
058
059
060
061
062
063
068
064
065
066
067
069
071
0
2m

第31図　土坑（４）（1/40）

73号土坑（水糸レベル＝779.30m）（第32図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｚ－42
平面形　不整楕円形
規　　模　147×114×31
坑　　底　すり鉢状を呈し、楕円形
立ち上がり　緩やかに立ち上がる
時　　期　不明
備　　考　礫は中央部と東よりにそれぞれ認められ、中央の礫は坑底より15㎝、東側の礫は坑底より16㎝上に存在する。完形の石皿が出土する。

74号土坑（水糸レベル＝779.90m）（第32図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ａ－39
平面形　楕円形
規　　模　57×46×54
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考

75号土坑（水糸レベル＝779.30m）（第32図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｙ－41
平面形　楕円形
規　　模　75×60×17
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　礫は、坑底より４㎝上に存在し、中央から東よりに集中する。

76号土坑（水糸レベル＝779.30m）（第32図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｚ・Ａ－41
平面形　楕円形
規　　模　110×85×15
坑　　底　ほぼ平坦で北側が高い
立ち上がり　北側は皿状を呈し、南側は直に近い
時　　期　藤内式期
備　　考　礫は、中央よりやや南東側に存在する。

77号土坑（水糸レベル＝779.80m）（第32図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｚ－39
平面形　不明
規　　模　／×／×／
坑　　底　不明
立ち上がり　不明
時　　期　不明
備　　考　風倒木痕内に存在しているため、形態等は全て不明である。坑底は浅く落ち込んでいる状態が認められる程度である。礫が３点認められる。

78号土坑（水糸レベル＝779.60m）（第32図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｙ・Ｚ－39.40
平面形　楕円形
規　　模　194×125×32
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　コーナー部は緩く、他は直に近い
時　　期　不明
備　　考　５号住居と重複する。

79号土坑（第32図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｚ－39
平面形　不整円形
規　　模　70×65×14
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　井戸尻式期
備　　考　４号住居内に存在する。

80号土坑（第32図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｚ・Ａ－39
平面形　長方形
規　　模　69×56×21
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　４号住居内に存在する。

81号土坑（第32図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｚ・Ａ－39
平面形　円形
規　　模　径65前後×18

坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　4号住居内に存在する。

82号土坑（水糸レベル＝779.70m）（第32図）
調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　A－40
平面形　楕円形
規　　模　105×85×24
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　井戸尻式期
備　　考

83号土坑（水糸レベル＝779.50m）（第32図）
調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　Z－40
平面形　楕円形
規　　模　128×89×28
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　東側では直に近い
時　　期　不明
備　　考　礫は、北側隅に存在する。また坑底より6㎝上で認められる。123号土坑と重複する。

84号土坑（水糸レベル＝779.60m）（第32図）
調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　A－40
平面形　不明
規　　模　／×／×20
坑　　底　丸底
立ち上がり　すり鉢状
時　　期　井戸尻式期
備　　考　96号土坑によって切られる。土器は、一箇所に集中する。

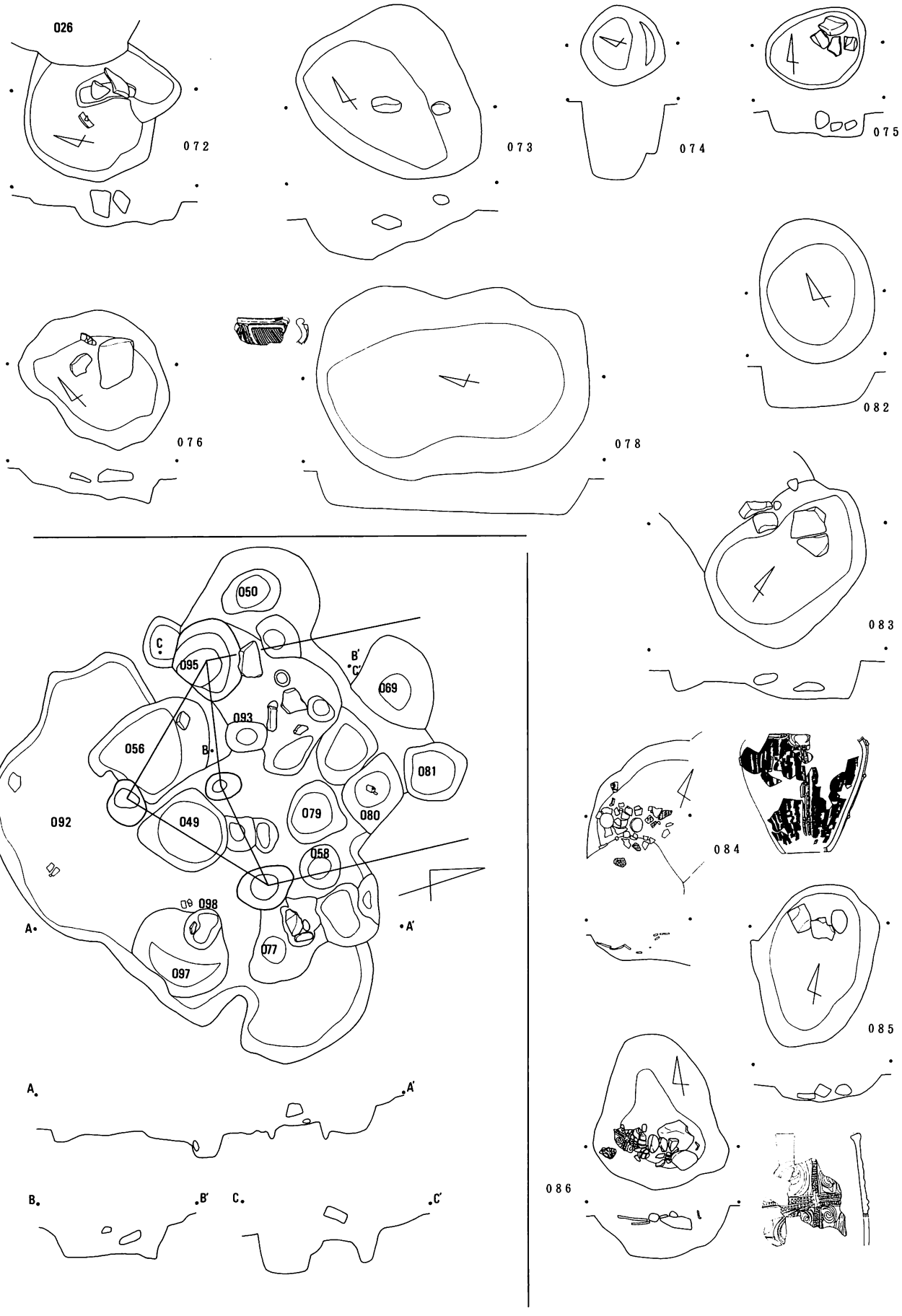
85号土坑（水糸レベル＝779.30m）（第32図）
調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　Z－40.41
平面形　楕円形
規　　模　125×85×31
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　皿状
時　　期　不明
備　　考　北側に礫は集中し、ほぼ坑底に存在する

86号土坑（水糸レベル＝779.50m）（第32図）
調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　Z・A－40
平面形　楕円形
規　　模　113×97×35
坑　　底　丸底で不整楕円形
立ち上がり　すり鉢状
時　　期　井戸尻式期
備　　考　96号土坑と重複する。土器片および礫は、土坑の上面で認められ、南側に集中する。

87号土坑（水糸レベル＝779.30m）（第33図）
調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　Y・Z－41
平面形　楕円形
規　　模　78×70×30
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　新道式期
備　　考

88号土坑（水糸レベル＝779.50m）（第33図）
調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　Z・A－40.41
平面形　楕円形
規　　模　／×88×28
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　西側では緩やかに立ち上がる
時　　期　不明
備　　考　礫は、確認面より上に存在し、坑底より4～20㎝上に存在する。

89号土坑（水糸レベル＝779.20m）（第33図）
調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　A－41.42
平面形　楕円形
規　　模　160×85×16
坑　　底　ほぼ平坦で円形
立ち上がり　皿状
時　　期　中期前半
備　　考　礫は、土坑の中位に認められ、坑底より4～10㎝上に存在する。



第32図　土坑（５）（1/40）・（1/60）

90号土坑（水糸レベル＝779.40m）（第33図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｚ－41
平面形　楕円形
規　　模　147×98×15
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　藤内式期
備　　考　西側の隅に礫が集中し、大形の礫は、中央よりやや西側に２ケ存在する。また礫は、坑底より2～7㎝上で認められる。

91号土坑（水糸レベル＝779.40m）（第33図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｚ・Ａ－41
平面形　楕円形
規　　模　93×68×26
坑　　底　中央部が凹む楕円形
立ち上がり　すり鉢状を呈する
時　　期　藤内式期
備　　考　76号土坑と重複する。礫は、中央より南側に散乱する。

92号土坑（第32図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｚ－40
平面形　瓢箪形
規　　模　170×110×18
坑　　底　平坦で瓢箪形
立ち上がり　緩やかに立ち上がる
時　　期　新道式期
備　　考　56号土坑と重複する

93号土坑（水糸レベル＝779.70m）（第32図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｚ－40
平面形　不明
規　　模　／×／×38
坑　　底　平坦
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　風倒木痕内で礫が４点認められる。

94号土坑（水糸レベル＝779.40m）（第33図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ａ－41
平面形　円形
規　　模　107×93×20
坑　　底　ほぼ平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　99号土坑と重複する。土器片と礫は、土坑中央から東側にかけて集中する。

95号土坑（水糸レベル＝779.80m）（第32図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ａ－40
平面形　楕円形
規　　模　85×70×60
坑　　底　平坦で円形に近い
立ち上がり　バケツ状
時　　期　不明
備　　考　４号住居の掘立柱の南西隅の柱

96号土坑（水糸レベル＝779.60m）（第33図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ａ－40
平面形　楕円形
規　　模　76×62×96
坑　　底　丸底で円形
立ち上がり　北側では袋状、南側では直に近い
時　　期　不明
備　　考　84号土坑と重複する。礫は、土坑のほぼ中央に存在し、大形のものである。

97号土坑（水糸レベル＝779.80m）（第32図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｚ－40
平面形　楕円形
規　　模　106×／×11
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　緩やかに立ち上がる
時　　期　不明
備　　考　風倒木痕内に存在する。

98号土坑（水糸レベル＝779.80m）（第32図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｚ－40
平面形　楕円形
規　　模　45×37×11
坑　　底　平坦で瓢箪形
立ち上がり　直に近い

時　　期　諸磯ｃ式期
備　　考　深さは、風倒木痕の確認面からだと41㎝である。

99号土坑(水糸レベル＝779.40m)（第33図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ａ－41
平面形　楕円形
規　　模　132×107×19
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　ほぼ直に近い
時　　期　不明
備　　考　94号土坑と重複し、本土坑のほうが新しい。凹石1点出土する。

100号土坑(水糸レベル＝779.50m)（第33図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ａ－40.41
平面形　楕円形
規　　模　133×105×27
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　東は緩やかで、他は直に近い
時　　期　不明
備　　考

101号土坑(水糸レベル＝779.40m)（第33図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｚ－41
平面形　不整円形
規　　模　80×78×22
坑　　底　ほぼ平坦で円形
立ち上がり　すり鉢状
時　　期　不明
備　　考　礫は、東側で認められ、坑底より7～15㎝上に存在する。

102号土坑(水糸レベル＝779.40m)（第33図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｚ－41
平面形　楕円形
規　　模　／×98×25
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　緩やかに立ち上がる
時　　期　不明
備　　考　礫は、北側隅に存在する。

103号土坑(水糸レベル＝779.00m)（第33図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｙ・Ｘ－42
平面形　円形
規　　模　径120前後×34
坑　　底　平坦で楕円形に近い
立ち上がり　緩やかに立ち上がる
時　　期　藤内式期
備　　考　土坑中央および南壁よりに土器片が存在する。坑底の西側および東側に落ち込みが認められ、本土坑に伴うものかどうかは不明である。

104号土坑（第33図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｙ－42
平面形　円形
規　　模　径70前後×33
坑　　底　平坦で卵形
立ち上がり　緩やかに立ち上がる
時　　期　五領ケ台式期
備　　考　坑底西側では狭く、東側では広がる。

105号土坑（第33図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｙ－42
平面形　瓢箪形
規　　模　192×92×33
坑　　底　坑底が２ケ所に分かれることから重複と考えられる。
立ち上がり　緩やかに立ち上がる
時　　期　不明
備　　考　新旧関係は不明である。

107号土坑(水糸レベル＝779.00m)（第33図）

調査年度　1991年度（第３次調査）
位　　置　Ｙ－42
平面形　円形
規　　模　径87前後×19
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　藤内式期
備　　考　６号住居と重複する。103号土坑と重複し、本土坑のほうが新しい。

108号土坑（第33図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　X－42
平面形　楕円形
規　　模　／×97×36
坑　　底　不明
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　6号住居・161号土坑と重複する。新旧関係は不明である。

109号土坑（水糸レベル＝780.20m）（第33図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　Z・Y－42
平面形　楕円形
規　　模　108×63×20
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　藤内式期
備　　考　110号土坑と重複し、本土坑のほうが新しい。礫は、南北に3ケ認められ、坑底より5～9cm上に存在する。

110号土坑（第33図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　Z・Y－42
平面形　楕円形
規　　模　／×60×15
坑　　底　平坦
立ち上がり　タライ状
時　　期　藤内式期
備　　考　109号土坑に切られる。大形の石は、土坑の北側におかれ、坑底より10cm上に存在する。

111号土坑（水糸レベル＝779.10m）（第33図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　Z－42
平面形　卵形
規　　模　75×55×27
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　東は緩く、他は直に近い
時　　期　不明
備　　考

112号土坑（水糸レベル＝779.20m）（第33図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　Z－41.42
平面形　楕円形
規　　模　82×38×23
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　中期中葉
備　　考　125号土坑と重複する。新旧関係は不明である。

113号土坑（第34図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　Z・Y－41
平面形　楕円形か
規　　模　88×48×33
坑　　底　平坦でほぼ楕円形
立ち上がり　緩やかに立ち上がる
時　　期　不明
備　　考　121.122号土坑と重複する。新旧関係は不明である。

115号土坑（水糸レベル＝779.30m）（第34図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　Y－41
平面形　不整楕円形
規　　模　径100×23
坑　　底　平坦で不整楕円形
立ち上がり　北は皿状、南は直に近い
時　　期　不明
備　　考　6号住居と重複する。礫は、15ケ認められ南北に長く存在する。また礫は、確認面から坑底近くまで入れられている。石皿の破片は、接合される。

116号土坑（水糸レベル＝779.10m）（第33図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　Z－41.42
平面形　不明
規　　模　／×112×21
坑　　底　平坦で中央がやや凹む
立ち上がり　直に近い
時　　期　藤内式期
備　　考　石皿片出土

第33図　土坑(６)(1/40)・(1/100)

0　2m

117号土坑(水糸レベル＝779.10m)(第33図)

調査年度　1991年度(第3次調査)
位　　置　Z－42
平面形　楕円形
規　　模　77×63×20
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考

118号土坑(水糸レベル＝779.10m)(第33図)

調査年度　1991年度(第3次調査)
位　　置　Z－42
平面形　卵形
規　　模　120×87×21
坑　　底　ほぼ平坦で卵形
立ち上がり　ほぼ直に近い
時　　期　不明
備　　考

121号土坑(第34図)

調査年度　1991年度(第3次調査)
位　　置　Z－41
平面形　不明
規　　模　／×／×27
坑　　底　不明
立ち上がり　不明
時　　期　藤内式期
備　　考　113.122.125号土坑と重複し、新旧関係は不明である。

122号土坑(第34図)

調査年度　1991年度(第3次調査)
位　　置　Z－41
平面形　不明
規　　模　145前後×37
坑　　底　ほぼ平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　113・121・125号土坑と重複する。

126号土坑(水糸レベル＝779.20m)(第34図)

調査年度　1991年度(第3次調査)
位　　置　Y－43
平面形　円形
規　　模　63×55×56
坑　　底　ほぼ平坦
立ち上がり　直に近い
時　　期　曽利I式期ないしそれ以降
備　　考　7号住居の中につくられる(貼り床がされていなかった)。

127号土坑(水糸レベル＝779.30m)(第34図)

調査年度　1991年度(第3次調査)
位　　置　Y－41
平面形　円形
規　　模　80×77×51
坑　　底　皿状を呈する
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　石皿は、土坑中央に皿部を上に向けられて出土。

129号土坑(水糸レベル＝778.50m)(第34図)

調査年度　1991年度(第3次調査)
位　　置　Z－43
平面形　袋状
規　　模　92×60×62
坑　　底　平坦
立ち上がり　袋状を呈する
時　　期　不明
備　　考　7号住居を切る。土坑中位に土器片が存在する。

130号土坑(水糸レベル＝778.60m)(第34図)

調査年度　1991年度(第3次調査)
位　　置　Y－43
平面形　不整楕円形
規　　模　127×102×23
坑　　底　ほぼ平坦
立ち上がり　直に近い
時　　期　中期前半
備　　考　西側に新しい土坑が存在する。土坑中央よりやや東側で土器片が出土する。

132号土坑(水糸レベル＝779.00m)(第34図)

調査年度　1991年度(第3次調査)
位　　置　Y－43
平面形　楕円形
規　　模　156×123×14
坑　　底　皿状を呈する
立ち上がり　緩やかに立ち上がる

時　　期　藤内式期
備　　考　礫は、斜めに立っている状態である。有孔鍔付土器片出土。

134号土坑（第34図）
調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　Y－41.42
平面形　円形
規　　模　径80前後×45
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　北は緩く、他は直に近い
時　　期　中期中葉
備　　考　6号住居内の溝に切られる。

135号土坑（水糸レベル＝778.90m）（第34図）
調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　Y－43
平面形　円形
規　　模　82×78×18
坑　　底　平坦
立ち上がり　緩やかに立ち上がる
時　　期　不明
備　　考　土器は、横になり確認面より上で、半分は土坑内に存在する。また土器は、坑底より5㎝上に存在する。

138号土坑（水糸レベル＝778.80m）（第34図）
調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　Y－43
平面形　不整楕円形
規　　模　115×100×38
坑　　底　二段の構築が認められる
立ち上がり　ほぼ緩やか
時　　期　藤内式期
備　　考　凹石が出土する。

140号土坑（水糸レベル＝778.80m）（第34図）
調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　X－43
平面形　楕円形
規　　模　110×90×34
坑　　底　皿状を呈する
立ち上がり　直に立ち上がる
時　　期　中期中葉
備　　考　礫は土坑のほぼ中央で認められ、中位に存在する。土器片は、礫より下位で認められる。

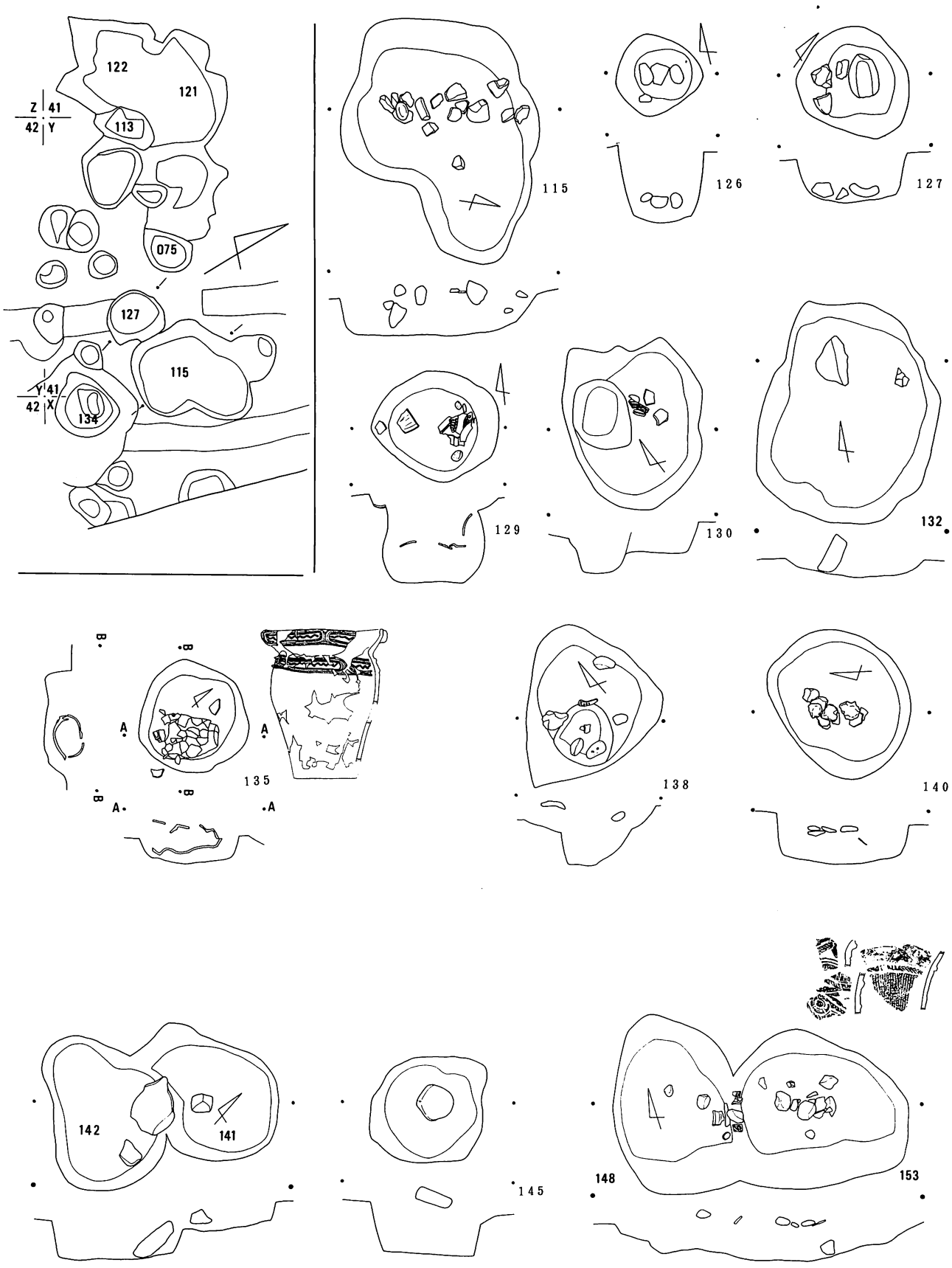
141号土坑（水糸レベル＝778.90m）（第34図）
調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　X－42・43
平面形　ほぼ円形
規　　模　85×/×21
坑　　底　平坦
立ち上がり　北では直に近い
時　　期　藤内式期
備　　考　本土坑は142号土坑に切られる。

142号土坑（水糸レベル＝778.90m）（第34図）
調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　X－43
平面形　楕円形
規　　模　114×92×27
坑　　底　平坦
立ち上がり　直に近くタライ状
時　　期　藤内式期
備　　考　大形の礫は斜めに落ち込んで認められ、土坑の底にまで達する。

145号土坑（水糸レベル＝779.70m）（第34図）
調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　X－43
平面形　不整円形
規　　模　96×81×42
坑　　底　平坦
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　土坑の確認面上部で検出される。

148号土坑（水糸レベル＝778.80m）（第34図）
調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　Y－43.44
平面形　楕円形
規　　模　132×90×20
坑　　底　やや平坦
立ち上がり　段を有するも緩やかである
時　　期　不明
備　　考　7号住居と153号土坑と重複する。

152号土坑（水糸レベル＝779.10m）（第35図）
調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　X－42
平面形　円形



第34図　土坑(７)(1/40)・(1/100)

0　2m

規　　模　49×42×15
坑　　底　平坦で円形に近い
立ち上がり　東はタライ状・西は直に近い
時　　期　曽利Ⅲ式期
備　　考　土坑中央で土器片が出土する。土器片は確認面より上に存在する。

153号土坑（水糸レベル＝778.80m）（第34図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　Y－43.44
平面形　楕円形
規　　模　／×110×26
坑　　底　皿状
立ち上がり　緩やかに立ち上がる
時　　期　井戸尻式期
備　　考　148号土坑と重複する。礫が認められそのうちの1点は、坑底近くに存在する。

154号土坑（水糸レベル＝778.70m）（第35図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　X－43.44
平面形　楕円形
規　　模　126×77×38
坑　　底　皿状を呈し、中央付近にピットを有するものの、柱穴を壊して土坑がつくられたのか、柱穴内に礫と土器が入っているのかは不明である。
立ち上がり　皿状で、柱穴は直に近い
時　　期　井戸尻式期
備　　考　土坑上面で礫が認められ、礫の下に土器は存在する。

157号土坑（水糸レベル＝775.50m）（第35図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　S－54
平面形　楕円形
規　　模　77×62×30
坑　　底　皿状で中央が凹む
立ち上がり　ほぼ直に近い
時　　期　諸磯c式期
備　　考　北東隅の中位に礫が2点認められる。

160号土坑（水糸レベル＝778.60m）（第35図）

調査年度　1991年度（第3次調査）
位　　置　X－44
平面形　円形
規　　模　76×65×12
坑　　底　ほぼ平坦
立ち上がり　タライ状
時　　期　曽利Ⅱ式期
備　　考　土坑中央から東にかけて遺物は出土し、土器は、坑底より20㎝上に存在し、確認面より上で認められる。

171号土坑（水糸レベル＝778.50m）（第35図）

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　X－44
平面形　円形　集石土坑
規　　模　108×/×29
坑　　底　平坦でほぼ円形
立ち上がり　ほぼ直に近い
時　　期　不明
備　　考　172号土坑と重複する。遺物は認められない。上面の礫は握り拳大が多く、その下からは炭化物の広がりを持った層が認められる。炭化物を掘り下げたところで、再度礫が存在し、上面の礫に比べ大型の礫となり、礫は平坦面を上に向けて置かれている。

172号土坑（水糸レベル＝778.50m）（第35図）

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　X－44
平面形　楕円形か集石土坑
規　　模　／×71×36
坑　　底　中央が凹み楕円形を呈する
立ち上がり　直に立ち上がる
時　　期　不明
備　　考　礫は確認面から坑底まで詰められる。出土遺物は、礫のみである。

173号土坑（水糸レベル＝778.40m）（第35図）

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　X－44
平面形　円形
規　　模　105×97×53
坑　　底　中央が高まる
立ち上がり　直に近い
時　　期　諸磯c式期
備　　考　坑底付近の中央部から西側にかけて土器片と礫が存在する。

174号土坑（水糸レベル＝778.00m）（第35図）

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　X－46
平面形　円形
規　　模　130×111×70
坑　　底　ほぼ平坦で楕円形
立ち上がり　ほぼ直に近い
時　　期　諸磯c式期
備　　考　土坑中位に礫は集中し、隙間なく詰められる。また礫は、下位の方がやや大型となる。礫は27ケである。

175号土坑（水糸レベル＝778.10m）（第35図）

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　Y－44
平面形　袋状
規　　模　61×47×58
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　袋状を呈する
時　　期　中期中葉
備　　考　10号住居の炉を壊してつくられる。土坑確認面より上部で、口縁部を下に向け斜めで出土する。また坑底より浮いた状態で礫の下に土器片及び土偶の頭が出土する。土偶の頭は、礫と礫の間に存在し、顔をしたに向けて出土する。

176号土坑（水糸レベル＝777.90m）（第35図）

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　W－46
平面形　楕円形
規　　模　90×78×46
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　緩やかに立ち上がる
時　　期　諸磯c式期
備　　考　土坑中央に土器片は集中し、坑底より30㎝上に存在する。

177号土坑（水糸レベル＝778.00m）（第35図）

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　X－46
平面形　円形
規　　模　108×95×45
坑　　底　ほぼ平坦で円形
立ち上がり　東側では段を有し、他は直に近い
時　　期　諸磯c式期
備　　考　土坑中央に土器片は集中し、坑底近くで土器片2点が出土する。あとは全て土坑上部に位置する。

178号土坑（水糸レベル＝777.90m）（第35図）

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　W・X－46
平面形　楕円形
規　　模　53×42×47
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　藤内式期
備　　考　確認面より上面及び土坑中位に土器片は存在する。

181号土坑（水糸レベル＝777.70m）（第35図）

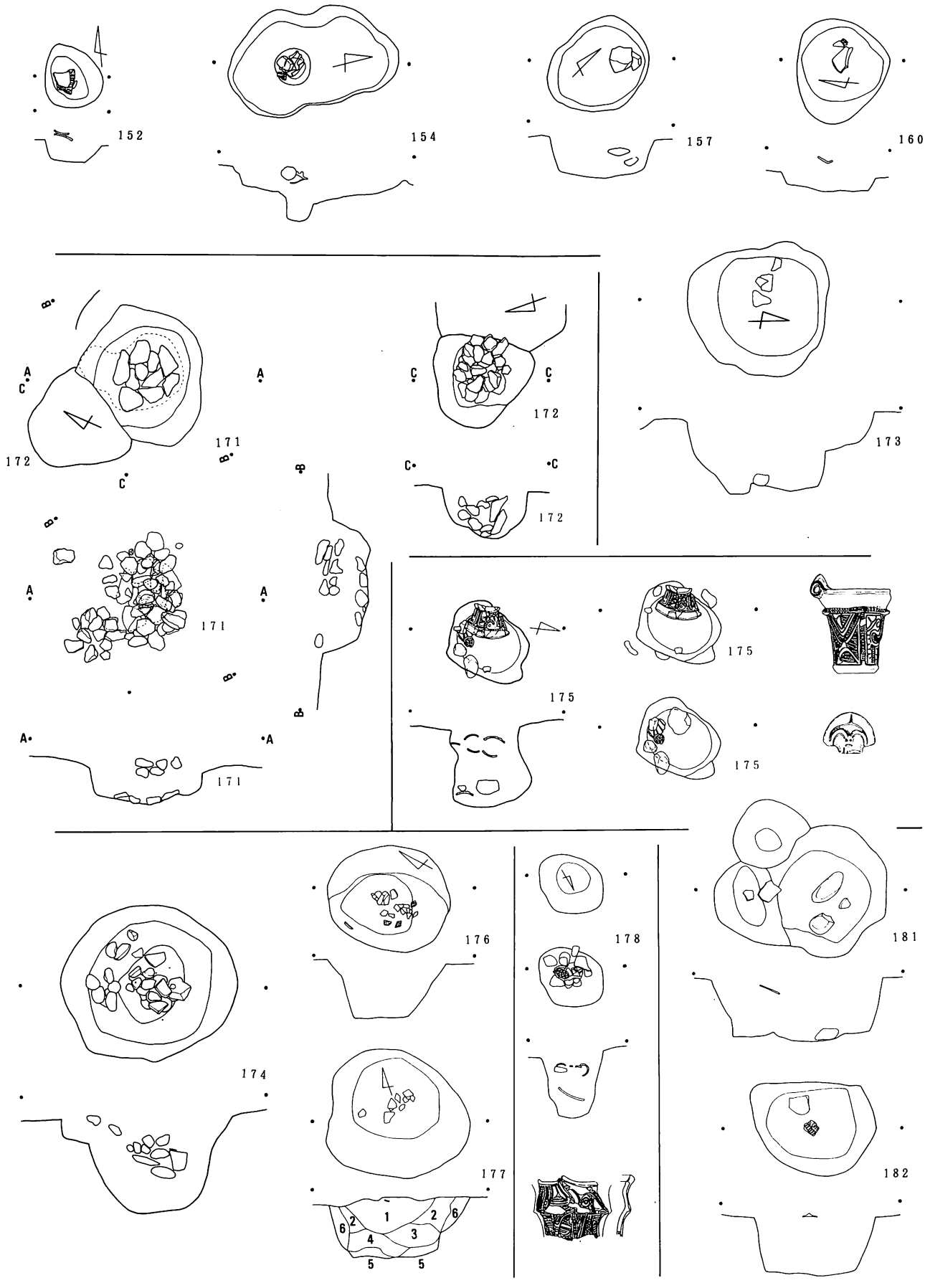
調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　W－46
平面形　円形と楕円形
規　　模　96×78×45　65×／×42
坑　　底　平坦
立ち上がり　直に近い
時　　期　中期中葉
備　　考　2基存在するが、新旧関係は不明である。西側のものは、坑底に礫が3ケ存在し、東のものは上面に土器片2点が出土する。

182号土坑（水糸レベル＝777.70m）（第35図）

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　W－47
平面形　楕円形
規　　模　94×70×42
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　藤内式期
備　　考　土器片は、確認面で出土し、11号住居と接合する（11住－84＋182土－P2）。

183号土坑（水糸レベル＝778.00m）（第36図）

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　X・Y－44
平面形　袋状
規　　模　51×／×42
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　袋状



第35図　土坑（８）（1/40）

時　　期　中期中葉
備　　考　10号住居と重複する。坑底近くに礫が存在し、土器片は礫と同じレベルないし上部で出土する。

189号土坑(水糸レベル＝781.60m)(第36図)
調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　E－34
平面形　楕円形
規　　模　138×111×75
坑　　底　ほぼ平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　かなり深い土坑である。礫は12点で坑底より10㎝前後上に存在する。

191号土坑(水糸レベル＝781.40m)(第36図)
調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　D－34・35
平面形　円形
規　　模　113×97×32
坑　　底　西側が高いほぼ円形
立ち上がり　西側は緩く、東側は直に近い
時　　期　不明
備　　考　礫が3点出土し、ほぼ同レベルであるが西側は、坑底直である。

192号土坑(水糸レベル＝781.50m)(第36図)
調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　D－34
平面形　円形
規　　模　94×89×42
坑　　底　平坦でほぼ円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　確認面で礫1点、土坑上面に存在する。

193号土坑(水糸レベル＝781.50m)(第36図)
調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　D－34
平面形　円形
規　　模　81×70×42
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　諸磯c式期と思われる
備　　考

195号土坑(水糸レベル＝780.80m)(第36図)
調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　A－36
平面形　不整円形
規　　模　116×110×33
坑　　底　平坦で不整円形
立ち上がり　直に立ち上がる
時　　期　諸磯c式期
備　　考　土坑内に遺物をばらまいたような状態で出土する。また土坑内にまんべんなく土器片が散らばり、土坑中位にほとんどのものが存在する。

196号土坑(水糸レベル＝780.90m)(第36図)
調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　C・D－36
平面形　円形
規　　模　142×117×44
坑　　底　平坦で不整円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　不自然な土層堆積を呈する。16号住居内に存在する。

土層説明
1－暗褐色土　2－黒褐色土　3－黒褐色土(2よりややしまりあり)　4－暗褐色土(ロームブロック及び褐色土粒子混入)　5－黒褐色土(暗褐色土粒子混入:しまり非常に強い)

199号土坑(水糸レベル＝780.40m)(第36図)
調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　A－37
平面形　ほぼ円形
規　　模　80×73×18
坑　　底　平坦でほぼ円形
立ち上がり　皿状
時　　期　井戸尻式期
備　　考　確認面で土器片が出土する。土器片は、坑底より13㎝上に存在する。

200号土坑(水糸レベル＝780.40m)(第36図)
調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　A－37
平面形　楕円形
規　　模　93×75×22

坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　礫は、坑底直ないし直に近い。礫は、6点出土する。

201号土坑(水糸レベル＝781.30m)(第36図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　B－33
平面形　楕円形
規　　模　72×53×36
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　ほぼ直に近い
時　　期　五領ケ台式期
備　　考　18号住居と重複する。土坑中位に土器片が存在し、外面を上に向けて出土する。

202号土坑(水糸レベル＝782.80m)　(第36図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　A－34
平面形　楕円形
規　　模　111×87×65
坑　　底　平坦でほぼ楕円形
立ち上がり　ほぼ直に近い
時　　期　諸磯c式期
備　　考　土層の堆積状態は、斜面下から流れ込んだような状況を呈しており、不自然さが感じられる。この状況から人為的に埋め戻されたと考えられる。石皿と土器は、第5層中に含まれ、この層は中央部が落ち込んでいることから、この層中になんらかの(腐食するもの)ものを入れていたことが考えられる。石皿と土器は、セットとしてとらえることができよう。

土層説明
1－褐色土(ローム粒子混入) 2－褐色土(暗褐色土粒子混入) 3－褐色土(ロームブロック及びローム粒子混入) 4－褐色土(暗褐色土粒子及びローム小ブロック混入) 5－暗黒褐色土(土器の入っている層)

204号土坑(水糸レベル＝782.00m)(第36図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　B－32
平面形　円形
規　　模　91×85×58
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　東寄りに礫が5点、中央及び北西側に大型の礫が1点づつ存在し、大型の礫は、確認面で認められる。また握り拳大のものは、確認面より約20㎝下に存在する。

土層説明
1－褐色土(暗褐色土粒子混入) 2－褐色土(1より明るい) 3－褐色土(ローム粒子混入) 4－暗褐色土(ローム小ブロック混入:しまり弱い) 5－暗褐色土(黒褐色土粒子及びローム小ブロック混入:どの層よりも一番暗い) 6－暗褐色土(ローム小ブロック混入:しまり弱い) 7－暗褐色土(ロームブロック混入)

207号土坑(水糸レベル＝781.80m)(第36図)

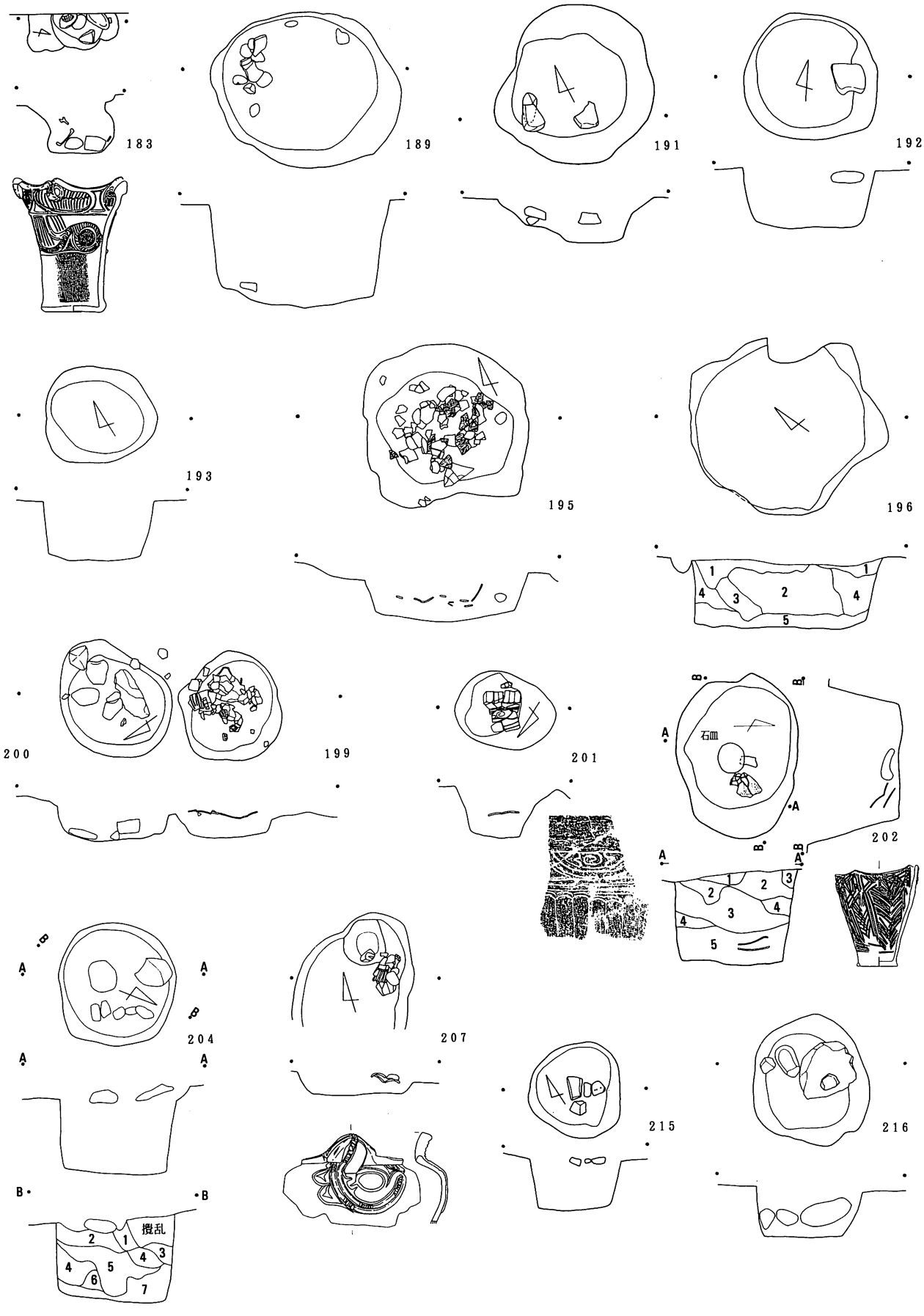
調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　A－37
平面形　楕円形か
規　　模　／×84×12
坑　　底　平坦で 形
立ち上がり　皿状
時　　期　井戸尻式期
備　　考　坑底の北側に落ち込みが認められる。坑底より約30㎝掘り込まれる。

215号土坑(水糸レベル＝783.10m)(第36図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　A・B－32
平面形　円形
規　　模　128×120×33
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　皿状
時　　期　不明
備　　考　214号土坑と重複する。

216号土坑(水糸レベル＝780.80m)(第36図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　B－32
平面形　円形
規　　模　91×83×35
坑　　底　平坦でほぼ円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　礫が4点認められ、東西方向に並ぶ。ま



第36図　土坑（９）（1/40）

0　2m

た礫は、土坑中位に存在する。

219号土坑(水糸レベル＝782.00m)(第37図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　Z－37
平面形　不明
規　　模　／×／×22
坑　　底　平坦で
立ち上がり　皿状
時　　期　不明
備　　考　220号土坑と重複する。東側は、調査区外のため不明である。石皿は、皿部を上に向けて坑底より14㎝上で出土する。

220号土坑(水糸レベル＝782.00m)(第37図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　Z－37
平面形　楕円形
規　　模　131×108×25
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　皿状
時　　期　藤内式期
備　　考　石皿が2点出土し接合して、1個体となる。皿部が上に向けられる。また石皿は、坑底直で検出される。

221号土坑(水糸レベル＝782.10m)(第37図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　Z－37
平面形　楕円形
規　　模　121×92×44
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　曽利Ⅳ式期
備　　考　土器片は、確認面と坑底から12㎝上で出土する。

222号土坑(水糸レベル＝782.00m)(第37図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　Z－37
平面形　楕円形
規　　模　95×75×36
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　すり鉢状
時　　期　中期
備　　考　確認面で礫1点、土坑上面に存在する。

223号土坑(水糸レベル＝782.40m)(第37図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　B－29
平面形　円形
規　　模　100×99×48
坑　　底　平坦で
立ち上がり　直に近い
時　　期　諸磯c式期
備　　考　大型の礫が、土坑中央に詰め込まれる。礫は、土坑中位に位置する。

224号土坑(水糸レベル＝782.10m)(第37図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　B－30
平面形　不整円形
規　　模　112×93×60
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　藤内式期
備　　考　大型の礫が、土坑中位から坑底にかけて集中する。詰め込まれたような状態である。

225号土坑(水糸レベル＝782.40m)(第37図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　A－29
平面形　円形
規　　模　128×115×49
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　中期後半
備　　考　土器片は、確認面から10㎝下がったところで出土している。

228号土坑(水糸レベル＝781.90m)(第37図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　B－31
平面形　円形
規　　模　120×110×31
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　皿状
時　　期　諸磯c式期
備　　考

229号土坑(水糸レベル=781.90m)(第37図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　B－31
平面形　円形
規　　模　80×76×18
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　皿状
時　　期　五領ケ台式期
備　　考

230号土坑(水糸レベル=782.10m)(第37図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　B－31
平面形　円形
規　　模　111×90×47
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　曽利Ⅲ式期
備　　考

234号土坑(水糸レベル=781.80m)(第37図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　A－32
平面形　楕円形
規　　模　95×62×31
坑　　底　中央が凹む楕円形
立ち上がり　すり鉢状
時　　期　中期
備　　考

236号土坑(水糸レベル=781.30m)(第37図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　Z－33
平面形　円形
規　　模　116×95×49
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　諸磯c式期
備　　考　東側は、一部袋状となる。

237号土坑(水糸レベル=782.20m)(第37図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　A・Z－29
平面形　円形
規　　模　72×60×47
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　井戸尻式期
備　　考　礫の出土が目立つ。礫は、中央部に集中し、土坑中位からやや下がった位置で認められる。

244号土坑(水糸レベル=781.70m)(第37図)

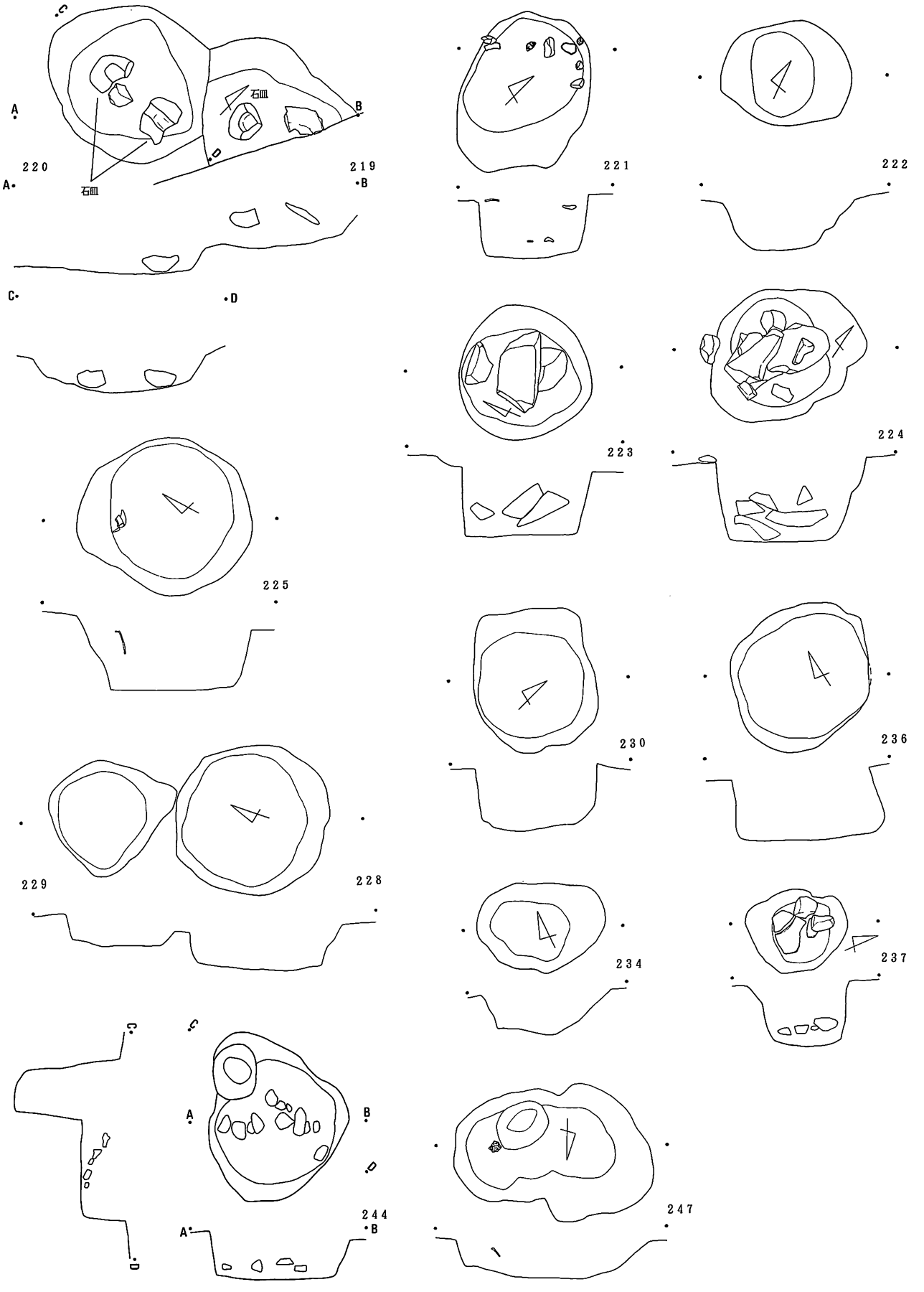
調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　A－31
平面形　円形
規　　模　115×100×32
坑　　底　平坦でタライ状
立ち上がり　ほぼ直に近い
時　　期　諸磯c式期
備　　考　礫が多く認められ、ほぼ南北に沿って並ぶ。243号土坑と重複し、23号住居内に存在する。

246号土坑(水糸レベル=781.70m)(第38図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　C－33
平面形　円形
規　　模　216×190×214
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に立ち上がり、ロート状に広がる
時　　期　中期後半
備　　考　土層状態は、自然堆積を呈するものであるが、特に10・11層では不自然さが感じられる。この層は、ほとんど差がなく、11層だけが落ち込んだ、或いは沈んだ状況としてとらえられる。このことから10・11層中に腐食物の存在が想定できる。

土層説明

1－耕作土 2－暗褐色土(暗茶褐色土粒子混入:しまりあり) 3－暗褐色土(黒褐色土粒子混入:しまりなし) 4－黒褐色土(しまりなし) 5－暗褐色土(黒褐色土粒子混入:しまりあり) 6－暗褐色土(暗茶褐色土粒子混入:しまりなし) 7－暗褐色土(黒褐色土粒子及び暗茶褐色土ブロック混入:しまりあり:湿りけあり) 8－暗褐色土(褐色土粒子混入:しまりなし:湿りけあり)9－暗褐色土(黒褐色土粒子混入:しまりなし:湿りけあり) 10－黒褐色土(しまりなし:湿りけあり) 11－黒褐色土(しまりなし:湿りけあり) 12－ロームブロック(しまりなし:湿りけあり) 13－壁の崩壊土(ローム:しまり



第37図　土坑(10)（1/40）

なし:湿りけあり）14－黒褐色土(しまりなし:湿りけあり）15－ローム(崩壊土:しまりなし:湿りけあり)16－黒褐色土(しまりなし:湿りけあり）

247号土坑(水糸レベル＝782.40m）(第37図)

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　A・Z－28
平面形　瓢箪形
規　　模　147×77×27
坑　　底　ほぼ平坦で瓢箪形
立ち上がり　皿状
時　　期　五領ケ台式期
備　　考　平面形態では2基の存在が認められるが坑底からは1基として考えられる。南壁よりに落ち込みが認められる。

248号土坑(水糸レベル＝782.50m）(第87図)

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　Z－28
平面形　袋状
規　　模　82×73×78
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　袋状
時　　期　井戸尻式期
備　　考　特殊脚付鉢は、口縁部付近に赤彩が施されている。一部口縁の突起を欠いており、鉢部と脚部の接点で剝がれている。接合はするものの細かな部分はなく接合面は丸みを帯びている。壊れてはいるものの数回利用されていた可能性もある。また鉢は、口縁部を上に向けられ斜めになって出土する。石斧1は、確認面で出土し、石斧2は、坑底より約6㎝上で出土する。

249号土坑(水糸レベル＝783.10m）(第38図)

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　B－25
平面形　不明
規　　模　／×90×10
坑　　底　平坦
立ち上がり　緩やかに立ち上がる
時　　期　不明
備　　考　深さが10㎝程度のため切りあい関係はつかめない。土坑の中にピットが存在し、50㎝の深さを計測する。土坑は2～3基重複しているものと思われる。

250号土坑(水糸レベル＝783.00m）(第88図)

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　A－25
平面形　不整円形
規　　模　123×93×14
坑　　底　平坦で不整円形
立ち上がり　皿状
時　　期　五領ケ台式期
備　　考　風倒木によって約半分破壊される。土坑の南側では土器片が多く、北側ではコハク片が多く認められる。

255号土坑(水糸レベル＝783.10m）(第38図)

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　B－25
平面形　楕円形
規　　模　132×110×53
坑　　底　平坦でほぼ円形
立ち上がり　坑底付近では袋状を呈する
時　　期　不明
備　　考

256号土坑(水糸レベル＝783.00m）(第38図)

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　B－25
平面形　円形
規　　模　108×102×40
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　五領ケ台式期
備　　考　257号土坑と重複する。石斧は坑底から出土する。

257号土坑(水糸レベル＝783.00m）(第38図)

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　B－25
平面形　楕円形
規　　模　111×87×35
坑　　底　中央が凹む不整円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考

258号土坑(水糸レベル＝782.70m)(第38図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　B－27
平面形　円形
規　　模　124×111×82
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　諸磯c式期
備　　考　上面は、耕作による畝のため壊される。

261号土坑(水糸レベル＝783.10m)(第38図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　B－25
平面形　楕円形
規　　模　113×92×24
坑　　底　ほぼ平坦で楕円形
立ち上がり　緩く立ち上がる
時　　期　諸磯c式期
備　　考

262号土坑(水糸レベル＝782.90m)(第38図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　B－25
平面形　楕円形
規　　模　80×／×12
坑　　底　ほぼ平坦で楕円形
立ち上がり　不明
時　　期　五領ケ台式期
備　　考　重複が著しく、新旧関係は不明である。

265号土坑(水糸レベル＝782.60m)(第38図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　B－27
平面形　円形
規　　模　85×76×57
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　北側は袋状で、南側は直に近い
時　　期　不明
備　　考　29号住居より新しい。北側に土坑が存在するが、新旧関係は不明である。

267号土坑(水糸レベル＝785.90m)(第38図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　A－25
平面形　不明
規　　模　径50前後×25
坑　　底　平坦である
立ち上がり　直に近い
時　　期　中期中葉
備　　考　耕作によって東側は、撹乱を受ける。土器は、胴下半部から底部まで残存しており、土坑中位に存在する。

268号土坑(水糸レベル＝785.90m)(第38図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　A－25
平面形　円形
規　　模　87×76×19
坑　　底　平坦でほぼ円形
立ち上がり　タライ状
時　　期　不明
備　　考　礫が、土坑上面から中位にかけて存在する。

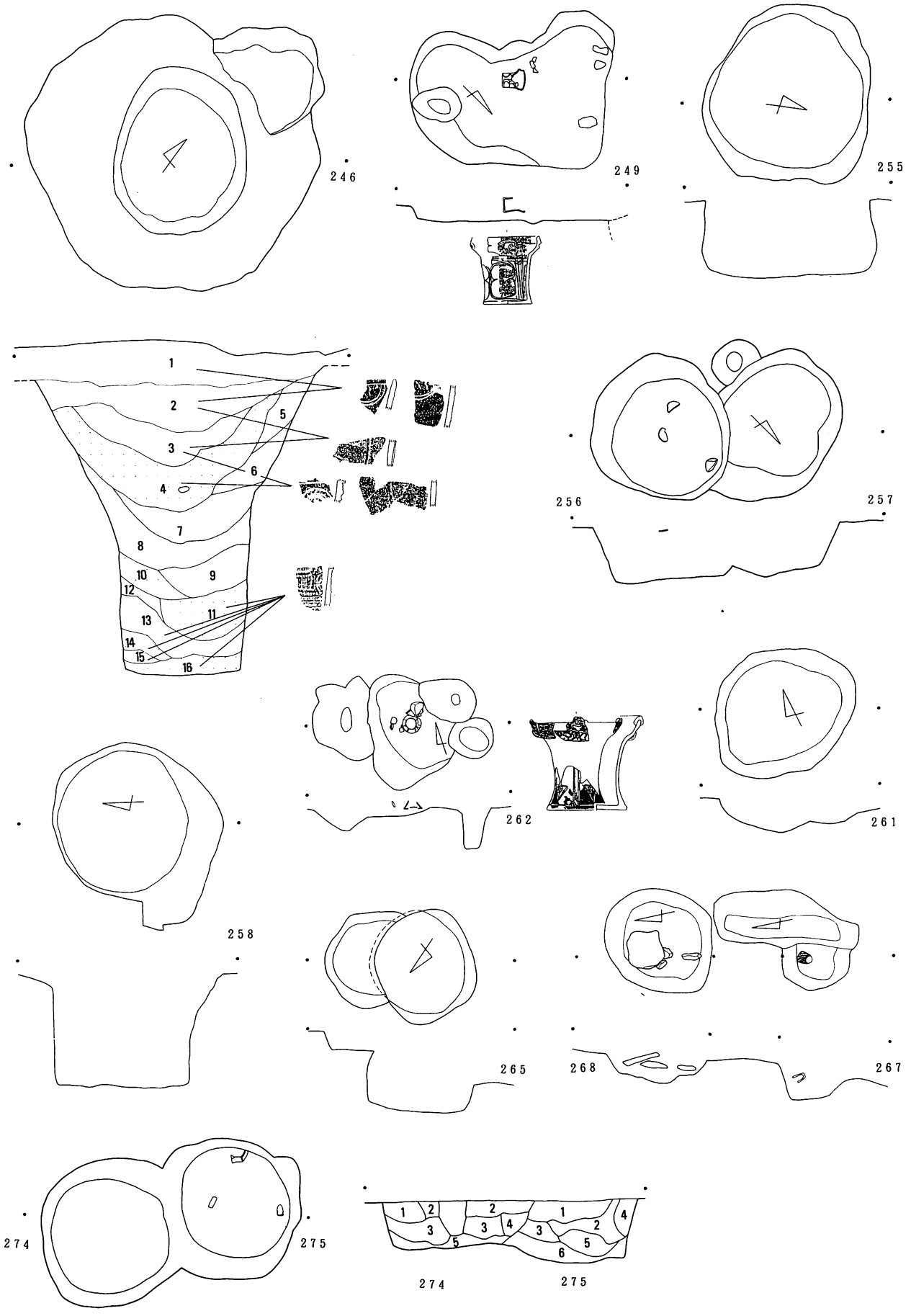
274号土坑(水糸レベル＝785.60m)(第38図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　A－16
平面形　円形
規　　模　107×／×35
坑　　底　平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　275号土坑と重複し、本土坑のほうが新しい。275号土坑の土層堆積状態に比べ、人為的な埋め戻しではないかと思われる。

土層説明
1－褐色土　2－褐色土(暗褐色土粒子混入:1より暗い)　3－暗褐色土　4－褐色土(ロームブロック混入)　5－暗褐色土(ローム粒子混入)

275号土坑(水糸レベル＝785.60m)(第38図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　A－16
平面形　円形
規　　模　108×／×45
坑　　底　ほぼ平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　五領ケ台式期
備　　考　274号土坑と重複する。坑底からやや上層で土器片が出土し、その下から石斧が1点出土する。



第38図　土坑(11)（1/40）

土層説明
1－暗褐色土 2－暗褐色土(1より暗い) 3－暗褐色土(ローム小ブロック混入) 4－褐色土 5－暗褐色土(黒色土粒子及びローム小ブロック混入:一番暗い) 6－暗褐色土(ローム小ブロック混入)

281号土坑（水糸レベル＝785.10m）（第39図）

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　A－17
平面形　袋状
規　　模　86×60×87
坑　　底　中央が凹む袋状
立ち上がり　不明
時　　期　五領ケ台式期
備　　考　37号住居内
土層説明
1－暗褐色土 2－暗褐色土(1より暗い:しまりあり) 3－褐色土 4－暗褐色土(しまりなし) 5－暗褐色土(褐色土粒子混入) 6－黒褐色土 7－暗褐色土(ローム粒子多量混入)

283号土坑（水糸レベル＝784.90m）（第39図）

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　A－18
平面形　楕円形
規　　模　100×70×19
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　緩やかに立ち上がる
時　　期　藤内式期
備　　考

284号土坑（水糸レベル＝784.70m）（第39図）

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　A・B－18
平面形　楕円形
規　　模　134×109×35
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　藤内式期
備　　考　西壁寄りに大型の礫が2点出土し、ほぼ中央に1点存在する。中央の礫は、坑底近くで認められる。

287号土坑（水糸レベル＝784.70m）（第39図）

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　A－18
平面形　不整楕円形
規　　模　113×65×15
坑　　底　平坦で不整楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　中期前半
備　　考　北側は2基の土坑と重複する。完形の石皿出土

288号土坑（水糸レベル＝784.80m）（第39図）

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　A－18
平面形　楕円形
規　　模　／×63×17
坑　　底　ほぼ平坦で円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　289号土坑と重複する。大型の礫が、土坑上面で認められ、その下に平坦な礫が2点存在する。

290号土坑(水糸レベル＝784.50m)（第39図）

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　A－18
平面形　楕円形
規　　模　95×57×18
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　中期中葉
備　　考　土坑は2基存在し、新旧関係は不明である。遺物の出土している土坑は、90×70×14を計測し、ほぼ中央確認面で土器片が出土する。

293号土坑(水糸レベル＝784.60m)（第39図）

調査年度　1992年度（第4次調査）
位　　置　A－19
平面形　楕円形
規　　模　130×115×5
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　皿状
時　　期　藤内式期
備　　考　重複関係が認められ、本土坑のほうが新しい。古い土坑は、110×95×37を計測し、平坦で円形を呈する。

294号土坑(水糸レベル＝784.50m)(第39図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　A－19
平面形　楕円形
規　　模　104×90×13
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　皿状
時　　期　藤内式期
備　　考

297号土坑(水糸レベル＝783.60m)(第39図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　B－22
平面形　楕円形
規　　模　1240×88×28
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　中期中葉
備　　考　坑底中央より西側で広い範囲に焼土が認められ、東コーナー付近にも焼土が認められる。

土層説明

1－暗褐色土 2－暗褐色土(ローム小ブロック混入) 3－暗褐色土(褐色土粒子混入) 4－褐色土(暗褐色土粒子混入) 5－黒褐色土(炭化物混入) 6－黒褐色土(暗褐色土粒子混入)

298号土坑(水糸レベル＝783.60m)(第39図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　B－23
平面形　円形
規　　模　80×76×30
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　礫は、土坑上面で認められる。

299号土坑(水糸レベル＝783.60m)(第39図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　B－23
平面形　楕円形
規　　模　80×58×24
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　不明
備　　考　土坑中央北側で礫が認められ、上面に集中する。

300号土坑(水糸レベル＝783.60m)(第39図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　A－23
平面形　楕円形と思われる
規　　模　／×103×37
坑　　底　丸底を呈する
立ち上がり　すり鉢状
時　　期　藤内式期
備　　考　耕作により撹乱される。土坑上面から中位に土器片は、存在する。

304号土坑(水糸レベル＝783.60m)(第39図)

調査年度　1992年度(第4次調査)
位　　置　B－23
平面形　楕円形
規　　模　／×／×／
坑　　底　平坦で楕円形
立ち上がり　直に近い
時　　期　中期中葉
備　　考　土坑中央確認面から、中位にかけて礫が集中し、坑底近くまで認められる。

第39図　土坑(12)（1/40）

第３節　住居跡出土遺物（実測図）（第40図から第51図）

1　**３号住居pit－３出土遺物**（第40図）口縁部の破片で、キャリパー状を呈する。

2　**４号住居出土遺物**（第40図）浅鉢である。口縁部は「く」の字状に屈折し、口唇部直下には横帯する連続の押圧文が施される。押圧の上部には爪形が施文される。

６号住居出土遺物（第40・41図）（３から９）

3　ほぼ完形である。器面には縄文が施され、口縁部直下から「Ｙ」字状と「Ｂ」字状の懸垂文がそれぞれ２単位に施される。

4　口縁部には、２単位の突起が付される。突起間には、眼鏡状の貼り付けがなされ、中央から垂下させられた粘土紐の貼り付けは、胴部のくびれ部で左右に分けられる。

5　口縁部から胴上半部まで現存する。口縁部には４単位の突起が付され、眼鏡状突起が付けられる。また胴部中央まで垂下させられた隆帯には、刻みが施される。口縁部直下には蛇行する粘土紐が横帯する。

6　口唇部は、内面に折れ曲がり、口縁部は「く」の字状を呈する。口唇部には小突起が付され、胴部まで垂下させられ、胴部文様帯を左右に分割させる。口縁部は無文帯を形成し、眼鏡状突起が付せられる。

7　口縁部は緩やかに内弯し、連続する隆帯の半円と円形文が横帯する。胴部には、刺突文が施され、垂下する粘土紐によって区画される。

8　７と同様な構成で、口縁部には、連続する半円形の隆帯が横帯し、４単位の隆帯は垂下し、刻みが施される。

9　口縁部の破片である。口縁部には眼鏡状の突起が付せられる。

以上３から９までは、井戸尻式期である。

８号住居出土遺物（第41図）（10から20）

10　胴上半部から底部まで現存する。胴上半部文様帯と下部文様帯とに区分され、横帯する隆帯によって文様帯はわけられる。渦巻文と三角形の区画による文様構成で、区画内には沈線文が充塡する。

11　４単位の突起が付され、直下から棒状の懸垂文が付され、口縁部文様帯が構成され、楕円形文は左右に分割される。区画内には、ペン先状工具で施文される。頚部のくびれ部には無文帯が形成され、以下半円形状の隆帯が横帯する。隆帯には、それぞれ刻みが施される。

12　口縁部は緩やかに内弯し、無文帯が形成される。口縁部と胴部の境には、横帯する隆帯が施され、刻みと波状文が施文される。直下には隆帯により縦に区画され、区画内には沈線文と渦巻文とが施される。

13　口縁部と胴部の境には、横帯する隆帯が施され、刻みと波状文が施文される。また大きく張り出した隆帯から垂下した上部には、爪形文と矢羽根状の沈線が刻まれる。底部は、屈曲底を呈する。

14　把手部の破片である。内面には、眼鏡状の貼り付けが成される。

15　把手部の破片である。

16　土製の紡錘車である。

17　手涅ね土器である。

18　把手が付されていたものと思われる。両脇には円形の貼り付けがなされ、上面には刻みが施され、中央より隆帯が垂下する。

19　胴部の破片で、口縁部と胴部を区画する隆帯には、刻みが施される。以下区画文で構成され、区画内には、沈線文と三叉文が施される。

20　底部の破片である。屈曲した底部には、楕円形に施された隆帯によって区画され、区画内には沈線文で充塡される。

以上14.16を除いて、井戸尻式期に属するものと思われる。

9号住居出土遺物（第42・43図）(21から38)

21　口縁部には、4単位の突起が付される。口縁部文様帯は、隆帯によって半円形状と三角形状に区画され、ボタン状の貼り付けがなされ、区画内には沈線文が施される。胴上部文様帯は、隆帯による楕円区画が横帯させられ、区画内には交互の刻みが施され波状を呈する。以下器面には縄文が施される。

22　口縁部には1単位の突起が付され、突起から垂下させられた隆帯は、屈曲した口縁部で渦巻状に丸められる。また垂下する隆帯と口唇部には、爪形文が施される。口縁部と胴部が区画されるように、3条の沈線が横走させられる。以下縄文が屈曲する底部まで施される。

23　口縁部の破片である。口縁部文様帯は、無文が形成される。横走する隆帯は、口縁部と胴部を区画し、刻みが施される。張り出した隆帯から垂下させられた上面には爪形文が施され、胴部文様帯は左右に区画される。

24　横走する隆帯は、口縁部と胴部を区画し、刻みが施される。大きく張り出した隆帯から垂下させられた上面には爪形文が施され、胴部文様帯は左右に区画される。区画内はさらに小単位のパネル状に区画され、区画内には沈線文で充填される。

25　底部が欠損する。口唇部直下には、1条の沈線文が巡らされる。器面に縄文が施されたのち、渦巻状に磨り消される。

26　口縁部には、大形の把手が付され、把手の構成は18に類似する。また口縁部は、丸みをもって内弯させられる。縄文を地文として器面に施され、口唇部直下には1条の沈線が巡らされる。

27　口縁部の破片である。口縁部には注口が付けられ、口唇部には注口の両脇に半円形状の貼り付けがなされ、上面には刻みが施される。注口は半円形状を呈し、窓枠状に区画され、区画内の左には三叉文・楕円形文が施され、右には縦位による沈線文で充填される。(pit－4出土)

28　口縁部の破片で、口唇部上面には円形の貼り付けがなされ、口縁部には円形状の貼り付けが施される。

29　口縁部には、眼鏡状の把手が付され、刻みが施される。また波状の隆帯によって区画された内には、三叉文と沈線文で充填される。胴上半部には楕円区画がなされ、沈線文が施される。以下縦位による沈線文で充填される。

30　胴上半部は、隆帯による渦巻文で構成され、下半部には縄文が施される。

31　口縁部の破片で、口唇部には刻みが施される。

32　口縁部と胴部の境に、眼鏡状の把手が付され貫通させられる。胴上半部には横走する隆帯に刻みがなされ、以下半肉彫りによる文様が施される。

33.34　脚部の破片である。脚部には、透かしが施される。

35　補修孔と思われる1対の孔が認められる。

36　小型の鉢で完形品である。2ケ1単位の渦巻文が2単位に施され、脇にはペン先状工具で施文される。

37　胴下半部から底部の破片である。胴部には縦位による沈線文で充填され、屈曲する底部では楕円区画文が横帯させられる。区画内には交互刺突による刻みが施される。以上藤内式期末から井戸尻式期

38　器面には、地文として縄文が施される。諸磯b式期

10号住居出土遺物（第43・44図）(39から46)

39　口縁部には、貫通孔の有する把手が付けられ、刻みが施される。小突起には半肉彫りされた文様で構成される。周囲には、刻みを持つ隆帯が施され、渦巻状を呈するものも存在する。

40　口縁部には小突起が付され、垂下する隆帯には刻みが施される。半円状に半肉彫りされた脇には、交互による刻みが施され、波状を呈する。

41　口縁部文様帯には、貫通孔を有する把手が付される。また隆帯によって区画がなされ、三叉文・ジグザク文が施される。以下胴部文様帯で、縦位による沈線文が施される。

43　口縁部と胴部を区画する隆帯には、刻みが施される。また大きく張り出した箇所から垂下する隆帯が貼り付けられ、矢羽根状に刻みが施され、胴部文様帯を左右に分割させる。

44　浅鉢である。口縁部は「く」の字状に屈曲し、屈曲部には帯状の半円状の押圧文が施され、以下無文帯となる。45は浅鉢で、無文である。

46　胴部から底部まで現存する。胴部中位には、大きく曲がる楕円状の隆帯が刻みを持ちながら区画し、区画内は縦位による沈線文で充塡される。胴下半部には、ややこぶりの刻みを有する楕円区画文が施され、横位の隆帯によって区画される。以上藤内式期末から井戸尻式期

47　**12号住居出土遺物**（第44図）胴部から底部まで現存する。器面全体に横位の平行沈線文が施されたのち、結節浮線文が「く」の字状に貼り付けがなされる。諸磯ｃ式期

13号住居出土遺物（第44図）(48.49)

48　浅鉢で、中位に段を有する。

49　底部付近の破片で器面に縄文が施される。

14号住居出土遺物（第45図）(50から55)

50　口縁部から胴部中央まで現存する。口縁部には４単位の小突起が付けられ、第１文様帯は口縁部に形成されており、小突起をはさんで隆帯による三角形区画と不規則な形状をもつ区画が施される。隆帯には爪形文が施され、ジグザグ文で区画される。また区画内には三叉文が施文される。第２文様帯は、口縁部直下に施され、縦位による沈線文で構成される。第３文様帯は胴部中央に施され、菱形の区画が横位に展開し、キャタピラ文が施される。また区画内にはジグザグ文でさらに区画される。

51　１部現存している口縁部文様帯には、三角形状に施された隆帯上に爪形が施文される。第２文様帯は、頚部に存在し、楕円区画文を主体とするものである。爪形文で区画された区画内には、ジグザグ文が施される。また直下には帯状にキャタピラ文が展開し、ジグザグ文で区画される。第３文様帯は胴部中央にあり、抽象文が施され外周をジグザグ文で区画される。区画内には玉抱三叉文が施され、ジグザグ文でさらに区画され

52　頚部にはキャタピラ文が施され、直下には楕円区画文が横帯し、区画内にはキャタピラ文とジグザグ文で構成される。

53　波状口縁を呈する口唇部には刻みが施され、垂下する隆帯は、口縁部文様帯を左右に分割させる。口縁部文様帯は、縦位の平行沈線文で構成され、垂下する隆帯の右脇にはパネル文が施され、区画内にはキャタピラ文とジクザグ文が施される。直下には横帯する隆帯によって口縁部文様帯と胴部文様帯とを区画する。胴部文様帯はパネル文を主体として、垂下する隆帯によって文様帯が分割される。

54　口縁部の破片で、菱形区画が施されるものである。以上藤内式期

55　内面には黒彩された痕跡が認められ、貫通孔が施される。諸磯ｃ式期

15号住居出土遺物（第45図）(56から59)

56　口縁部には、１条の沈線文が横位に施され、直下には「コ」の字状に沈線文で区画され、区画内には縄文が施される。

57　口縁部と底部を欠損するものである。器面には縄文が施され、沈線による渦巻文は、把手が付されていたと思われる両脇に施文される。

58　口縁部には、半円形状に２条の沈線が横位に施文される。直下には縦位に蕨状の沈線文が施される。また半円形状の谷から底部付近まで縦位に櫛歯状工具による文様が施される。

59　口縁部には渦巻文が施されるために、口唇部には小突起が形成される。また口唇部には、渦巻文をはさんで左右に１条の沈線文が施される。以下胴部には、沈線によって「コ」の字状に区画され、区画内には「ハ」の字状文で充塡される。以上曽利Ｖ式期

16号住居出土遺物（第46図）(60から62)

60　底部を欠損する浅鉢である。

61　口縁部の破片で、把手には貫通孔が施され、大きく屈曲した口縁部には、隆帯による渦巻文と波状文が施される。

62　口唇部には、連鎖状に横帯する押圧文が施される。

63　**18号住居出土遺物**（第46図）ミミズク把手の破片である。

19号住居出土遺物（第46図）(64から66)

64　炉体土器である。胴部中央から底部を欠損する。口縁部は、やや残存状態は悪い。口縁部文様帯は、渦巻文と棒状の貼り付け文でそれぞれ２単位で構成される。また器面には押引による角押文で充塡される。第２文様帯は頸部に施され、楕円区画を主体とする。区画内には、隆帯に沿って角押文が巡らされ、ジグザグが横位に施される。狢沢式期

65　器面に張りつけられたものである。内部は空洞を呈し、円形状の貼り付けは貫通している。直下には楕円形状の隆帯が施される。

66　口縁部の破片である。口縁部には把手が付され、直ぐ脇には角押文で区画が施され、押引文で充塡される。また把手からは、隆帯が刻みをもって垂下する。

20号住居出土遺物（第46図）(67から69)

67　炉の奥壁に使用された土器片である。口縁部は無文帯を形成し、直下には眼鏡状の把手が付され、上面には刻みが施される。また三角形状に区画された隆帯は、キャタピラ文が施され、区画内のコーナーには三叉文が施される。

68　小型のもので、口唇部には１つの突起が付され、刻みが施される。口縁部直下には、隆帯によって胴部とを区画させ、以下パネル状に区画され、区画内には沈線文で充塡される。

69　底部の破片で、キャタピラ文と沈線文が施される。以上藤内式期

70　**21号住居出土遺物**（第46図）器面全体に半截竹管による平行沈線文が施される。胴部は緩やかに内傾し、胴下半部からやや外反し、底部に向かって屈曲を呈する。諸磯ｃ式期

71　**22号住居出土遺物**（第47図）胴部の破片で、器面全体に沈線文で充塡され、「Ｕ」字状に隆帯が施され、左右には嘴状に貼り付けがなされる。曽利Ｉ式期(pit－6出土)

24号住居出土遺物（第47・48図）(72から85)

72　口縁部は、第１文様帯として無文帯が形成され、直下に第２文帯が施され、楕円区画帯が横位に展開し、隙間を三角区画文でうずめられる。それぞれの隆帯の脇には、キャタピラ文が施され、楕円区画内にはジグザグ文が中央に施文され、三角区画内にはキャタピラ文を囲うようにジグザグ文が施される。また第２文様帯は、ジグザグ文によって第３文様帯が区分される。

73　ほぼ完形品で、口唇部には横位にジグザグ文が施され、口縁部文様帯が形成される。第２文様帯の頸部にはキャタピラ文が横位に施され、ジグザグ文によって区画される。第３文様帯は胴部に施され、抽象文が器面全体に展開させられ、ジグザグ文で区画される。

74　口唇部には１ヶ所小突起が付され、刻みが施される。第１文様帯は口縁部で形成され、隆帯は規則性がなく展開される。突起部を境として右では縦位による沈線文で充塡され、ほぼ中央にジグザグ文が施される。左ではキャタピラ文で区画され、区画内にはジグザグ文が施される。第２文様帯は、ジグザグ文を主体とし、キャタピラ文によって区画される。第３文様帯は、隆帯によって「Ｕ」字状に巡らされ刻みが施される。隆帯の脇にはキャタピラ文が施され区画される。

75　口縁部の破片で、口唇部には渦巻状にせりあがった隆帯によって小突起が形成され、刻みが施される。また隆帯によって区画された脇には、キャタピラ文で区画され、ジグザグ文が施される。突起間には、ペン先状工具による連続押し文で充塡される。頸部には、ジグザグ文が横位に施文される。

76　口唇部には爪形文が施され、口縁部には爪形文を伴う三角形区画文・波状文が施される。

77　口縁部文様帯は、３条の隆帯によって構成され、爪形文が施される。胴部文様帯はパネル状に区画がなされ斜行する沈線文で充塡される。

78　口縁部と底部を欠損するもので、胴部文様帯は垂下する隆帯によって左右に分割される。文様構成は、パネル状文が主体をなし、区画内には沈線文で充塡される。

79　胴部中位には、パネル文が縦位に施され、「Ｕ」字状の隆帯は背中合わせに張りつけられ、左右に文様構成が分けられる。

80　口唇部には刻みが施され、口縁部文様帯には三角形と円形状の区画が施される。直下には隆帯が横位に施され、以下胴部文様帯は区画文によって構成され、区画内には沈線文によって充塡される。

81　口縁部文様帯は、逆三角形状にキャタピラ文が施され、ジグザグ文によって区画される。頚部には、隆帯が横位に施され、隆帯に沿ってキャタピラ文が連続させられる。これらのキャタピラ文は、ジグザグ文によって区画される。

82　胴部には隆帯によって区画され、区画内にはキャタピラ文とジグザグ文が施される。

83　口縁部は無文帯を形成し、胴部文様帯は、隆帯による連続楕円区画文で上下左右に構成され、区画内には縄文が施される。

84　口唇部には小突起が付され、直下には交互刺突によって波状文が施される。口縁部文様帯は、三角形区画を主体として爪形文玉抱き三叉文が施される。また空白部には沈線文で充塡される。

85　有孔鍔付土器の破片である。以上藤内式期

26号住居出土遺物（第49図）(86から96)

86　口縁部には、把手が張りつけられ貫通される。第１文様帯は口縁部に形成され、刻みを有する隆帯は波状を呈する。隆帯の脇にはキャタピラ文が施され、空白部には沈線文とジグザグ文でうめられる。頚部には縦位による沈線文で充塡され、第２文様帯が構成される。胴部中央には、第３文様帯として隆帯による連続する山形文が横帯し、キャタピラ文で区画される。区画内には、沈線文と縦位にジグザグ文が施される。第４文様帯は、第２文様帯と同様な手法で構成される。

87　口縁部と頚部の境には、刻みを有する隆帯が横位に施され、大きく張り出した隆帯からは、「Ｊ」字状に貼り付けがなされ、交互刻みと爪形文が施される。また「Ｊ」字状の隆帯は、底部付近まで垂下する隆帯によって区画される。区画内には、キャタピラ文とジグザグ文・三叉文で充塡される。

88　浅鉢の口縁部で、口唇部にはミミズク把手が付される。また把手の両脇には、沈線文が施される。

89　ほぼ完形である。口縁部には、貫通された把手が２単位と「Ｕ」字状を呈する貼り付けが２単位施される。口縁部文様帯は、隆帯による楕円形状区画と沈線文で構成される。第２文様帯は、縦位の平行沈線文で充塡される。胴下半部は無文帯で構成され、底部は屈曲させられる。

90　底部を欠損する浅鉢で、口唇部には小突起が付される。

91　口縁部の破片で、口唇部上面には三叉文状に貼り付けがなされ、把手は口縁部文様帯を形成する。把手の左右には連続する角押文が施される。狢沢式期

92　浅鉢である。波状を呈する口唇部には刻みが施され、波頂部から隆帯は垂下させられる。

93　胴下半部から底部まで現存する。胴部には、沈線による区画が施される。

94　胴下半部から底部までパネル状に区画され、区画内には沈線文で充塡される。

95　粘土紐の貼り付けがなされたのち、器面全体に縄文が施される。

96　胴部は、渦巻状・三角形状の区画が施され、沈線文で充塡される。91.92以外は藤内式期

27号住居出土遺物（第50図）(97・98)

97　波状を呈する口唇部の波頂部から、刻みを有する隆帯は垂下し、口縁部文様帯を左右に分割させる。炉からの出土である。

98　底部を欠損する円筒形の土器で、器面には輪積み痕が認められる。

99　**28号住居出土遺物**（第50図）隆帯には刻みが施され、脇にはジグザグ文が施される。

100　**29号住居**の炉体土器である（第50図）。胴下半部から底部が欠損する。口唇部直下から楕円区画文による文様帯が２段に形成され、２段目の楕円区画帯は半分横へずらして横帯させられる。また２段目の下部のほぼ中央から隆帯はクランク状を形成し、隆帯の脇には角押文が連続して施文される。

30号住居出土遺物（第50図）（101.102）

101　口唇部には把手が付され、把手には玉抱き三叉文が施される。口縁部文様帯は横位に展開され、三角形区画文の区画内には、三叉文・縦位の沈線文が施される。直下には３条の貼り付けがなされ、それぞれ刻みが施される。（pit－6出土）

102　口唇部と底部を欠損するもので、丸みを帯びた口縁部には、沈線による渦巻文と刻みが施される。頚部には横位に隆帯が巡らされ、刻みが施される。また大きく張り出された隆帯からは、「X」字状に貼り付けされた隆帯と底部の屈曲部まで垂下する隆帯が張りつけられ、それぞれ刻みが施される。隆帯によって区画された区画内には渦巻文と三叉文でうめられる。

103　**32号住居**の埋甕（第50図）で、ほぼ完形である。口縁部は朝顔状を呈し、頚部には波状を呈する貼り付けが施される。胴部には縄文が施され、蛇行懸垂文と渦巻状の懸垂文によって区画される。底部には、孔が穿たれる。

36号住居出土遺物（第51図）（104から106）

104　床面直上出土の完形品である。ラッパ状把手が付され、口唇部には爪形文が施される。口縁部文様帯は無文を呈し、胴部文様帯との境には爪形文が施された隆帯によって区画される。また大きく張り出された隆帯から懸垂文が施され、縦割りの区画がなされる。このため胴部文様帯は隆帯によって区画文が形成され、区画内には沈線文で充塡される。

105　底部を欠損する浅鉢である。

106　口縁部文様帯は、沈線文によって段が形成される。口縁部と胴部の境には、横帯する隆帯によって区分される。また大きく張り出された箇所から、渦巻状に隆帯が張りつけられ、刻みが施される。隆帯によって区画された器面には、パネル状に区画され、区画内には沈線文で充塡される。

37号住居出土遺物（第51図）（107.108）

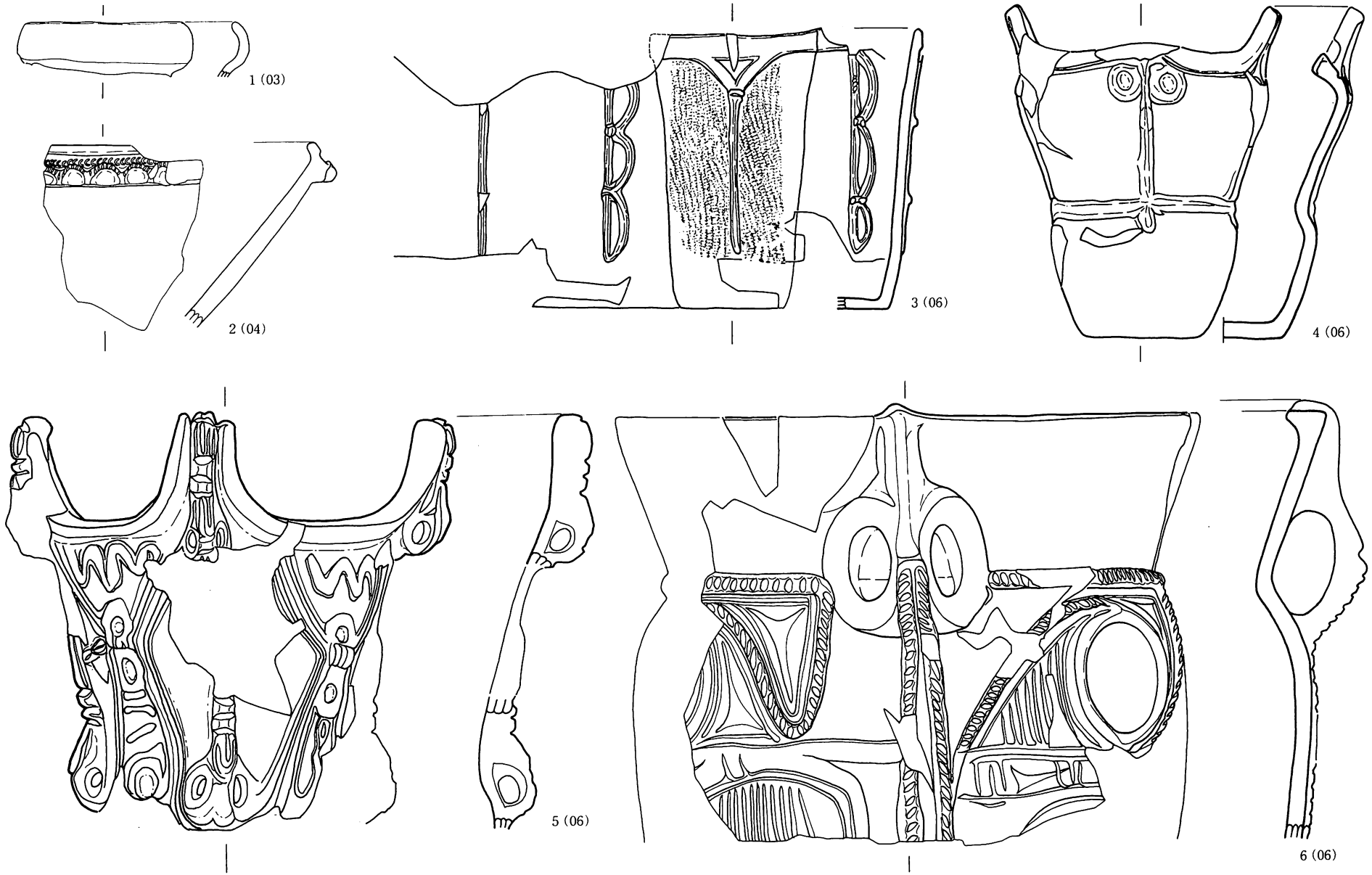
107・108は本住居の炉体土器である。107は南の炉体土器で、108は奥の炉体土器である。

107　胴部から底部まで現存する。文様構成は、４単位の区画を縦位と横位の沈線で行われ、区画内はT字上の沈線で充塡される。また区画内の左にはそれぞれ渦巻状の沈線が施文され、その後残存している器面全体に縄文が施される。

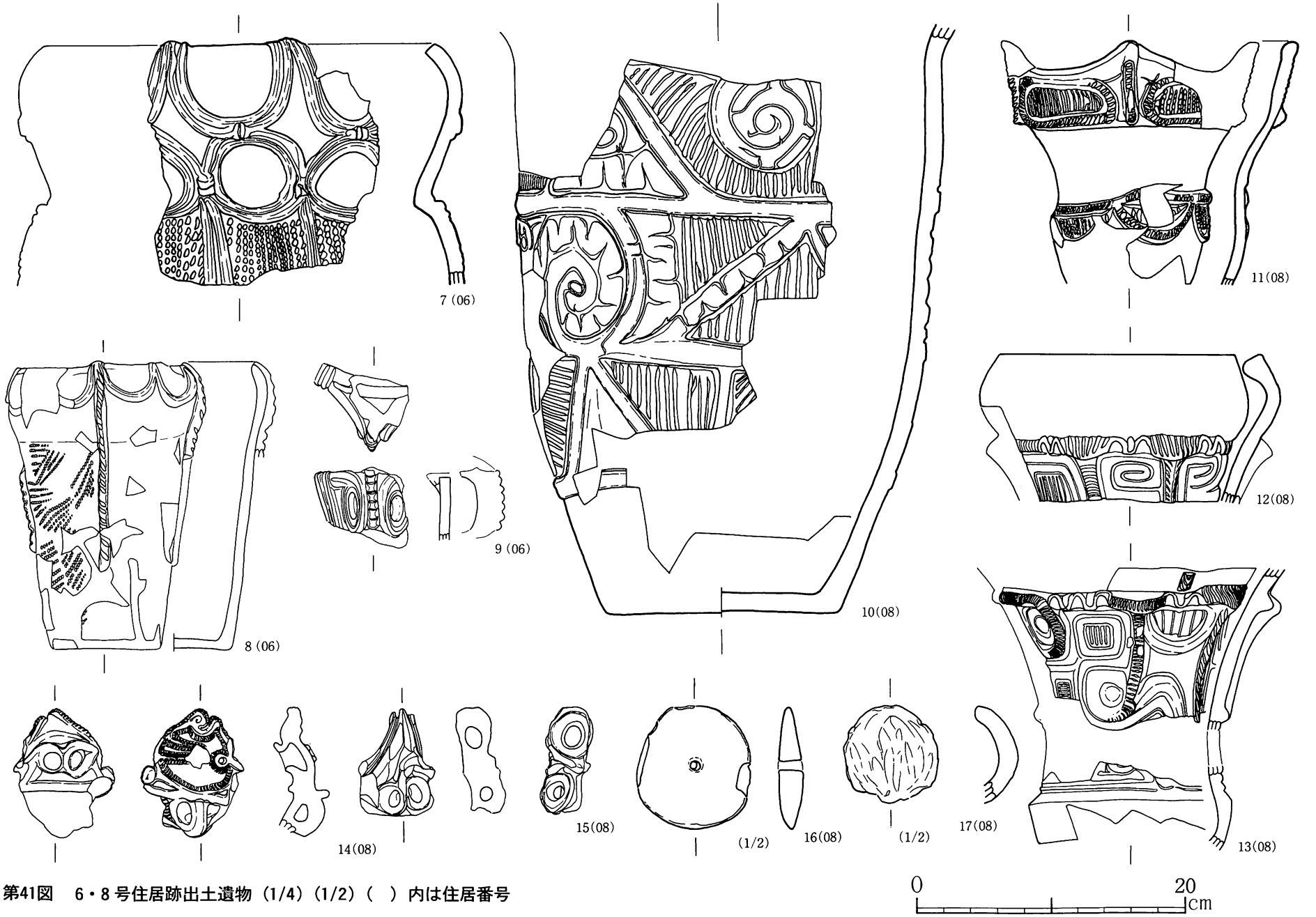
108　口縁部と底部を欠損する。胴上部には一条の隆帯が付され、１対の逆三角形が構成される。また逆三角形の頂点から垂下させられた隆帯は、胴中央付近でクランク状となる。その後沈線文は隆帯に沿って施される。

109　**39号住居出土遺物**（第51図）土偶の右足である。

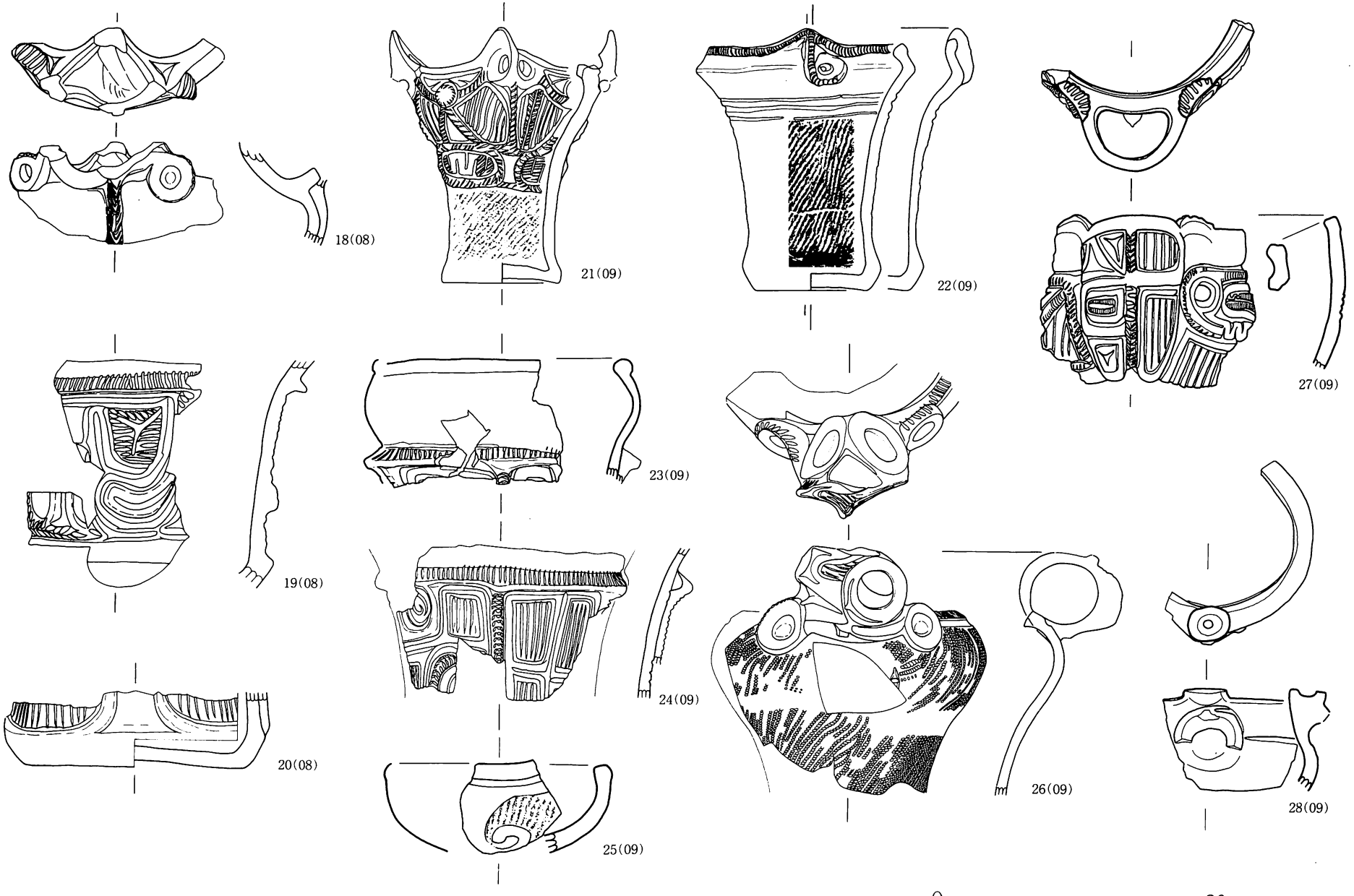
以上が住居出土遺物である。



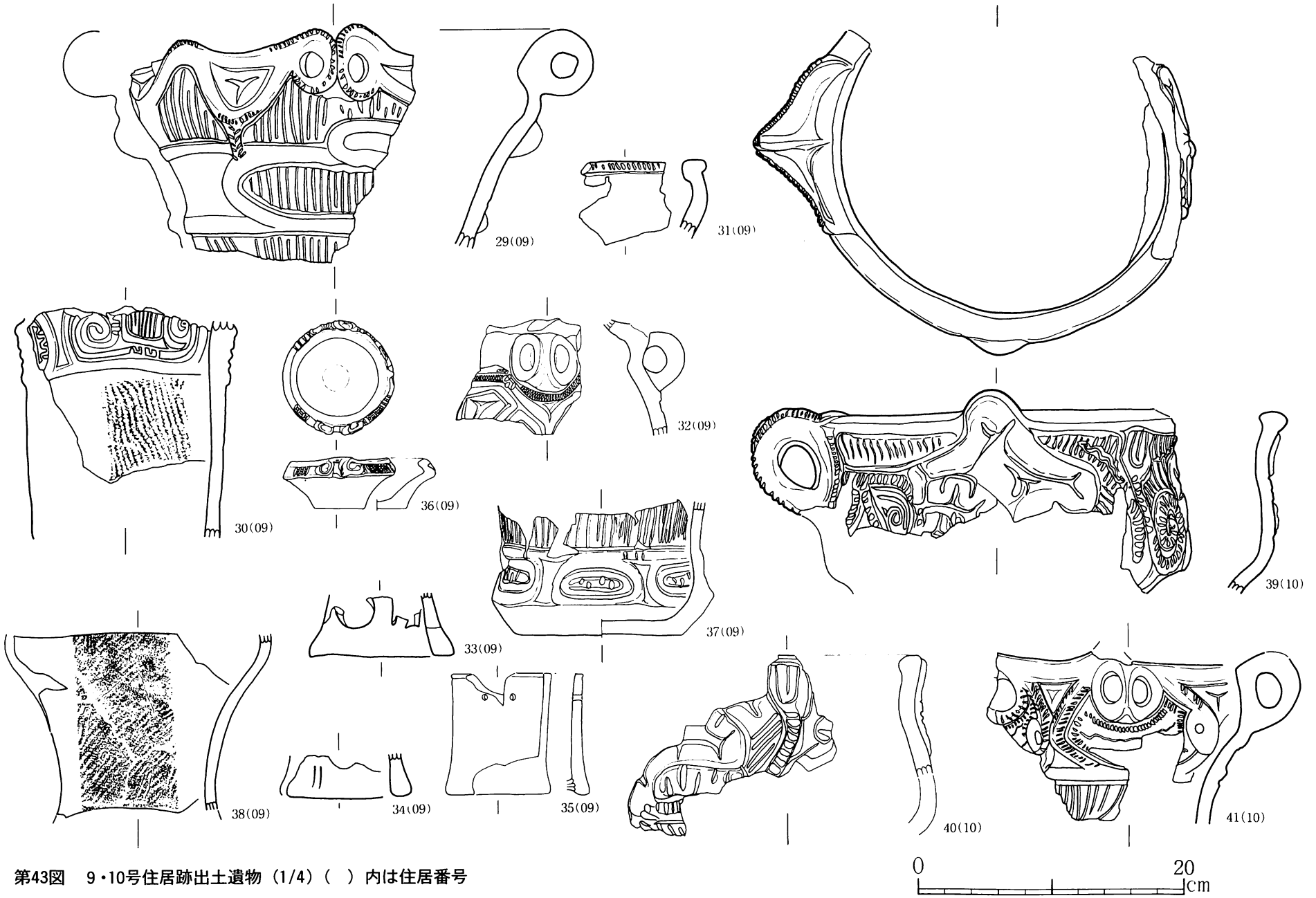
第40図　3・4・6号住居跡出土遺物（1/4）（　）内は住居番号



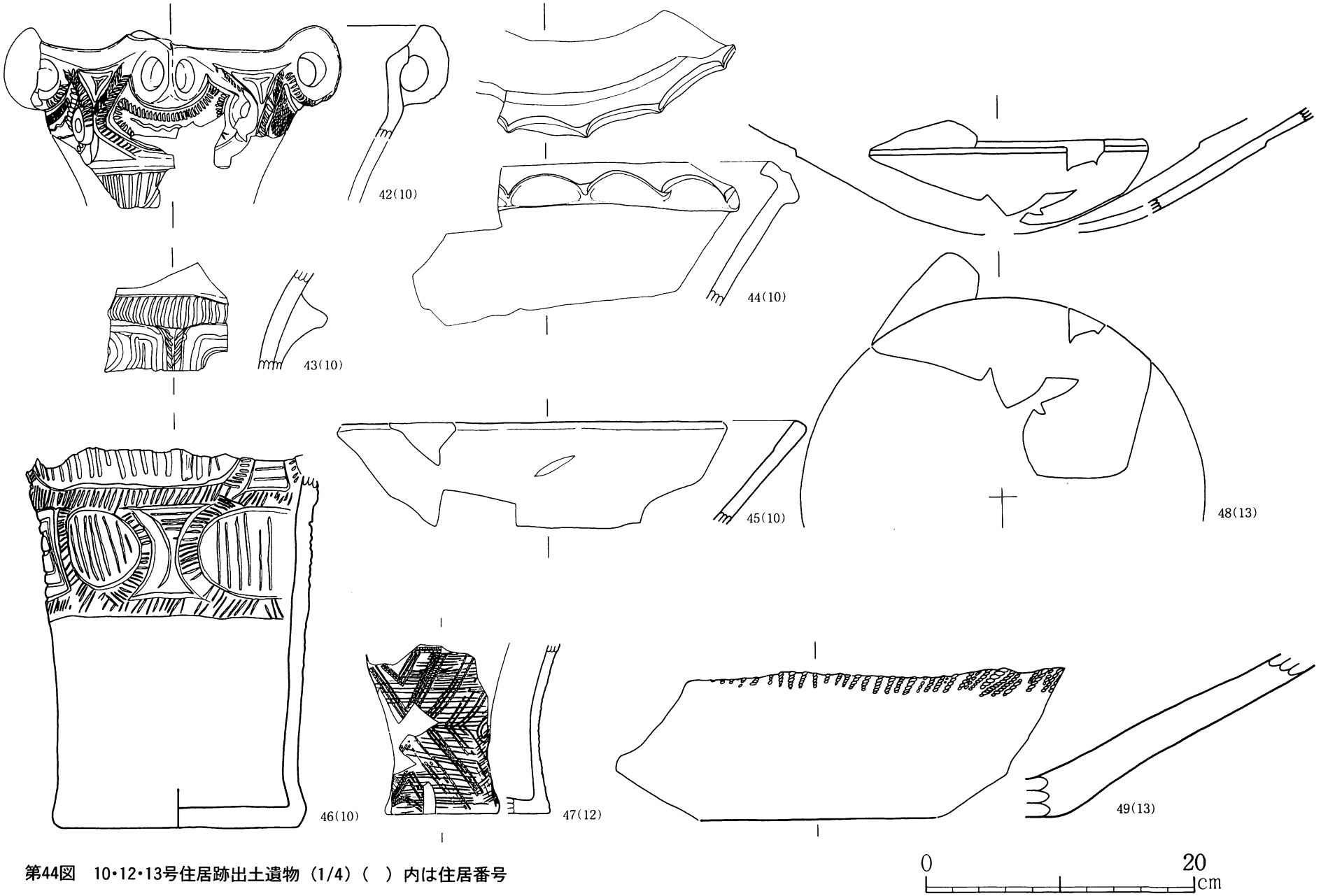
第41図　6・8号住居跡出土遺物（1/4）（1/2）（　）内は住居番号



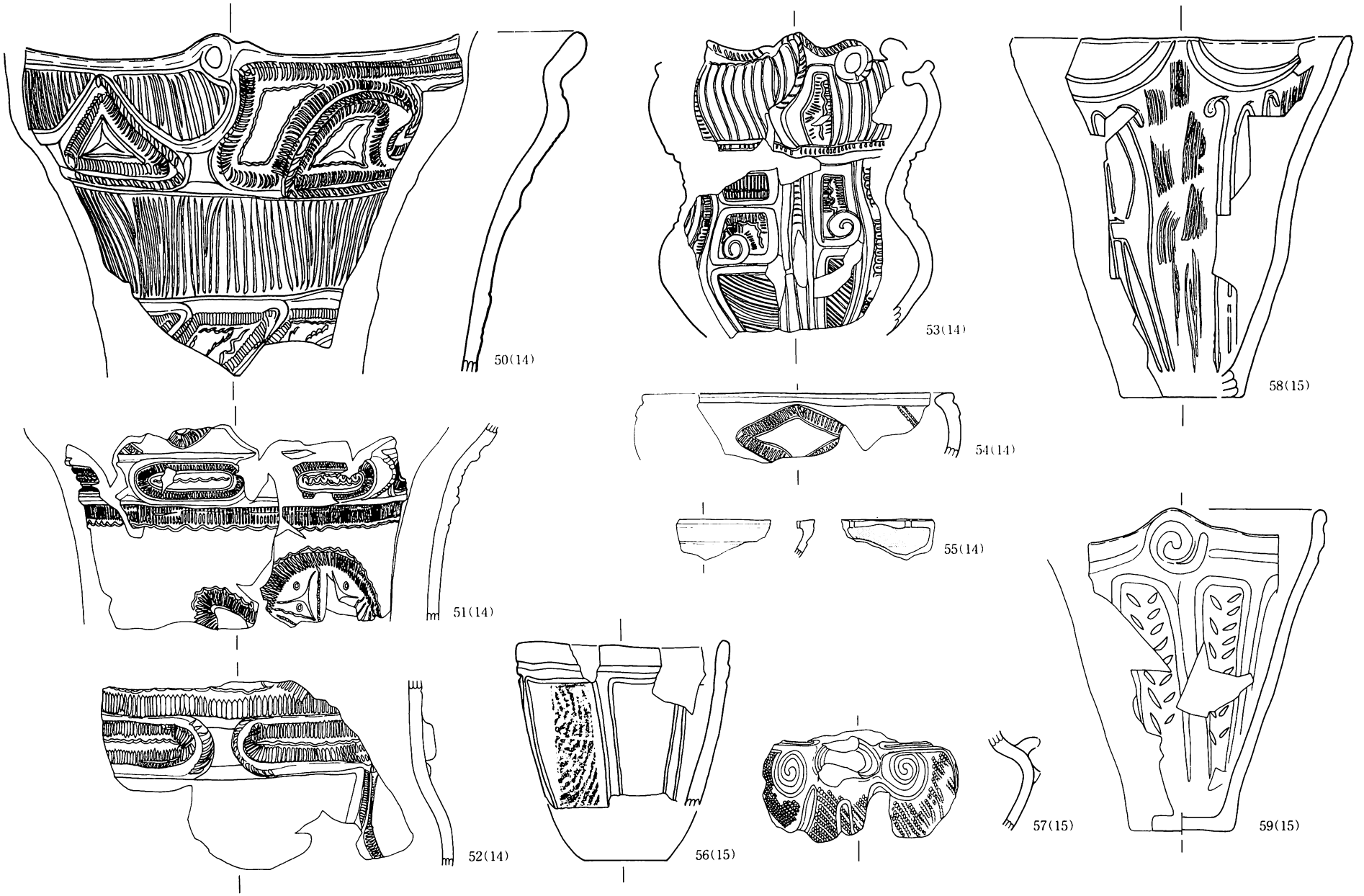
第42図　8・9号住居跡出土遺物（1/4）（　）内は住居番号



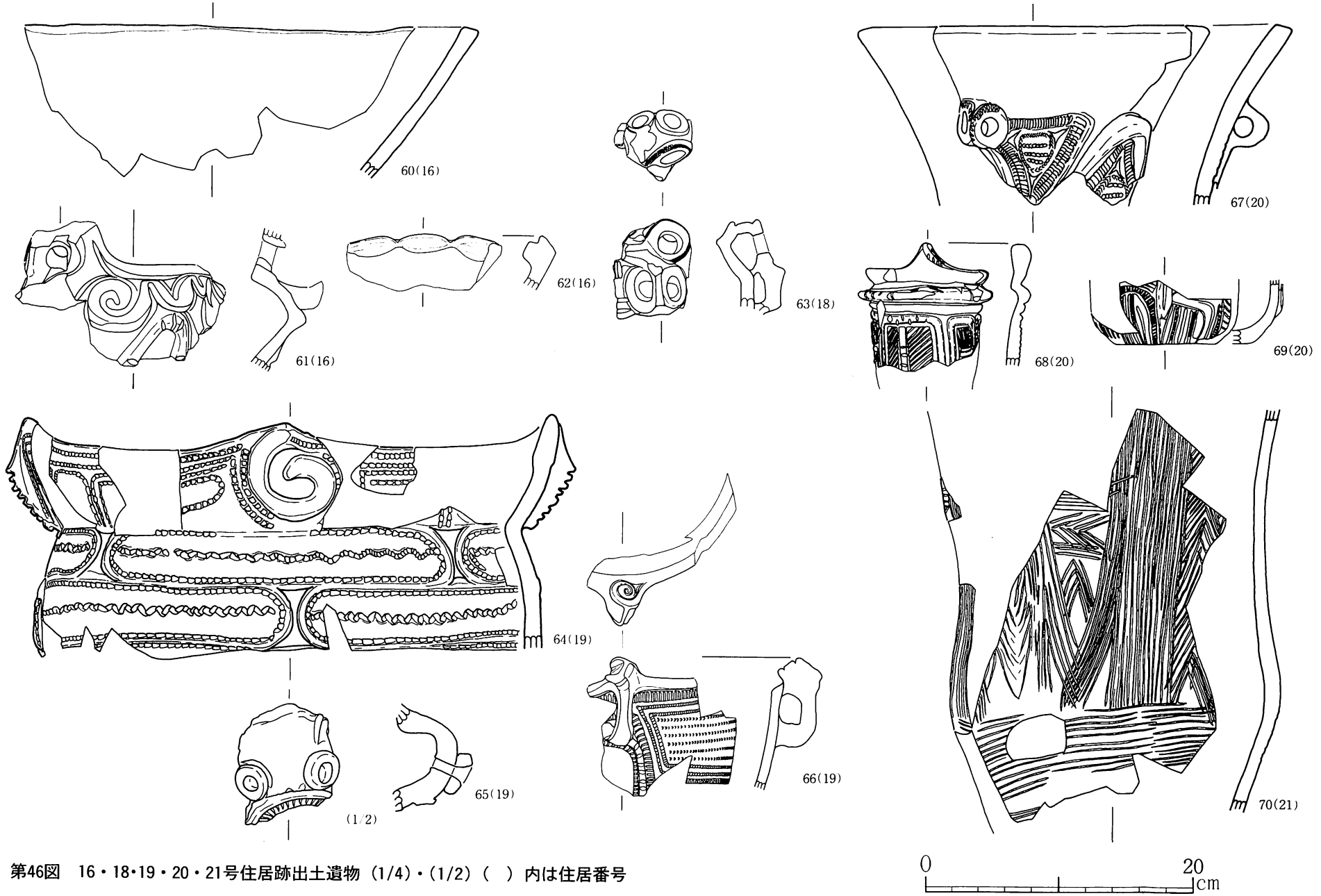
第43図　9・10号住居跡出土遺物（1/4）（　）内は住居番号



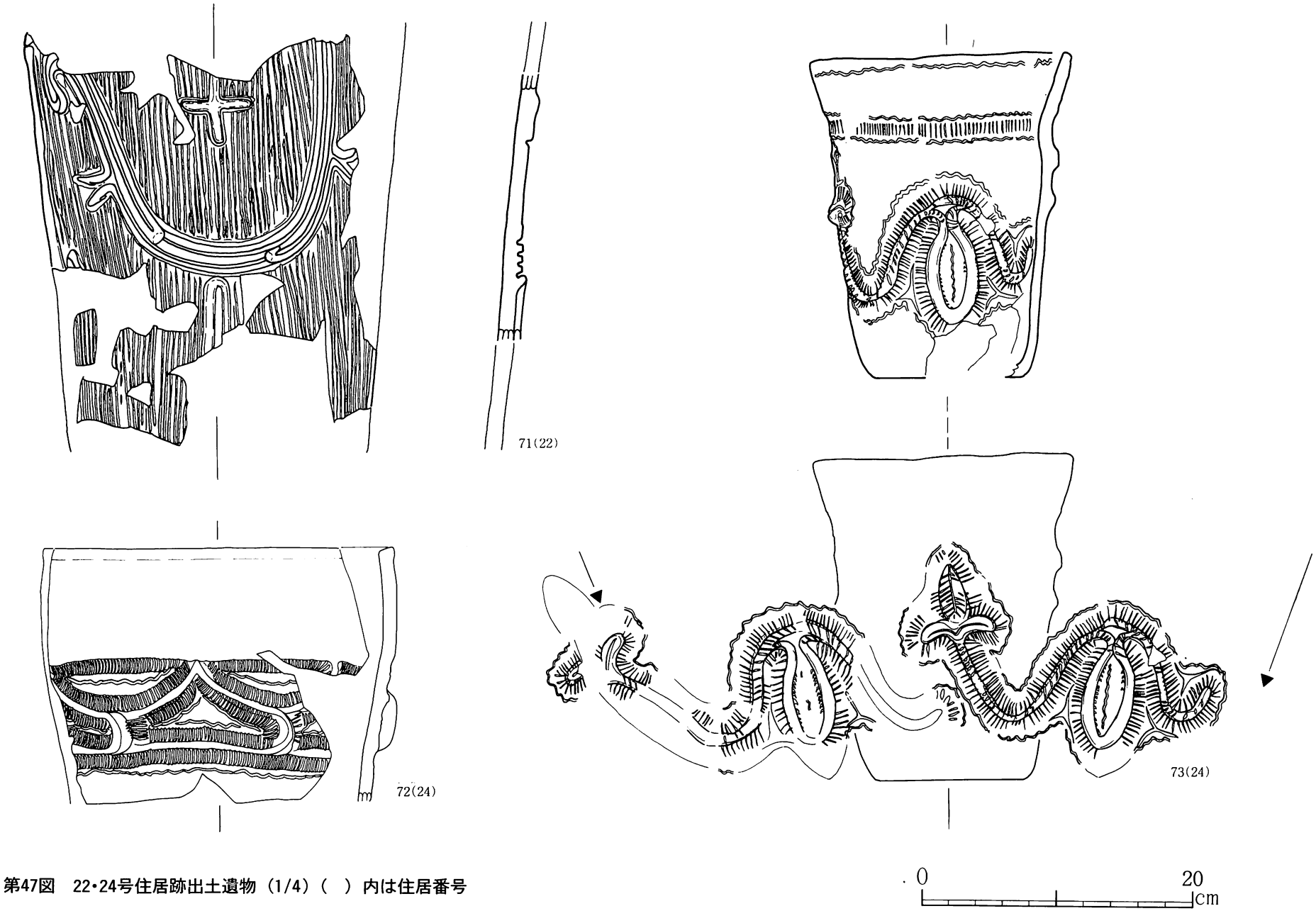
第44図　10・12・13号住居跡出土遺物（1/4）（　）内は住居番号



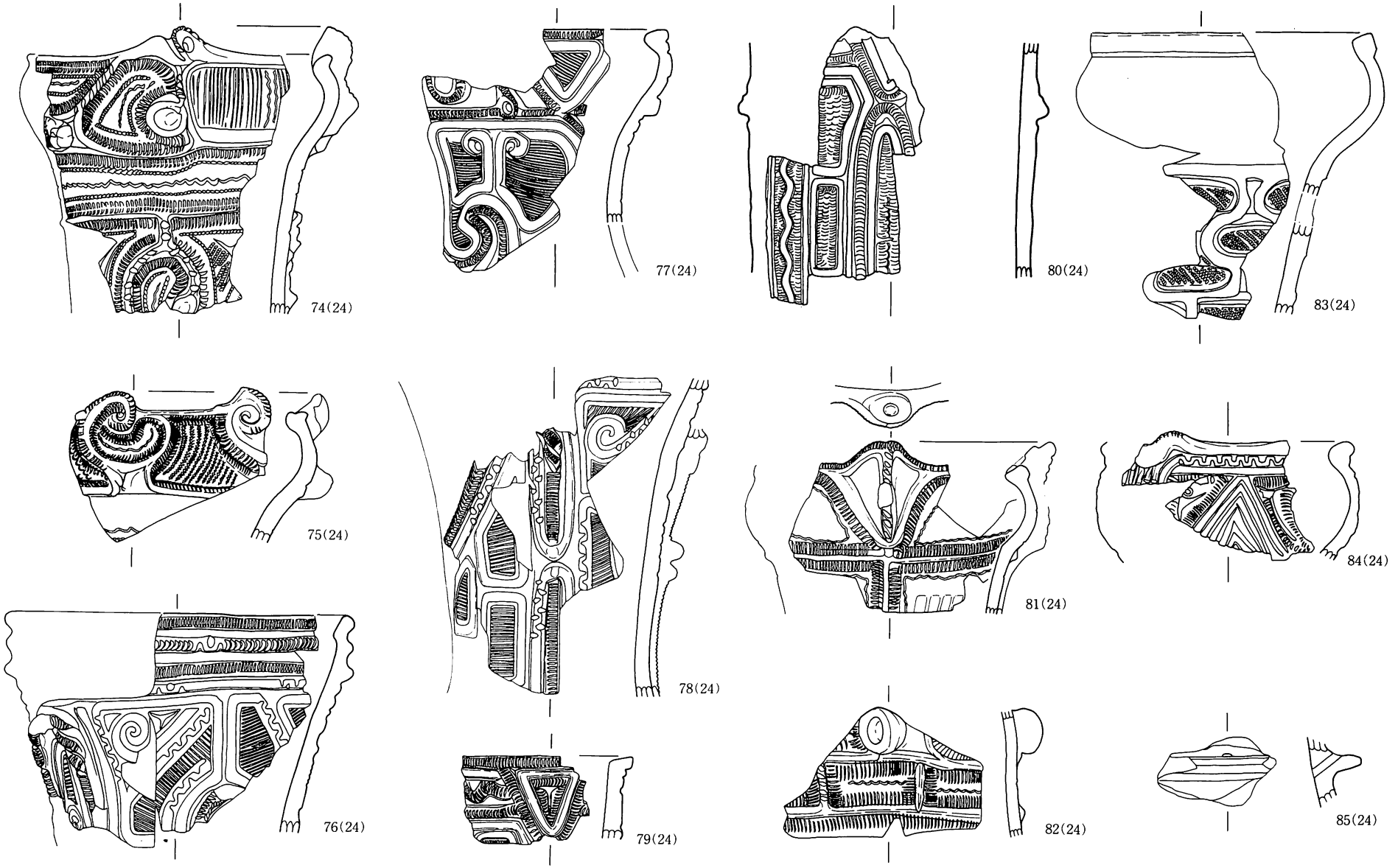
第45図　14・15号住居跡出土遺物（1/4）（　）内は住居番号



第46図　16・18・19・20・21号住居跡出土遺物（1/4）・（1/2）（　）内は住居番号

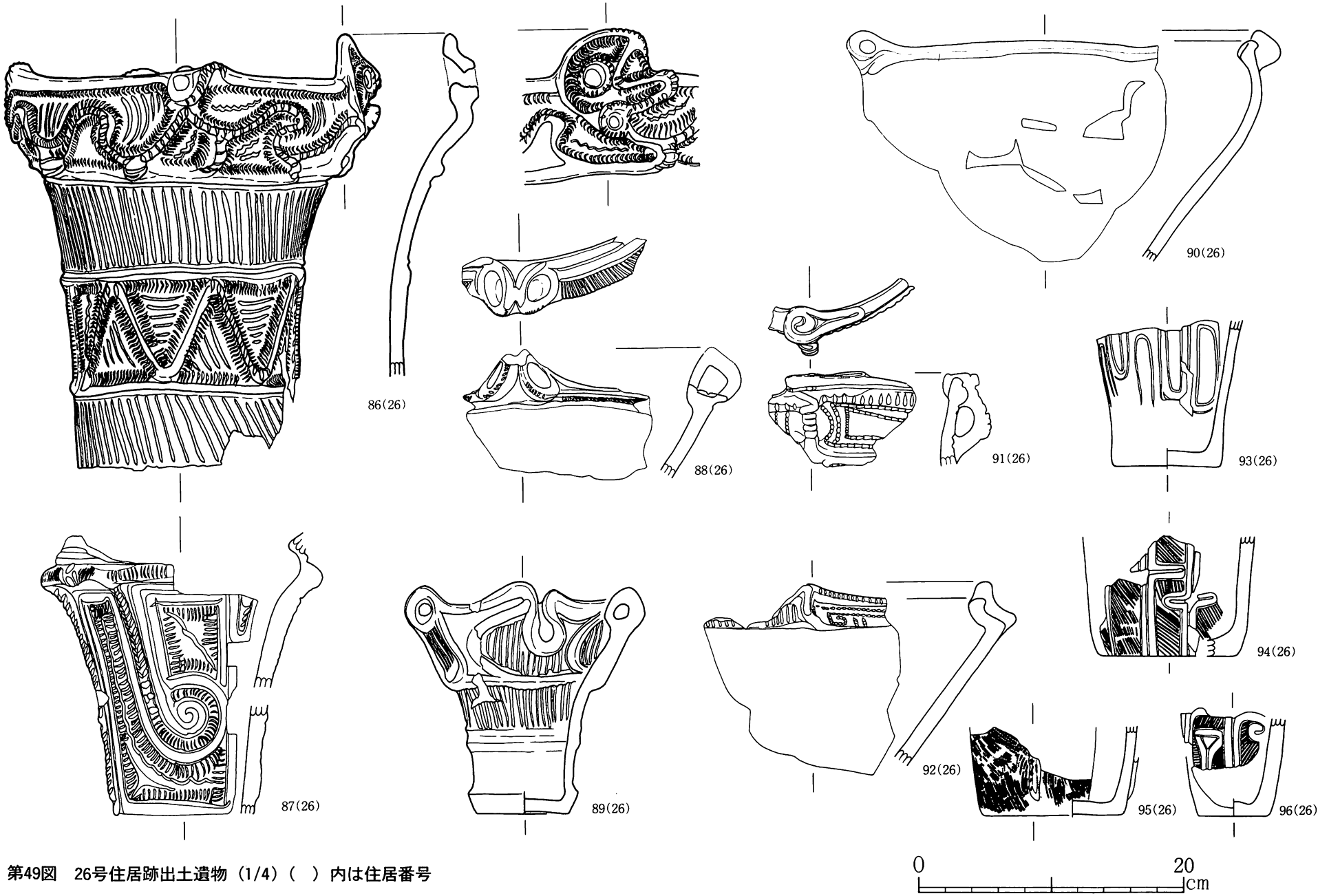


第47図　22・24号住居跡出土遺物（1/4）（　）内は住居番号

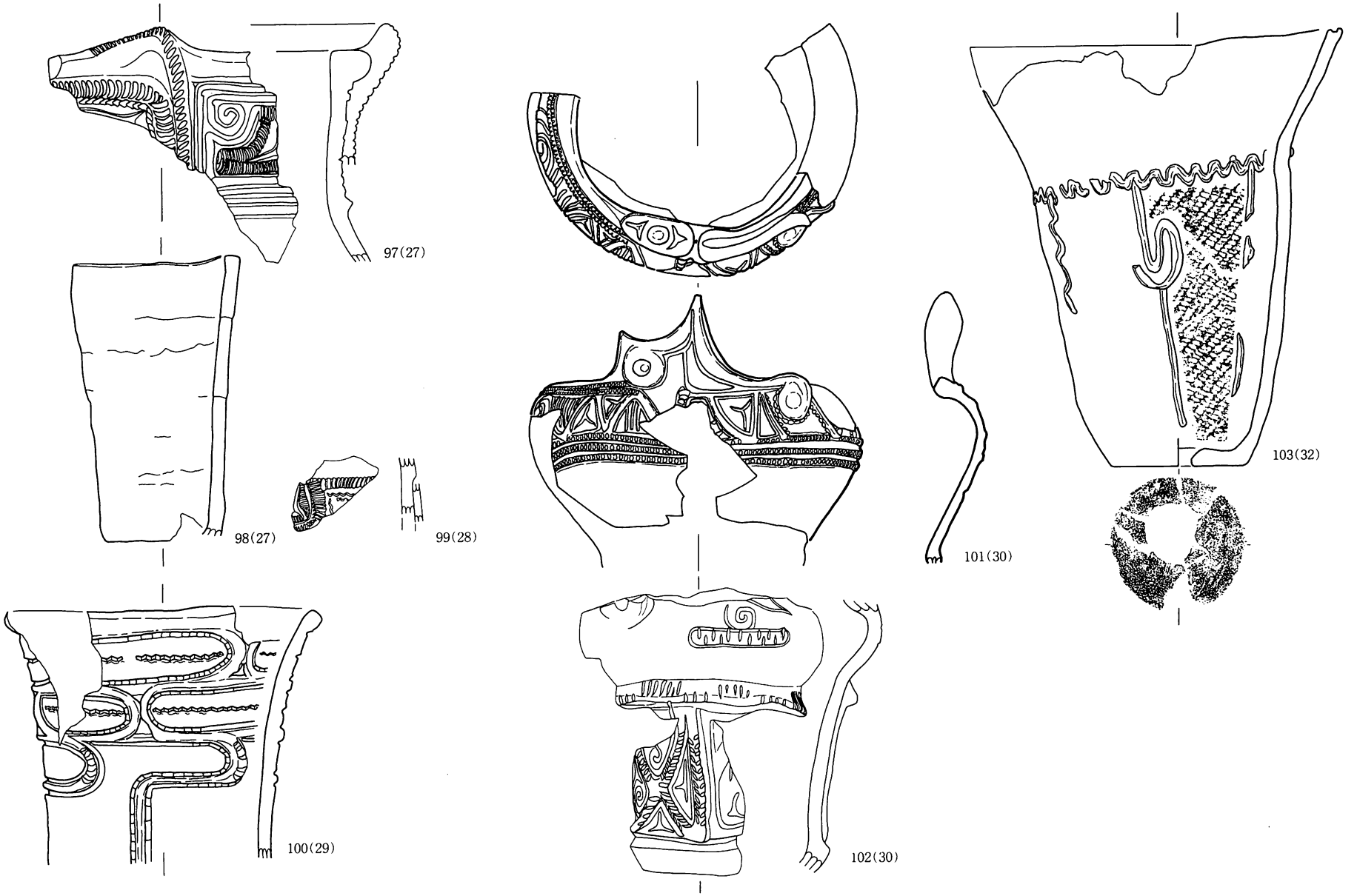


第48図　24号住居跡出土遺物（1/4）（　）内は住居番号

0　20 cm

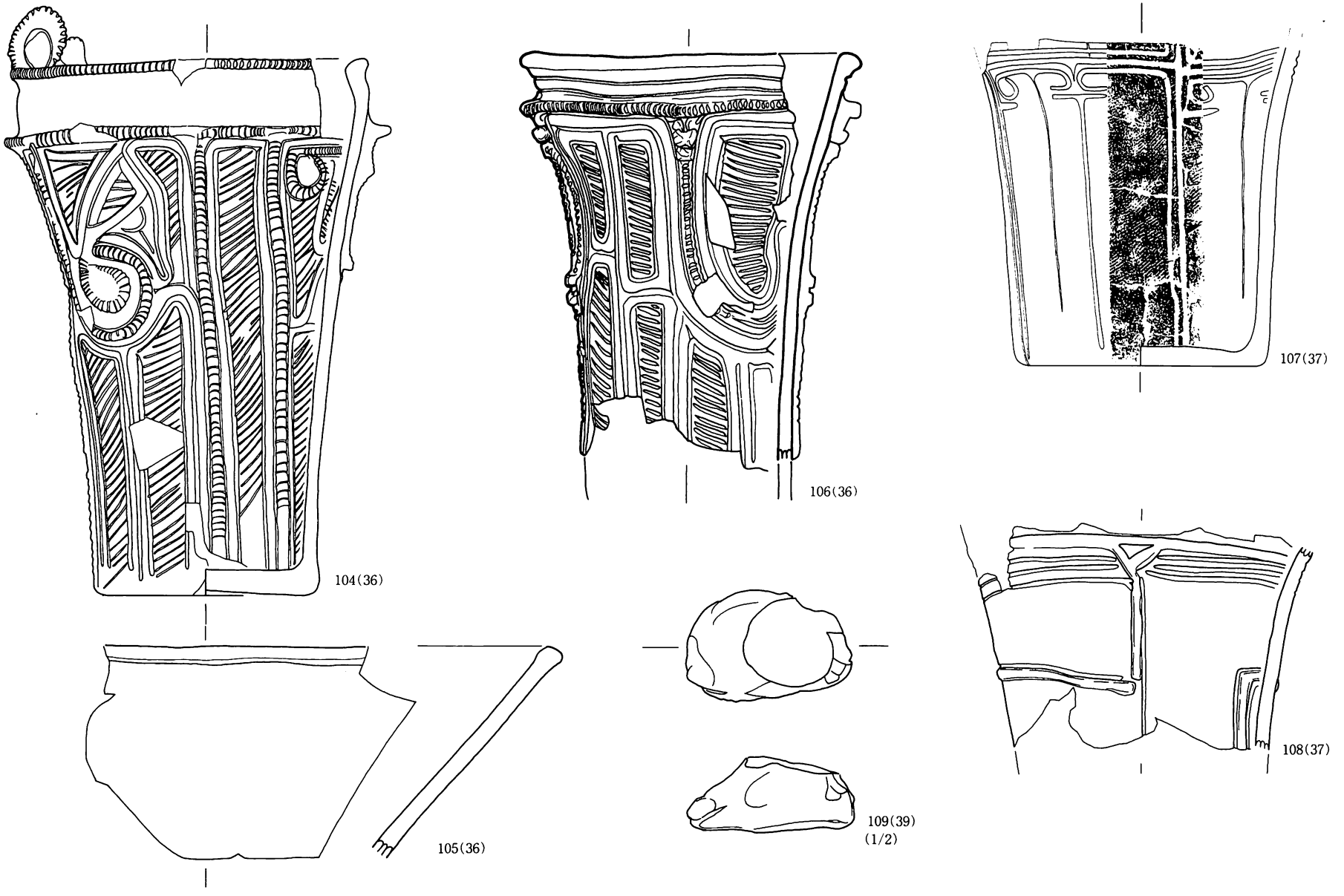


第49図　26号住居跡出土遺物（1/4）（　）内は住居番号



第50図　27・28・29・30・32号住居跡出土遺物（1/4）（　）内は住居番号

0　20 cm



第51図　36・37・39号住居跡出土遺物（1/4）・（1/2）（　）内は住居番号

第４節　土坑出土遺物（実測図）（３桁数字は、土坑番号及び遺物番号を意味する）（第52図から第57図）

001　胴下半部から底部まで現存する。器面には、文様は施されない。また底部には、圧痕が認められる。（第52図）

004－１　口唇部には刻みが施され、口縁部には縄文が施される。頚部は無文帯で、胴上部には隆帯によって区画され、直下には沈線による渦巻文が施される。五領ケ台式期

004－２　胴下半部から底部まで現存する。胴下半部には、縦位による沈線文が施される。

004－３　土偶の足と思われる。偏平を呈する。（第52図）

006　口縁部はキャリパー状を呈し、無文帯が形成される。直下には、横帯する隆帯によって胴部とを区画される。胴部文様帯は、縦位による平行沈線文によって充塡され、横帯する隆帯から２条の隆帯が垂下されられ、刻みが施される。曽利Ｉ式期（第52図）

009　口唇部には突起が付され、口縁部には縄文が施され、直下には３条の沈線が施文され、両脇にはＹ字状文が張りつけられ、胴部を縦に区画する。区画内には半円状に沈線文が施され、垂下する沈線文はＢ字状を呈する。器面には、縄文が施される。五領ケ台式期（第52図）

013　口縁部の破片で、口唇部には把手が付され、貫通孔が施される。（第52図）

015　脚部で、貫通孔が施される。（第52図）

021　口縁部はキャリパー状を呈し、口唇部から頚部まで隆帯が貼り付けされる。直下には、横帯する２条の刻みをもつ隆帯によって胴部とを区画し、頚部文様帯が形成される。区画内には、波状の隆帯が施される。また頚部には、耳状の把手が貫通孔をもって貼り付けされる。胴部には、「Ｕ」字状の隆帯が「Ｊ」字状の隆帯を囲む。隆帯には、刻みが施される。曽利Ｉ式期（第52図）

022　口縁部には、４単位の塔状把手が付され、貫通孔が施される。把手の正面には、沈線による渦巻文が施される。また把手部は、空洞化される。口縁部文様帯は、半肉彫りされる。井戸尻式期（第52図）

026　口唇部には、把手が付されていた痕跡が認められる。口縁部には、連続する半円形状の沈線文が横帯し、区画内には沈線文で充塡される。胴下半部には縄文が施される。藤内式期（第53図）

031　口唇部には、１つの把手が付され、刻みが施される。また把手から底部まで垂下する隆帯には、刻みが施される。口縁部は、無文でキャリパー状を呈する。口縁部と胴部の境には１条の隆帯が巡らされ、刻みが施される。胴部には、縄文が施される。（第53図）

033　口縁部の破片で、口唇部は無文帯で、直下にはＪ字状の隆帯が連続させられ、爪形文が施される。また隆帯によって区画された中には、爪形文・三叉文・交互刻みが施される。隆帯の下部は、無文となる。胴部には縄文が施され、縦位に施された隆帯によって区画される。藤内式期（第53図）

043　口縁部から底部まで現存し、復元されたものである。口唇部には把手が付され、円形状に沈線文が施される。第１文様帯の口縁部には、半円形と三角形状に隆帯が施され、脇には連続する角押文が施文される。また耳状の把手が付される。第２文様帯は頚部に施され、ペン先状工具による押し引き文が横走し、区画内にはジグザグ文が施される。第３文様帯は胴部に形成され、不規則な隆帯文が施され、空間にはペン先状工具によって充塡される。新道式期（第53図）

045　口縁部の破片で、口唇部には半円状の把手が付され、内側に刻みが施される。また直下には眼鏡状の把手も付される。この把手をはさんで左右に楕円形状の隆帯区画文が施され、区画内には爪形文が施される。藤内式期（第53図）

050　底部を欠損するもので、口唇部は４単位の波状を呈し、波頂部を中心として左右に隆線によるＵ字状文が展開させられる。胴下半部には、上部文様帯と逆の文様構成で施文され、空白部には三叉文が施される。藤内式期（第53図）

053　胴下半部から底部まで現存する。胴部には蛇行する沈線文が施され、脇には「ハ」の字文が施される。

（第53図）

075　口縁部の破片で、渦巻状に貼り付けられた隆帯には、刻みが施される。藤内式期（第53図）

078　口縁部の破片で、口縁部にはパネル状に区画文が施され、区画内には平行沈線文で充塡される。藤内式期（第53図）

080　口縁部には、渦巻状の把手が施され、以下山形状の隆帯が施される。また右端には穿孔が認められる。藤内式期（第53図）

084　口縁部と底部を欠損する。頸部には１部横帯する隆帯が認められ、隆帯は円形状の隆帯から垂下する２条の隆帯によって切られる。胴部には、縄文が施される。井戸尻式期（第53図）

086　刻みを有する隆帯は十字状に貼りつけられ、区画内に渦巻状の沈線文が施される。井戸尻式期（第54図）

088　口唇部は角状に肥厚し、一部赤彩が残存する。（第54図）

094　口縁部から底部にかけて器面には、縄文が施される。（第54図）

104　土器の口縁部に付された突起と思われる。円錐形を呈し、粘土紐による渦巻文によって構成され、空洞を呈する。（第54図）

128　胴部から底部にかけて、器面には撚糸文が施される。（第54図）

135－１　浅い土坑からの出土遺物である。底部を除いては、ほぼ完形に近いものである。第一文様帯の口縁部には楕円状に４単位の区画がなされ、区画の脇には連続する角押文が巡らされ、中央には山形に角押文が施される。第２文様帯は頸部に無文帯が形成される。第３文様帯は頸部直下に楕円状に４単位に区画され、第一文様帯と同様な手法で構成される。以下無文帯が形成される。狢沢式期（第54図）

135－２　口縁部の把手部である。口唇部上には三叉文が刻まれ、両端には交互に刻みが施される。井戸尻式期（第54図）

136　突起部の遺物である。内面には、沈線による三角形文と蛇行文が施される。外面には、懸垂させられた隆帯に刻みが施される。（第55図）

137　Ｘ－43.44グリッド規模227×140×25㎝、不整楕円形からの出土遺物である。口縁部を欠損する大形の土器で、現存する器面全体に撚糸文が施される。井戸尻式期（第55図）

150　胴上半部の破片である。隆帯による楕円状の区画が施され、更にキャタピラ文で区画される。区画内にはキャタピラ文とジグザク文が施文される。藤内式期（第55図）

154　口縁部の破片である。口唇部には、渦巻状の隆帯が貼り付けされ、上部には刻みが施される。井戸尻式期（第55図）

171　粘土塊である。握り締められた痕跡が認められる。（第55図）

175－１　完形品である。口縁部には、一ケ所眼鏡状把手が付される。丸みを帯びた口縁部には無文帯が形成され、頸部には横帯させられた隆帯が巡らされ、隆帯の上部には刻みが施される。胴部には垂下させられた隆帯によってＸ単位に区画される。区画内には、Ｘ字状の隆帯文・Ｊ字状文で形成され、各隆帯の脇には沈線文で充塡される。藤内式期末から井戸尻式期（第55図）

175－２　中空の頭部を持つ土偶である。眉は大きく半円状に開き、鼻は棒状工具によってあけられる。口は開けられている。後頭部には、渦巻文と三叉文によって髪形を表現させている。（第55図）

178－１　口縁部には小突起が形成され、刻みが施される。口縁部と胴部の境は「く」の字状に折れ曲がる。文様は棒状工具による沈線文と刻みを持つ隆帯で構成される。井戸尻式期（第56図）

178－２　コップ形の土器である。器面全体に縄文が施される。（第56図）

183　ほぼ完形品である。口縁部文様帯には、４単位の把手が付され、一か所は貫通される。また把手は、楕円区画文によって囲まれる。区画内には、沈線文と半截竹管状工具による刺突がなされる。第２文様帯は、胴上半部にあり、頸部より垂下させられた隆帯は刻みを持ちながら横へ延び、円形文が形成される。円形の中には、縄文が施される。以下胴下半部には、縄文で充塡される。藤内式期（第56図）

199　口縁部の破片で、縦位の貼り付けが認められる。口縁部はキャリパー状を呈し、無文である。口縁部と頚部の境には、横帯する隆帯が張りつけられ刻みが施される。井戸尻式期ないし曽利Ⅰ式期（第56図）

202　完形品である。4単位の波状口縁を呈し、口唇部には半截竹管状工具による刺突が施され、器面全体に平行沈線文が施文される。また横帯する「く」の字状の沈線文の上には、棒状の貼り付けがなされ、半截竹管状工具による押し引きが施文される。諸磯ｃ式期（第56図）

207　口縁部の破片で、口唇部には板状の突起が付され、突起部から垂下させられた隆帯は、部分的に刻みを有しながら逆Ｊ字状に巻かれる。井戸尻式期（第56図）

221　底部の破片である。縦位に平行沈線文が施される。（第56図）

236　有孔土器である。一部赤彩が残存する。諸磯ｃ式期（第56図）

249　一部欠損する。口縁部は丸く内弯し、口縁部文様帯には、地文として縄文が施され、粘土紐の貼り付けがなされる。頚部には、平行沈線文が横位に引かれ区画をなし、区画内には縦位に細沈線文が連続される。直下には、瘤状の貼り付けがなされ、刻みが施される。胴部文様帯には、地文を縄文として「８」の字状に沈線によって区画され、また瘤状の貼り付けされた直下からは、沈線文が施される。五領ケ台式期（第56図）

262　胴上半部を欠損する。口唇部には、4単位の突起が施される。口縁部は丸みを持ちながら、緩やかに外反する。口縁部文様帯は縄文を地文とし、沈線文が施される。また突起部の下には、橋状把手が付され縄文が施文される。胴下半部には縦位の平行沈線文が施され、三角形状の沈線文は左右に分けられる。また底部付近では、縄文が施される。五領ケ台式期（第56図）

279－1.2　口唇部には、円形と耳状の貼り付けがなされる。諸磯ｃ式期（第56図）

281　底部を欠損する浅鉢である。口唇部には、楕円形状に区画がなされ、隆帯の脇には沈線文が巡らされ、さらに交互刺突が施される。また楕円状の区画間には円形の貼り付けがなされ、刻みが施される。口唇部の文様帯の右下には、補修孔と思われる１ケの貫通孔が認められる。五領ケ台式期（第56図）

287　胴部以下を欠損する。第１文様帯は口縁部に存在し、半円形状と三角形状の隆帯によって区画する。区画内には、沈線文で充填される。頚部には、口縁部から連続する隆帯が楕円形状に区画され、区画内には爪形文とペン先状工具による連続刺突文が施される。（第57図）

290　口縁部を欠損する。頚部には刻みを持つ隆帯が巡らされ、大きく張り出された箇所からさらに隆帯が垂下させられ、胴部を区画する。区画内には、渦巻文・三叉文・平行沈線文が施され、隆帯による円形区画も施される。藤内式期（第57図）

８号住居出土遺物（第57図）

110　口縁部と胴部の境は屈曲され、底部ですぼまれる。器面全体に、縄文が施される。井戸尻式期

23号住居出土遺物（第57図）

111　口唇部は内弯され、底部に向かってすぼまれる。口縁部は無文帯をなし、胴部には縄文が施される。

24号住居出土遺物（第57図）

112　第48図－84と同一個体であるが、接合されない。

113　胴上半部を欠損する。下部文様帯は、隆帯によって方形状の区画が横帯され、爪形文で充填される。

114　胴上半部を欠損する。下部文様帯は、渦巻状の爪形文とジグザグ文で構成される。

26号住居出土遺物（第57図）

115　胴部には三角形状のパネル文で区画され、区画内には沈線文で充填される。

30号住居出土遺物（第57図）

116　胴部中位から底部まで現存する。胴部中位には、粘土紐による貼付けが施される。

36号住居出土遺物（第57図）

117　胴上半部を欠損し、胴部にはパネル文による区画がなされ、区画内にはジグザグ文が施される。また胴部と底部の境には、横位にジグザグ文が施文される。

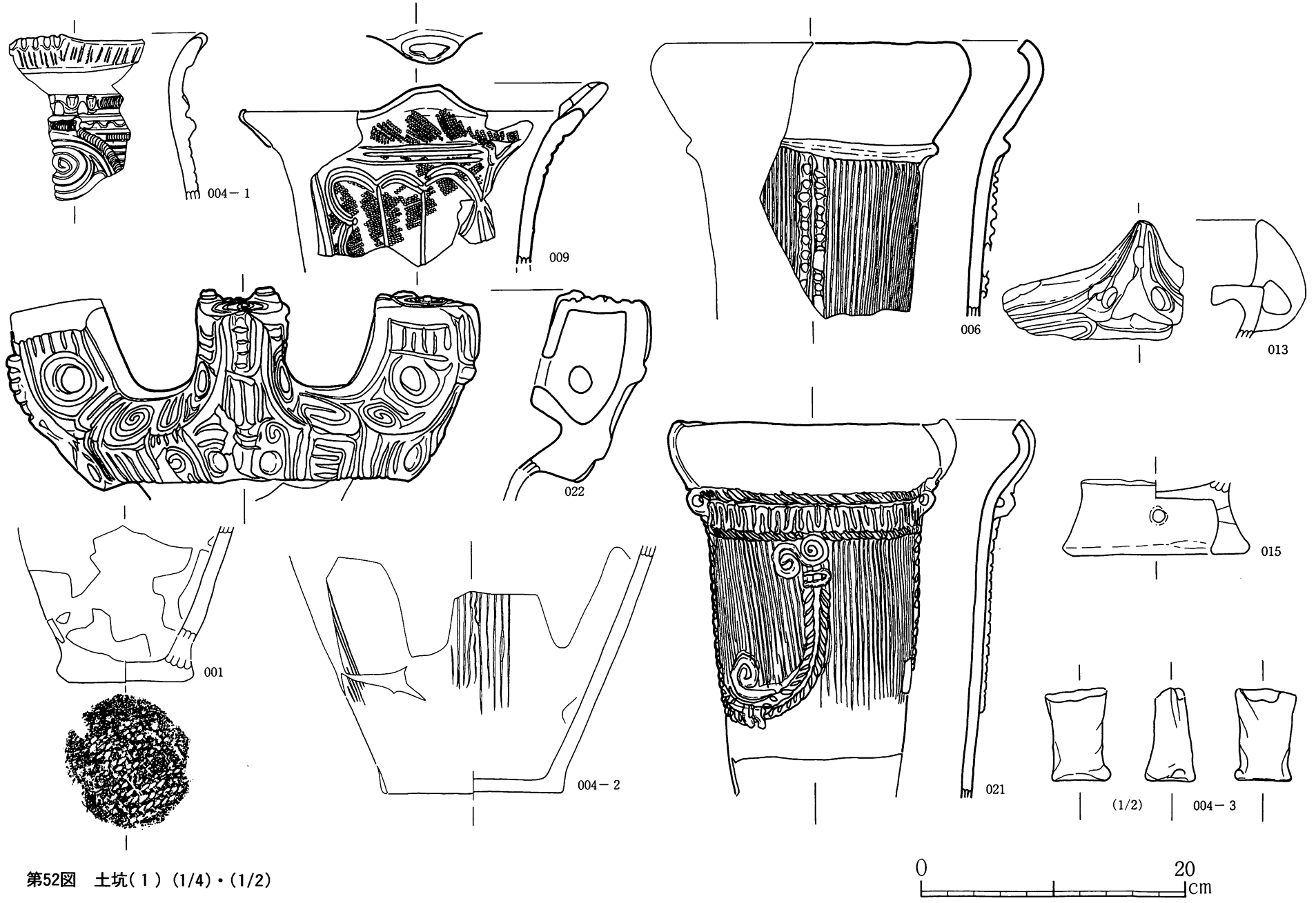
118　胴上半部を欠損する。胴下半部には、蛇行する懸垂文が施され、さらに下部には楕円区画文が横帯させられ、区画内には、爪形文が施文される。

005　胴下半部を欠損する。口唇部には小突起が付され、隆帯によって頸部まで文様が施される。頸部には4条の沈線が横位に施され、以下隆帯による装飾が施される。井戸尻式期

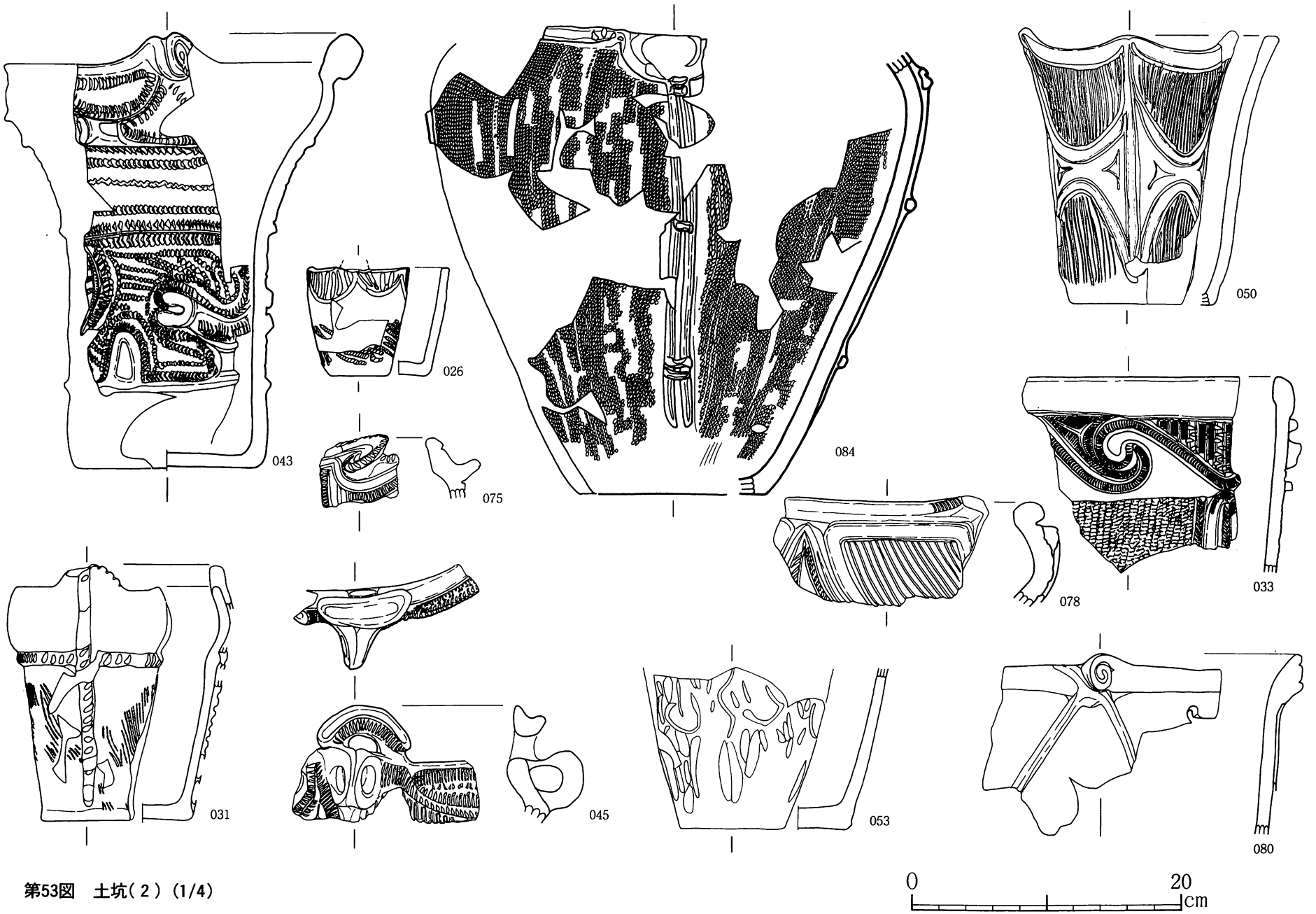
005.006　5・6号土坑と接合する。口縁部はキャリパー状を呈し、2本の隆帯には刻みが施される。頸部には横位に隆帯が貼付けられ、胴部には「U」字状の隆帯が施され刻まれる。また胴部には、地文として縦位に沈線文が施される。井戸尻式期

37号住居出土遺物（第57図）

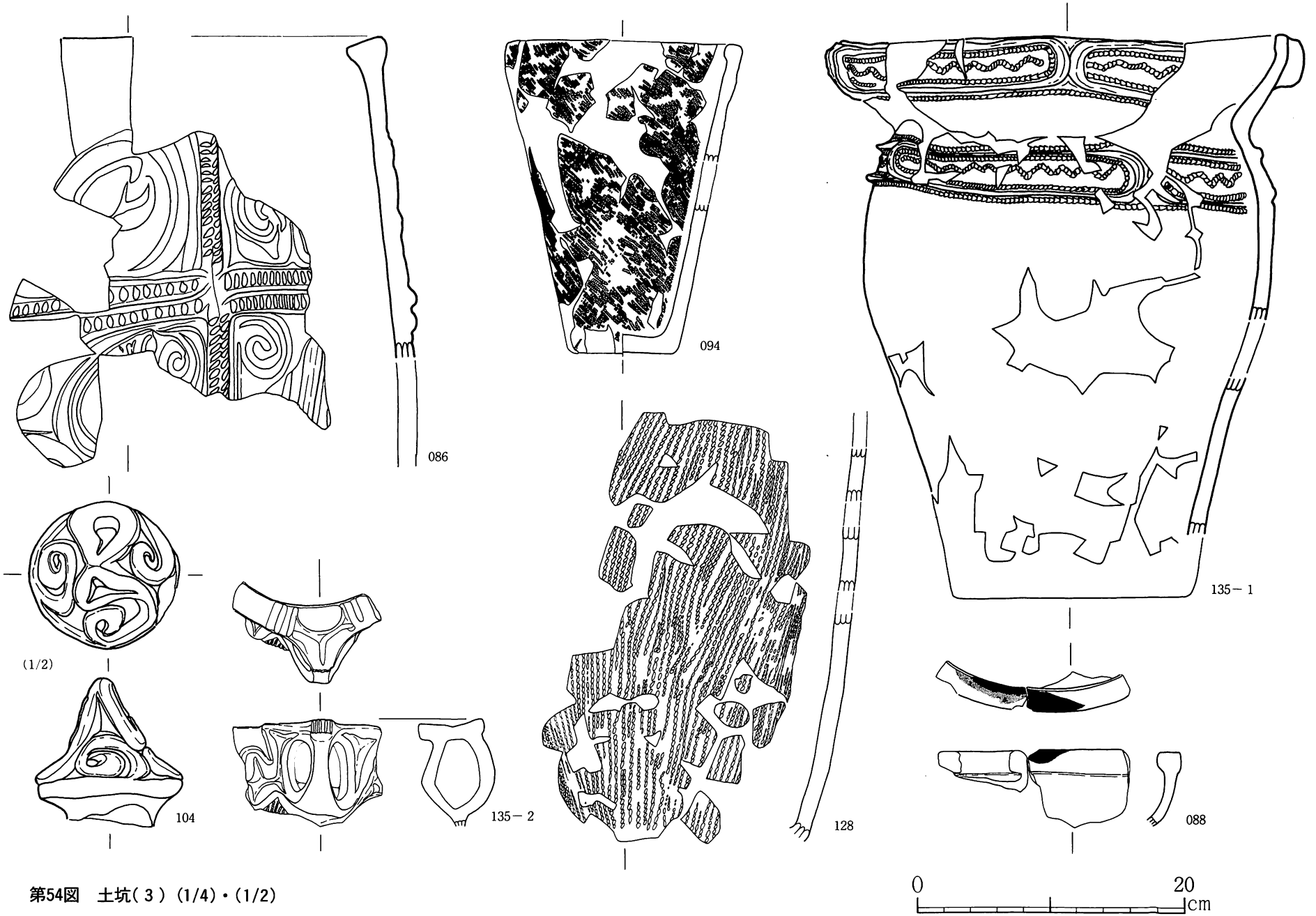
119・120　同一個体である。口唇部には渦巻状の小突起が付され、口縁部文様帯には半円状の区画がなされる。区画内には角押文が連続させられる。新道式期



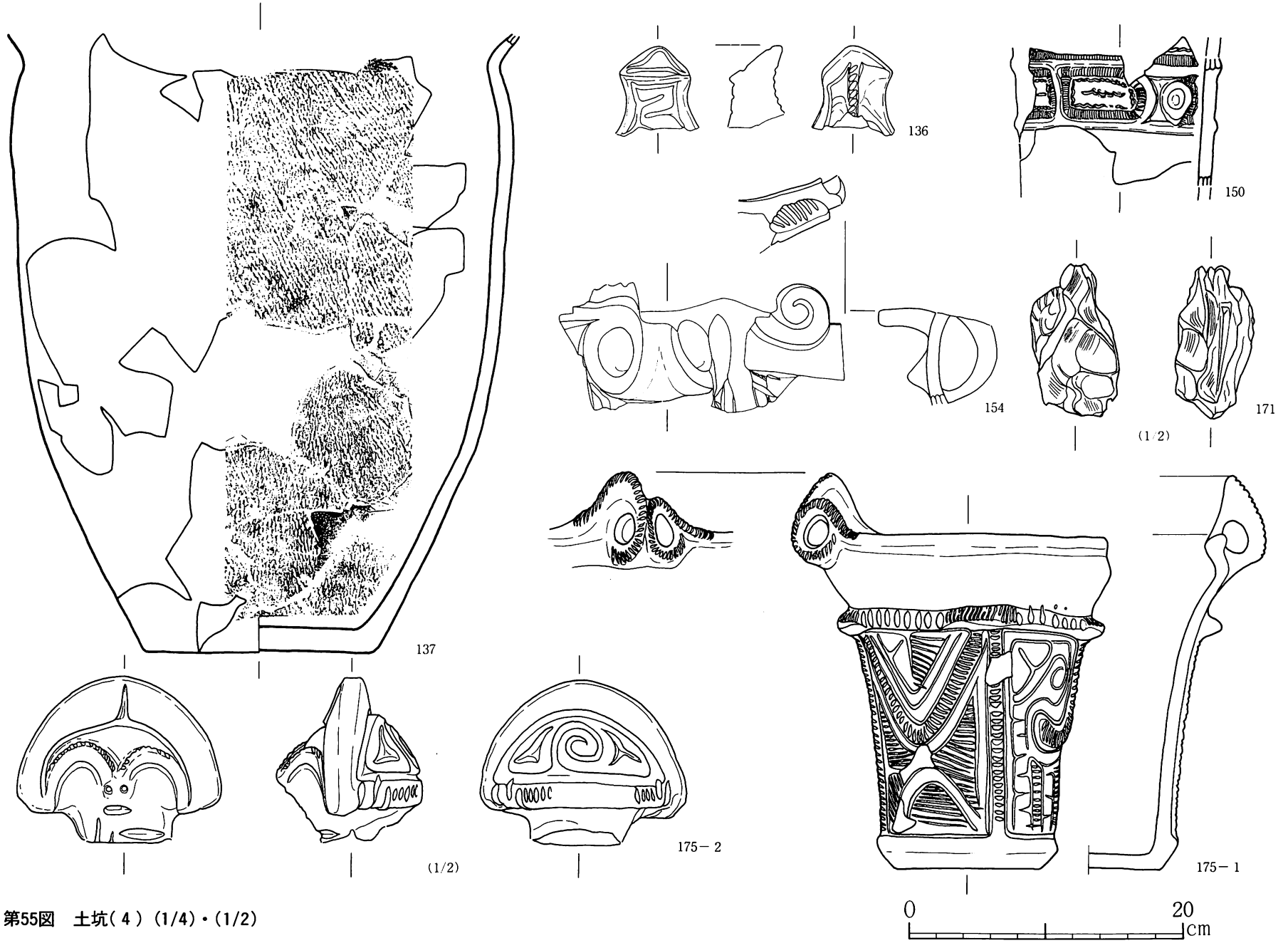
第52図　土坑(１)(1/4)・(1/2)



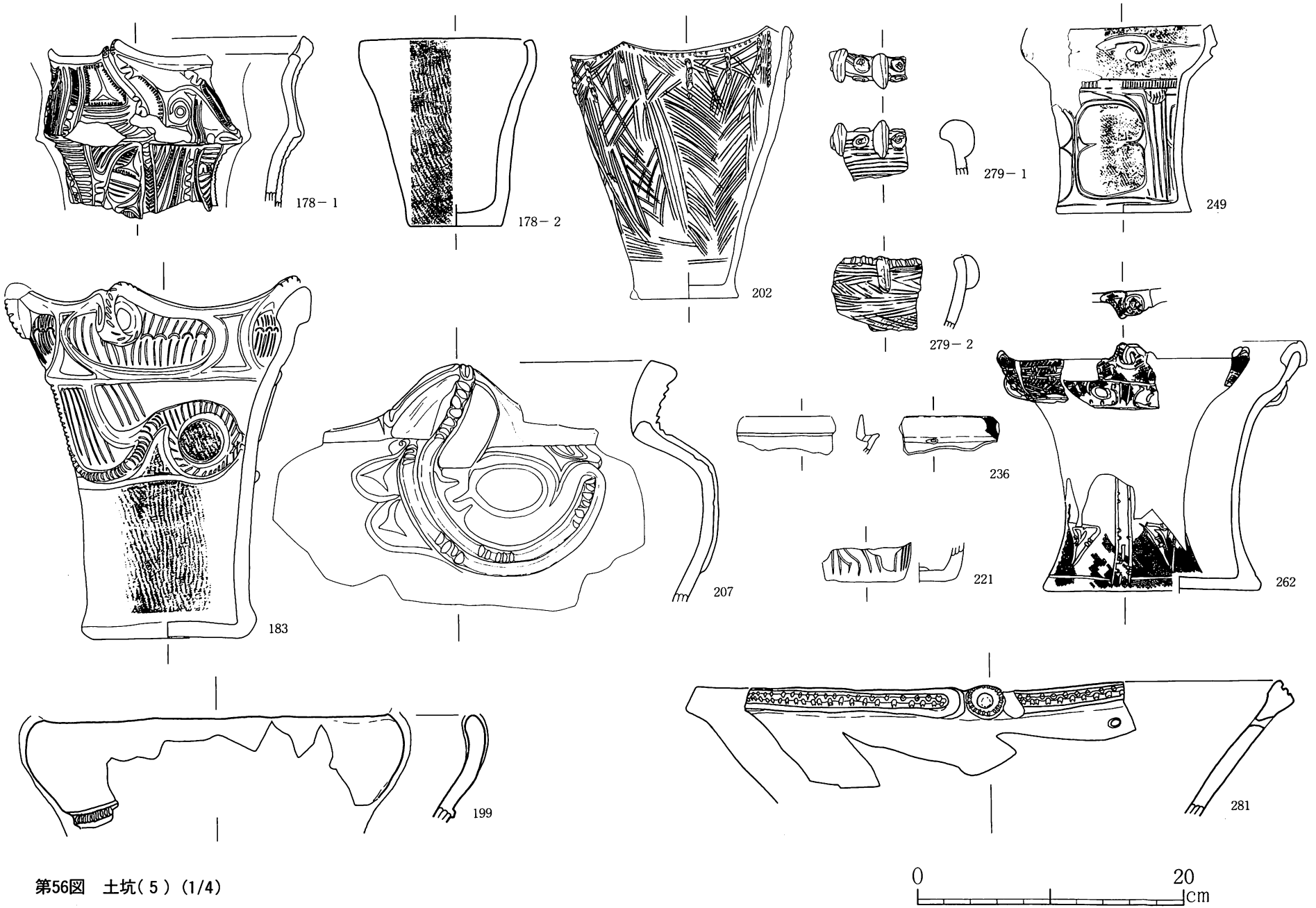
第53図　土坑（２）（1/4）



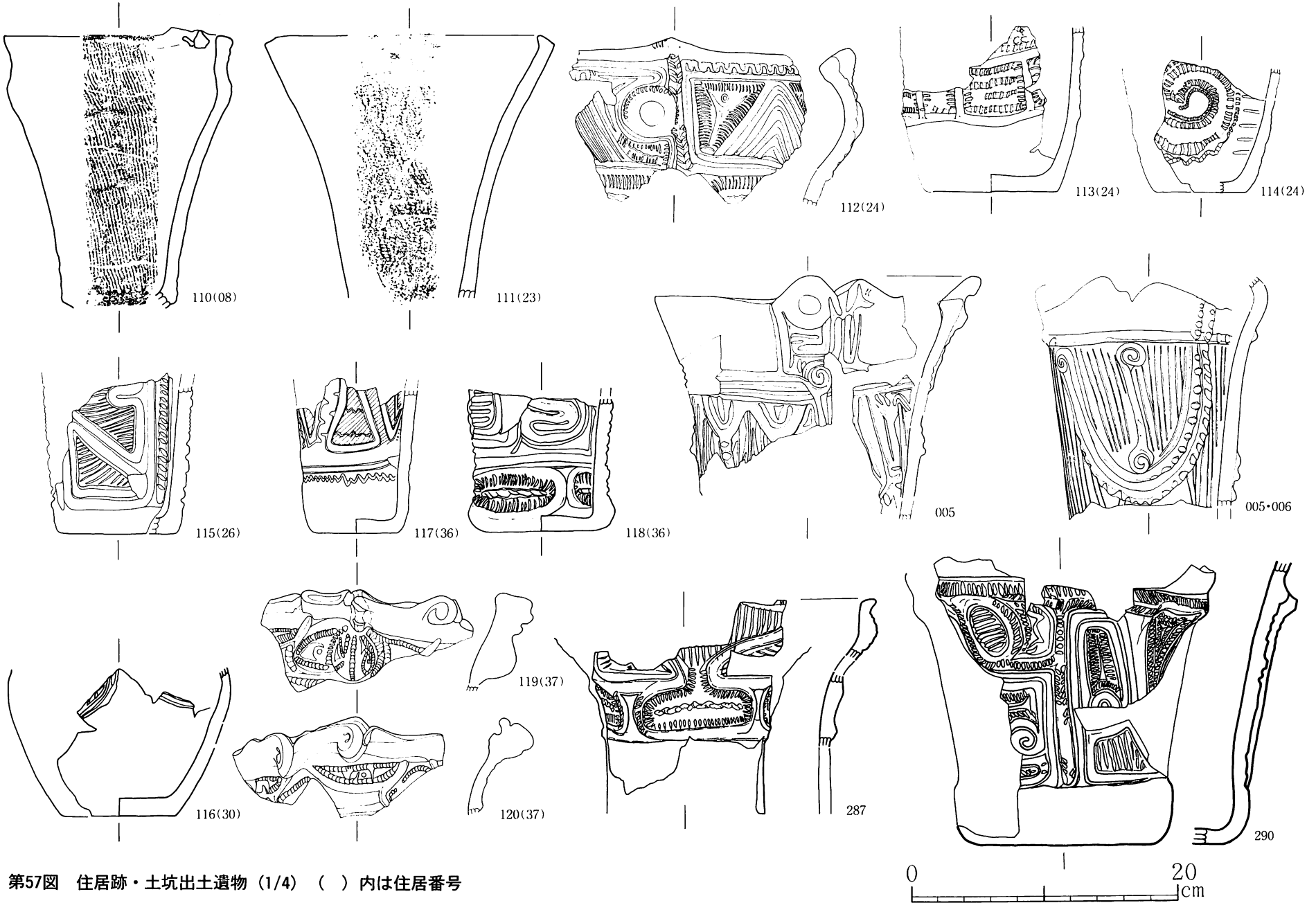
第54図　土坑（３）（1/4）・（1/2）



第55図　土坑(４)(1/4)・(1/2)



第56図　土坑（５）（1/4）



第57図　住居跡・土坑出土遺物（1/4）（　）内は住居番号

第５節　住居跡出土遺物（拓本）（第58図から第77図）

１号住居（第58図）

01－１　口唇部の内面は、「く」の字状に外反し、刻みが施される。口縁部には、楕円区画文が施され、刻みが施文される。藤内式期

01－２　縄文を地文とし、器面に施される。（pit5出土）

01－３　渦巻文と半肉彫りされた文様で構成される。（pit5出土）井戸尻式期

01－４　円形状に粘土紐が貼付され、その後交互に刻みが施される。井戸尻式期

01－５　渦巻文と平行沈線文の組み合わせによって、施文される。井戸尻式期

01－６　沈線による渦巻文と平行沈線文が、器面に施される。井戸尻式期

01－７　縦位に平行沈線文が底部付近まで施され、一部梯子状に刻みが施文される。井戸尻式期

01－８　縦位に平行沈線文が、施される。（pit5出土）

２号住居（第58図）

02－１　口縁部は、朝顔状に外反し、小突起が付される。口唇部はやや肥厚し、直下は無文帯が形成される。胴上半部には、爪形文と交互刺突によるジグザグ文が施文される。ジグザグ文の直下には、瘤状の貼付がなされ、縦位に沈線文が引かれ左右に区画される。区画内には、斜行する沈線文で網目状に施される。五領ケ台式期

02－２　口唇部はやや肥厚し、外反する。五領ケ台式期

02－３　口唇部には、粘土紐が「Ｙ」字状に貼付され、爪形文が施される。区画内には、平行沈線文と刺突文で充塡される。五領ケ台式期

02－４　口唇部はやや肥厚し、内面は「く」の字状を呈する。横位に連続させられる。浅鉢　五領ケ台式期

02－５　口唇部内面には、４条の爪形文が施される。浅鉢　五領ケ台式期

02－６　口唇部内面には、角押文が４条に施文され、２段目と３段目の間に半截竹管状工具による交互刺突が施される。浅鉢 五領ケ台式期

02－７　口縁部は、緩やかに内傾する。胴上半部には、平行沈線文が３本巡らされ、直下には沈線による渦巻文が施され、器面には、地文として平行沈線文で充塡される。曽利Ⅳ式期

02－８　胴部には平行沈線文が充塡され、粘土紐の貼付と刻みが施される。曽利Ⅰ式期

02－９　器面には、平行沈線文が施される。中期後半のものと思われる。

02－10　縄文を地文とし、底部付近まで施文される。

３号住居（第58図）

03－１　口縁部の破片で、口縁部の上段には、交互刺突によるジグザグ文が形成され、２段目には、棒状工具による渦巻文と刻みが施される。（炉出土）五領ケ台式期

03－２　器面には、縄文が施される。（炉出土）

03－３　２本の沈線で左右に区画され、区画内には平行沈線による流水文が施される。中期後半のものと思われる。

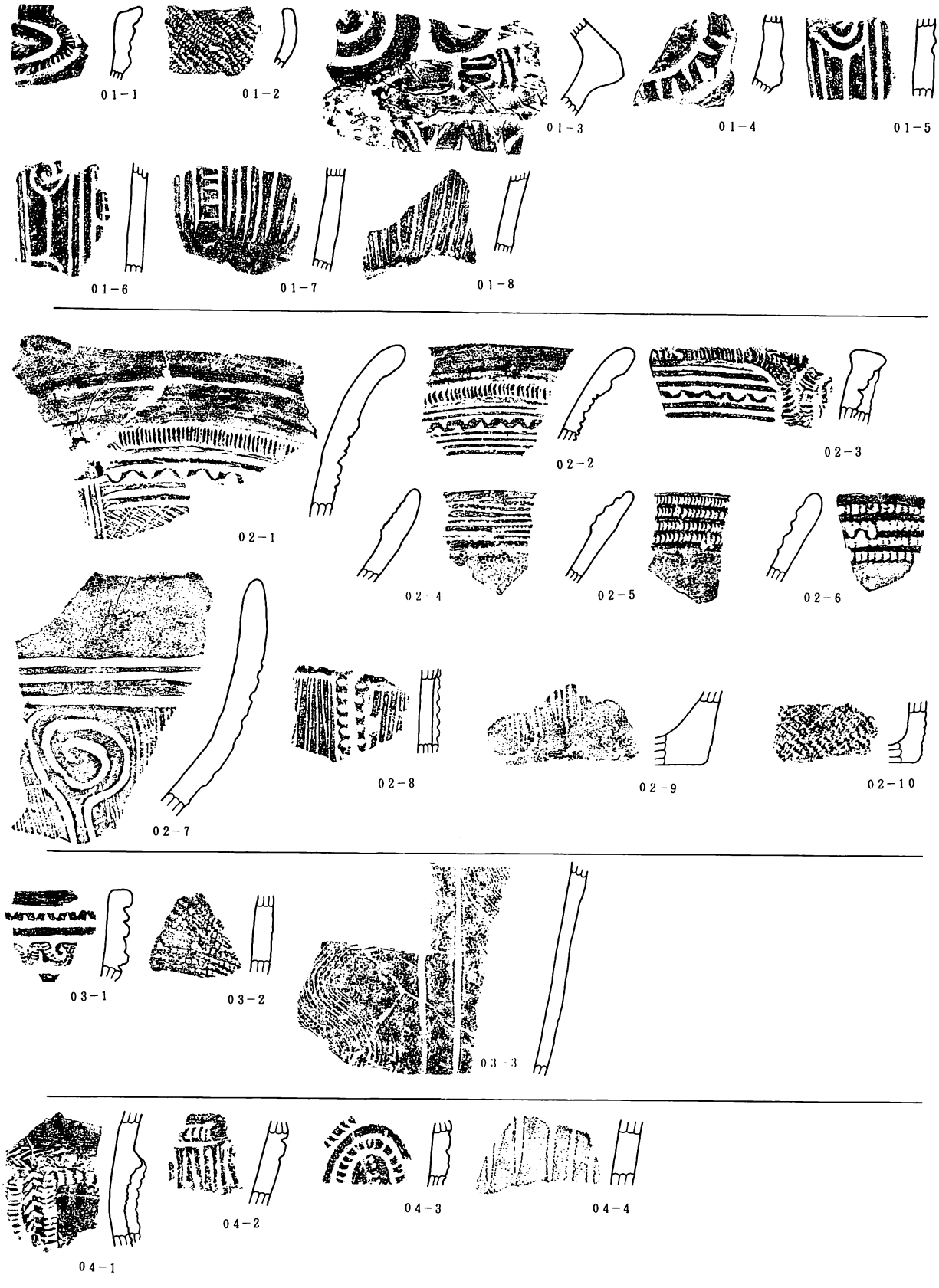
４号住居（第58図）

04－１　胴上半部の破片で、口縁部と胴部を区画するように、隆起帯が貼付され、「く」の字状に沈線が施される。また隆帯の両脇には、連続する角押文で区画される。藤内式期

04－２　爪形文と平行沈線文で、器面に充塡される。

04－３　楕円区画内には、楕円状に半截竹管による押引き文が施され、さらに内側には、角押文が施される。（炉出土）藤内式期

04－４　棒状工具による沈線文が、縦位に施される。



第58図　住居出土遺物(１)(1/3)

0　10cm

6号住居（第59図）

06－1　口唇部はやや肥厚し、内面は緩い「く」の字状を呈する。口唇部直下には、連続する角押文が横位に5条施され、第1～3の文様帯が形成される。第1文様帯にはほぼ中央に角押文がジグザグに施文され、第2文様帯にはコの字状に角押文で区画され、ジグザグ文が施される。狢沢式期と思われる。

06－2　口縁部は、キャリパー状を呈し、緩い波状口縁となる。口唇部の内面は、緩い「く」の字状を呈し、先細りになりやや尖る。外面には、2条に貼り付けが行われ、上下に爪形文が口縁部に沿って波状に施文される。直下には、「V」字状に平行沈線文が施される。新道式期～藤内式期と思われる。

06－3　縦位による平行沈線文によって区画され、区画内には、斜行する平行沈線文で充塡される。区画間には、貼り付けがなされ、ペン先状工具による刺突と「ハ」の字状の刻みが施される。藤内式期

06－4.5　器面全体に縄文が施される。同一個体と思われる。

06－6　平行沈線が縦位に施され、区画内には、「く」の字状に平行沈線が引かれる。中期後半

06－7　器面には、平行沈線文で充塡される。曽利式期

06－8　頚部から胴上半部にかけての破片で、器面全体に平行沈線文が施される。頚部には、4条の半截竹管文による押し引き文が施文され、粘土紐による貼り付けは、直下から3本垂下して「U」字を形成し先端部で渦巻状に施される。曽利II式期

06－9　胴下半部の大形の破片で、粘土紐の貼り付けがなされ、2本1単位のものと1本1単位のものとに器面は区画される。区画内には、棒状工具による刺突文が施される。曽利II式期

06－10　爪形文による区画がなされ、区画内には沈線文が施される。（炉出土）藤内式期

7号住居（第59図）

07－1　無文帯が形成された口縁部には、粘土紐による貼付と瘤状の貼り付けが施される。井戸尻式期

07－2　器面には、縄文が施される。中期中葉

07－3　胴部には、「く」の字状の刻みによって区画され、脇には棒状工具によるジグザグ文が施文される。また器面には、指頭圧痕が認められる。藤内式期

07－4　胴部には、パネル文が施され、区画内には平行沈線文が充塡され、区画された中央には、縦位の沈線によって半隆起させられた波状文が形成される。藤内式期

07－5　胴上半部の破片で、横位に沈線文が施され、直下には縦位の平行沈線文が施される。中期中葉と思われる。

8号住居（第59図）

08－1　口縁部には小突起が付され、円形の貫通孔が施されるとともに、三叉状の沈線文によって貫通孔は囲まれる。藤内式期

08－2　口縁部は無文帯を形成し、胴上半部には、横走する隆帯には刻みが施される。藤内式期

08－3　平行沈線文でパネル状に区画され、区画内には、平行沈線で充塡される。藤内式期

08－4　円形状に沈線文が施される。井戸尻式期

9号住居（第59・60図）

09－1　口縁部は波状を呈し「く」の字状に平行沈線文が施され、爪形文が施文される。諸磯c式期

09－2　波状口縁を呈し、波頂部から左右に結節状文が施され、胴上半部には円形状に結節状浮線文が施される。諸磯c式期

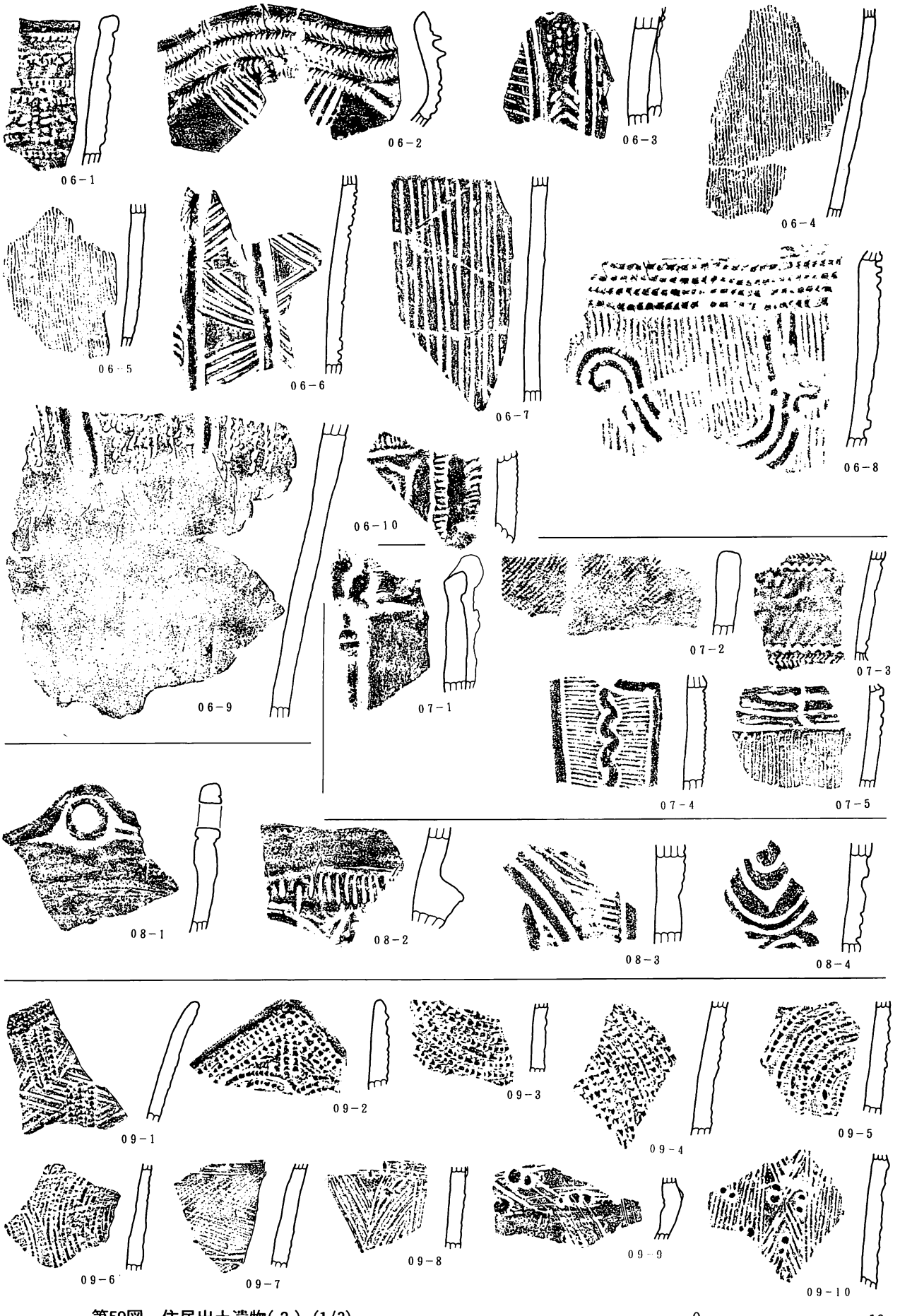
09－3.4.5.6　円形状に結節状浮線文が施される。諸磯c式期

09－7.8　半截竹管による平行沈線文が、器面に施される。諸磯c式期

09－9.10　平行沈線文が施され、2ケ1単位のボタン状の貼り付けがなされる。諸磯c式期

09－11　口唇部には横位に角押文が施され、直下には半円状に施文される。五領ケ台式期

09－12　波状口縁を呈し、波頂部には渦巻状に貼り付けがなされ、際にはペン先状工具による刺突が施される。新道式期



第59図　住居出土遺物（２）（1/3）

0　10cm

09－13　口縁部には小突起が付され、円形状に貫通される。口縁部直下には、横走する爪形文が施される。藤内式期

09－14　口縁部は、キャリパー状を呈し内傾する。器面には、縄文が施される。中期

09－15　口唇部はやや肥厚し、直下には楕円区画が施され、区画内にはキャタピラ文が施文される。藤内式期

09－16　口唇部は無文帯が形成され、直下には楕円区画が横帯する。（pit8出土）中期中葉

09－17　口縁部には、円形状の小突起が付されるが、貫通されることなく、周辺には刻みが施される。口縁部の内面は、「く」の字状に外反する。また口縁部直下には、円形状に区画された沈線文の中に円形の刺突文が施され、右には三角形の沈線文で区画される。中期中葉に属すると思われる。

09－18　縄文を地文として、器面に施される。藤内式期

09－19　連続して半円状の貼り付けがなされ、刻みが施される。藤内式期

09－20　胴下半部はパネル状に区画され、区画内には縦位への沈線文が施される。井戸尻式期

09－21　口縁部には、円形の貼り付けがなされ、貫通されない。脇には、蛇行させるように棒状工具による交互の刻みが施される。井戸尻式期

09－22　口縁部は波状を呈し、波頂部から斜めに垂下された貼り付けには、刻みが施される。

09－23　碗形を呈するものと思われる。口唇部には無文帯が形成され、直下には縄文が施される。井戸尻式期

09－24　口縁部はキャリパー状を呈し、横帯する隆帯によって口縁部と胴部を区画する。また隆帯には刻みが施される。井戸尻式期

09－25　口唇部直下には、三角形の沈線によって区画され、区画内には、三叉文が施される。井戸尻式期

09－26　「U」字状に沈線が施され、区画内には、平行沈線文で充填される。井戸尻式期

09－27　胴上半部は、隆帯によって文様が構成される。胴下半部は、縄文で充填される。井戸尻式期

09－28　左右を区画するように「T」字状の隆帯が施される。井戸尻式期

09－29　胴下半部から底部の破片で、ソロバン底を呈し、屈曲する上部には縄文が施される。井戸尻式期

09－30　底部の破片である。器面には、縄文で充填される。

10号住居（第61図）

10－1　口縁部の内面は、「く」の字状に外反する。口唇部には刻みが施され、直下には、キャタピラ文とペン先状工具による刺突で施文される。以下、無文帯となる。新道から藤内式期

10－2　口縁部は、波状を呈し内傾する。直下には、粘土紐によって半円状に区画され、刻みが施される。隆帯に沿って脇には、キャタピラ文が施文され、ペン先状工具による刺突文と三叉文が施される。新道から藤内式期

10－3　口縁部は、「く」の字状に外反し、三角形状の小突起が付される。また直下には、楕円形状に隆帯が貼り付けられ、刻みが施される。また区画内には、棒状工具によるジグザグ文が施文される。藤内式期と思われる。

10－4　口縁部は波状を呈し、直下には渦巻文が施され、また上部には交互に刻みが施文され、蛇行する。下部には、「V」字状に貼り付けがなされ、刻みが施される。井戸尻式期

10－5　口縁部は、「く」の字状に内傾し、半円状に半肉彫りされる。井戸尻式期

10－6　胴部には、粘土紐の貼り付けがなされ、両脇には、キャタピラ文が施される。またその外周には、ジグザク文で区画される。藤内式期

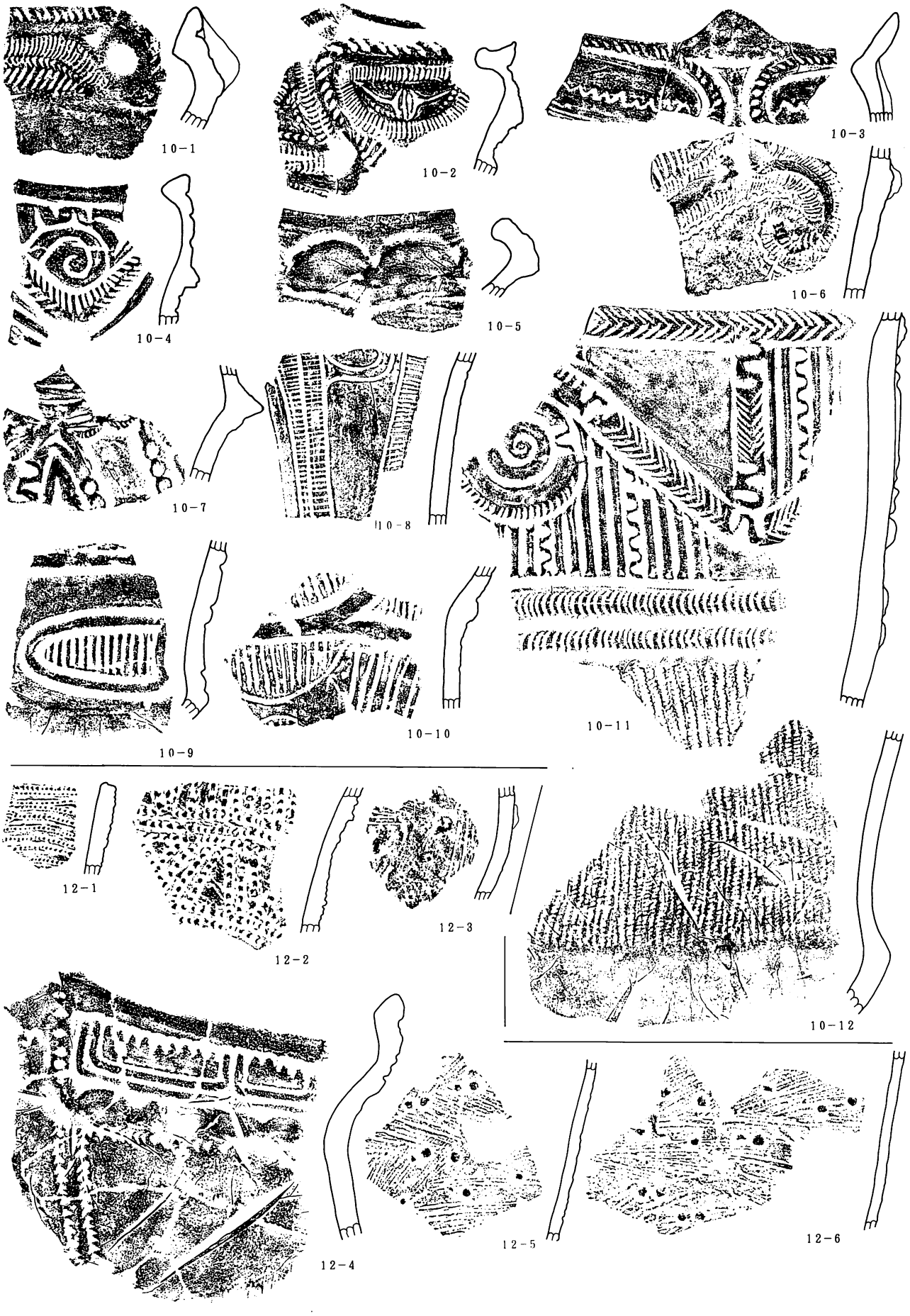
10－7　粘土紐による貼り付けと連続する押圧文が施される。また平行沈線文との境には、連鎖状文が施される。井戸尻式期

10－8　縦位に施された沈線の区画内には、平行沈線文で充填され、区画間には、沈線が施文される。井戸尻式期

10－9　底部付近には、沈線による楕円区画文が施され、区画内には、平行沈線文で充填される。また底部は、ソロバン玉状に折れ曲がる。藤内式期～井戸尻式期

第60図　住居出土遺物（３）（1/3）

0　10cm



第61図　住居出土遺物（４）（1/3）

0　10cm

10－10　隆帯は、胴上半部文様帯と下半部文様帯に区画する。上半部文様帯は楕円状に区画され、下半部文様帯は沈線によって半円形状に施され、区画内には、平行沈線文によって充塡される。井戸尻式期

10－11　胴部は、上部文様帯と下部文様帯に区画される。上部文様帯には、隆帯による渦巻文や平行沈線文によって文様が構成され、横帯する２本の隆帯には爪形文が施される。下部文様帯には、縄文が施文される。井戸尻式期

10－12　胴下半部から底部にかけての破片で、器面には縄文が施文され、屈曲底を呈する。井戸尻式期

12号住居（第61図・62図）

12－1.2　半截竹管文による爪形文が施される。諸磯ｃ式期

12－３　器面には、縦横に平行沈線文が施され、その後ボタン状の貼り付けがなされる。諸磯ｃ式期

12－４　口縁部は波状を呈し、口唇部内面は「く」の字状に外反する。口唇部直下にはパネル状に区画され、区画の上部には、半截竹管状工具による刺突が連続して施される。パネルの下部には半円状の文様が横帯し、下端にはペン先状工具による刺突文が縦横に連続する。中期前半

12－5.6　「く」の字状の沈線文が施されたのち、２ケ１単位のボタン状の貼り付けがなされる。諸磯ｃ式期

12－７　口唇部先端は尖り、その下でやや膨らみをもつ。口唇部直下には、角押文が３条にわたって巡らされ、その下部からは、縦位に角押文が施される。狢沢式期

12－８　胴部の破片で、上部に沈線が巡らされ、その下にはやや太めの沈線が斜めに施される。その後に小さな刻みが施される。中期前半

12－９　縄文が施された後に、パネル状に区画される。藤内式期

12－10　器面全体に、縄文が施される。中期中葉と思われる。

12－11　縄文を地文とする破片で、土製円盤である。

12－12　無文の土器で、外周は擦られている。土製円盤である。

13号住居（第62・63図）

13－1.2　器面には平行沈線文が施され、２ケ１単位のボタン状の貼り付けがなされる。諸磯ｃ式期

13－３　波状口縁を呈し、口唇部には刻みが施される。平行沈線が施された後に、２ケ１単位のボタン状の貼り付けがなされる。諸磯ｃ式期

13－４　器面には平行沈線文が施され、ボタン状の貼り付けが施される。諸磯ｃ式期

13－5～7　器面には縄文が施された後、平行沈線文が口縁部に施文される。諸磯ｂ式期

13－8.9　器面には、「く」の字状の平行沈線文が施され、その後２ケ１単位のボタン状の貼付と、棒状の貼り付けが認められる。諸磯ｃ式期

13－10　胴上半部には、半截竹管による円形状の結節状浮線文が施され、下部には平行沈線文が施され、２ケ１単位のボタン状の貼付が施される。諸磯ｃ式期

13－11　雷状の沈線が施された後、棒状の貼り付けがなされ、結節状の爪形が施される。諸磯ｃ式期

13－12　「く」の字状に平行沈線文が施された後、縦に貼り付けがなさ、半截竹管による押圧が認められる。諸磯ｃ式期

13－13　胴部の器面には、雷状に平行沈線文が施される。諸磯ｃ式期

13－14　器面には、平行沈線文が斜めに施される。諸磯ｃ式期

13－15　半截竹管文による平行沈線文が器面に施される。諸磯ｂ式期

13－16　胴上半部には、平行沈線文が施される。諸磯ｂ式期

13－17　半截竹管状工具による押引文が「く」の字状に施され、２ケ１単位のボタン状の貼り付けがなされる。諸磯ｃ式期

13－18　底部付近の破片である。縦位に施された結節の爪形文の間に、綾杉状の沈線が施され、底部と胴部を区画する横位への沈線が巡らされ、２ケ１単位のボタン状の貼り付けがなされる。諸磯ｃ式期

13－19　口縁部は、鋭く屈曲する有孔土器である。諸磯ｃ式期

13－20.21　口縁部は波状を呈し、波頂部直下には、渦巻状の貼り付けがなされ、２ケ１単位のボタン状の貼り付けがなされる。諸磯ｃ式期

13－22.23　口縁部は波状を呈し、波頂部直下にはメガネ状に粘土紐の貼り付けがなされる。また隙間には２ケ１単位のボタン状の貼り付けがなされる。諸磯ｃ式期

13－24　口縁部は平縁で、文様は、22.23と同様な手法で構成される。諸磯ｃ式期

13－25　文様は、22.23と同様な手法で構成される。諸磯ｃ式期

13－26　底部の破片で、平行沈線文が施されたのち、縦位に貼り付けがなされる。ボタン状の貼り付けは、２ケ１単位と１ケ１単位とにわかれている。諸磯ｃ式期

13－27　口縁部の破片で、口唇部には横位に連続する半載竹管文が施され、直下には縦位に平行沈線文が施文される。諸磯ｃ式期

13－28　27と同様な手法で構成され、ボタン状の貼り付けがなされる。諸磯ｃ式期

13－29　胴下半部から底部にかけての破片で、器面には横位に平行沈線文で充塡される。諸磯ｃ式期

13－30　胴下半部から底部にかけての破片で、器面には縦位に平行沈線文で充塡される。諸磯ｃ式期

14号住居（第62図）

14－１　口縁部はキャリパー状を呈し、沈線文によって区画された中には、キャタピラ文が施される。藤内式期

14－２　口唇部は緩やかに外反し、直下には隆帯によって半円形状に区画がなされ、区画内には平行沈線文で充塡される。藤内式期

14－３　胴部には、並行沈線によって半隆起させられ、渦巻状・パネル状に施文される。その後器面には細い平行沈線文が施される。藤内式期

14－４　胴部には、ゲジゲジ文が施される。藤内式期

14－５　平行沈線文が施された直下には、爪形文が横位に施され、その下端には、棒状の工具による波状の沈線が併走させられる。藤内式期

14－６　パネル文によって胴部は区画され、区画内には平行沈線文で充塡される。藤内式期

14－７　半載竹管による平行沈線文によって区画がなされる。区画内には綾杉状文が施され、その後蛇行沈線文が垂下する。（11と同一個体と思われる）藤内式期

15号住居（第64図）

15－１　口唇部の上端には、角押文が２条に巡らされ、下部は無文となる。浅鉢　五領ケ台式期～狢沢式期

15－２　胴上半部には、刺突文が数段にわたって施文され、直下には細い平行沈線が横位と縦位によって区画させる。五領ケ台式期と思われる。

15－３　胴上半部に沈線が施され、沈線間を上下に刺突が施され、鋸歯状文が形成される。（pit1出土）

15－４　口唇部に１条の沈線文が施され、下部には、綾杉状文と蛇行沈線文が施される。

15－５　口縁部と胴部を区画するように、１条の沈線が巡らされ、下部は「コ」の字状に区画され、区画内には綾杉状文が施される。曽利Ｖ式期

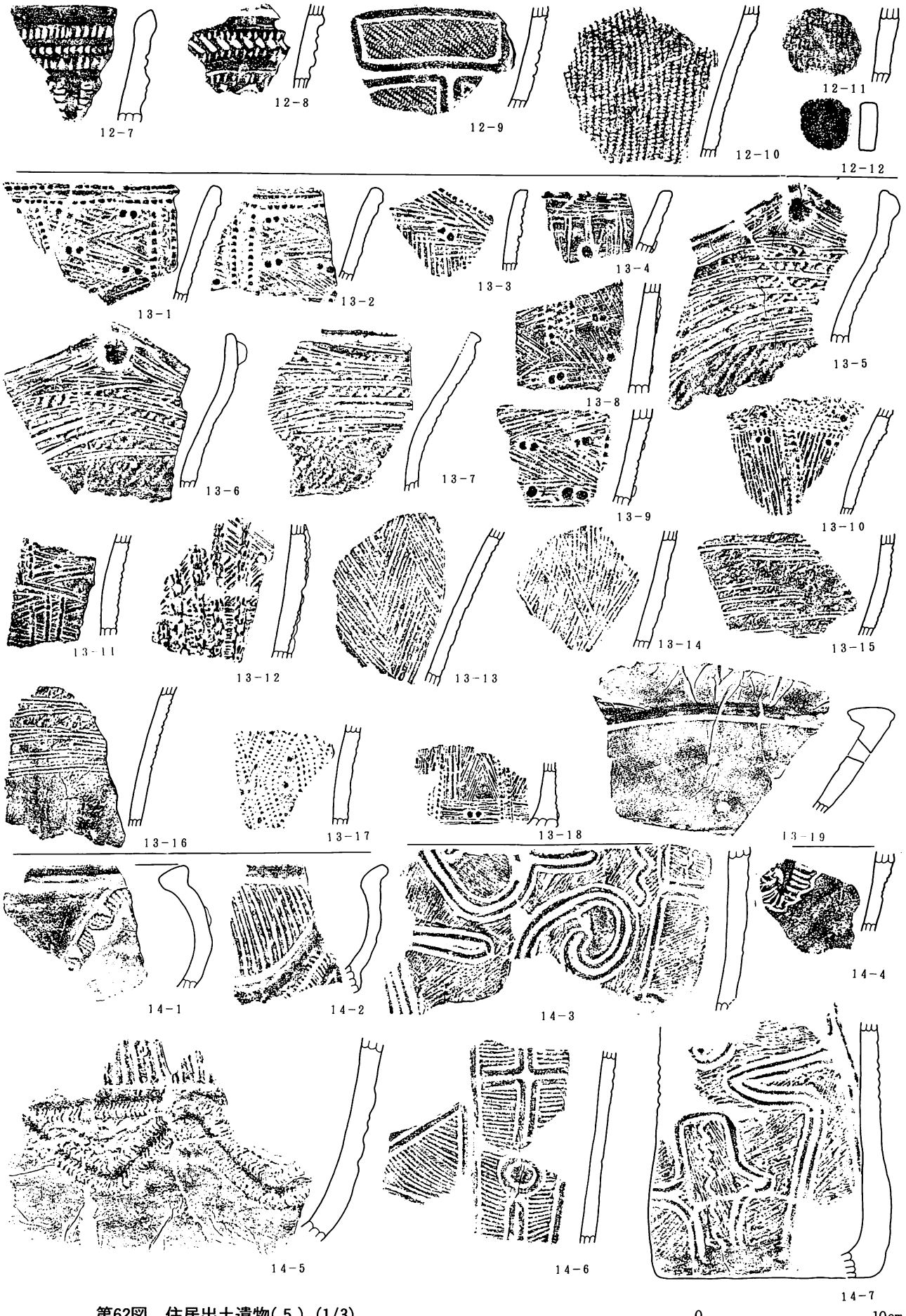
15－６　口唇部には、１条の沈線が巡らされ、その下部は「コ」の字状に区画され、区画内には綾杉状文が充塡される。曽利Ｖ式期

15－７　口唇部直下に沈線文が施され、下部には「コ」の字状に区画が施され、区画内には「八」の字状文で充塡される。曽利Ｖ式期

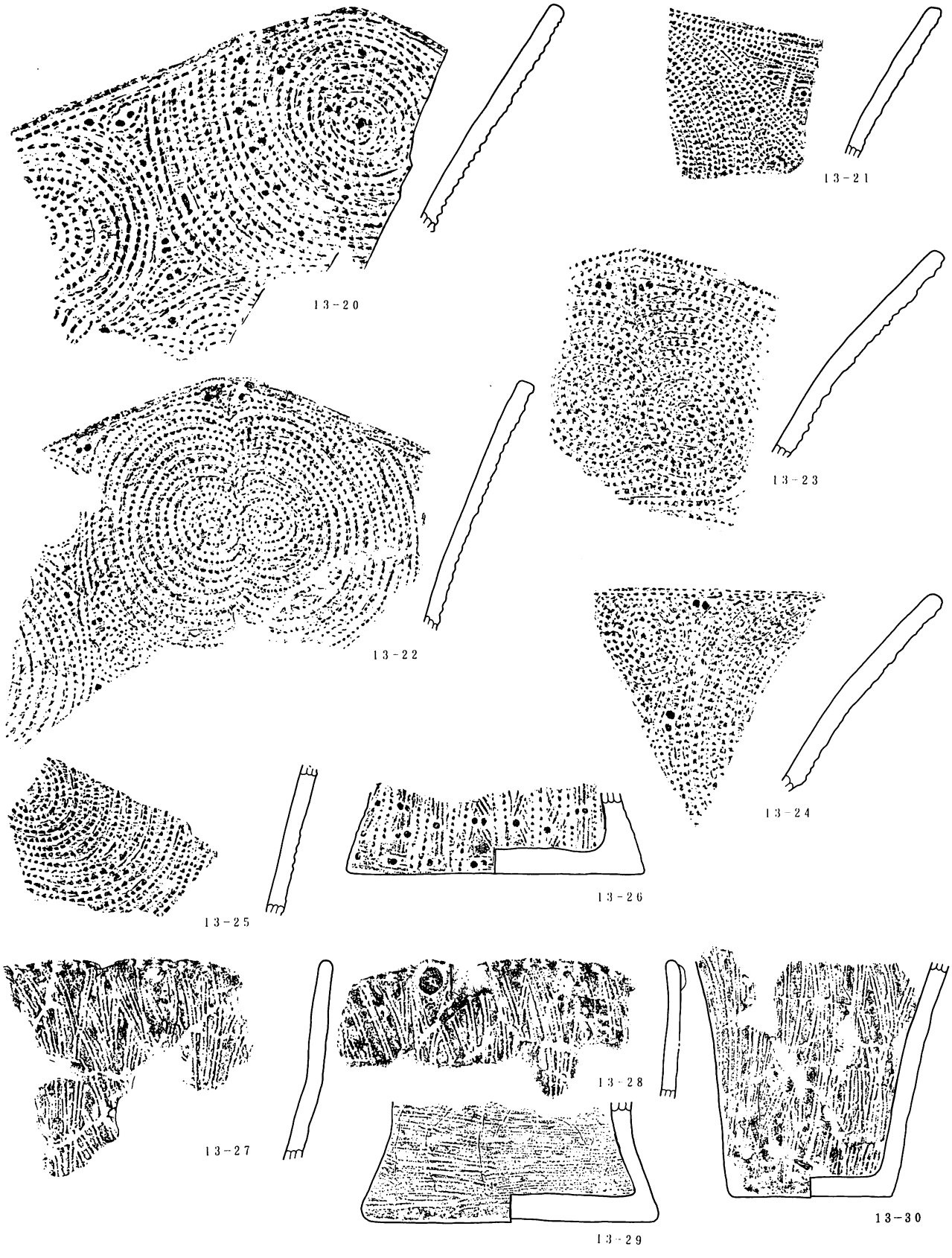
15－８　口唇部直下には、１条の沈線が巡らされ、下部には二重の「コ」で区画され、区画内には涙状の「八」の字文で充塡される。曽利Ｖ式期

15－９　口縁部の破片で、棒状工具による楕円状と「コ」の字状の沈線文が施される。

15－10　胴下半部に縄文が施され、沈線によって区画される。



第62図　住居出土遺物(５)(1/3)



第63図　住居出土遺物（６）（1/3）

0　10cm

15－11　沈線によって区画され、区画内には、蛇行沈線文が施される。曽利Ⅴ式期

15－12　胴部には縄文が施され、胴部中位には渦巻文と縦位の平行沈線文が施される。曽利Ⅴ式期

15－13　胴上半部から下半部にかけての破片で、上端には横位への緩く延びる半弧状の沈線が施されれ、その下には蕨手状と楕円状の沈線を組み合わせて１単位とし、両脇には６本１単位の櫛歯状工具によって数段に施される。胴部は、緩い曲線を描き外反する。曽利Ⅴ式期

16号住居（第64・65図）

16－１　平行沈線文が横位に施された後、棒状の貼付とボタン状貼付が施される。口唇部には、棒状工具による刻みが施文される。（pit1出土）諸磯ｃ式期

16－２　口唇部には、半截竹管による押し引き文が施され、以下平行沈線文が「く」の字状に施文され、半截竹管による押し引きが施される。諸磯ｃ式期

16－３　器面には、平行沈線文で充塡される。諸磯ｃ式期

16－４　底部の破片で、平行沈線文とボタン状の貼付が施される。諸磯ｃ式期

16－５　口縁部の破片で、口縁部には第１文様帯に区画がなされ、区画内には縄文と横位に半円状の沈線が施される。五領ケ台式期

16－６　口縁部は肥厚し、内面は「く」の字状に外反する。口唇部直下には瘤状の貼り付けがなされる。中期初頭に属するものと思われる。

16－７　口縁部の破片で、円形状に貼り付けがなされる。（pit13出土）五領ケ台式期

16－８　口縁部は緩やかに外反し、口唇部には１条の沈線文が施される。内面は「く」の字状に外反する。器面には、縄文が施され、指による横撫でが２条になされる。五領ケ台式期

16－９　５条の連続する押し引き文は波状を呈し、波頂部直下には縦位に押し引き文が施される。狢沢式期に属するものと思われる。

16－10　口縁部は波状を呈し、やや内傾する。角押文は、口縁部の形状に沿って施される。内面はやや窪み、口縁部は肥厚する。（溝からの出土）狢沢式期に属するものと思われる。

16－11　楕円形状の貼り付けがなされ、その脇にはキャタピラ文が長方形に区画される。区画内にはペン先状工具による刺突が施される。（pit3出土）新道式期に属するものと思われる。

16－12　横位に爪形文が施され、その下はパネル状に区画され、区画内には半截竹管状工具による刺突がなされる。中期中葉と思われる。

16－13　幅広の爪形文の脇には、ペン先状工具によるジグザグの刺突が施される。新道式期に属するものと思われる。

16－14　口唇部は大きく外反し、内面は「コ」の字状に折れ曲がる。口唇部直下には１条の沈線文が施され、鋸歯状に刻みがつけられる。その下には半円形状に沈線が横走し、下部には円形の刺突が施される。(pit15出土)藤内式期に属するものと思われる。

16－15　口縁部は緩やかに外反し、口唇部には１条の沈線が施され、直行するように短い沈線文が施文される。頚部には縄文が施され、横位に沈線文が巡らされる。中期前半のものと思われる。

16－16　口縁部には突起が付され、三叉文が施される。内面には、円形状に窪みが施され貫通されない。(pit5出土)井戸尻式期と思われる。

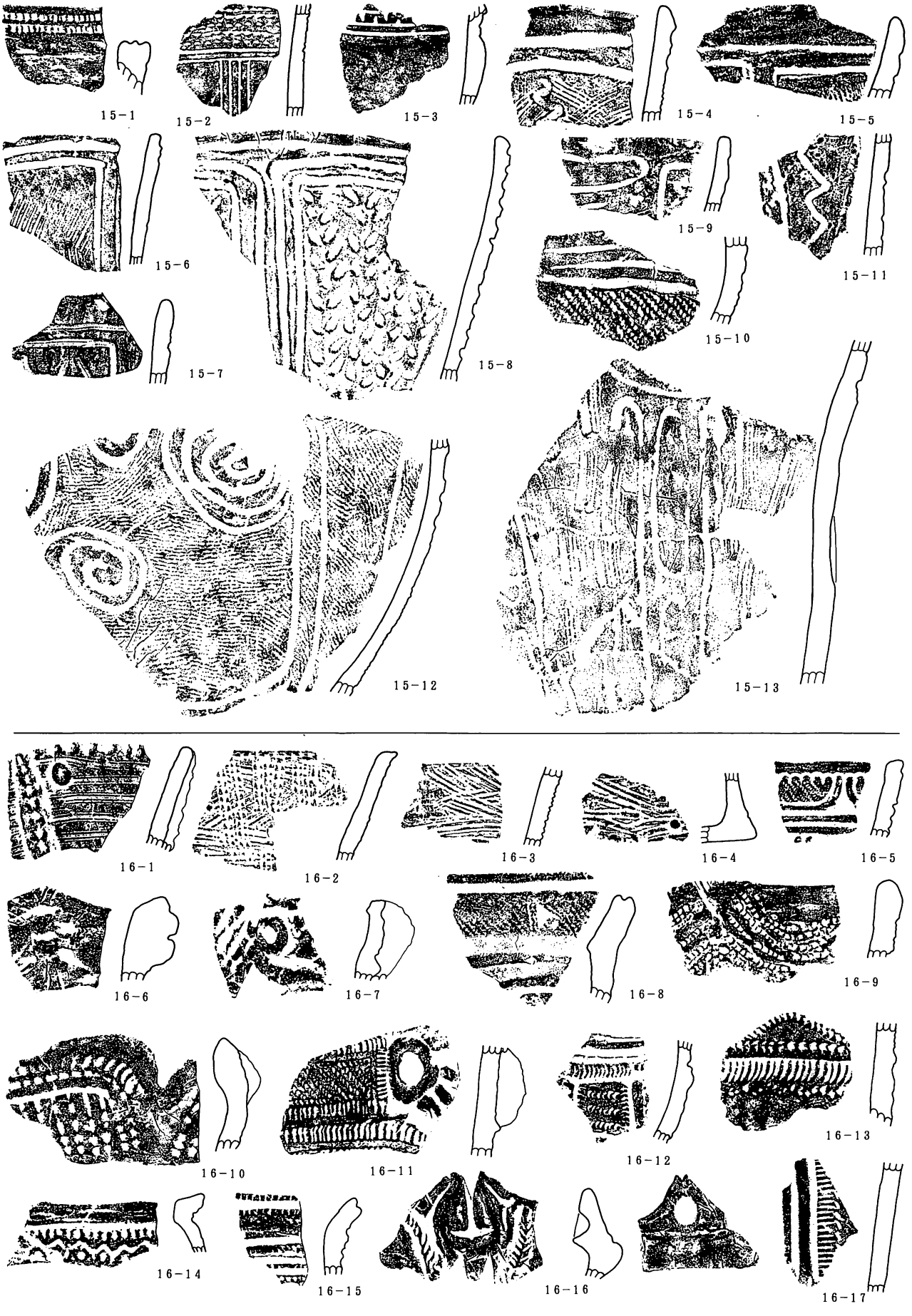
16－17　半截竹管状工具によって区画され、区画内には横位に短い沈線文が施される。藤内式期

16－18　横位に貼り付けされた隆帯の脇には、ペン先状工具による刺突が施される。（pit1出土）新道式期に属するものと思われる。

16－19　幅広のキャタピラ文と、棒状工具によるジグザグ文が施される。藤内式期

16－20　縦位に沈線文が施される。

16－21　平行沈線文が、縦位に施される。（pit7出土）曽利Ⅰ式期と思われる。



第64図　住居出土遺物（７）（1/3）

0　10cm

17号住居（第65図）

17－1　口唇部には「コ」の字状の刺突が施され、以下平行沈線文によって施文される。（pit2）諸磯ｃ式期

17－2　波状口縁を呈し、口縁部に沿って押し引き文が施される。諸磯ｃ式期

17－3　ボタン状の貼付と、棒状の貼り付けがなされる。（pit8出土）諸磯ｃ式期

17－4　半截竹管状工具による平行沈線文が施された後、ボタン状貼付と棒状の貼り付けが施される。（pit8出土）諸磯ｃ式期

17－5　器面全体に平行沈線文で充塡され、ボタン状貼付がなされる。（pit3出土)諸磯ｃ式期

17－6　器面全体に細い粘土紐を貼り付け、半截竹管状工具による押し引き文が施され、ボタン状貼付がなされる。諸磯ｃ式期

17－7　口縁部は厚く、波状を呈する。波頂部から縦位に刻みが施され、脇には交互刺突が施文される。(pit11出土)五領ケ台式期

17－8　波状口縁を呈するものと思われ、波頂部から刻みが施される。（pit13出土）井戸尻式期

18号住居（第65図）

18－1　器面には、ソーメン状の貼り付けがなされ、縄文が施される。諸磯ｂ式期

18－2　口縁部は、ややキャリパー状に丸みを帯び内傾する。器面には縄文が施され、口唇部直下には交互刺突によって波状を呈する。またその直下には三角印刻文が横位に展開され、細沈線文が施される。以上が第１文様帯で、第２文様帯は、頚部に施された横位の沈線以下と思われる。五領ケ台式期

18－3　胴部には、横走する沈線文が２条巡らされ、直下には半円状に沈線文が展開し、弧状の谷部から沈線文が垂下させられる。五領ケ台式期

18－4　胴部には１条の沈線文が施され、その上下に半円形状の沈線文が横位に展開される。五領ケ台式期

18－5　器面にはわずかに縄文が施された痕跡が認められ、沈線は弧状と三角形を形成する。五領ケ台式期

18－6　口唇部には１条の沈線が巡らされ、その脇には刻みが施される。中期初頭のものと思われる。

18－7　口縁部には粘土紐が渦巻状に貼り付けられ、爪形文が施される。中期中葉のものと思われる。

18－8　口縁部は肥厚し、直下には粘土紐によって貼り付けられ、刻みが施される。藤内式期

18－9　胴部中位には、楕円区画文が施され、区画内には縦位による沈線文で充塡される。井戸尻式期

18－10　半截竹管によって半隆起させられた面には、爪形文が施され、棒状工具による沈線文が施文される。藤内式期に属するものと思われる。

18－11　平行沈線文によって半隆起させられた面には、爪形文が施され、以下は縦位の沈線文によって充塡される。藤内式期

18－12　口縁部は大きく波状を呈し、縦位に施された沈線文は半円状の沈線文で区画される。口縁部の内面は「く」の字状に外反する。井戸尻式期と思われる。

18－13　器面は、棒状工具によって細く半隆起させられる。中期中葉

18－14　交互刺突によって波状が形成され、脇には爪形文が施される。中期中葉

18－15　平行沈線文によって半隆起させられ、爪形文が施される。（pit14出土）中期中葉

18－16　器面には、縦位に沈線文と粘土紐による貼り付けがなされ、刻みが施される。井戸尻式期

18－17　器面にはL－Rの縄文で充塡され、その後擦り消しがなされる。井戸尻式期に属すると思われる。

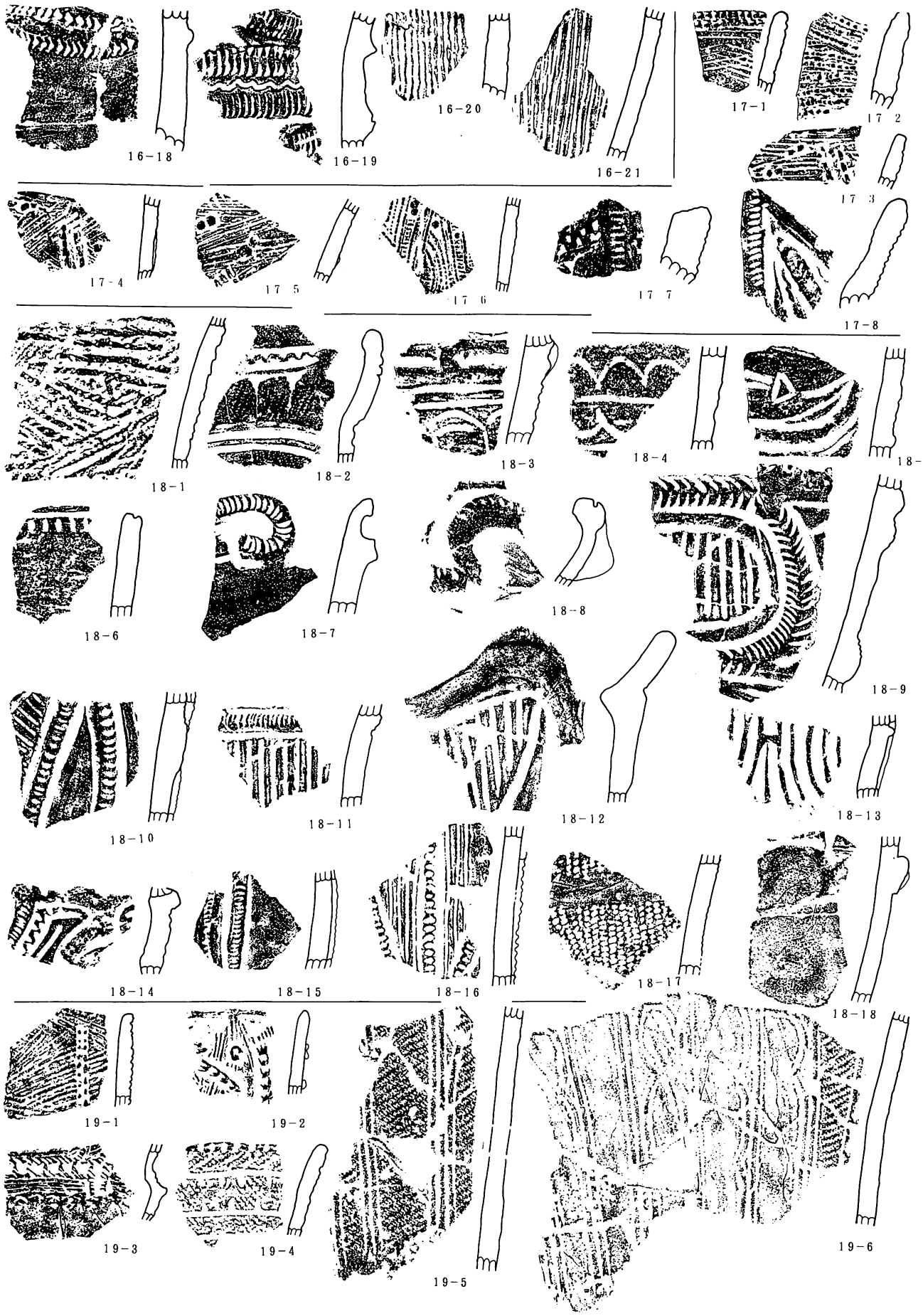
18－18　みみず腫れ状に「Ｙ」字形に貼り付けがさなれる。五領ケ台式期に属するものと思われる。

19号住居（第65・66図）

19－1　器面全体に平行沈線文が施され、半截竹管状工具による押し引き文が縦位に施文される。諸磯ｃ式期

19－2　器面は平行沈線文で充塡され、ボタン状の貼り付けがなされる。棒状の貼り付けの後、半截竹管状工具による刺突がなされる。諸磯ｃ式期

19－3　色調は灰白色を呈し、在地系のものとは明らかに異なり、搬入品である。胴上半部で一度括れ外反する。



第65図　住居出土遺物(８)(1/3)

0　10cm

突帯上には、交互に刻みが施され、突帯と口縁部間には、平行沈線文が横位に施文され、その後ハシゴ状の貼り付けがなされ、刻まれる（本遺物は21号住居出土のものである）。北白川下層II式期

19－4　口縁部の破片で、器面全体に縄文が施され、口唇部には刻みが施される。直下には横位に２本の平行沈線文が施され、交互に刺突が施文される。五領ケ台式期

19－5　器面全体に縄文が施され、縦位に施された沈線文によって区画される。（炉からの出土）五領ケ台式期

19－6　器面には縦位に平行沈線文が施され、区画内には波状の沈線文が縦位に施文される。また区画内の１部には、縄文が施される。（炉からの出土）五領ケ台式期

19－7　器面には縄文が施され、上部には爪形文が施文される。

19－8　口縁部には連続する角押文が楕円形状・「Ｖ」字状に施文される。狢沢式期

19－9　口縁部は連続する角押文で構成され、下部には渦巻状に隆帯が施され、刻みが施文される。狢沢式期

19－10　口唇部には爪形文が施され、直下には角押文とペン先状工具によって区画がなされる。区画内には、円形状にキャタピラ文と角押文が施文される。新道式期

19－11　口縁部文様帯は、隆帯によって区画され、区画内には角押文で充塡される。狢沢式期

19－12　器面には角押文が施され、直下にはジグザグ文が施文される。狢沢式期

19－13　連続する角押文は、「＋」字状に施文され、中央には三叉文が施される。（pit5出土）狢沢式期

19－14　13と同様な手法である。

19－15　渦巻状に粘土紐が貼付され、直下には角押文が施される。五領ケ台式期

19－16　楕円形状に区画されたなかには、角押文で充塡される。狢沢式期

19－17　器面には角押文が施される。狢沢式期

19－18　楕円形状に区画された隆帯の脇には、連続する角押文が施され、区画内中央には、ジグザグ文が施される。狢沢式期

19－19　半隆起線文には爪形が施文され、上部には連続する縦位の角押文で充塡される。狢沢式期

19－20　連続する角押文は、山形を呈する。直下には角押文によるジグザグ文が施される。狢沢式期

19－21　２条１単位の連続する角押文で構成される。狢沢式期

19－22　２条のキャタピラ文の直下には、ペン先状工具による縦位の刺突で充塡される。新道式期

19－23　キャタピラ文が施され、区画するように波状の沈線が施文される。藤内式期

19－24　爪形文の間には、ジグザグ文が施され、隆帯の脇には爪形文が施される。藤内式期

19－25　器面には縄文が施される。爪形文の間には縄文は認められない。藤内式期

19－26　ペン先状工具で施文され、キャタピラ文で区画される。新道式期

19－27　ペン先状工具による刺突が渦巻状に施される。新道式期

19－28　器面全体に縄文が施され、平行沈線文によって縦に区画される。五領ケ台式期

19－29　隆帯には刻みが施される。藤内式期

19－30　横帯する隆帯の直下には渦巻状の隆帯と縦位の沈線文が施される。藤内式期

19－31　沈線文で区画された中には、三叉文が施される。井戸尻式期

19－32　直立した口縁部には、連続する角押文が横位と斜位に施される。狢沢式期

19－33　縦位に引かれた沈線文の脇には縄文が施される。５と同様な手法である。五領ケ台式期

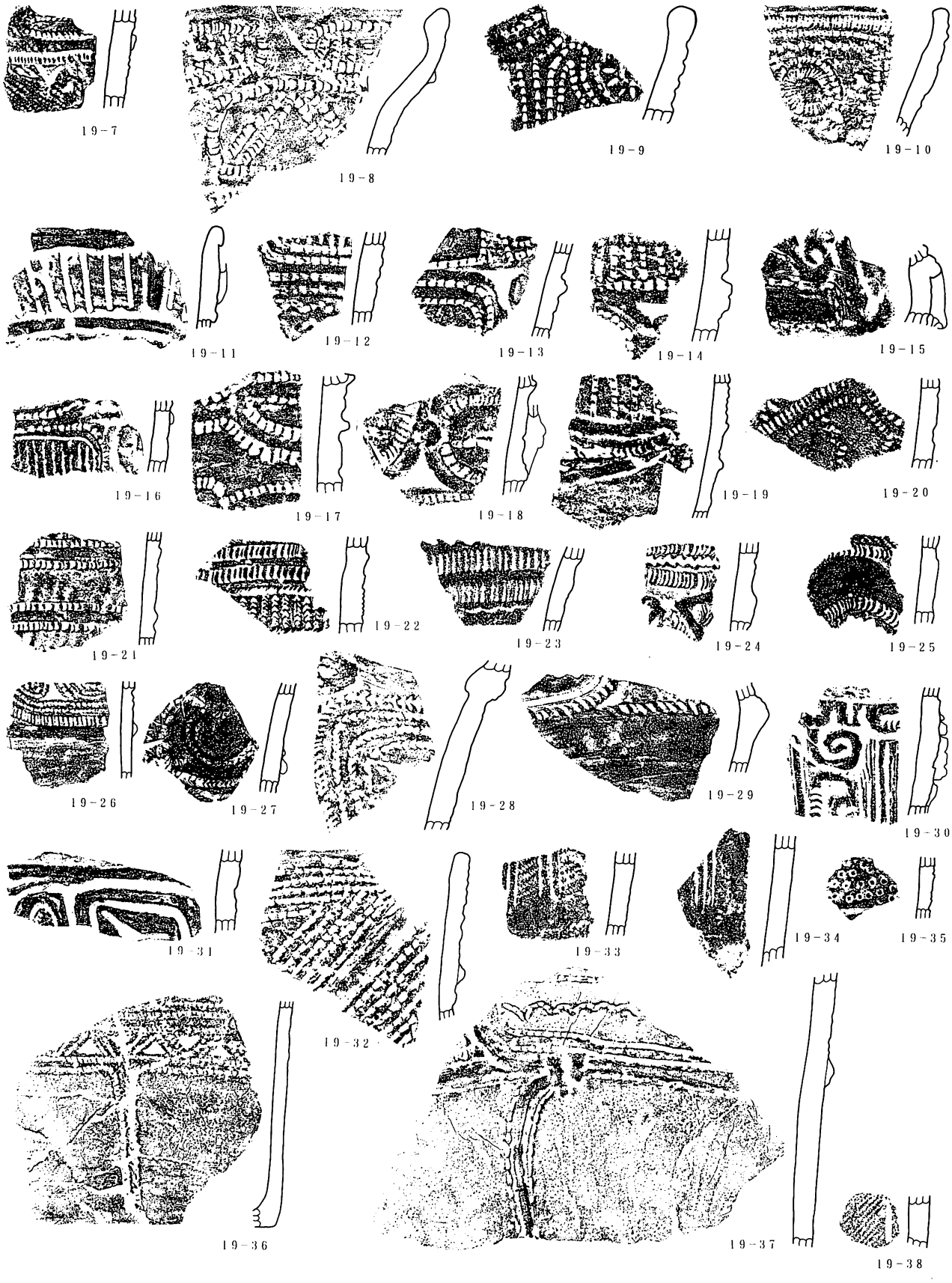
19－34　胴下半部の破片で、３条の沈線文が器面に施される。

19－35　円形竹管状工具による刺突が施される。

19－36　胴下半部のもので、三角印刻文の脇には連続する角押文が施される。狢沢式期

19－37　クランク状の隆帯の脇には、連続する角押文が施され、区画内には、連続する角押文によってジグザグ文が施される。狢沢式期

19－38　土製円盤である。



第66図　住居出土遺物(９)(1/3)

0　10cm

20号住居（第67図）

20－1　口唇部はやや肥厚し、直下には角押文によって連続する三角形が横帯させられる。五領ケ台式期

20－2　パネル状に区画された中には斜行沈線文と縦位のジグザグ文が施される。藤内式期

20－3　隆帯によって区画され、脇には角押文によって刺突が施され、中央の空間には棒状工具によるジグザグが施文される。藤内式期

20－4　貼り付けによって渦巻が構成され、交互の刻みが施される。藤内式期

20－5　口唇部には刻みが施される。浅鉢である。藤内式期

21号住居（第67・68図）

21－1　波状口縁を呈し、波頂部から数状の浮線文が施され、器面は「く」の字状の沈線文で充填される。2ケ1単位のボタン状の貼付が施される。諸磯ｃ式期

21－2　文様構成は、21－175.176と同様である。諸磯ｃ式期

21－3　波状口縁を呈し、半截竹管状工具による押し引きがなされる。諸磯ｃ式期

21－4　器面には平行沈線文で充填され、棒状貼付が施された後、押し引きされる。諸磯ｃ式期

21－5.6　同一個体と思われる。平行沈線文を地文として、2ケ1単位のボタン状の貼り付けがなされる。諸磯ｃ式期

21－7　5.6と同様な手法で文様構成がなされる。諸磯ｃ式期

21－8.9　諸磯ｃ式期

21－10～13　同一手法によって文様が構成される。口縁部は波状を呈し、渦巻状・木の葉状に貼り付けがなされ、その後半截竹管による押し引き文が施される。諸磯ｃ式期

21－14　平行沈線文を地文として、半截竹管状工具による刺突が施される。諸磯ｃ式期

21－15.16　口唇部は緩やかに外反し、ボタン状の貼り付けが施される。諸磯ｃ式期

21－17　口縁部の破片で、縦に長く貼り付けがなされ、その脇にはボタン状の貼付が施される。器面は、平行沈線文で充填される。諸磯ｃ式期

21－18.19　文様構成は、1と同様の手法である。諸磯ｃ式期

21－20.21.22.23　諸磯ｃ式期

21－24.25.26　斜行する平行沈線文が、器面に施され、棒状の貼り付けが施される。その後ボタン状の貼り付けが施され、26はさらに半截竹管状工具により刺突される。諸磯ｃ式期

21－27　斜行する平行沈線文が施されたのち、半截竹管状工具による押し引き文が施される。諸磯ｃ式期

21－28　器面には平行沈線文で充填させられ、その後渦巻状に粘土紐の貼り付けが行われる。諸磯ｃ式期

21－29　平行沈線文を地文とし、その上に浮線文が渦巻状に施文され押し引き文が施される。諸磯ｃ式期

21－30　半截竹管状工具による刺突が施される。諸磯ｃ式期

21－31　斜行する沈線文が施された後、2ケ1単位のボタン状の貼り付けがなされる。諸磯ｃ式期

21－32　沈線文が施された後、2ケ1単位のボタン状の貼り付けがなされる。諸磯ｃ式期

21－33.34　「く」の字状の沈線文を地文として器面に施され、2ケ1単位のボタン状の貼り付けがなされる。35.36　諸磯ｃ式期

21－37　口唇部には棒状工具による刺突が施文され、以下半截竹管状工具による沈線で充填される。内面の口唇部には無節の縄文が施される。船元Ｉ式土器Ａ類

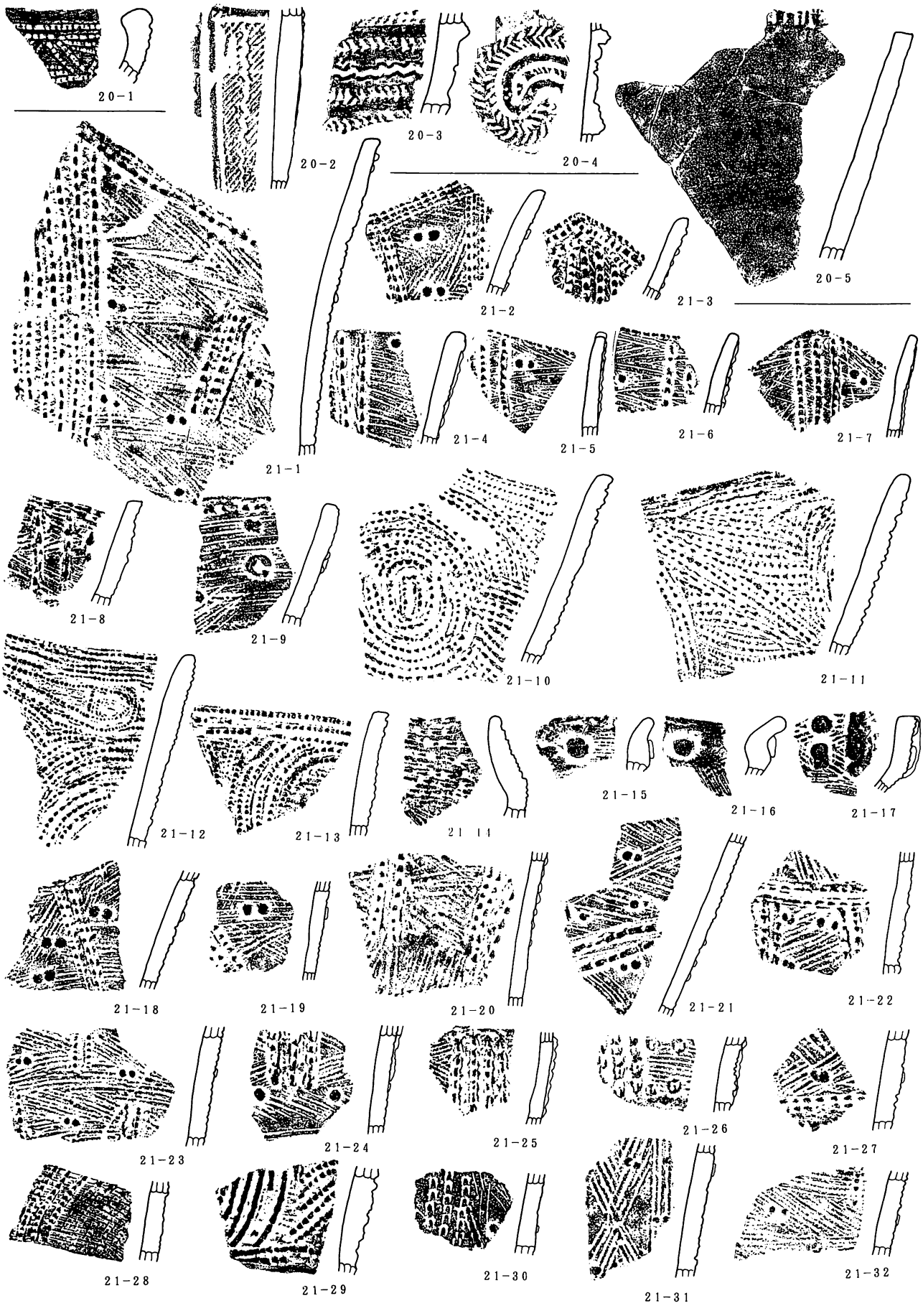
21－38.39.40　細い平行沈線文によって器面に充填される。諸磯ｃ式期

21－41.42.43.44　平行沈線文によって充填される。諸磯ｃ式期

21－45.49　底部の破片で、ボタン状の貼り付けが施される。諸磯ｃ式期

21－47.48　底部の破片で、沈線文とボタン状の貼り付けがなされる。諸磯ｃ式期

21－50　口縁部はカップ状を呈し、内面は「く」の字状に外反する。口縁部文様帯は、口唇部に形成され、縄文



第67図　住居出土遺物(10)（1/3）

0　10cm

が施され沈線によって区画される。以下頚部まで無文となる。頚部から胴部にかけて縄文が施され、頚部には瘤状の貼付がなされ刻みが施される。両脇には縦位による沈線文によって区画される。五領ケ台式期

21－51　円形状に貼付文が施され、その後に縄文が施される。沈線文は円形状の貼付文を囲い、三叉文風に施文される。五領ケ台式期

21－52　沈線文が集合された箇所に円形の貼り付けがなされ、中央は窪む。器面には縄文が施される。五領ケ台式期

21－53　器面には縄文が施され、三角形状の貼り付けがなされる。五領ケ台式期

21－54　胴上半部の破片で、「Y」字状に貼り付けがなされ区画し、区画内には交互刺突によるジグザグ文が横位に施され、沈線文によってさらに区画される。五領ケ台式期

21－55　縄文を地文として湖面に施され、縦位による沈線及び隆帯によって区画される。五領ケ台式期

21－56　縄文を地文として器面に施され、縦位の沈線文と貼り付けによって区画される。五領ケ台式期

21－57　器面には縄文が施され、縦位による沈線文によって区画される。五領ケ台式期

21－58　口唇部には渦巻状に小突起が付され、爪形文が施される。直下には楕円形状に半隆起帯で区画され、区画内には波状文とキャタピラ文で充塡される。以下半隆起帯による渦巻文が２対施され、中央には交互刺突によるジグザグ文で構成される。藤内式期

21－59　胴部を区画するように大きく外面に隆帯が張り出し、その上部には沈線文が巡らされる。また隆帯の脇には爪形文が長方形に区画され、区画内には縦位にジグザグ文が施される。藤内式期

21－60　波状口縁を呈し、波頂部直下から垂下する隆帯には、刻みが施される。また隆帯によって区画されたなかには、三叉文が施される。井戸尻式期

22号住居（第69図）

22－1.2　諸磯ｃ式期

22－３　口縁部は緩やかに外反し、縦位に貼り付けがなされ、刻みが施される。両脇には連続する角押文が施される。五領ケ台式期～狢沢式期

22－４　器面には縄文が施され、その後半円状に沈線文が横帯する。五領ケ台式期

22－５　口縁部はややキャリパー状を呈し、キャタピラ文が２条に施され、下段のものは半隆起帯に沿って半円状に施文される。藤内式期

22－６　口唇部は大きく外反し、「く」の字状を呈する。直下には平行沈線文による区画がなされ、区画内には平行沈線文で充塡される。藤内式期

22－７　波状に施された隆帯には、爪形文が施され、その上下には三角形に区画が施される。区画内には爪形文と三叉文が施される。（21住と接合）藤内式期

22－８　半截竹管による区画が施され、区画内には沈線文で充塡される。

22－９　縦位に並行沈線文が施されたのち、粘土紐による貼り付けが施される。曽利II式期

23号住居（第69図）

23－１　器面は沈線文で充塡され、口唇部には大きな耳状の貼り付けとボタン状貼付が施文される。諸磯ｃ式期

23－２　口縁部は半円状に波形を呈し、刻みが施される。縄文を地文とし、器面には円形状の貼り付けがなされ、施文される。また沈線は円形状の貼り付け文を囲うように施文される。（炉出土）五領ケ台式期

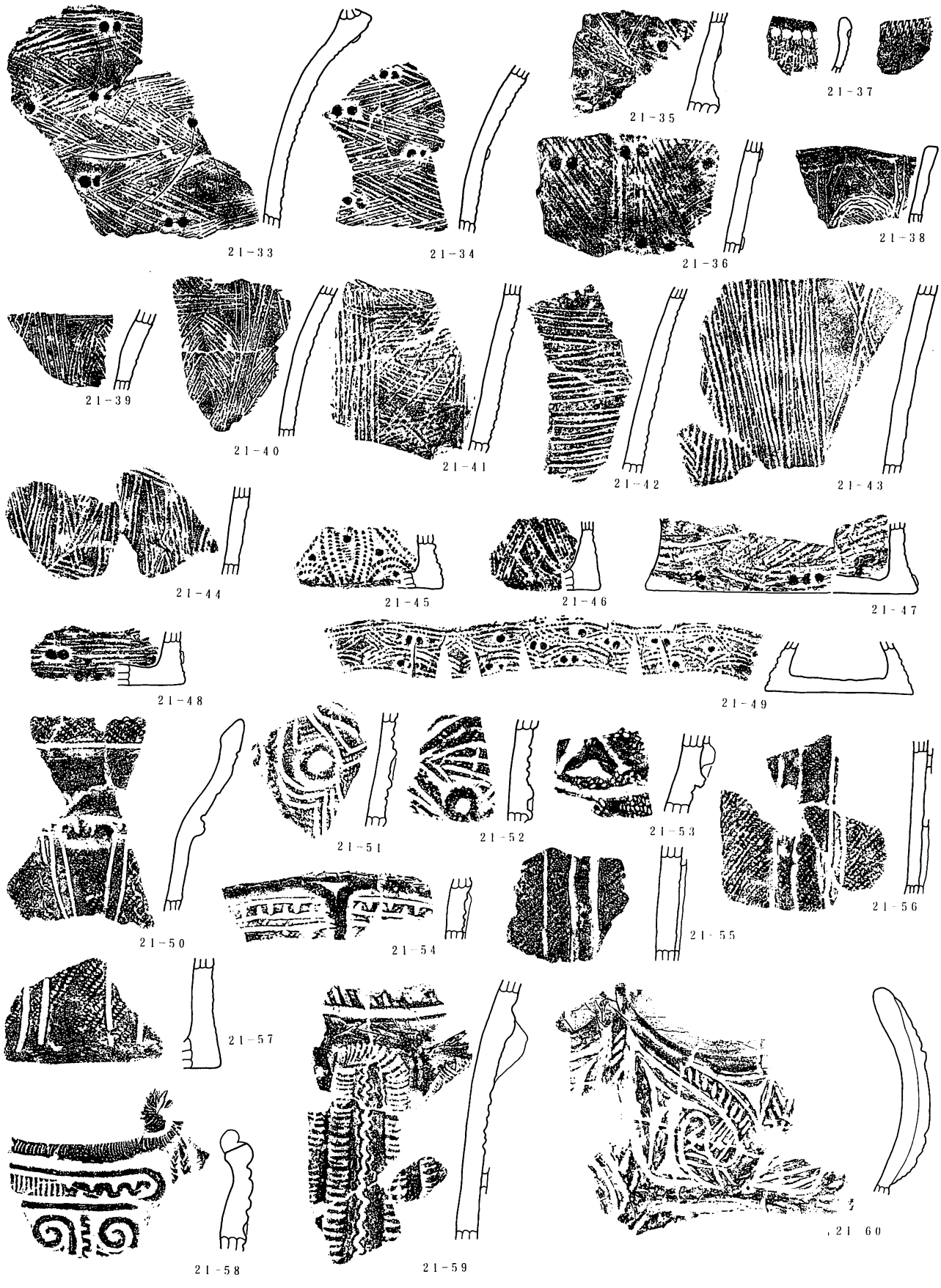
23－３　口唇部は肥厚し、「く」の字状に外反する。内面には、楕円形の窪みが施される。五領ケ台式期

23－４　口唇部の平坦面には「く」の字状に刺突文が２条に施文され、肥厚する。以下無文帯となる。

23－５　器面には縄文が施され、沈線文で区画される。また指頭によって横なでされた器面には、盛り上がりが一部で認められる。（pit3出土）五領ケ台式期

23－５　棒状工具による沈線文が施され、器面には縄文が施される。五領ケ台式期

23－７　隆帯は楕円状に区画がなされ、区画内にはキャタピラ文が施される。藤内式期



第68図　住居出土遺物(11)（1/3）

0　10cm

23－8　爪形が施文され、その脇にはジグザグ文が施される。藤内式期

23－8　隆帯には刻みが施される。（炉出土）中期中葉

23－10　縦位による平行沈線によって区画がなされ、区画内には交互刺突によって波状を呈する。藤内式～井戸尻式期

23－11　幅広の隆帯は三角形状に区画され、区画内には三叉文が施される。井戸尻式期

23－12　半隆起させられた面には、交互の刻みによって蛇行させられる。内面には三叉文状に沈線が施文される。井戸尻式期

24号住居（第69・70図）

24－1　口縁部はキャリパー状を呈し、口唇部直下には、交互刺突によってジグザグ文が形成される。以下平行沈線文によって区画される。区画内には爪形文が施され、三叉文が施文される。藤内式期

24－2　口唇部は波状を呈し、口縁部には縦位に平行沈線文が施される。また区画内には三叉文が施され、円形竹管の刺突がなされ、爪形文で囲まれる。藤内式期

24－3　口縁部文様帯には、平行する隆帯と蛇行する隆帯に、爪形文が施される。藤内式期

24－4　口唇部は平坦面をもち、外面に張り出す。口縁部文様帯は、大きく波状に隆帯が施され、爪形文が施文される。隆帯によって区画された中には、半截竹管状工具によって縦位に施される。藤内式期

24－5　口縁部はほぼ直立し、口縁部文様帯は蛇行する隆帯と、口縁部に平行する隆帯によって構成される。胴部には、縄文が施される。藤内式期

24－6　口唇部は大きく外反し、直下には三角形の区画が施され、区画内には三叉文と爪形文が施文される。藤内式期

24－7　口縁部は緩やかに外反し、直下にはパネル状に区画が施され、区画内には爪形文と半截竹管状工具による刺突が施文される。藤内式期

24－8　口唇部には爪形文が施され、胴部には指頭圧痕が認められる。（36住と接合）藤内式期

24－9　口縁部には鋸歯状文が横帯し、胴上半部には縄文が施される。中期前半のものと思われる。

24－10　胴部の破片で、三角形状に区画がなされ、区画内は沈線文で充塡される。藤内式期

24－11　キャタピラ文とジクザグ文の組み合わせで、区画内には半截竹管状工具による刺突が施される。藤内式期

24－12　隆帯には刻みと爪形文が施される。藤内式期

24－13　爪形文とジグザグ文の組み合わせである。藤内式期

24－14　半円状の刺突がなされ、キャタピラ文とジグザグ文によって構成される。藤内式期

24－15　パネル状に区画された中には、爪形文で充塡され、平行沈線による蛇行懸垂文が施文される。

24－16　「S」字状に半隆起させられた隆帯は、キャタピラ文とジグザグ文を区画する。藤内式期

24－17　胴上半部には楕円区画がなされ、区画内にはキャタピラ文とジグザグ文が施される。下部には爪形文が施され沈線で区画される。藤内式期

24－18　「X」字状の隆帯には、爪形文が施される。藤内式期

24－19　文様は15と同様な手法で施文される。藤内式期

24－20　半円形状に爪形文が施され、半截竹管状工具による刺突によって区画される。藤内式期

24－21　底部が欠損し、器面にはほぼ全体に縄文が施される。藤内式期

24－22　区画されたなかには、爪形文と蛇行懸垂文が底部付近まで施される。藤内式期

24－23　胴下半部には、隆帯によって区画され、区画内には縄文が施される。藤内式期

24－24　斜行する沈線文は、縦位の平行沈線文によって区画される。藤内式期

25号住居（第71図）

25－1　口縁部は波状を呈し、直下には縦位に貼り付けがなされ、刻まれる。隆帯の左右には角押文が横位に施

第69図　住居出土遺物(12)（1/3）

第70図　住居出土遺物(13)（1/3）

0　10cm

される。その下には交互刺突が施文される。五領ケ台式期に属するものと思われる。

25－2　口縁部には「ノ」の字状の貼り付けがなされ、直下には三角印刻文が交互に施される。区画された波形の面には、縄文が施される。五領ケ台式期

25－3　器面には縄文が施され、横帯する半円状の沈線は2段に施文され、並行する沈線によって区画される。五領ケ台式期

25－4　口縁部は緩いキャリパー状を呈し、口唇部は外反する。直下には、爪形文が施される。藤内式期

25－5　器面全体に縄文が施される。中期中葉と思われる。

25－6　器面全体に縄文が施される。中期中葉と思われる。

25－7　半円状に隆帯が巡り、刻みが施され、中央に貼り付けがなされ刻まれる。藤内式期

26号住居（第71・72図）

26－1　口縁部には小突起が付され、直下から角押文が横位に施される。胴部には、2条の平行沈線文が巡らされ、下端には、3本の縦位への沈線によって左右に区画される。五領ケ台式期

26－2　口唇部には、左上がりに2条の押引文が施され、波状口縁を呈するものと思われる。その直下には、三角印刻文と細線文の組み合わせが連続する。また口唇部は、緩く内傾する。五領ケ台式期

26－3　口縁部には、沈線が巡らされ、直下には三角印刻文が施され、細線文が垂下する。五領ケ台式期

26－4　口唇部には、縄文が施され、直下には竹管状工具による刺突が鋸歯状に施される。内面は、「く」の字状に外反する。五領ケ台式期

26－5　口唇部には縄文が施され、2本に引かれた沈線の間には、三角形状の刺突が交互に施される。五領ケ台式期

26－6　口縁部の破片で、口唇部にはキャタピラ文が施され、直下には交互刺突による波状文が施される。口唇部内面は、緩い「く」の字状を呈する。五領ケ台式期

26－7　口縁部は、波状を呈する。口唇部の内面は、「く」の字状に緩く外反する。また口唇部には、三角形の交互刺突により、鋸歯状を呈する。五領ケ台式期

26－8　口唇部に刻みが施され、口縁部には横位の沈線文が施され、鋸歯状文が施文される。五領ケ台式期

26－9　口唇部には、交互に刻みが施され、以下は無文帯となる。また口唇部内面は、「く」の字状に外反する。浅鉢と思われる。五領ケ台式期

26－10　口唇部には刻みが施され、直下には2条の沈線が巡らされる。口唇部の内面は、「く」の字状に外反する。五領ケ台式期

26－11　縄文を地文とし、沈線によって区画されたなかに、渦巻状文が施される。口縁部の内面は、「く」の字状に外反し、やや肥厚する。

26－12　口縁部に付けられた小突起には、棒状工具による刻みが2本施文され、下部には平行沈線文による半円が認められる。口縁部内面は、やや肥厚し「く」の字状を呈する。

26－13　縄文を地文として、口唇部には刻みが施される。口縁部内面は、「く」の字状に外反する。五領ケ台式期と思われる。

26－14　口唇部は、波状を呈する。五領ケ台式期

26－15　口縁部はやや内傾し、内面は「く」の字状にやや外反する。口唇部直下には、2条の角押文が施される。五領ケ台式期

26－16　口唇部には、角押文が施される。浅鉢と思われる。五領ケ台式期

26－17　縄文を地文とし、山形の沈線及び縦位への沈線が施される。五領ケ台式期

26－18　三角印刻文は沈線によって区画され、縄文を地文とした器面は、沈線によって区画される。五領ケ台式期

26－19　角押文が波状に施され、区画内に三叉文が施文される。五領ケ台式期

26－20　三角形の印刻状に施された上端には、角押文が施され、下端にはコブ状の貼り付けがなされ刻みが施される。またコブの両脇には、棒状工具による角押文が、円形状に施文される。五領ケ台式期

26－21　角押文による楕円状文と直線文が施される。（pit4出土）狢沢式期

26－22　隆帯に沿って角押文が、施される。狢沢式期

26－23　角押文が、施される。（pit1出土）中期前半のものと思われる。

26－24　口縁部は直立し、平行沈線文が横位に施される。中期前半のものと思われる。

26－25　横走する５本の沈線によって、口縁部と胴部は区画される。胴部には、細い沈線が縦位に施される。五領ケ台式期

26－26　口縁部は緩やかに内傾し、小突起が付せられるものと思われる。楕円状に爪形文が施され、直下には、粘土紐によって隆起させられる。新道式期

26－27　口唇部は、丸みをもってやや肥厚する。また沈線によって半円状あるいは三角状に半隆起させた後、ヘラ状工具によるキャタピラ文が両脇に施される。藤内式期

26－28　口唇部には沈線文が巡らされ、直下には粘土紐によって「Ｙ」字状に隆起させられる。隆起帯には、縄文が施され、以下太い沈線によって区画され、区画内には斜行沈線文で充塡される。藤内式期

26－29　口縁部は波状を呈し、口唇部は、無文帯を形成する。胴上半部は、粘土紐により横位と縦位に隆起させられ、刻みが施される。隆帯によって区画された中には、楕円状文が施文され、楕円区画内には綾杉状文が施される。藤内式期

26－30　口唇部は丸みを帯び肥厚し、蛇行する隆帯及び横走する隆帯には、爪形文が施文される。藤内式期

26－31　口唇部は丸く肥厚し、直下には横走する３本の沈線が巡らされる。胴部には、太い撚りと細い撚りを合わせた縄文が施文される。藤内式期

26－32　口縁部はキャリパー状を呈し、縄文を地文とする。口唇部には１条の沈線が巡らされる。藤内式期

26－33.34　口縁部は丸みを帯び、内傾する。口唇部は無文帯を形成し、直下から縄文が施される。藤内式期

26－35　口唇部は無文帯を形成し、直下から縄文が施文される。また胴部には、ジグザグ文が楕円形状に施される。藤内式期

26－36　口唇部はやや肥厚し、内面は外反する。口唇部以下は、縄文を地文とする。中期中葉

26－37　縄文を地文として、山形の沈線文が２段に施される。藤内式期

26－38　口縁部はキャリパー状を呈し、口唇部はやや肥厚し、縄文を地文とする。藤内式期

26－39　口唇部はキャリパー状を呈し、口唇部には刻みが施される。また沈線によって区画された帯状には、縄文が施される。藤内式期

26－40　半隆起させられた面には、縄文が施される。直上には爪形文が横位に施文され、上部にはジグザグ文が横走する。藤内式期

26－41　口唇部はやや肥厚し、その直下には、指頭圧痕が認められる。藤内式期

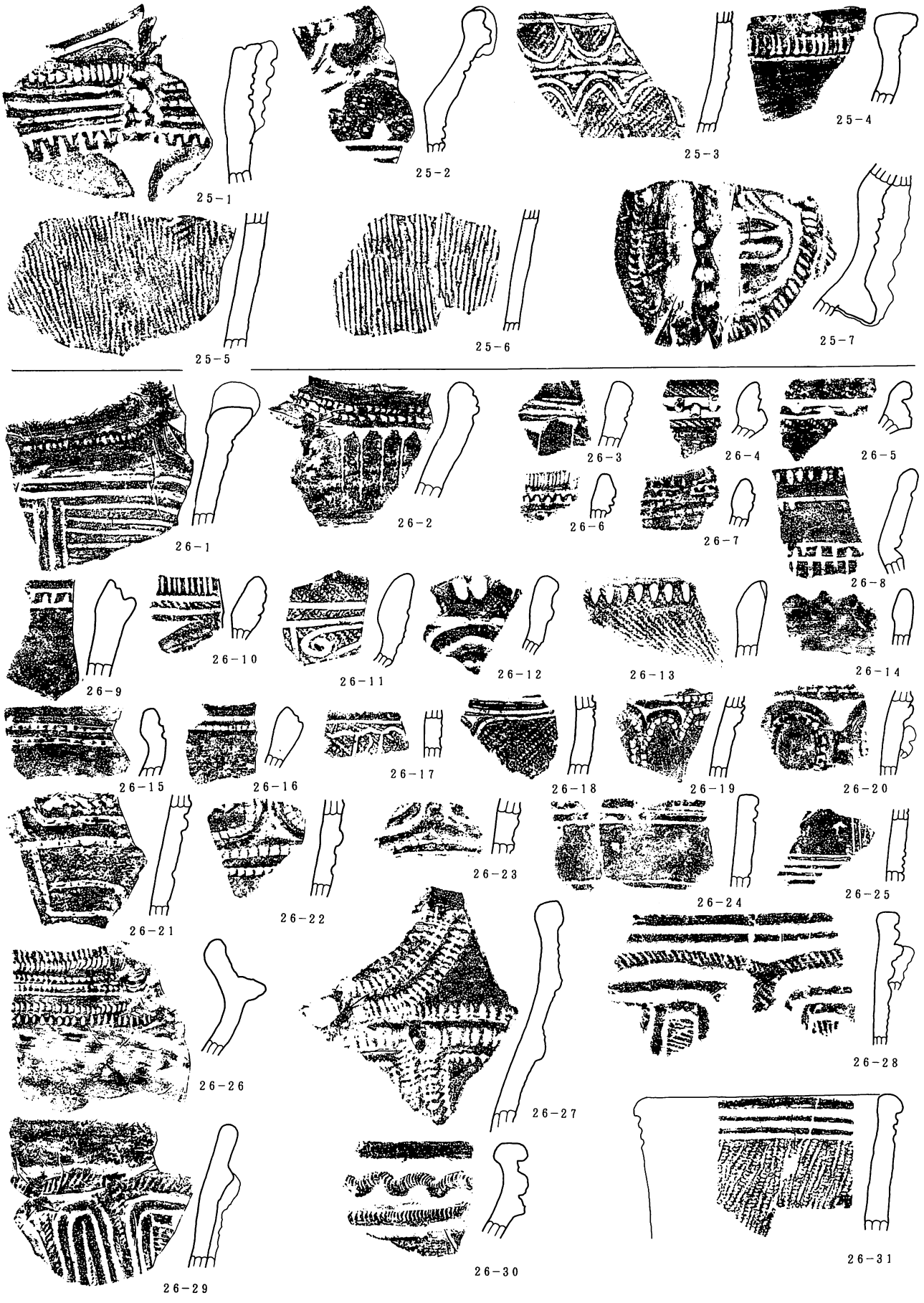
26－42　口唇部は丸みをもち肥厚し、キャリパー状を呈する。半截竹管状工具による平行沈線文が、縦位に施文される。藤内式期

26－43　口唇部はやや肥厚し、ほかは比較的薄手である。平行沈線文が縦位に施され、沈線によって半円形状に区画される。また区画内には、三日月状の沈線が１本施される。中期中葉

26－44　口唇部は外面に張り出し、横走する沈線によって胴部とを区画する。胴部には、パネル状の区画が施され、区画内には平行沈線文で充塡される。藤内式期

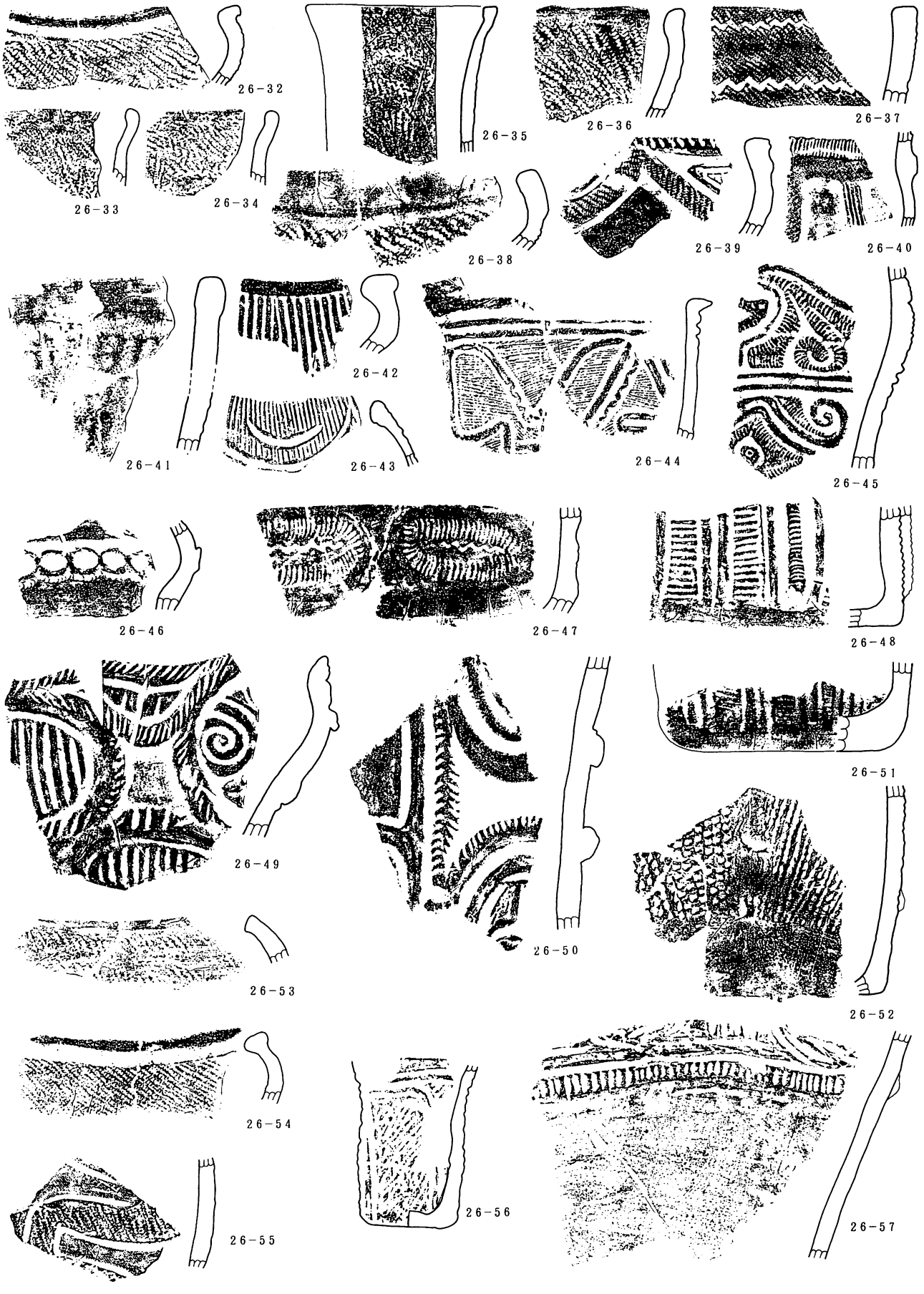
26－45　胴上半部には、三叉文を真似た沈線によって半隆起させ、爪形文が施される。直下には半截竹管による平行沈線文を横位に施し、上部文様帯と下部文様帯が区画される。下部文様帯も同様な手法と、渦巻文及び玉抱三叉文風に施文される。藤内式期

26－46　口縁部直下の破片で、貼り付けされた粘土紐を指頭によって楕円状に押しつぶし、直下にペン先状工具



第71図　住居出土遺物(14)（1/3）

0　10cm



第72図　住居出土遺物(15)（1/3）

0　10cm

による刺突が施される。新道式期～藤内式期

26－47　胴下半部には、楕円状に幅広のキャタピラ文が施され、半隆起した楕円区画内には山形の沈線文が施文される。藤内式期

26－48　胴下半部から底部までの破片である。半截竹管文によって半隆起させられた区画内には、平行沈線文で充塡させられ、縦位への粘土紐による隆帯には、爪形文が施される。藤内式期

26－49　口縁部は、キャリパー状を呈する。先細りした口唇部には、ヘラ状工具による刻みが施され、直下に沈線によって半円状に区画される。区画内には、ヘラ状工具で交互による刻みが施される。また隆帯によって楕円状に区画された中には、縦位による沈線文及び渦巻文が施され、隆帯には刻みが施文される。藤内式期

26－50　胴部の破片で、隆起帯には、刻みが施される。藤内式期

26－51　胴下半部から底部までの破片で、沈線は、３本１単位として底部付近まで施され区画される。区画内には、平行沈線文で充塡される。藤内式期

26－52　胴下半部から底部にかけての破片で、無文帯を挟んで左右に棒状工具とペン先状工具による刺突文が施される。中期中葉

26－53　口唇部は、無文帯が形成され、直下から器面には縄文が施される。

26－54　口唇部には、１条の沈線が施され、以下器面には縄文が施される。

26－55　胴部には縄文が施され、その後磨り消しが行われ、沈線によってクランク状に区画される。

26－56　口縁部を欠損するミニチュア土器で、頚部には横走する沈線が施文される。また胴部は、パネル状に区画され、区画内には斜行する沈線文で充塡される。藤内式期

26－57　浅鉢と思われる。胴上半部には沈線文が施され、直下には横走する隆帯に刻みが施文される。胴下半部は、無文帯が形成される。中期中葉

27号住居（第73図）

27－１　縄文を地文として、交互に刻みが施され、直下には、棒状工具によって半円形状に施文される。五領ケ台式期

27－２　口唇部はやや肥厚し、ペン先状工具による刺突が施される。浅鉢　新道式期と思われる。

27－３　口縁部は、緩やかで朝顔状に開き、縄文を地文とする。藤内式期

27－４　口縁部には、小突起が付けられ、突起部から垂下する粘土紐の貼り付けは、口唇部と胴部を区画するように左右に延ばされ、刻みが施される。胴上半部には、縄文が施される。藤内式期

27－５　口縁部に付けられたラッパ状突起には、刻みが施され、貫通はされていない。藤内式期

27－６　底部付近の破片である。縄文を地文とする。

27－７　胴部の破片で、渦巻状に半隆起させられた脇には、キャタピラ文および棒状工具によるジグザグ文が施される。（炉２出土）藤内式期

27－８　縄文を地文とする。五領ケ台式期と思われる。

28号住居（第73図）

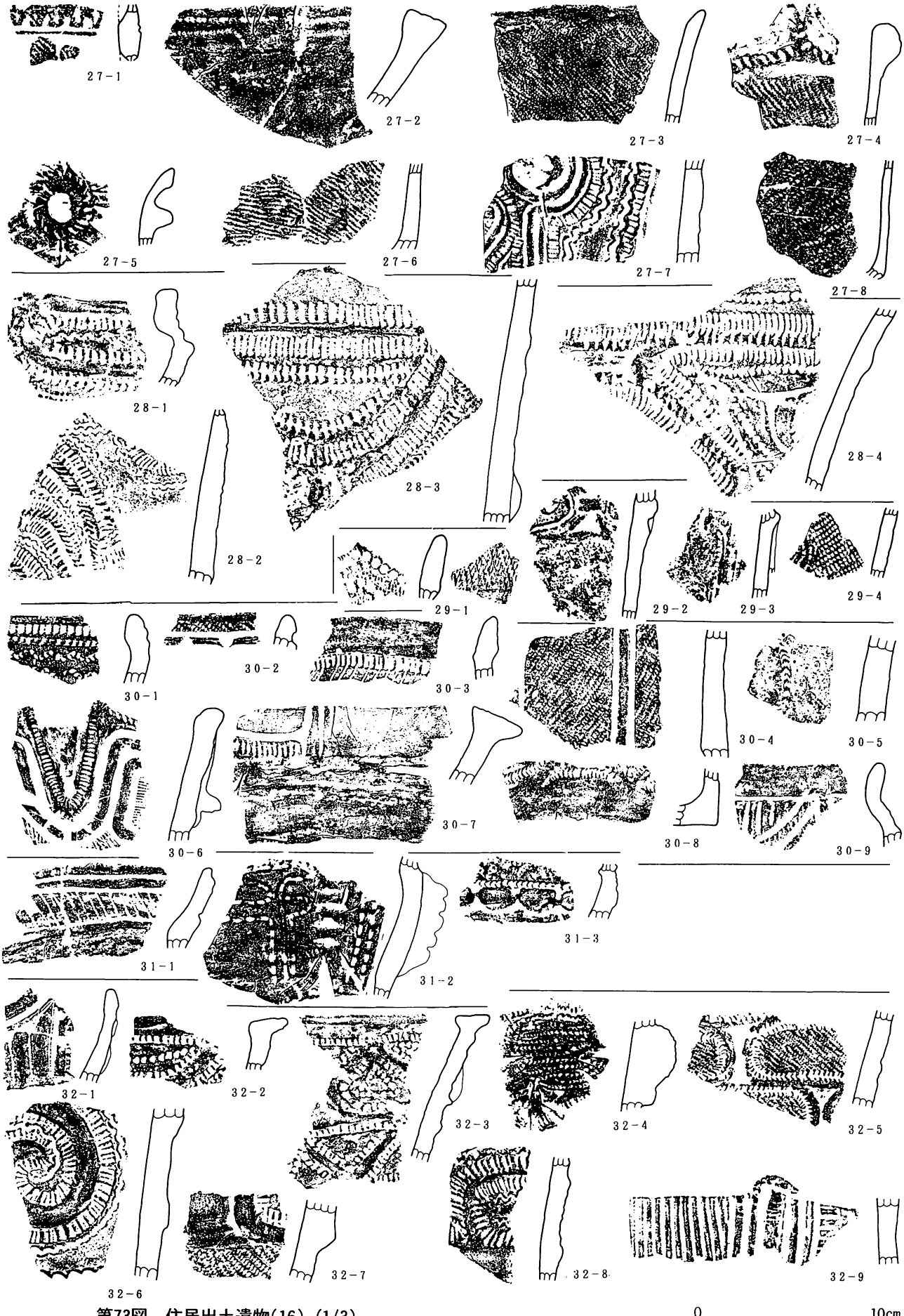
28－１　口縁部には楕円状にキャタピラ文が施され、楕円内にはジグザグ文が施文される。

28－２　胴部には爪形文とジグザグ文が平行させて施される。また１部には爪形文はジクザク文によって区画される。（pit1出土）

28－２　胴部には、半円形状にキャタピラ文が施される。（pit16出土）

28－４　横走するキャタピラ文の直下には、逆三角形状にキャタピラ文が施され、区画内にはペン先状工具による刺突と三叉文が施文される。（pit1出土）

以上中期中葉に属するものと思われる。



第73図　住居出土遺物(16)（1/3）

0　10cm

29－1　口唇部内面には、無節の縄文が施文され、外面は、棒状工具による円形の刺突が口縁部に沿って２条に施される。船元Ⅰ式土器Ａ類

29－2　三角印刻文が施され、両脇には連続する角押文が施文される。五領ケ台式期

29－3　棒状に貼り付けられた両脇には、角押文が連続して施される。五領ケ台式期

29－4　刺突文が器面に施され、連続する角押文が曲線を描き施文される。中期初頭に属するものと思われる。

30号住居（第73図）

30－1　口唇部はやや肥厚し、内面は「く」の字状に外反する。口唇部には、連続する角押文が２条に施され、直下には角押文によるジグザグ文が２条に施文される。五領ケ台式期

30－2　口唇部には、縄文が施され、直下には横走する沈線文が施文され、交互刺突が施される。五領ケ台式期

30－3　口唇部の内面は「く」の字状に外反し、外面は無文帯を形成し、直下には横走する角押文が施され、斜行する細沈線文と交差する。五領ケ台式期

30－4　器面には、地文として縄文が施され、平行沈線によって区画される。五領ケ台式期と思われる。

30－5　円形竹管文による刺突が施され、ペン先状工具による押引文が施される。また器面には、縄文が施される。新道式期に属するものと思われる。

30－6　口縁部には「Ｖ」字状の隆帯が認められ、刻みが施される。また口唇部にも刻みが施文される。隆帯から下は、平行沈線によって「Ｕ」字状に区画され、区画内には、平行沈線文で充填される。藤内式期

30－7　平坦面をもった口唇部には、三叉状に沈線が施され、刻みが施文される。井戸尻式期

30－8　胴下半部から底部の破片で、爪形文が施される。新道式期

30－9　口縁部は緩やかに外反し、無文帯を形成する。直下には、棒状工具による横位の沈線文と半円状の沈線文によって区画される。区画内には、縦位の沈線文が施される。また沈線によって半隆起させられた帯には、刻みが施文される。中期中葉に属するものと思われる。

31号住居（第73図）

31－1　口縁部の破片で、２条の沈線によって区画され、区画内には斜行する細沈線が施される。内面は、緩やかに「く」の字状に外反する。（pit1出土）五領ケ台式期

31－2　口縁部の破片で、棒状の貼り付けが施された後、刻みが施文される。また両脇には、連続する角押文が縦横に施される。（pit1出土）五領ケ台式期

31－3　連続する楕円形状の隆帯の直上には、ペン先状工具による刺突が施される。（pit4出土）新道式期

32号住居（第73図）

32－1　波状口縁を呈し、口唇部に沿って１条の沈線が施され、以下三角印刻文と細沈線文の組み合わせが横位に連続する。（pit1出土）五領ケ台式期

32－2　口唇部には平坦面を有し、直下には連続する角押文が楕円形状に施文される。（pit4出土）新道式期

32－2　口唇部には平坦面を有し、直下の上部文様帯には、丸みを帯びた三角形が角押文によって形成され、下部文様帯には、左右に連続する三角形区画が認められる。（pit4出土）新道式期と思われる。

32－4　瘤状に貼り付けられた上面には、ペン先状工具で施文される。（pit4出土）新道式期

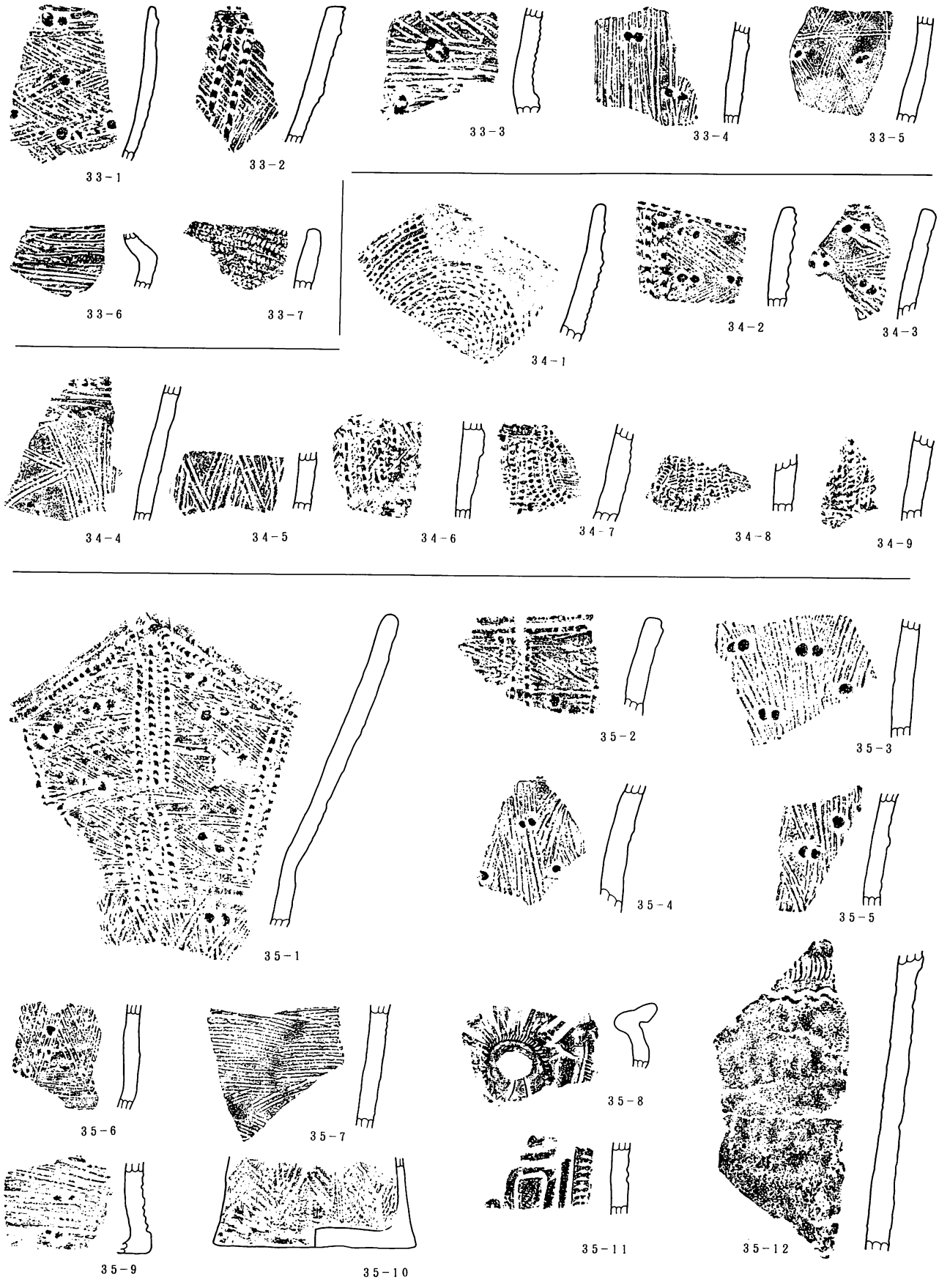
32－5　胴部の破片である。隆帯によって楕円形に区画された脇に、連続する角押文が施され、区画内には縄文が施文される。新道～藤内式期

32－6　胴部には、渦巻状にキャタピラ文が施され、外周には棒状工具によるジグザグ文が施される。（pit1出土）藤内式期

32－7　横位の隆帯によって、上部文様帯と下部文様帯に区分される。上部文様帯には楕円形区画文が施され、下部文様帯には縄文が施文される。（pit7出土）藤内式期

32－8　キャタピラ文が楕円形状に施され、外周にはジグザグ文が施文される。（pit6出土）藤内式期

32－9　平行沈線文によって充填される。（pit2出土）中期中葉



第74図　住居出土遺物(17)（1/3）

0　10cm

33号住居（第74図）

33－1　「く」の字状に沈線が施され、２ケ１単位のボタン状の貼り付けがなされる。

33－2　「く」の字状に沈線文が施され、その後棒状の貼り付けが行われ、半截竹管による押し引きが施文される。

33－3　胴上半部には、斜行する沈線文が施され、２ケ１単位のボタン状の貼り付けがなされ、半截竹管による刺突が行われる。

33－4　器面には、半截竹管による平行沈線文が施され、２ケ１単位のボタン状の貼り付けがなされる。

33－5　「V」字状の平行沈線文が２段に施され、ボタン状の貼付が施される。諸磯ｃ式期

33－6　「く」の字状に折れ曲がった口縁部で、縄文を地文とし、その後平行沈線文で充塡される。諸磯ｂ式期

33－7　口縁部の破片で、器面には縄文が施される。

以上１から５までは、諸磯ｃ式期で、６はｂ式期である。

34号住居（第74図）

34－1　４単位の波状口縁を呈し、結節状浮線文の渦巻文が、波頂部直下に施される。

34－2　４単位の波状口縁を呈し、口唇部に沿って結節状浮線文が施され、２本の棒状の粘土紐が貼り付けられる。また２ケ１単位のボタン状の貼付が施される。

34－3　平行沈線文が施された後、２ケ１単位のボタン状の貼付が施される。

34－4　胴部には平行沈線文が施される。（pit1出土）

34－5　「V」字状に平行沈線文が施される。

34－6　「く」の字状に平行沈線文が施され、その後棒状の貼付が結節状に施される。

34－7　平行沈線文が施された後、結節状爪形文が施される。

34－8　平行沈線文が施された後、結節状爪形文が施される。（pit1出土）

34－9　結節状浮線文が施される。

以上１から９までは、諸磯ｃ式期である。

35号住居（第74図）

35－1　波状口縁を呈し、器面には平行沈線文で充塡され、２ケ１単位のボタン状の貼り付けが施される。

35－2　「く」の字状に平行沈線文が施された後、棒状に貼付された粘土紐は、結節状に施文される。

35－3.4.5　平行沈線文が施された後、２ケ１単位のボタン状の貼付が施される。

35－6　「V」字状に平行沈線文が施される。

35－7　胴上部には、平行沈線文が施され、直下には「く」の字状に平行沈線文が施される。

以上諸磯ｃ式である。

35－8　円形の周囲には、刻みが施される。藤内式期

35－9　胴下半部から底部にかけての破片である。平行沈線文が施され、２ケ１単位のボタン状の貼付が施される。諸磯ｃ式期

35－10　器面には、平行沈線文で充塡される。諸磯ｃ式期

35－11　並行沈線によって半隆起させられた縦位の上面には、爪形文が施文され、その脇には半截竹管による区画がなされ、区画内には、縄文が施される。藤内式期

35－12　胴部にはキャタピラ文が施文され、直下には棒状工具によるジグザグ文が施文される。また胴部には、指頭圧痕が認められる。藤内式期

36号住居（第75・76図）

36－1　器面には、平行沈線文が施され、口唇部には、瘤状の貼付がなされる。（pit1出土）諸磯ｃ式期

36－2　口唇部は外反し、刻みが施される。胴上半部は、「く」の字状の平行沈線文で充塡される。諸磯ｃ式期

36－3　波状口縁を呈し、連続する爪形文が施される。（pit1出土）諸磯ｃ式期

第75図　住居出土遺物(18)（1/3）

0　10cm

36－4　口唇部から縦位に棒状の貼付がなされ、両脇にボタン状の貼付が施される。諸磯ｃ式期

36－5　器面全体に平行沈線文が施され、２ケ１単位のボタン状の貼り付けが施される。諸磯ｃ式期

36－6　器面には、平行沈線文によって充塡される。諸磯ｃ式期

36－7　器面には、平行沈線文で充塡され。諸磯ｃ式期

36－8　胴上半部には半截竹管による曲線文が、下半部には平行沈線文がそれぞれ施される。諸磯ｃ式期

36－9　「く」の字状に屈曲した口唇部には、連続する角押文と交互刺突が施される。また口唇部には、曲線を描き隆起させられた上面には、刻みが施文される。五領ケ台式期

36－10　口縁部は、朝顔状に外反し、口唇部には、半円状の貼付が施され、内面は、「く」の字状を呈する。胴部には、縄文が施され、口唇部直下には、平行する沈線文が２条に施される。また半円状に連続する沈線文が横位に施文され、区画される。（pit6出土）五領ケ台式期

36－11　文様構成は10と同様で、口唇部の突起部には、半円形状の貼り付けがなされる。五領ケ台式期

36－12　口唇部には刻みが施され、直下には縄文が施文される。五領ケ台式期

36－13　口縁部は「く」の字状に内傾し、連続する角押文が波状に施される。以下縄文が施文される。五領ケ台式期

36－14　口唇部には、刻みが施され、直下には平行沈線文と楕円状の沈線文が施文される。器面には、縄文が施される。五領ケ台式期

36－15　口唇部は、やや肥厚し刻みが施され、直下には、交互の刺突が施文される。五領ケ台式期

36－16　口唇部は、「く」の字状に外反し、連続する角押文が施される。五領ケ台式期

36－17　口縁部はやや肥厚し、外面には交互刺突が施される。五領ケ台式期

36－18　交互刺突によってジグザグが形成され、２段に施される。五領ケ台式期

36－19　口唇部はやや厚みをもたせ、連続する角押文は「コ」の字状に施される。胴部は、無文帯で形成される。五領ケ台式期

36－20　口唇部の内面は、「く」の字状を呈し、連続する角押文が施される。五領ケ台式期

36－21　口唇部には、三叉文が施文され、隆帯に沿って連続する角押文と爪形文が施される。五領ケ台式期に属するものと思われる。

36－22　口縁部は内傾し、爪形文と角押文が横位に連続させられる。五領ケ台式期に属するものと思われる。

36－23　口唇部には、ペン先状工具による刺突が半円形状に施文される。新道式期

36－24　器面には、円形竹管とペン先状工具による刺突が施される。新道式期

36－25　胴部には、隆帯が楕円状に付され、刻みが施される。また隆帯の脇には、キャタピラ文とペン先状工具による刺突が施される。新道式期

36－26　キャタピラ文で区画された中には、ペン先状工具による連続刺突文が施される。新道式期に属するものと思われる。

36－27　縄文を地文とし、隆帯によって区画される。また隆帯に沿って連続する三角形状の刺突が施される。新道式期に属するものと思われる。

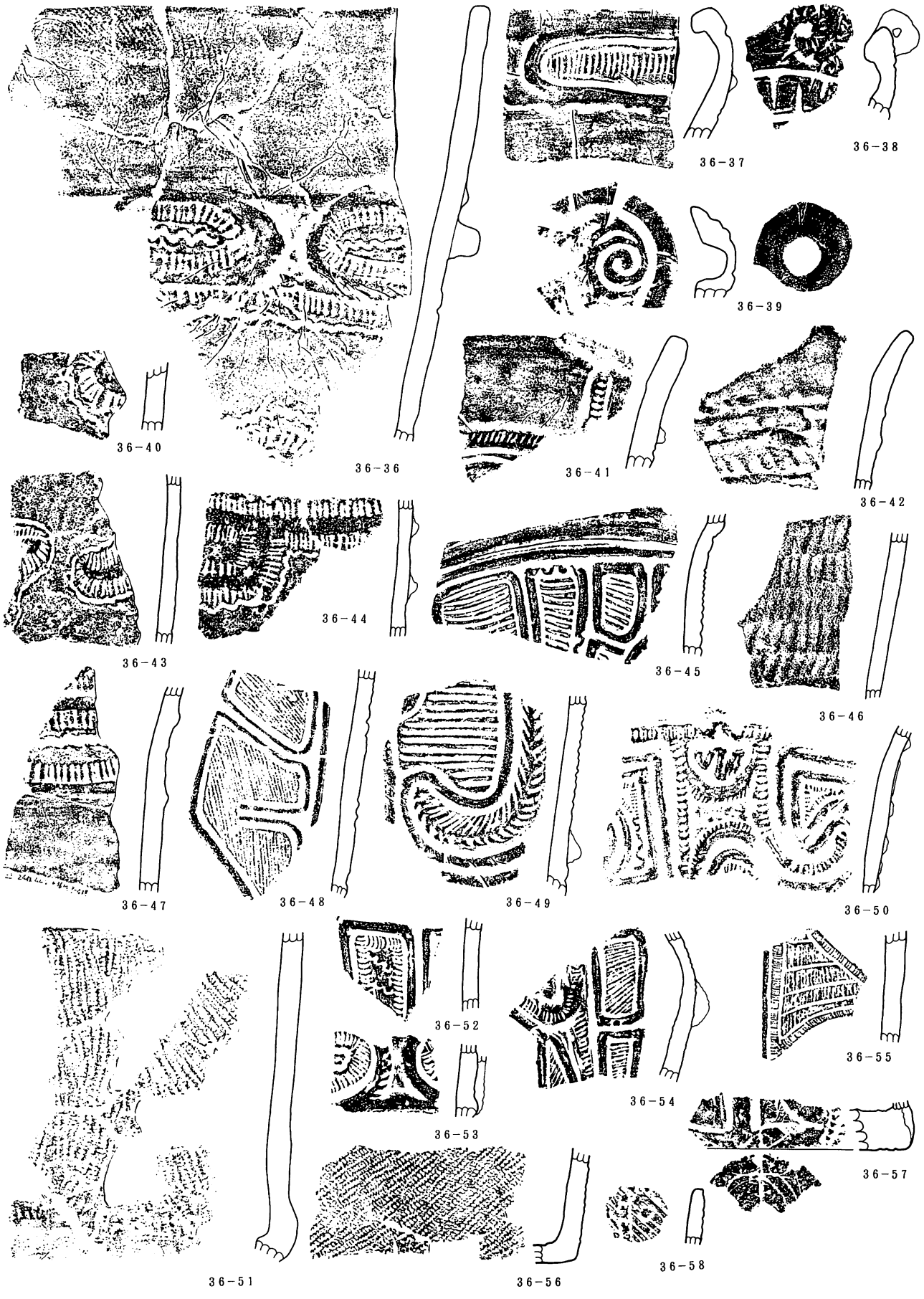
36－28　口唇部は、外面に張り出し、爪形文が施される。以下無文帯が、形成される。藤内式期

36－29　口唇部には爪形が施文され、横位に貼り付けされた隆帯には、「く」の字状の刻みと、棒状工具による刻みがジグザグに施される。以下、胴上半部には楕円区画文が施される。藤内式期

36－30　口縁部は、厚みをもたせ、刻みが３本施される。直下は、無文帯が形成される。以下縄文を地文として器面に施される。藤内式期

36－31　口唇部は、大きく外面に張り出し、平行沈線文によって区画される。藤内式期

36－32　口縁部は、朝顔状に外反し、器面全体に縄文が施される。口唇部には、棒状工具によるジグザグ文が巡らされる。胴上部には、ジグザグ文が施文され、直下には爪形文が横位に施される。藤内式期



第76図　住居出土遺物(19)（1/3）

0　10cm

36－33　上部のキャタピラ文と沈線文によって、「T」字状に半隆起させられた上面には、縄文が施される。藤内式期

36－34　口唇部には、波状に粘土紐が貼り付けられ、直下の半隆起させられた上面には、刻みが施される。藤内式期

36－35　太い隆帯には、「く」の字状に刻みが施される。またパネル状に区画された中には、平行沈線文で充塡される。藤内式期

36－36　胴上半部には、キャタピラ文が楕円状に施され、区画内には、ジグザグ文が施文される。藤内式期

36－37　口縁部は、キャリパー状を呈し、楕円区画文が施される。区画内には、縦位の沈線で充塡される。藤内式期

36－38　口唇部には、ラッパ状把手が付され、刻みが施される。直下には、平行沈線文と刻みによって蛇行する半隆起帯が形成される。藤内式期

36－39　円形状に付された把手で、外面には沈線による渦巻文が施され、内面は丸く窪まされる。藤内式期

36－40　キャタピラ文の外周には、ジグザグ文が施される。藤内式期

36－41　粘土紐の貼付がなされ、刻みが施される。口縁部には、把手が付されていたと思われる痕跡が残されている。藤内式期

36－42　口縁部は無文で、緩やかに外反する。胴上半部には、指頭圧痕が認められる。（pit1出土）藤内式期と思われる。

36－43　胴部には、抽象文が施される。藤内式期

36－44　隆起させられた脇には、キャタピラ文が施文され、ジグザグ文によって区画される。藤内式期

36－45　口縁部は、無文帯を形成し、以下楕円区画文で充塡される。藤内式期

36－46　胴部には、指頭圧痕が数段に認められる。藤内式期

36－47　胴部には、半截竹管状工具による平行沈線文で区画され、区画内には、平行沈線文で充塡される。藤内式期

36－49　「J」字状に貼り付けられた粘土紐には、「く」の字状の刻みが施される。藤内式期

36－50　胴上半部には、三角と四角に区画された中に沈線文が施され、さらに刻みをもった隆帯によって区画される。藤内式期

36－51　胴下半部から底部付近の破片である。器面には、縄文で充塡される。藤内式期

36－52　パネル文の中には、爪形文が施される。藤内式期

36－53　粘土紐によって楕円区画された区画内には、キャタピラ文とジグザグ文が施される。藤内式期

36－54　胴部にはパネル文によって区画がなされ、区画内には沈線文で充塡される。藤内式期

36－55　半截竹管によって区画された中には、横走する4本の沈線が施されさらに区画される。区画内には、縦位の沈線で充塡させられる。藤内式に属するものと思われる。

36－56　胴下半部から底部にかけての破片で、器面全体に縄文が施される。藤内式期に属するものと思われる。

36－57　底部の破片で、沈線文と爪形文が施される。底部には、木の葉文が残存している。中期中葉。

36－58　土製円盤である。平行沈線文が施され、その後結節状文が施文される。諸磯c式期

37号住居（第77図）

37－1　口縁部は、大きく外反する。口唇部には、半円形の平行沈線が施される。時期不明

37－2　諸磯c式期

37－3　「く」の字状に沈線文が施され、その後結節浮線文が施される。諸磯c式期

37－4　器面には平行沈線文が充塡され、結節状文が施される。諸磯c式期

37－5　平行沈線文で器面は充塡され、2ケ1単位のボタン状の貼り付けがなされる。諸磯c式期

37－6　口唇部はやや肥厚し、内面は緩く「く」の字状を呈する。口唇部直下には、交互刺突により鋸歯状文を

第77図　住居・土坑出土遺物(20)（1/3）

0　10cm

形成し、下部には、棒状工具によって半円状に施文される。五領ケ台式期

37－7　波状口縁を呈し、連続する角押文が施される。

37－8　口唇部には貼り付けがなされ、刻みが施される。五領ケ台式期

37－9　「く」の字状に口縁部は屈曲し、連続角押文が楕円形状に施される。浅鉢　五領ケ台式期

37－10　口唇部はやや肥厚し、１条の沈線が引かれる。中期初頭と思われる。

37－11　口縁部は、やや肥厚し「く」の字状を呈する。角押文が連続して行われる。五領ケ台式期

37－12　口縁部は内傾し、口唇部は外面に張り出される。粘土紐によって隆起させられた両脇には、連続する角押文が施される。中期前半のものと思われる。

37－13　連続する角押文によって施文される。中期初頭のものと思われる。

37－14　口唇部に「３」の字状の貼り付けがなされ、内面は「く」の字状を呈する。浅鉢　中期中葉のものと思われる。

37－15　渦巻状に粘土紐が貼付され、角押文が施される。内面には、円形状に貼り付けられた上端に、沈線が施される。中期前半のものと思われる。

37－16　器面には、縄文が施され、その後棒状工具による沈線文が弧状に展開され、直下には三角印刻文が円文を囲うように施文される。五領ケ台式期

37－17　連続する角押文が、円形状と横位に施文される。円形状に施された直下には、三叉文が施される。狢沢式期

37－18　連続する角押文が、クランク状に施文される。五領ケ台式期

37－19　胴部には、輪積痕と指頭圧痕が数段に認められる。（pit1出土）

37－20　輪積痕が認められ、指頭圧痕が残されている。五領ケ台式期

37－21　粘土紐が「Ｙ」字状に貼り付けされ、刻みが施される。五領ケ台式期

第６節　土坑出土遺物（拓本）（第77図～第86図）（00Xは、土坑番号を意味する）

006から014号土坑（第77図）

006－1　口唇部にはＶ字状の貼り付けがなされ、波状を呈する。口唇部直下には、横帯する貼り付けがなされたのち、押圧が施される。口唇部内面には、渦巻状の貼り付けが施される。井戸尻式期

006－2　口唇部は「く」の字状に内弯させられ、無文帯が形成される。直下には横走する沈線によって、口縁部と胴部を区画させる。胴部には、隆帯と刻みが施され、左右に区画され、１対のボタン状の貼り付けが施される。井戸尻式期

006－3　口唇部に付せられた突起部と思われる。井戸尻式期

006－4　口縁部は直立し、無文帯となる。胴部には、縄文が施される。井戸尻式期

010－1　胴部の破片で、隆帯に沿って角押文が施される。狢沢式期

010－2　隆帯による区画文と爪形文が、胴部に施される。井戸尻式期

010－3　底部は屈曲させられ、垂下する隆帯には刻みが施される。また横帯する隆帯には、爪形文が施される。井戸尻式期

011－1　無文帯をもつ口縁部の破片で、口唇部はやや外反する。中期に属するものである。

011－2　胴部には、沈線文による区画がなされ、区画内には、櫛歯状工具によって器面に施される。曽利Ⅳ～Ⅴ式期

012－1　胴部には、粘土紐による渦巻文が施され、刻みが施される。諸磯ｂ式期

012－2　胴下半部の破片で、垂下する隆帯には刻みが施され、器面には縦位の沈線文で充填される。井戸尻式期

012－3　垂下する隆帯の両脇には、櫛歯状工具によって施文される。曽利Ⅳ～Ⅴ式期

012－4　浅鉢の口縁部で、内面には連続する角押文が施される。五領ケ台式期

014－1　口縁部はキャリパー状を呈し、頚部には横走する沈線文が施される。曽利Ⅰ式期に属するものと思われる。

014－2　縦位に平行沈線文による区画がなされ、区画内にはペン先状工具による刺突が施される。中期中葉

014－3　頚部には隆帯がめぐらされ、刻みが施される。以下胴部には平行沈線文が施される。井戸尻式期

015から037号土坑（第78図）

015－1　口唇部から胴部にかけて、縦位に平行沈線文が施される。井戸尻から曽利Ⅰ式期に属する

017－1　半隆起させられた隆帯には、爪形文が施される。また区画された内面には、平行沈線文で充填される。藤内式期

017－2　器面には、やや幅広の平行沈線文が施される。藤内式期

017－3　器面には、平行沈線文が施される。諸磯ｃ式期

019－1　口縁部文様帯には渦巻文が施され、脇には連続するペン先状工具によって施文され、空間には平行沈線文が施される。新道式期

019－2　幅広の隆帯によって区画され、隆帯の上には三叉文が施される。また区画内には沈線文が施される。井戸尻式期

019－3　胴部にはキャタピラ文が施され、ジグザグ文で区画される。藤内式期

019－4　器面全体に縄文が施される。中期中葉

021－1　口縁部はキャリパー状を呈し、２条の隆帯が貼り付けされる。曽利Ⅰ式期

021－2　胴部には平行沈線文で充填され、２条の隆帯が貼り付けされる。曽利Ⅰ式期

023－1　口唇部には小突起が付され、爪形文が施される。直下には沈線文が施される。五領ケ台式期

023－2　縦位による平行沈線文が施され、蛇行沈線文が垂下させられる。曽利Ⅲ式期

024－1　残存状態が悪くはっきりとしないが、器面には縄文が施される。中期に属するものである。

024－2　パネル文によって区画された中には、平行沈線文によって充填させられ、そののち縦位にジグザグ文が施される。藤内式期

025－1　口縁部は緩やかに内弯し、連続する逆Ｕ字状の沈線が施される。直下には２条の沈線文が横位に施され胴部とを区画させる。五領ケ台式期

026－1　隆帯によって区画された脇には、キャタピラ文が施される。藤内式期

026－2　隆帯には刻みが施され、脇には沈線による区画が施され、区画内にはキャタピラ文が施される。藤内式期

026－3　口唇部は波状を呈し、波頂部直下には爪形文を伴う楕円区画文が施される。また両脇には平行沈線文が連続して施される。頚部には２条の隆帯が巡らされ、爪形文が施される。藤内式期

027－1　底部は屈曲させられ、胴下半部には沈線文によって区画がなされる。井戸尻式期

027－2　縦位にはりつけられた隆帯には、矢羽根状の刻みが施される。井戸尻式期

030－1　口縁部には楕円状の区画が施され、区画内には沈線文で充填される。藤内式期

030－2　胴部にはキャタピラ文が施され、ジグザグ文で区画される。胴下半部には、縄文が施される。藤内式期

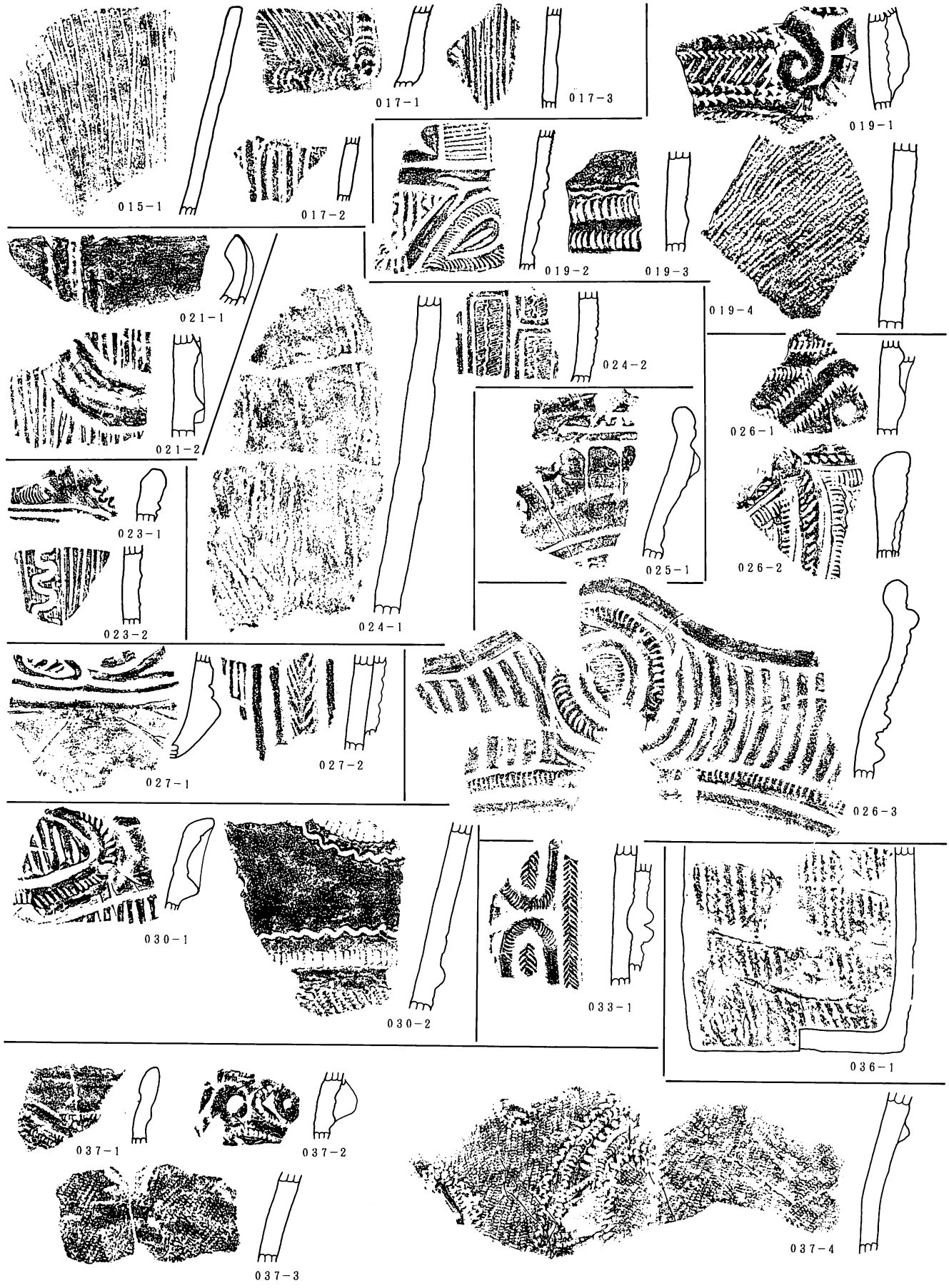
033－1　胴部にはＵ字状に貼り付けがなされ、爪形文が施される。藤内式期

036－1　器面には縄文が施される。中期中葉

037－1　口唇部は無文帯を形成し、内面は「く」の字状を呈する。直下には粘土紐が貼り付けられ、角押文で区画される。中期前半のものと思われる。

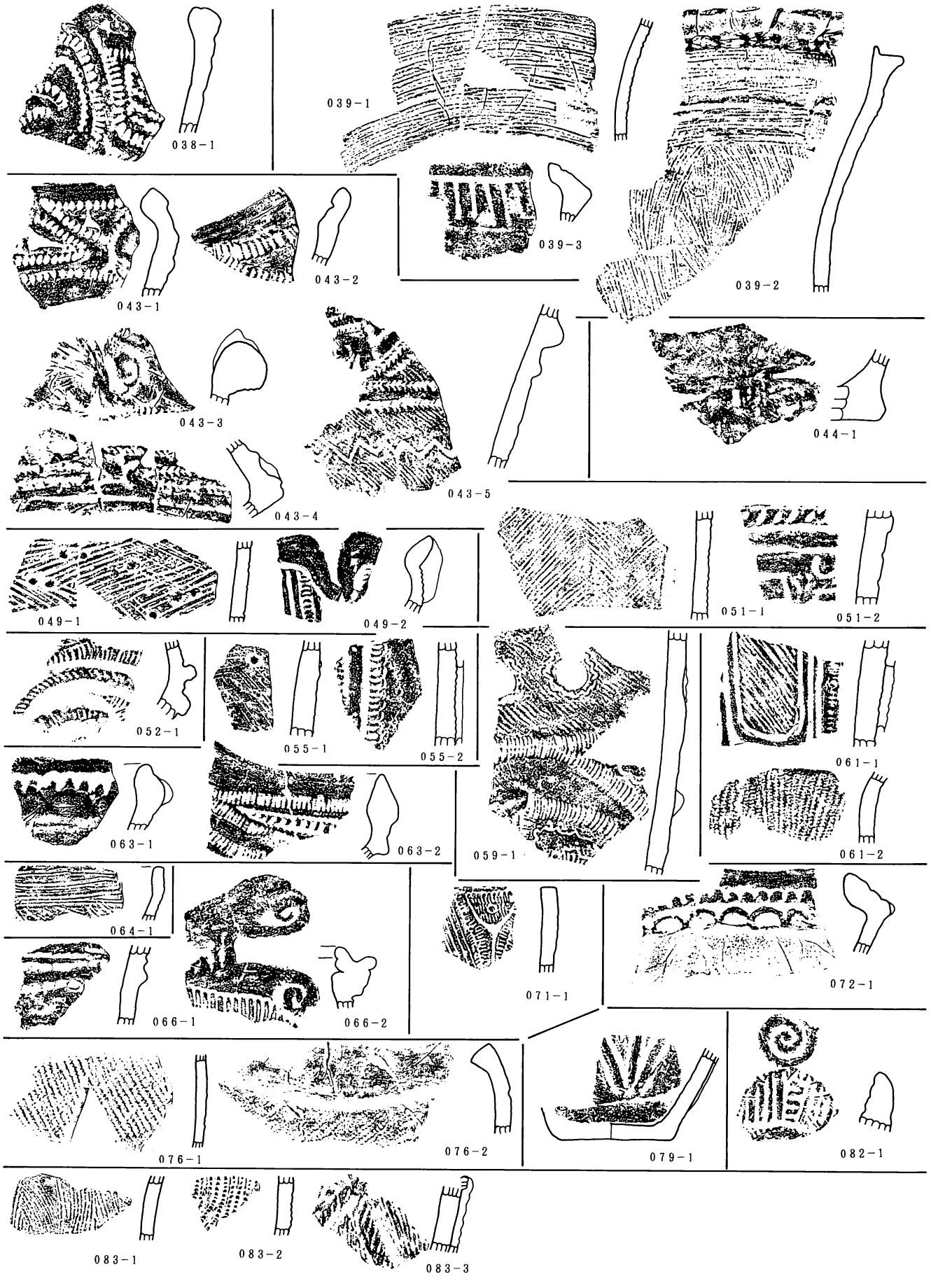
037－2　胴部には円形の貼り付けがなされ、角押文で区画される。新道式期

037－3　器面には縄文が施される。五領ケ台式期



第78図　土坑出土遺物(21)（1/3）

0　10cm



第79図　土坑出土遺物(22)（1/3）

0　10cm

037－4　器面には縄文が施され、抽象文が施される。新道式期

038から083号土坑（第79図）

038－1　連続する角押文が施され、脇には角押文によるジグザグ文が形成される。新道式期

039－1　平行沈線文で充塡される。諸磯ｃ式期

039－2　口唇部は大きく張り出され、直下には横位の平行沈線文が施される。胴部には縦位にゆるやかな曲線をもった沈線文で充塡される。諸磯ｃ式期

039－3　口唇部は「く」の字状に折れ曲がり、連続する角押文まが施される。中期前半のものと思われる。

043－1　三角形状に区画が施された隆帯の脇には、角押文が施され、区画内には三叉文が施される。新道式期

043－2　口縁部は波状を呈し、角押文が施される。また内面には、三叉文が施される。新道式期

043－3　口縁部には把手が付され、渦巻文が施される。新道式期

043－4　隆帯によって区画された脇には、連続するペン先状工具による刺突文が施される。新道から藤内式期

043－5　胴上半部には、隆帯に沿ってペン先状工具による区画がなされる。以下胴部には縄文が施されジグザグ文が横位に施文される。新道から藤内式期

044－1　底部の破片で、底部には網代痕が一部残存する。中期

049－1　諸磯ｃ式期で、平行沈線文を地文とし、２ケ１単位のボタン状の貼り付けがなされる。

049－2　口唇部は外反し、Ｖ字状に切れ目が施される。中期中葉のものと思われる。

051－1　器面には、綾杉状沈線文が施され、縦位の沈線文によって区画される。曽利Ⅳ式期

051－2　半隆起させられた隆帯には刻みが施され、以下沈線による文様で構成される。井戸尻式期

052－1　隆帯に刻みが施され、キャタピラ文で区画される。藤内式期

055－1　平行沈線文とボタン状の貼り付けが施される。諸磯ｃ式期

055－2　縦位に施された隆帯の脇には、レンゲ文が施される。藤内式期

059－1　胴上半部には縄文が施され、円形に押圧された脇には、ジグザグ文で区画される。直下にはキャタピラ文で区画され、区画内にはジグザク文が施される。藤内式期

061－1　藤内式期

061－2　器面には縄文が施される。

063－1　口唇部には、半截竹管状工具による連続刺突文が施される。中期前半

063－2　口縁部は波状を呈し、直下にはキャタピラ文が施される。中期中葉

064－1　諸磯ｃ式期

066－1　器面には、連続する角押文が施される。狢沢式期

066－2　口唇部の内外面には、渦巻文が施される。直下には半截竹管状工具による沈線文が施される。中期前半

071－1　沈線によって三角形に区画された中には、レンゲ文・キャタピラ文・玉抱三叉文が施される。藤内式期

072－1　浅鉢である。口唇部には半截竹管状工具による連続刺突文が施され、直下には押圧された半円形状の隆帯が横位に施される。藤内式期

076－1　器面には、Ｒ－Ｌの縄文が施される。中期中葉と思われる。

076－2　口唇部は無文帯で、直下には１条の沈線文が巡らされる。以下縄文が施される。中期に属する。

079－1　底部付近の破片で、半隆起させられた３本の隆帯は、放射状に広げられる。井戸尻式期

082－1　内面には沈線による渦巻文が施され、外面には平行沈線文と交互刻みによる蛇行懸垂文が施される。井戸尻式期

083－1　諸磯ｃ式期

083－2　諸磯ｃ式期

083－3　隆帯には刻みが施され、沈線文で充塡される。藤内式期

第80図　土坑出土遺物(23)（1/3）

0　10cm

086から137号土坑（第80図）

086－1　隆帯には、刻みが施される。井戸尻式期

087－1　把手の部分と思われる。連続するペン先状工具による渦巻文と三角印刻文によって、獣の顔面が表現される。新道式期

089－1　緩やかに内弯する浅鉢の口縁部には、半円状の隆帯に沿ってキャタピラ文が施される。新道式期

090－1　口縁部は波状を呈し、口唇部には刻みが施される。井戸尻式期

090－2　口縁部は無文帯が形成され、直下から渦巻状の隆帯が刻みをもって貼り付けられる。井戸尻式期

091－1.2　パネル文と楕円区画文である。藤内式期

092－1　口縁部は波状を呈し、爪形文が施される。新道式期

098－1　諸磯ｃ式期

103－1　口縁部は朝顔状に開き、波状を呈する。口縁部文様帯は、パネル文で区画され区画内には沈線文で充填される。藤内式期

103－2　波状口縁を呈し、半隆起帯で区画がなされ、区画内には沈線文が施される。藤内式期

104－1　口唇部は大きく外反し、口縁部には半截竹管状工具による刺突文と細沈線文が施され、器面には縄文が施される。五領ケ台式期

106－1　平行沈線文の両脇には、キャタピラ文が施され、また交互に刻みが施文される。藤内式期

107－1　口縁部は無文帯で、直下には角押文が施される。藤内式期

109－1　諸磯ｃ式期

109－2　平行沈線文で区画され、区画内には渦巻文が施される。藤内式期

110－1　楕円区画文とキャタピラ文の組み合わせである。藤内式期

112－1　波状を呈する浅鉢である。内面には、２条の角押文が口縁部に沿って波状を呈し、直下には１条の角押文が直線的に横走させられる。狢沢式期

112－2　沈線の脇には、連続するレンゲ文が施される。藤内式期

116－1　キャタピラ文が渦巻状の沈線文に沿って施される。藤内から井戸尻式期

121－1　楕円形状に区画された中には、沈線文で充填される。また隆帯には一部Ｒ－Ｌの縄文が施される。藤内式期のものと思われる。

123－1　渦巻状の隆帯には、刻みが施される。藤内式期

124－1　諸磯ｃ式期

128－1　胴下半部から底部にかけてのもので、沈線によってパネル状に区画され、爪形文によってさらに区画される。藤内式期

129－1　連続するペン先状工具によって充填される。新道式期

129－2　隆帯は、交互刺突により蛇行させられ、両脇は渦巻文で構成される。中期中葉

130－1　口縁部文様帯は、ペン先状工具によって構成される。新道式期

131－1　爪形文とジグザグ文で構成される。藤内式期

131－2　土製円盤である。中期中葉

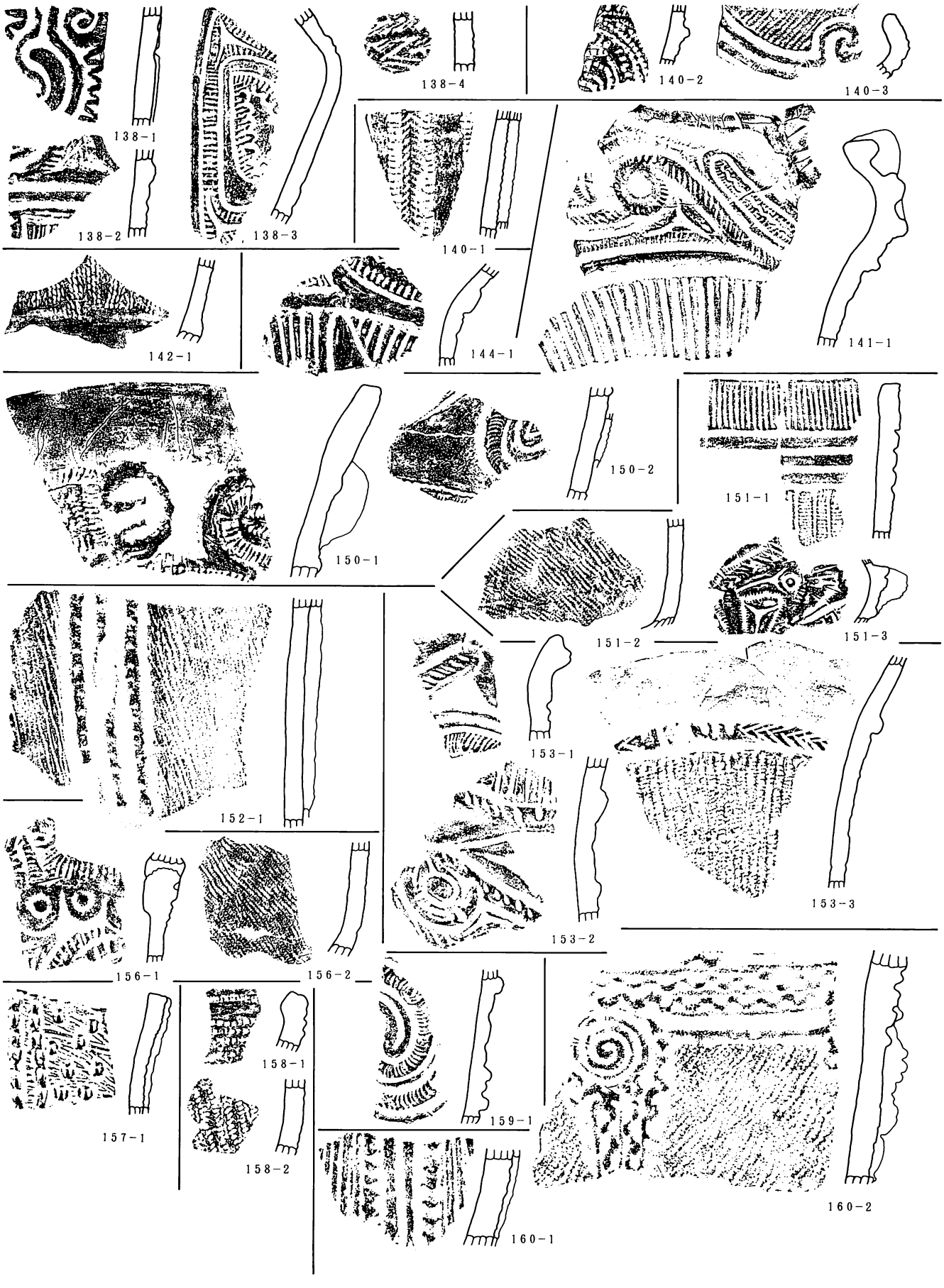
132－1　口縁部は直立し２ケ１対の孔があけられる。藤内式期

136－1.2　瘤状の隆帯には、交互による刻みが施される。井戸尻式期

136－3　底部は屈曲し、楕円区画文が横帯させられ、区画内には沈線文で充填される。井戸尻式期

137－1　縦位に施された隆帯の脇には、連続する角押文で区画される。狢沢式期

137－2　隆帯上に爪形文が施され、直下には沈線文によってパネル状に区画され、区画内にはレンゲ文が施される。藤内式期



第81図　土坑出土遺物(24)（1/3）

0　10cm

138から160号土坑（第81図）

138－3　沈線文による区画と、キャタピラ文による区画がなされ、三叉文が施される。区画内にはレンゲ文が施される。藤内式期

138－4　諸磯ｃ式期の土製円盤である。

140－1　キャタピラ文が施される。藤内式期

140－2　連続する角押文が施される。狢沢式期

140－3　平行沈線文によって半隆起させられ、空間には縄文が施される。曽利II式期

141－1　口縁部文様帯は隆帯による渦巻文と、パネル文で構成され、横走する隆帯によって口縁部と胴部とが区画される。第２文様帯は頸部にあり、縦位による沈線文で充塡される。藤内式期

142－1　底部付近のもので、器面には撚糸文が施文される。藤内式期（163－2と接合する。同一グリッド内に存在し、すぐ近くにつくられている）

144－1　楕円状に区画された隆帯の脇には、キャタピラ文が施され、以下縦位の沈線文で充塡される。藤内式期

150－1　口縁部は朝顔状に開き、無文帯が形成される。直下には隆帯によって「の」の字状に貼り付けられ、楕円区画文とキャタピラ文が施される。藤内式期

150－2　隆帯には、爪形文が施文される。また下部には、ジグザグ文とキャタピラ文が施される。藤内式期

151－1　口縁部は直立し、キャタピラ文が施される。直下には平行沈線文が施され、以下横位に蛇行する半隆起帯にはキャタピラ文が施される。藤内から井戸尻式期

151－2　器面には、Ｒ－Ｌの縄文が施される。中期中葉

151－3　玉抱三叉文とペン先状工具による刺突文の構成である。新道式期

152－1　器面には無節の縄文が施され、３本の隆帯には刻みが施される。曽利III式期

153－2.3　隆帯に刻みが施されるもので、２は渦巻状に貼り付けられた隆帯には、三叉文が施される。３は口縁部口縁部文様帯に無文帯が形成され、頸部には横位に隆帯が巡らされ、胴部には縄文が施される。井戸尻式期

156－1　キャタピラ文と円形竹管文で構成される。藤内式期に属するものと思われる。

157－1　諸磯ｃ式期

158－1　口唇部には爪形文が施され、口縁部には連続する角押文が横走させられる。五領ケ台式期

159－1　渦巻状に隆帯が巡り爪形文が施される。藤内式期

160－2　器面には縄文が施され、浮線文が波状に横位と縦位に貼り付けされる。曽利II式期

163から178号土坑（第82図）

163－1　隆帯の脇には、キャタピラ文が施文され、さらにペン先状工具による連続刺突文がジグザグ状に区画する。新道式期

163－2　胴下半部から底部にかけて撚糸文が施文される。藤内式期(142－1と接合する)

173－1～5 諸磯ｃ式期

174－1.2　諸磯ｃ式期

175　　隆帯による区画文とジグザグ文・三叉文で構成される。藤内式期

176－1～5 諸磯ｃ式期

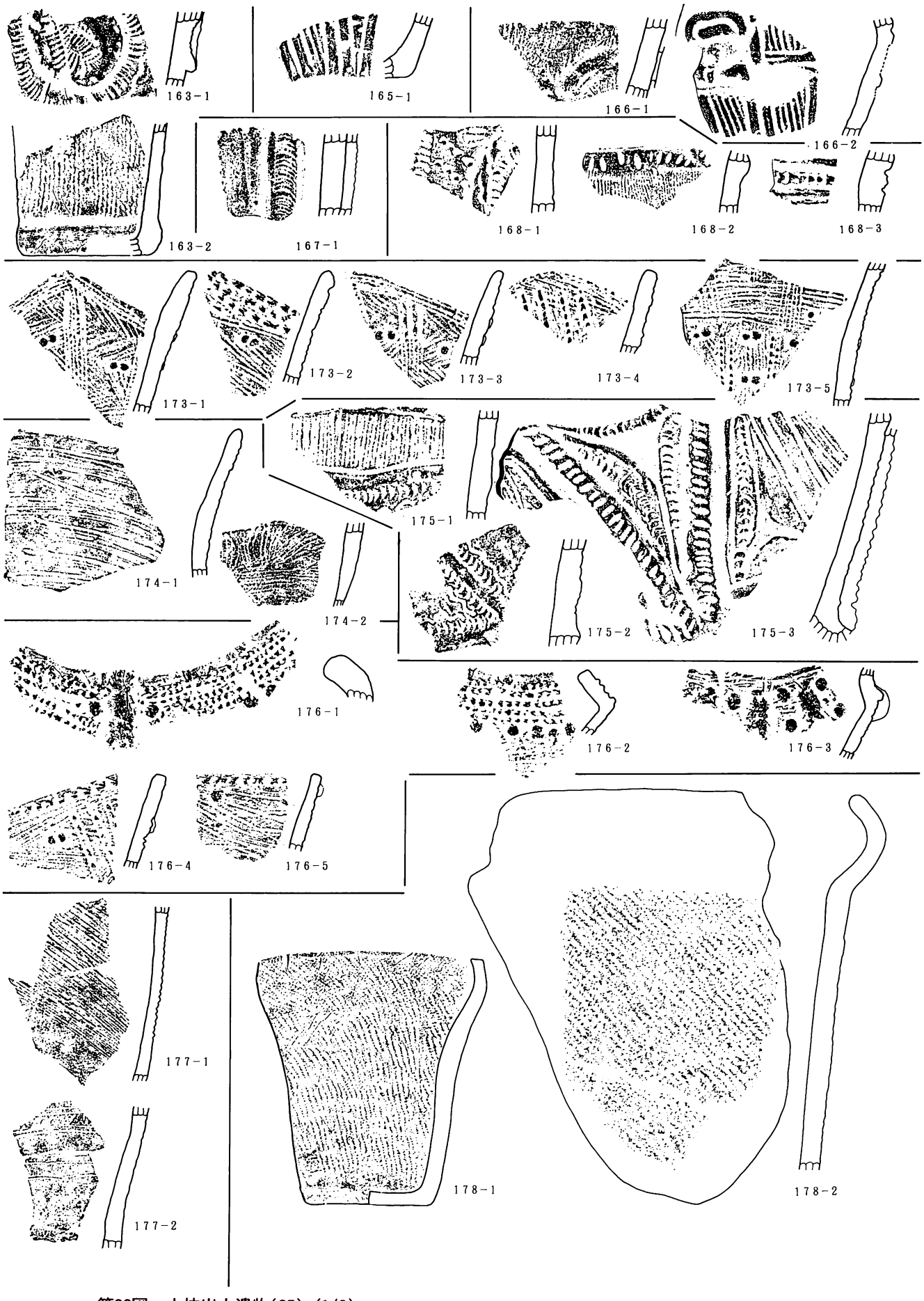
177－1.2　諸磯ｃ式期

178　　口縁部は緩やかに内傾し、器面全体に縄文が施される。中期中葉

181から199号土坑（第83図）

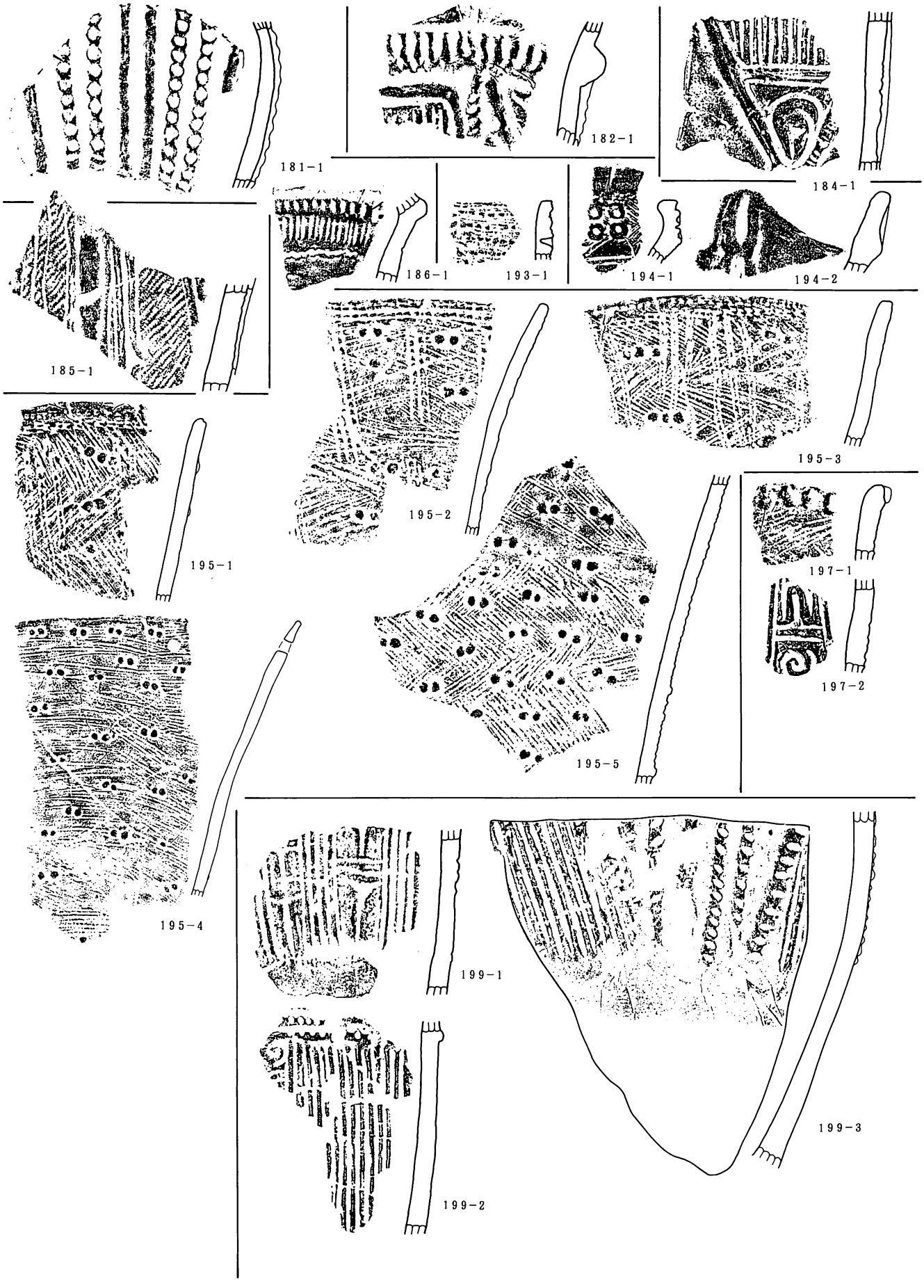
181－1　押圧された隆帯は、２本１単位として貼り付けがなされる。井戸尻式期

182－1　頸部には、幅広の隆帯が巡らされ、刻みが施される。胴部にはパネル状に区画文が施される。藤内から井戸尻式期



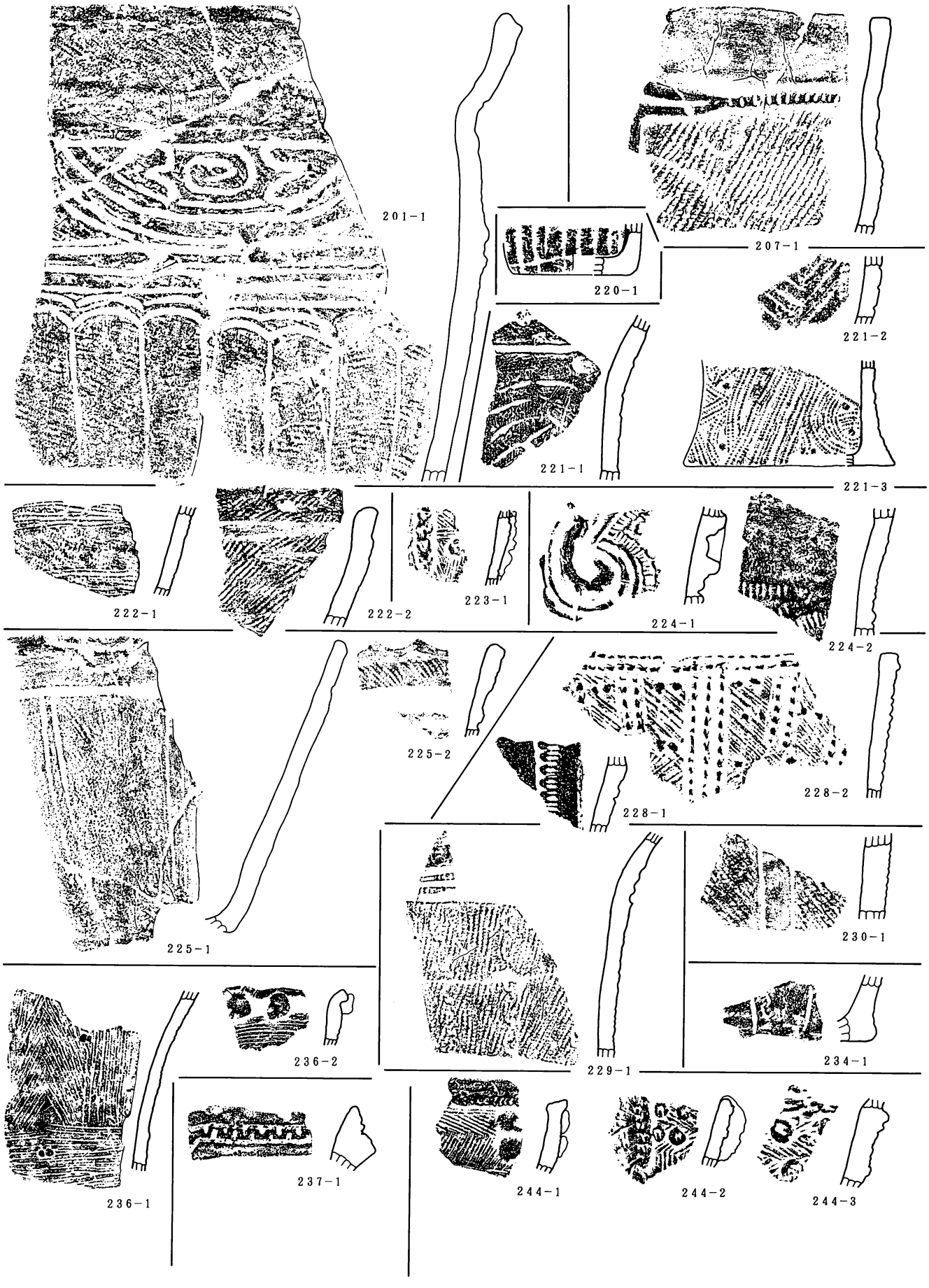
第82図　土坑出土遺物(25)（1/3）

0　10cm



第83図　土坑出土遺物(26)（1/3）

0　10cm



第84図　土坑出土遺物(27)（1/3）

0　10cm

184－1　隆帯によって区画された内面には、沈線文が施される。井戸尻式期

185－1　器面には縄文が施され、隆帯によって左右に区画され、さらに沈線文によって区画される。中期前半

186－1　藤内式期

193－1　諸磯ｃ式期

194－1　諸磯ｃ式期

194－2　口唇部には連鎖状に隆帯が張りつけられ、小突起が形成される。井戸尻式期

195－1～5　器面には半截竹管文による平行沈線文で充塡され、口唇部には押引文が施される。また２ケ１単位のボタン状の貼り付けがなされる。諸磯ｃ式期

197－1　口唇部は、指で押圧される。以下器面には、平行沈線文が施される。諸磯ｃ式期

197－2　器面には、沈線によって渦巻文と波状文が施される。井戸尻式期

199－1　縦位に平行沈線文で充塡され、三叉文と隆帯による貼り付けがなされ、刻みが施される。井戸尻式期

199－2　胴上半部には２条の隆帯が横走し、下段の隆帯は渦巻状が形成され、それぞれ刻みが施される。以下縦位による平行沈線文で充塡される。井戸尻式期

199－3　胴下半部の破片で、垂下された隆帯には刻みが施文され、器面には平行沈線文が施される。井戸尻式期

201から244号土坑（第84図）

201－1　器面には縄文が施され、頚部には沈線による半円形状区画がなされ、区画内には渦巻文が施される。直下には横位に沈線文が施され、以下半円状に２段の沈線が施され、谷部から縦位に沈線が施文される。五領ケ台式期

207－1　口唇部には無文帯が形成され、直下には隆帯が貼り付けられ刻みが施される。以下縄文が施される。井戸尻式期

220－1　器面には、縦位の平行沈線文が施される。中期中葉

221－1　口縁部直下の破片と思われる。横１条の沈線文の下には、「ハ」の字状文が施される。曽利Ⅳ式期

221－2　器面には「ハ」の字状文が施される。曽利Ⅳ式期

221－3　細い粘土紐は器面に貼付され、押し引きされる。また隙間にはボタン状の貼り付けがなされる。諸磯ｃ式期

222－1　縄文を地文として器面に施され、平行沈線文が施文される。諸磯ｂ式期

222－2　器面に縄文が施され、口唇部には横位に磨り消しがなされる。五領ケ台式期

223－1　棒状の貼付とボタン状の貼付が施される。諸磯ｃ式期

224－1　渦巻状に貼付された隆帯は、沈線文とキャタピラ文で区画される。藤内式期

224－2　器面には、キャタピラ文が施される。藤内式期

225－1　口唇部直下には横位に１条の沈線文が施され、以下縦位に平行沈線文が施文される。曽利Ⅳ式期

225－2　口唇部には山形状の小突起が付され、直下には縄文が施される。以下無文帯が形成される。五領ケ台式期

228－1　器面には、レンゲ文が施される。藤内式期

228－2　平行沈線文で器面は充塡される。また半截竹管文とボタン状の貼付が施される。諸磯ｃ式期

229－1　頚部には３条の沈線が引かれ、胴部には縄文が施文される。五領ケ台式期

230－1　器面には縄文が施され、縦位の平行沈線文の間は磨り消される。曽利Ⅲ式期

234－1　底部の破片である。沈線文は、底部付近まで施される。中期

236－1　器面には平行沈線文で充塡され、２ケ１単位のボタン状貼付が施される。諸磯ｃ式期

236－2　口唇部には、やや大型のボタン状貼付がなされる。諸磯ｃ式期

237－1　浅鉢の口縁部で、肥厚した口唇部には平行沈線文が施文され、交互刻みが施される。五領ケ台式期

244－1.2.3　平行沈線文とボタン状貼付が施される。諸磯ｃ式期

246から281号土坑（第85図）

246－1　角押文によって区画がなされ、横帯する角押文の下部には、角棒状工具によってジグザグ文が施文される。狢沢式期

246－2.5　器面には無節Ｌの縄文が施文され、磨り消しされた箇所も存在する。曽利Ⅳ式期

246－3　渦巻状の隆帯には、刻みが施される。藤内式期

246－4　諸磯ｃ式期

246－6.7　口唇部には１条の沈線が施され、直下には沈線による半円形状の区画がなされ、区画内には刺突文が施される。曽利Ⅳ式期

246－8　沈線文で区画がなされた後、区画内にＬ－Ｒの縄文が施文される。中期末葉から後期初頭に属するものと思われる。

246－9　緩やかに曲線が描かれた微隆起の内側にはＲ－Ｌの縄文が施文される。中期末葉から後期初頭に属するものと思われる。

247－1　地文を縄文とし、器面には弧状の平行沈線文が施される。中期初頭に位置づけされるものと思われる。

256－1　口唇部はやや肥厚し、内面は「く」の字状に折れ曲がる。口唇部外面には、連続する角押文が「∩」状に施文される。五領ケ台式期

256－2　器面には縄文が施され、細沈線文が縦位に施文される。五領ケ台式期

258－1.2.3.4　諸磯ｃ式期に属するもので、１は口唇部を肥厚させ、半截竹管状工具によって横から刺突し、その後指でつままれている。３は半截竹管状工具を交互に刺突させ、円形状に施される。

261－1　諸磯ｃ式期の口縁部の破片である。

267－1　胴下半部から底部にかけてのもので、器面全体にＲ－Ｌの縄文が施される。藤内式期

275－1　器面には、「直前段自結」による結節縄文が施される。五領ケ台式期

＊「前段自結」とは、山内清男氏の結節縄文に関する説明を理解しやすいように、小野正文氏によって区分されたものである。結節縄文には二通りの作り方があり、このうち縄の条の一方が他方を繞って結節をつくる場合を「直前段自結」とし、縄それ自身で結節を作る場合を「同段自結」と区分の試みを行っている（小野正文　1987　P239　「第10項曽利式土器の縄文」『釈迦堂Ⅱ－本文編－』）。

276－1.2　諸磯ｃ式期で、平行沈線文とボタン状の貼り付けが施される。

279－1.2　諸磯ｃ式期で、平行沈線文とボタン状の貼り付けが施される。

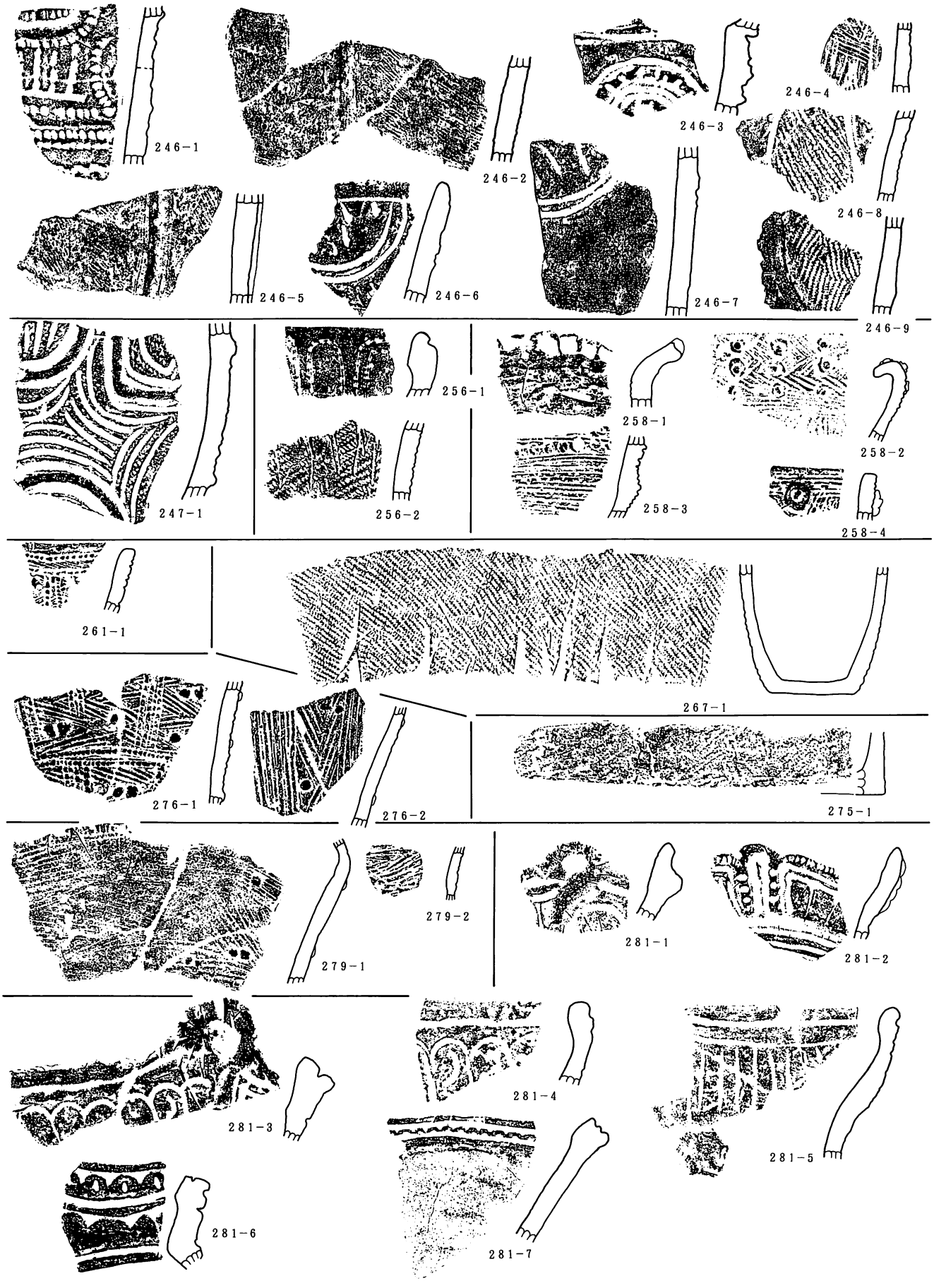
281－1～８　五領ケ台式期の口縁部の破片である。281－7.8は浅鉢で、７は口唇部を肥厚させ平行沈線文が施された後、円形竹管による交互刺突が施される。８は、口唇部は「く」の字状に折れ曲げられ、連続する角押文は「コ」の字状に区画され、区画内には連続する角押文が楕円形状に施文される。281－1.3.4は同一個体である。口唇部には「の」の字状に貼り付けられた突起の一端は、胴部まで垂下させられる。また口唇部には、１条の押引文が施文され、以下「∩」の沈線文が横帯させられる。「∩」字状の区画内には「ノ」の字状の沈線文が施されているウヒコ箇所も存在している。281－2は、口縁部文様帯に「∩」字状の貼り付けがなされ、刻みが施される。また両脇にはキャタピラ状に角押文が施文される。直下には、沈線文によって区画された中には、三角印刻文と細沈線文が施され、頚部には、横位に沈線文が施文される。281－5は、口唇部を肥厚させ２条の沈線文が施される。直下には、縦位に沈線文が施文される。281－6は、波状を呈する口唇部に三角印刻文が施され、半円状に形成された中央には刻みが施される。直下には巾広の沈線文が引かれ、さらに下部には三角印刻文が施文される。

283から310号土坑（第86図）

283－1　三角形状の隆帯の脇には、巾広のキャタピラ文が施文される。新道から藤内式期の範疇に含まれる。

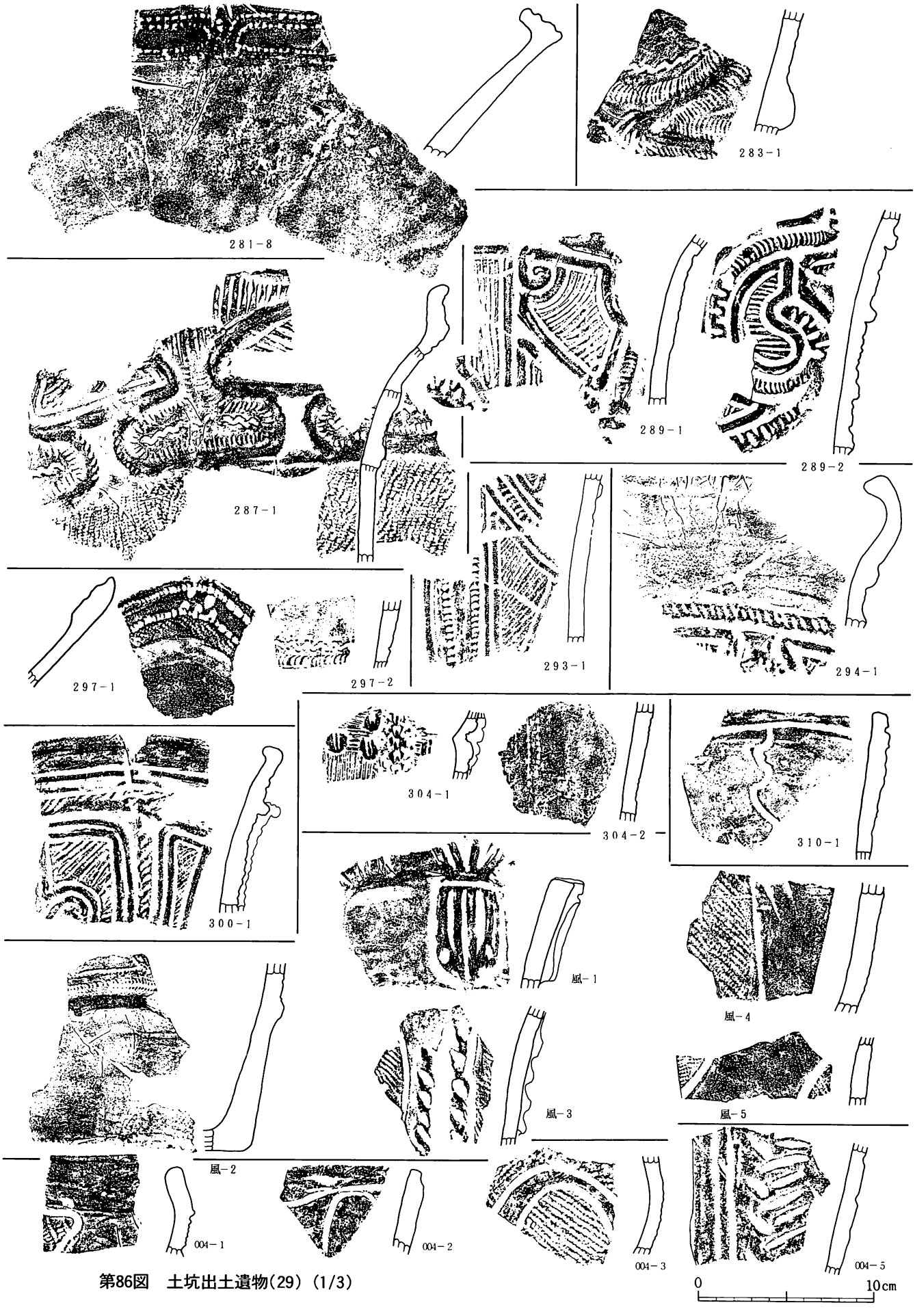
287－1　（第57図287の拓本）新道式期

289－1.2　パネル文と渦巻状をなす隆帯の構成で、区画内には沈線文で充填される。藤内式期



第85図　土坑出土遺物(28)（1/3）

0　10cm



第86図　土坑出土遺物(29)（1/3）

293－1　パネル文の中には、沈線文で充塡される。藤内式期

294－1　口縁部は、キャリパー状を呈し、無文帯が形成される。頚部には刻みをもつ隆帯が貼り付けられ、以下パネル文が施される。藤内式期

297－1　浅鉢の口縁部片である。外面は無文を呈し、内面には、半截竹管状工具による連続押引文が２条に施され、その後縄文が施文される。また波状を呈する波頂部には、半截竹管状工具による刺突文が施される。五領ケ台式期

297－2　連続する爪形文とジグザグ文の構成によるものである。藤内式期

300－1　口縁部には平行沈線文が施文される。頚部には横帯する隆帯に刻みが施され、張り出された箇所からさらに隆帯が垂下させられ刻みが施される。垂下する隆帯は、パネル文を左右に区画する。藤内式期

304－1　諸磯ｃ式期

304－2　連続する角押文は縦位に３本施され、両脇のものは「クランク」状を呈する。五領ケ台式期に属するものと思われる。

310－1　口唇部には、沈線文が施され、蛇行懸垂文が施文される。曽利Ｖ式期

風－1～5Ａ－24グリッド内風倒木痕出土遺物である。１は井戸尻式期で、無文帯の口縁部に貼り付けがなされ、３条の沈線文と貼り付けされた両脇には、棒状工具による刺突が１対施される。また貼り付けされた口唇部には、３条の沈線文が施文される。２は新道式期で、隆帯の脇にペン先状工具による連続刺突文が施される。３は井戸尻式期で、隆帯には刻みが施され、縄文は沈線によって区画される。４・５は中期末に属するもので、縄文は沈線によって囲まれる。

４号住居跡出土遺物（第86図）

004－1　口縁部から胴部の一部までの破片で、口縁部は無文帯で構成され、胴部には縄文が施され、沈線文によって区画される。区画外は、擦り消される。

004－2　口縁部の破片で、口唇部には一条の沈線文が施文され、直下には逆「Ｕ」字状の沈線文が施される。また沈線文で区画された中には、細いヘラ状工具による綾杉文が施される。

004－3　胴部の破片で、器面には縄文が施され、その後２本の沈線文によって区画がなされる。区画内は、擦り消される。

004－4　胴部の破片で、器面には涙状の「ハ」の字文が施され、垂下する２本の沈線文は、「ハ」の字文を区画する。

以上曽利Ｖ式期に属するものと思われる。

第7節　特 殊 土 坑（第87.88.89図）

248号土坑（第87図） Z－28グリッドに位置し、形態はほぼ円形を呈する袋状の土坑である。長径は82㎝、短径は73㎝、深さは78㎝を計測する。壁は、坑底から中位までは袋状を呈し、上部はほぼ垂直に立ち上がり、坑底は平坦である。本土坑は、30号住居跡を壊してつくられており、柱穴内の覆土とは異なっていた。遺物は、特殊脚付鉢と石斧が出土している。特殊脚付鉢は、本土坑の東壁寄りの坑底から約16㎝上の位置で発見され、口縁部を上に向けて、土坑の中央に向かって斜めになった状態で出土している。このことから特殊脚付鉢は、流れ込みによって土坑内に存在したものとは考えがたい。また投げ込まれたものであるとするならば、土器はもっと横向きになって出土、或いは壊れて出土するものと考えられる。出土状況および土坑内の出土位置等を考えた場合、この特殊脚付鉢は、土坑内に置かれていたものと考えることが自然と思われる。

また、本土坑から石斧が2点出土しており、1点は確認面から、もう1点は坑底より約6㎝上で見つかっており、本土坑のほぼ中央付近から出土する。本遺跡では、石斧をともなった土坑の数はかなり多い。248号土坑もこの例外ではないものと思われる。

特殊脚付鉢の口縁部の内外面にはベンガラが施されており、また黒彩された部分はベンガラを施すための前段階に行われている。この土器の口縁部には2ケ所の突起が付されており、外面には肉厚の渦巻文が施文され、その周辺は沈線文で囲まれ、三叉文が施される。また突起の内面には、三角形状に彫り込みがなされ、その外枠は沈線文で囲まれる。脚部には、3ケ所にヘラ状工具による三角形状の透かしが認められ、透かしの底辺はそれぞれ丸みをおびている。透かしと透かしの間には、ヘラ状工具による縦への調整がなされる。脚部は重量感があり、非常に安定している。

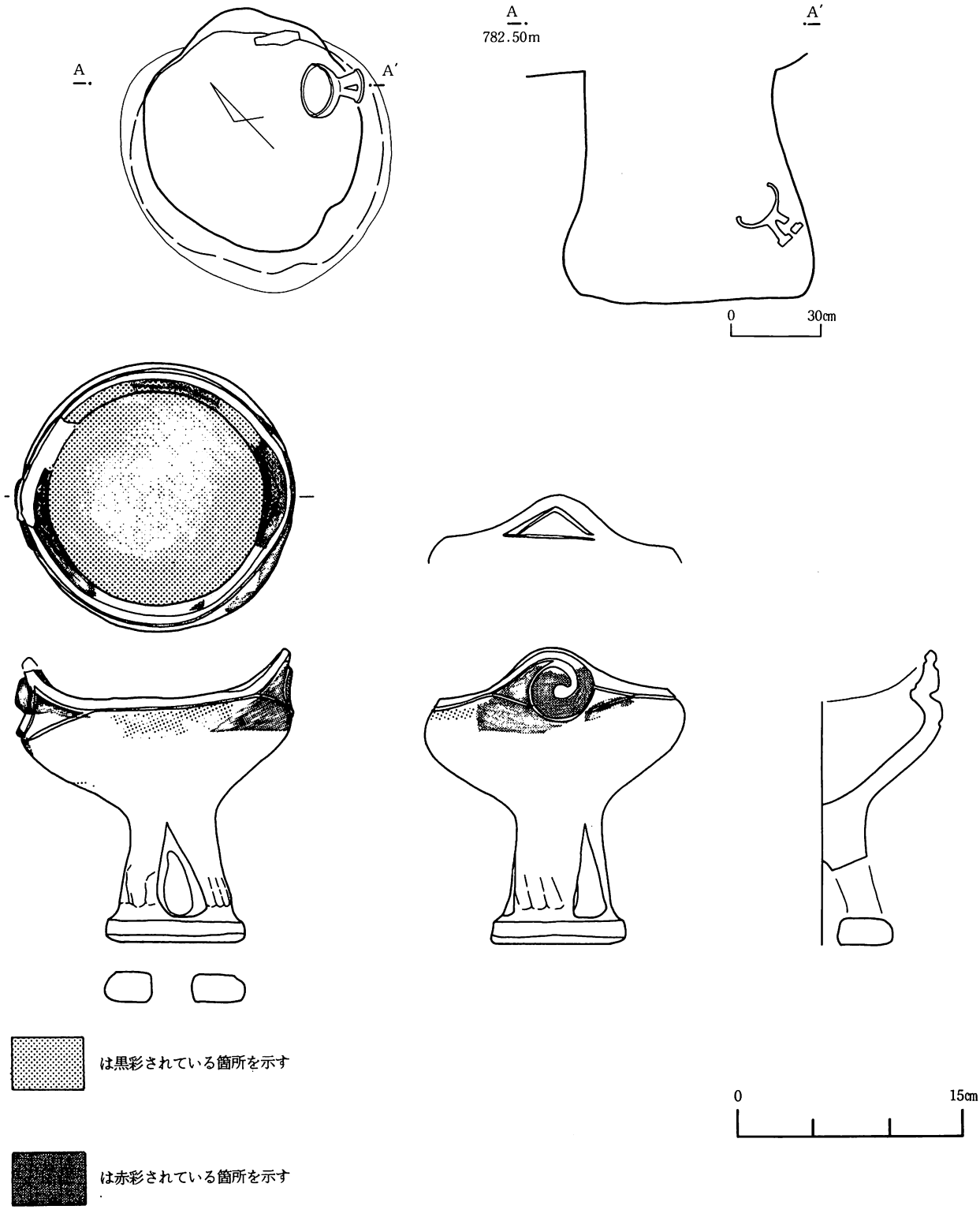
口縁部に付された突起部の外面では赤彩が明瞭に認められるが、鉢の丸みをもってやや下がった箇所では、一部分に赤彩の痕跡が認められるものの明瞭ではない。このことから、器面全体に赤彩が施されていた可能性がある。しかし脚部については、赤彩は認められない。鉢の内面においては、口唇部で認められる。

黒彩されている箇所は、口唇部と鉢の底面全体に認められる。

特殊脚付鉢の突起部までの器高は19.5㎝、口径は18.6㎝、脚底部径は9㎝を計測する。器面全体は丁寧に磨かれ、この特殊な土器は井戸尻式期に比定される。（山本茂樹）

250号土坑（第88図） 南北約140㎝、東西約105㎝、深さ約35㎝の浅い土坑である。この土坑からは琥珀製品や破片が出土しており、このうち垂飾の完形品が2点（第89図2.3）、孔の認められる破片や形状がある程度推定できる破片が4点存在し（第89図4.5.6.7）、風化が著しく本来の形状を復元することが困難な細片や細粒は17ケ所で認められている。これらの琥珀は半透明で赤味を帯びた飴色を呈する。琥珀製品のうち、2は分銅形の垂飾で孔が縦に貫通する。側面は丸味を持ち、底面・上面は平滑に磨かれている。この垂飾は最初に出土したもので完形品であったが、出土後暫くして崩壊が始まり、孔の部分で縦に割れてしまった。3はやまり垂飾の完形品で、しかも出土後も状態が良好でまったく崩壊していない。形状は分銅形に近いが、張りだした部分が存在する。孔内には穿孔が両方向からなされたことを示すズレが認められる。琥珀の表面は上面・底面・側面共に良く磨かれている。3の琥珀製垂飾の資料的価値を高めているのが共伴して出土した土器片（第89図8.9）であり、これらは同一個体で五領ケ台期に属する。4の琥珀は破片で円盤型を呈し、両面は滑らかに仕上げられているが、穿孔の痕跡は認められない。5の琥珀は穿孔の痕跡を明確に残す破片であり、孔と反対の面は平滑に磨かれている。6.7は小破片であるが、穿孔の痕跡を残している。

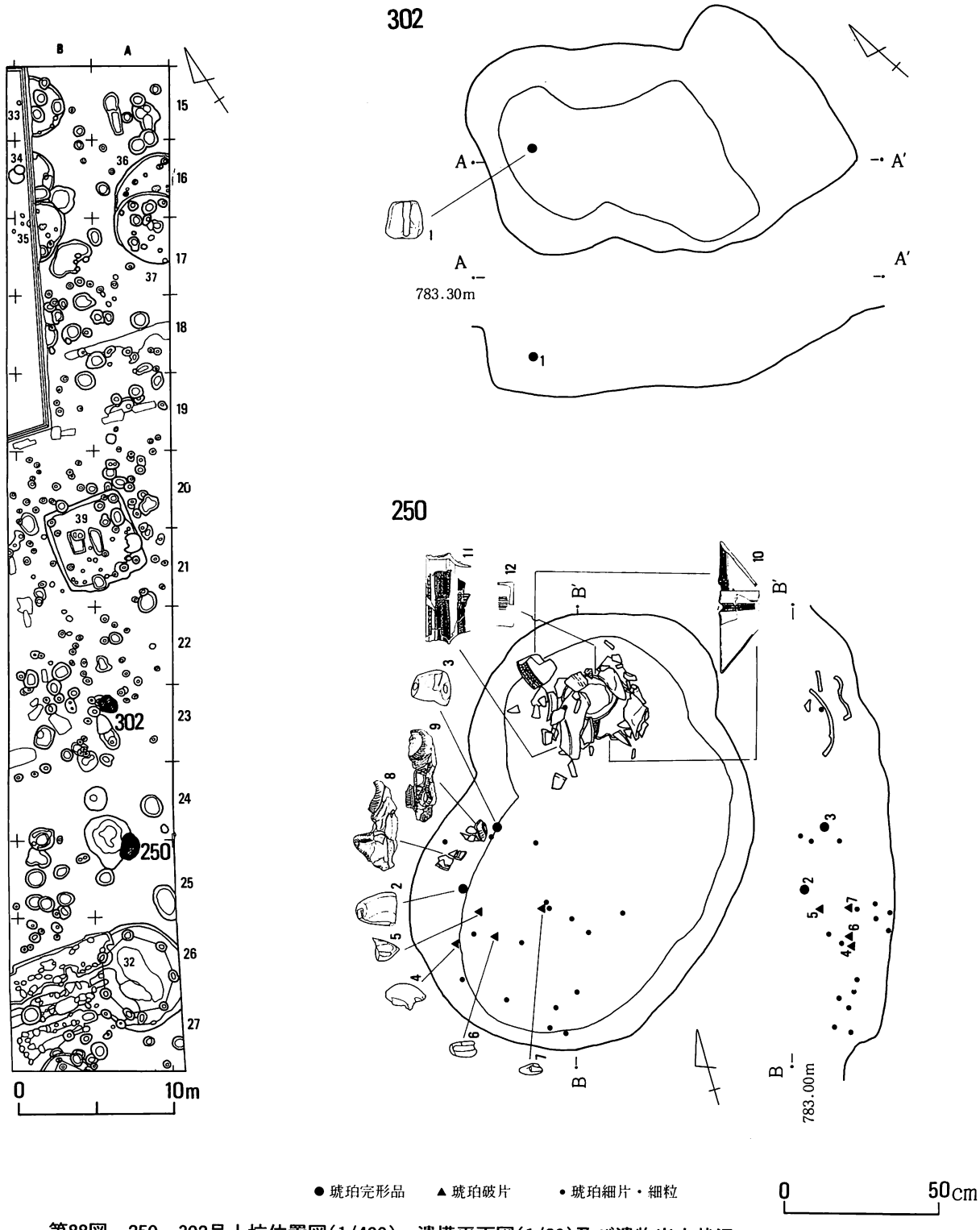
土坑内における琥珀の分布は、土坑の南西部分が中心で完形品は比較的高い位置に存在する。これら多数の琥珀製垂飾と破片により、本土坑の性格は墓坑とするのが妥当であろう。土坑の北側部分には土器が集中しており、南側部分と様相を異にする。これについては2基の土坑が重複している可能性もあるが、出土土器（第89図10.11.12）が8.9の土器と同じく五領ケ台期のものであることや、北側部分から琥珀の細片が土器と共に出土していることから、1基の土坑北側部分に土器が埋められ、南側部分に琥珀の垂飾を伴う遺体が埋葬されたと見ること



第87図　248号土坑(1/20)及び出土遺物(1/4)

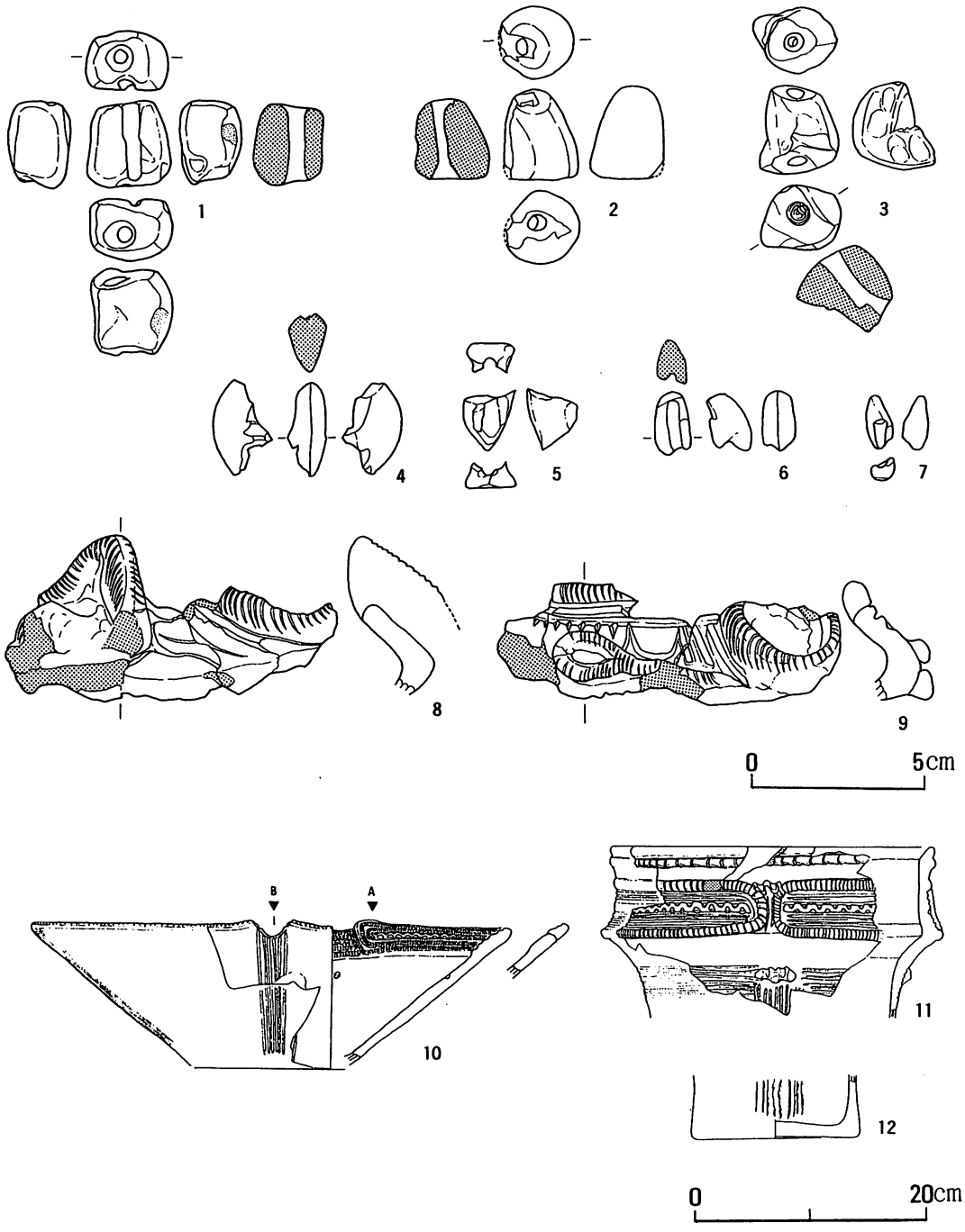
もできる。10は内面の口縁部に文様帯を持ち、外面に縦方向の平行沈線を4単位持つ浅鉢でほぼ半分が残存している。破片両端2ケ所に補修孔が認められるものの穿孔途中でやめている。11は深鉢で、口縁部は爪形文を施す隆帯で区画され、区画内に横位細沈線と交互刺突を施す。胴部は横位細沈線と基点となる箇所に横位の突起を施し、細沈線を垂下させる。12は深鉢の底部付近の破片である。長野県富士見市の大石遺跡1号住居址ではこの3点と同じタイプの土器が、また、11については同じ大泉村の小坂遺跡で類似した土器が出土している。

302号土坑（第88図）南北約120㎝、東西約65㎝、深さ約25㎝の浅い土坑である。土坑の北寄り、底面から高さ13㎝の部分で琥珀製垂飾が1点出土している（第89図1）。これは250号土坑の琥珀製品と同様に、赤色を帯びた飴



第88図　250・302号土坑位置図(1/400)・遺構平面図(1/20)及び遺物出土状況

色を呈し、崩壊のない良質な琥珀製垂飾である。形状は丸味を持った直方体であり、表面は丁寧に磨かれている。貫通する孔に平行して、琥珀表面に穿孔の痕跡が残るが、これは穿孔に失敗したものか、あるいは琥珀の原石から垂飾1個体分を分割する際の穿孔の名残かもしれない。共伴する土器は皆無である。　(五味信吾)



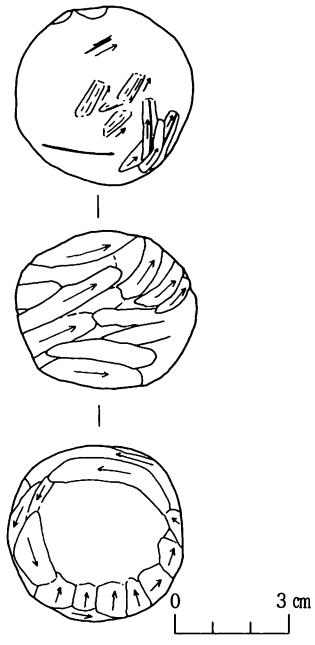
第89図　250号土坑(２～12)・302号土坑(１)出土遺物１～９(1/2)、10～12(1/６)

本節は、「甲ッ原遺跡概報II」(1993・３)を基に再掲載したものである。その後、本遺跡出土の琥珀を赤外吸収スペクトルによる分析法を用いて、その測定方法および測定結果が「研究紀要10」で論じられた。詳細については、研究紀要を参照されたい。

引用・参考文献

山梨県教育委員会『甲ッ原遺跡概報II』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第83集1993五味信吾・野代幸和「山梨県北巨摩郡大泉村甲ッ原遺跡出土琥珀の産地同定(1)―赤外吸収スペークトル分析―」『研究紀要10』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター1994

第8節　土　　鈴（第90図）（図版10）



第90図　土鈴（1/2）

この土鈴は、本遺跡内において出土した唯一の土鈴である。X－43グリッドの遺構確認作業中、遺物包含層より遺構に伴わず出土し、発見された位置を図面に記録するのみであった。またその後の調査により、137号土坑がその下に存在していた。

本土鈴は完形品で、球形状を呈する。外面は無文で、5㎜幅のヘラ状工具による整形痕が底面と思われる平坦面に平行或いは右斜め上に押し引きされている。平坦面と球状をなす接合部については上から下へ粘土をのばし、その後横方向のなでによって面が調整されている。胎土には、小粒の石が認められ、雲母は含まれてはいない。色調はやや赤みがかった褐色を呈する。形状は、上下がやや偏平をなす球状で、鰐口および孔は存在しない。球面には、粘土特有の粘り気が気泡状に残されており、指によるものと思われる。また整形は丁寧な仕上げが行われておらず、整形の際残された粘土溜まりが各所で認められる。本土鈴の特徴として、製作技法があげられよう。坂井遺跡において、「土鈴の製作手法は、椀形のものを２個つくり合わせて掌にのせ、ころがしながら丹球をつくったのであろう」と記載されている。しかし本土鈴については、団子を製作するように丸みをもたせ、中に小石或いは土玉を数個入れた後、蓋をするような製作方法である。その痕跡が明瞭に認められ、蓋をされた箇所は平坦面として残存し、接合箇所には縦或いは横方向にヘラ状様工具によって貼り付けがなされる。そのために、底の部分との接合箇所には鋭い角ができている。横径約4.8㎝、縦径約4.2㎝、重さ57gをそれぞれ計測する。

県内の出土例としては、先に記した坂井遺跡（韮崎市）を始めとして、釈迦堂遺跡（一宮町）・宮の前遺跡（市川大門町）・曽根遺跡（櫛形町）・柳坪遺跡（長坂町）・飯米遺跡（須玉町）・上野原遺跡（中道町）・酒呑場遺跡（長坂町）・社口遺跡（高根町）で認められている。

出土としては、住居内および遺構外で、坂井遺跡・釈迦堂遺跡・柳坪遺跡・宮の前遺跡・酒呑場遺跡・社口遺跡が住居内からの出土である。この内中期後半に属するものは、坂井・釈迦堂・柳坪遺跡で、井戸尻から曽利Ⅰに属するものは、宮の前遺跡である。

土鈴の中身であるが、小石が入れられているものには坂井遺跡があげられる。また特筆すべきものとして、飯米遺跡出土の例で、幸か不幸か遺構確認時において壊され、結果として土鈴の中に入れられたものが明らかにされた。中からは、炭化した長さ４㎜の種子が30粒ほど出てきており、豆科に属するものであることが判明している。この土鈴は、遺構に伴っての出土ではないが、球状をなす直径4.5㎝の完形品であったことが報告されている。完形品出土のものは、坂井遺跡・釈迦堂遺跡で、釈迦堂遺跡では、18個の土鈴中６個が完形品で、２／３が欠損品である。坂井遺跡では４点の出土で、この内２点が完形品である。また酒呑場遺跡においても完形品で出土した土鈴も存在する。

県内において、縄文時代の遺跡の調査はかなり多く行われているが、土鈴が確認された遺跡となるとその数は非常に少ない。釈迦堂遺跡から出土した土鈴の数は、一遺跡内では最高の数であり、これほど多く出土した遺跡は県内では見当たらない。また土鈴の出土した遺跡を県内でみると、釈迦堂遺跡は最も東に位置し、ほとんど北巨摩方面で、長野県に近接する場所といえる。

また近県の長野県で出土した遺跡は、棚畑遺跡・南中島遺跡・山影遺跡で、土鈴と思われるものでは、居平遺跡があげられ、遺跡内からの出土数は少ない。

土鈴の用途としては、これからの研究課題となることと思われ、遺跡の性格・出土状況等をあわせて考えていかなければならないであろう。

第９節　平安時代の住居跡と出土遺物

39号住居跡（第91図）

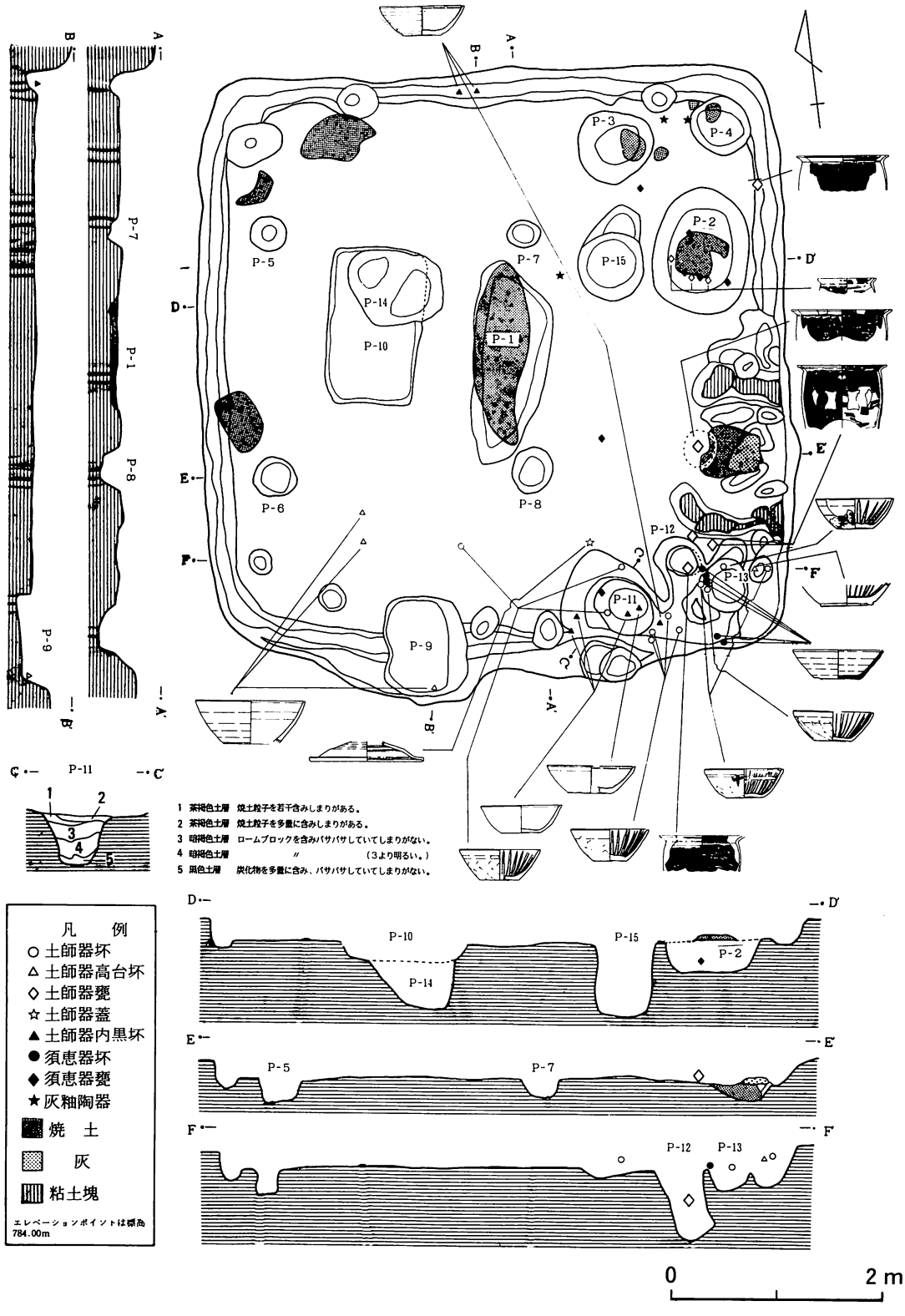
本住居跡は、Ａ・Ｂ－20.21グリッドに位置する。１辺約 5.5mの正方形を呈する大型の住居跡で、方位はほぼ磁北に合致する。覆土は黒褐色土で、縄文時代の住居跡の覆土とは明らかに異なる。床面は確認面より約30㎝の深さであり、住居跡の各辺には床面から10㎝程度掘り込んだ幅約20～30㎝の周溝が存在する。カマドは住居跡の東辺中央よりやや南寄りに存在し、規模は左右の幅約150㎝、奥行き約110㎝である。袖の部分には粘土塊が残存していたものの、煙道の痕跡・袖石などは認められなかった。カマドの中央部分には灰が塊の状態で認められ、その周囲には焼土や床面が炎によって赤焼けした痕跡が残る。一方、住居跡の中央にも南北180㎝、東西60㎝の浅い掘り込み内（Ｐ－１）に焼土が存在するほか、これ以外にも住居跡の北辺・西辺の周溝付近、北東隅のピット内（Ｐ－２．３．４）に焼土の痕跡が残る。柱穴については、住居跡の西辺と中央付近に南北に並ぶ４ケ所のピットがほぼ等間隔（約240㎝）に位置し、これに該当すると考えられる（Ｐ－５．６．７．８）。こうした住居跡のカマドと反対側に４ケ所の柱穴が偏る例は長野県松本市周辺でも確認され、Ｂ２類として位置づけられている。住居跡の南壁と４ケ所の柱穴の中央には住居跡と方位を同じくする長方形の浅い落ち込み（Ｐ－９．10）が存在し、住居に付属した施設と考えられる。住居跡の東南隅には、深さ40～60㎝のピットが２基（Ｐ－11.12)存在するが、このうちＰ－11は底面に黒色の炭が約15㎝堆積しており、カマドに伴う炭の貯蔵穴の可能性がある。

39号住居跡の出土遺物（第92図）は、須恵器（坏・甕）、土師器（坏・高台坏・蓋・甕・皿）、灰釉陶器である。１～５の土師器坏はいわゆる「甲斐型坏」であり、内面体部に放射状暗文と外面体部下半に斜方向のヘラ削りが施されている。口径11.0㎝前後、底径4.8～5.4㎝で、底径が口径の半分より小さくなる。底部の調整は回転糸切り後、部分的にヘラ削りを施している。６～８は長野県地方に多く見られる「内黒坏」であるが、８は内面が赤褐色に変色しており、２次焼成を受けた可能性がある。口径11.6～12.5㎝、底径5.6～6.0㎝である。９は須恵器坏で、口径12.6㎝、底径6.0㎝である。10は土師器の蓋で、内面体部にラセン状の暗文を有し、口径16.0㎝である。11.12は土師器の高台坏であるが、11が厚手で内面体部に放射状暗文を有するのに対して、12は薄手で暗文も見られない。なお、12のタイプの高台坏と10のタイプの蓋はセット関係になる可能性がある。13～17は土師器甕で、内面の口縁部から胴部にかけて横方向のハケメ、外面の頸部から胴部にかけて縦方向のハケメを有す。しかし、15～17が金雲母などを多く含むいわゆる「甲斐型甕」であるのに対し、13.14は胎土が非常に緻密で、不純物をあまり含まない点で大きく異なる。このうち、13は口径16.5㎝の小型、14は口径24.0㎝の大型の甕で、大小２つのタイプが存在する。15～17も大型で口径は25.0～28.8㎝である。13の小型甕は口縁が短く内弯するのに対して、他の大型の甕は口縁が薄手で長いという特徴を持ついわゆる「薄口縁型」である。

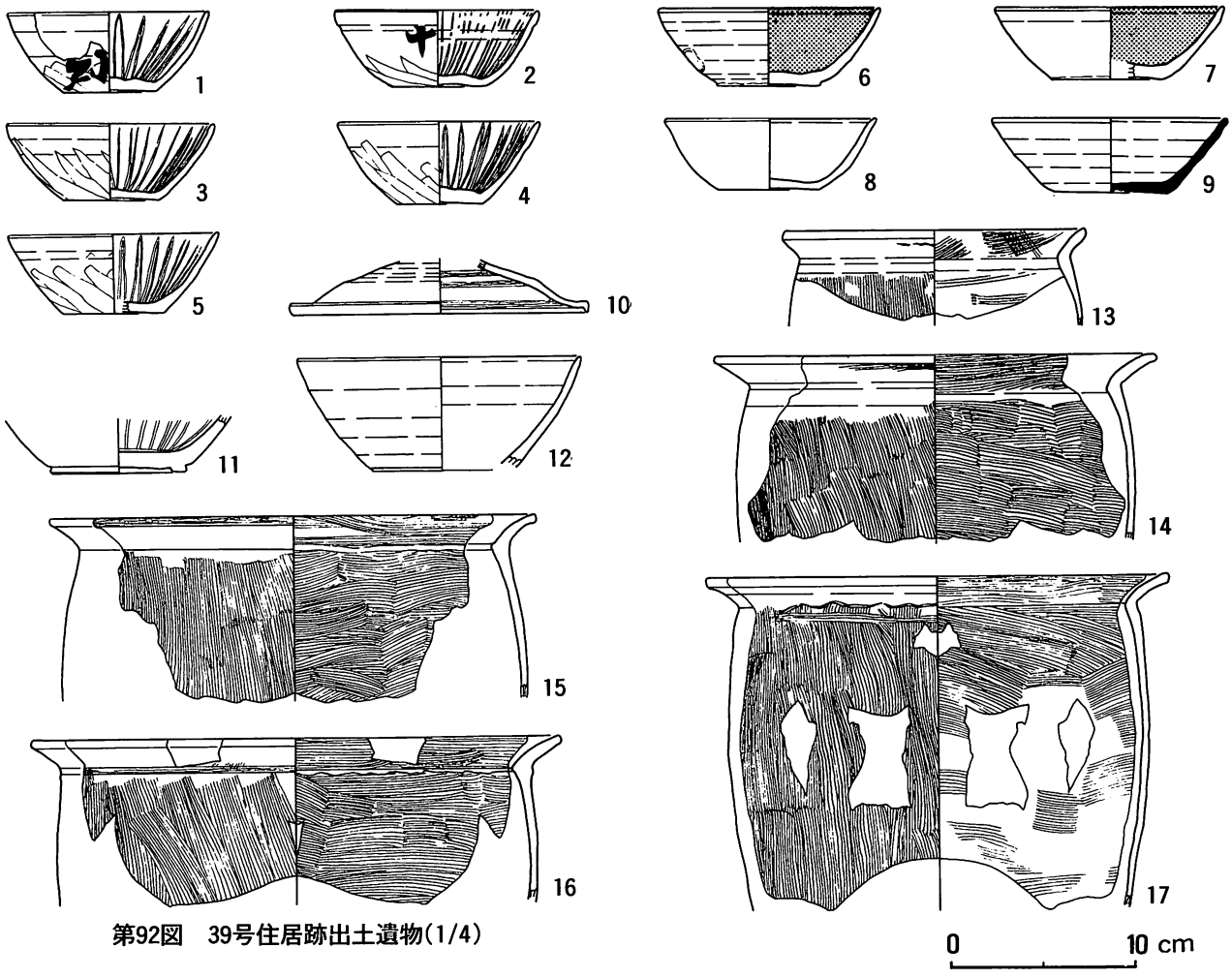
1～5の坏は「甲斐型土器編年」の第Ⅸ期に該当し、大型甕が「薄口縁型」と呼ばれるタイプであることや灰釉陶器の存在もこれに符合する。「甲斐型土器編年」の実年代については、周辺県の編年との間に数十年の隔りが存在することから再検討され、第Ⅸ期はこれまでの10世紀初頭から９世紀の中頃に早める案が提起されている。この編年案に従うと、八ヶ岳南麓地域においては「甲斐型土器編年」の第Ⅷ期（９世紀前半)に突然大規模な集落が発生し、第ＸⅡ期（10世紀前半)に最盛期を迎え、第ＸⅢ期（10世紀後半)以降急激に衰退していくという様相がみられる。39号住居跡は第Ⅸ期に属し、この地域の平安時代の住居としては比較的早い時期のものである。

墨書土器については、文字の判読可能な２点（１は「判？」、２は「十」）と判読の困難な数点が出土している。文字は、１が外面の体部下半、２が外面の口縁近くに正位で書かれている。本遺跡の西１kmに所在する寺所遺跡では39号住居跡より新しい第ＸⅠ～ＸⅢ期を中心とした31軒の住居跡から400点余りの墨書土器が出土しており、その大半は「侈」という文字が書かれている点、最も規模の大きい13号住居跡からは200点もの墨書土器が出土している点で注目されている。39号住居跡の墨書土器は寺所遺跡のような新しい時期の墨書土器と比較して、文字が比較的小さく丁寧に書かれているが、これは長野県内でも一般的に見られる特徴である。

39号住居跡における遺物の出土状態は第91図のようであり、甕類が主にピット内とカマド周辺から検出されて



第91図　39号住居跡(1/60)



第92図　39号住居跡出土遺物(1/4)

いるのに対して、坏類は住居跡の東南隅すなわちカマドの南に分布している。この付近のピットは何らかの理由で埋め固められた痕跡があり、坏はその上に正位しかも近接して並んだ状態で検出され（第91図Ｐ－13、第92図1.2.3.9)、どれも部分的に欠損しており完全なものはない。こうした出土状態は住居使用時の産物というよりも、廃絶に際しての意図的な行為に起因する可能性がある。さらに、土器の分布と先に述べた柱穴とカマドの関係と併せて、この住居を４本柱によって形成された西半分の「居間的空間」とカマドを中心とした東半分の「厨房的空間」に大きく分けることができる。　（五味信吾）

引用・参考文献

長野県教育委員会　1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書４－松本市内その１－　総論編』
坂本美夫・末木健・堀内真　1983「甲斐地域」『シンポジュウム奈良・平安時代土器の諸問題』　神奈川県考古同人会
坂本美夫　1989「甲斐型坏－編年について(1)－」『山梨考古学論集II』山梨県考古学協会
山梨県考古学協会　1992「甲斐国における平安時代研究の現状と課題」『山梨県考古学協会誌』第５号
山梨県考古学協会　1992『甲斐型土器－その編年と年代－』甲斐型土器研究グループ第１回研究集会資料
金原正　1991「長野県内の古代集落遺跡と墨書土器」『信濃』43巻第４号
平川南　1991「墨書土器とその字形－古代村落における文字の実相－」『国立歴史民族博物館研究報告』第35集

附編　1

甲ッ原遺跡のテフラ

山梨文化財研究所　河　西　　学

はじめに

本遺跡は、八ヶ岳南麓の火山麓扇状地を開析する甲川と油川とに挟まれて尾根状に残存した南北方向の斜面上に位置する。この地形面は約８万年前の御岳第一軽石Ｏｎ－Ｐｍ１以上のテフラを含む褐色ローム層によっておおわれている。本遺跡からは縄文時代前期から中期および平安時代の住居址が検出されている。縄文時代の住居址の多くは褐色ローム層を掘り込んでつくられている。ここでは褐色ローム層中で広域テフラを検出することを目的としてテフラ分析を行った。

試料・分析法

試料は、第４次調査のグリッド中に設定された深掘断面において、鉛直方向に５㎝おきに高さ５㎝幅10㎝奥行き５㎝の部分から採取された。No.2付近はやや暗色を呈するが明瞭ではない。No.5を境として上部はソフトロームとハードロームとが入り組んで存在するが、下部はハードローム層である。

分析法は、従来の方法と同様である（河西，1989,1990)。鉱物粒子の観察は、1/4～1/16㎜の粒径砂をスライドグラスに封入し偏光顕微鏡下で行った。１試料ごとに火山ガラス・鉱物・風化物その他の粒子を含めた合計が500粒になるように計数した。火山ガラスの形態分類は遠藤・鈴木(1980)の方法に従った。細粒結晶を包有するＦ型火山ガラスはＦ′型として区別した。

分析結果

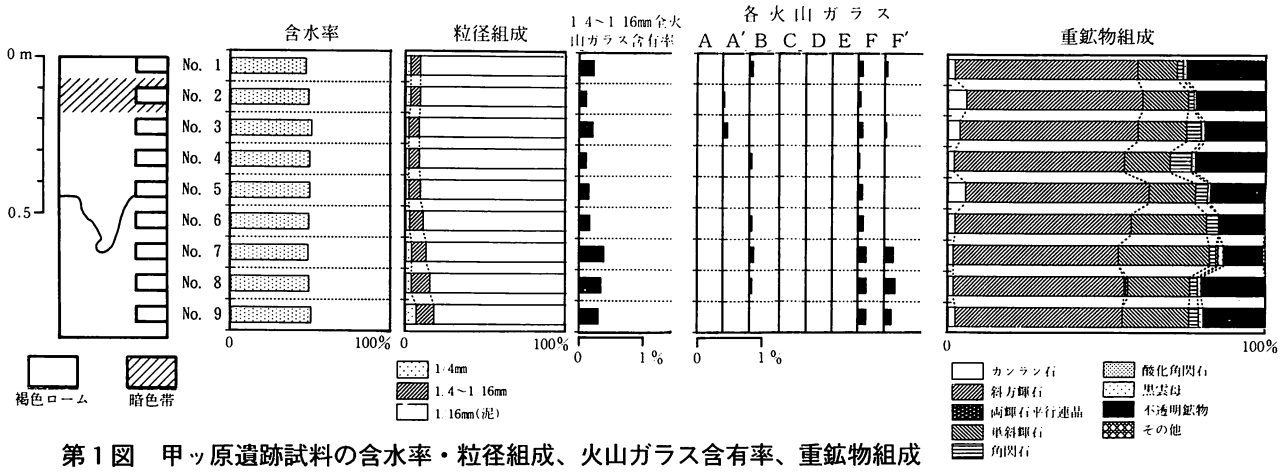
偏光顕微鏡下での計数結果を第１表に示す。これをもとに含水率（注１）、粒径組成、1/4～1/16㎜全火山ガラス含有率、形態別火山ガラス含有率を算出し第１図に示す。なお1/4～1/16㎜全火山ガラス含有率、形態別火山ガラス含有率は、試料単位重量当たりの1/4～1/16㎜粒径の火山ガラスの割合で表示した（注２）。

試料中の含水率は、45.4～48.7％とほとんど均質である。粒径組成では上方に向かって1/4㎜以上および1/4～1/16㎜粒径砂分の含有率が緩やかに減少する傾向が認められる。砂分含有率が最大のNo.9では、1/4㎜以上の砂分が7.3％、1/4～1/16㎜砂分が10.5％含まれる。試料全体に占める火山ガラス含有率も最大でNo.7の0.41％ときわめて少ない。形態別に見た場合Nos.7～9でＦ・Ｆ′型火山ガラスがわずかに連続して検出されるのみである。重鉱物組成では斜方輝石・単斜輝石・不透明鉱物を主体とし角閃石・カンラン石・黒雲母などをわずかに伴う。重鉱物組成において大きな変化は認められない。

以上の分析結果からは広域テフラを示す情報は得られなかった。八ヶ岳南麓で認められる姶良Ｔｎ火山灰ＡＴの火山ガラスも検出されなかった。したがって分析した褐色ローム層は少なくともＡＴよりも下位の層位であることはあきらかである。八ヶ岳南麓では褐色ローム層の上に整合的に黒色土が堆積しているが、本遺跡において

第１表　甲ッ原遺跡試料の計測鉱物粒数
（＋は計数以外の検出を示す、＊はスコリアを含む）

試料番号		No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6	No. 7	No. 8	No. 9
火山ガラス	A　無色	1	1							
	A　褐色									
	A′　無色	2	3	7	1	1		1		
	A′　褐色									
	B　無色	5	1	2	4	2	2	4	2	
	B　褐色						1			
	C　無色	1	1	1	1	2	1	1		1
	C　褐色									
	C　緑褐色									
	D　無色									
	E　無色									1
	F　無色	2	3	3	2	5	3	5	6	3
	F　褐色	4	1	3	1	1	3	2		4
	F　緑褐色									
	F′　無色	2	1	1		1	1	2		2
	F′　褐色＊	2		2				6	8	4
	F′　緑褐色									
石英		4	13	6	2		2	10		5
石英　β型			1							
長石		162	135	159	138	157	142	140	125	144
カンラン石		5	15	9	6	13	6	4	4	5
カンラン石　赤色						1				
斜方輝石		125	138	130	154	140	149	116	137	117
両輝石平行連晶									3	
単斜輝石		27	36	36	42	36	64	65	50	47
角閃石		4	4	11	19	10	11	5	6	7
酸化角閃石								1		
ジルコン				＋						
黒雲母		3	2	3	4	2		4	3	3
緑泥石								1		
不透明鉱物		55	56	46	66	43	40	29	53	45
その他		96	89	81	60	86	75	104	103	112
合計		500	500	500	500	500	500	500	500	500



第１図　甲ッ原遺跡試料の含水率・粒径組成、火山ガラス含有率、重鉱物組成

は薄い黒色土が褐色ローム層を不整合でおおっている。このことから縄文時代包含層である黒色土の一部からＡＴを含む褐色ローム層の間の欠如させるような地表面の削剝作用の存在が推定される。

注１　全重量に対する水分量の割合。湿重基準含水率。

注２　形態χ型の火山ガラスの含有率Ａχは、

$$A\chi\ (\%) = (C/B) \times (E\chi/D) \times 100$$

で算出される。ただし、

Ｂ：試料の乾燥重量（ｇ）

Ｃ：1/4～1/16㎜粒径砂分の重量（ｇ）

Ｄ：計数した1/4～1/16㎜粒径粒子の総数

Ｅχ：計数したχ型火山ガラスの粒数

文　献

遠藤邦彦・鈴木正章（1980）立川・武蔵野ローム層の層序と火山ガラス濃集層。考古学と自然科学，13，19－30。

河西学（1989）丘の公園地域のテフラと地形。山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第46集、『丘の公園第２遺跡発掘調査報告書』、165－184、山梨県教育委員会。

河西学（1990）立石遺跡での先土器遺物を包含する地層。山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要、6、47－58。

附編　2

甲ッ原遺跡出土漆塗土器の塗装技術について

国立歴史民俗博物館　永　嶋　正　春

はじめに

標記の遺跡では、従来からの発掘調査において、縄文時代前期に属する土器片で、赤彩の痕跡をとどめるものあるいは漆による塗彩さえ考えられるものが出土している。加えて第５次調査においては、当該期としてはきわめて典型的な漆彩文土器の断片が出土した。いわゆる押出タイプと言っていいような有孔浅鉢型土器の断片である。この種の土器は山形県押出遺跡における出土例をその代表とはするが、先行して発掘されている福井県鳥浜貝塚において、きわめて保存状態の良い断片が出土したことによりその存在が知られ、注目を受けることになったものである。筆者の知るところでは、この両遺跡以外の出土例としては、新潟県下の遺跡でその出土が確認されているだけであり、山梨県下での出土は、新たな知見を加えるものとして大変重要である。

この種の土器は、外観的に見て、赤色漆地に漆を用いて幾何学的な文様を描いたものと判断されているが、この素材や技法についてあらためて丁寧に観察することは、その技法を確定する上で是非とも必要である。今回の調査に際しては、資料そのものを、直接、光学顕微鏡によって丹念に観察するとともに、所定の箇所からごく小さな試料を採取してその層断面薄片試料を作製し、塗装技術の中身に立ち入っての検討を行った。なお使用されている赤色顔料はベンガラ（赤色酸化鉄）と推定されるのであるが、念のため蛍光Ｘ線分析による確認を実施した。以下にこれらの調査結果を報告するが、ここでは、Ａ地点の46号住居跡から出土した遺存状況の良好な漆彩文土器片（No.33）を中心にして取り扱うこととしたい。

調査結果

この土器片（Ａ地点46号住No33）の内外全面は、やや黒ずんだ淡赤色で覆われているが、その質感性状や割れ断面の状況からして、これは何等かの塗彩技法によるものであることは明白である。すなわち、胎土表面（器表面）の酸化発色でないことは一見して明らかである。

ところでこの淡赤色層は、胎土の表面にきわめて良く密着してごく薄い塗膜状を呈しているのが特徴であり（口絵図１）、土器などでよく認められるところの粉化したような赤色塗彩、例えばこの報告の最後の方で触れているＣ区248土坑出土の特殊脚付鉢の赤彩（口絵図７）などとは異質なものである。この淡赤色層には、微視的に見るときわめて細かな網状断文が生じており（口絵図２）、塗膜の硬質さをうかがわせるが、文様線で覆われた部分でも全く同じように断文が存在している（口絵図4,5)ことからすれば、この種の断文が後世の傷みによるものとは考えられず、器表面に赤彩を施すにあたって、必然的に生じたものと判断せざるをえない。この淡赤色層の表面を高倍率で観察したものが口絵図３であるが、赤色顔料と樹脂様のものとの混合物として捉えてよい性状を呈しており、層断面試料にはその特徴が端的に現れている。すなわち口絵図６で言えば、粒径が１ミクロンにも達しないような微粒子状の赤色顔料の周囲を、淡黄褐色の樹脂様物質が隙間なく充塡している。この赤色顔料は、赤色部分についての蛍光Ｘ線分析で鉄が有意に検出され、水銀は検出されないことから、ベンガラ（赤色酸化鉄）と判断できる。縄文時代の赤色顔料については、現在までの所、全国的に見ても朱（赤色硫化水銀）の使用が認められるのは後期初頭以降（ごく一部の例外はあるが）であり、本資料の赤色顔料がベンガラであることは納得できる状況である。顔料の周囲を充塡される樹脂様物質は、顕微鏡的所見としては施文に用いられた樹脂すなわち漆（後述）と一致しており、したがって、土器片の全面に塗られている淡赤色層はベンガラ漆と判断できる。ただし、前述のごとき微細な網状断文の存在は、このベンガラ漆が常温では塗布されていないことを意味しており、胎土表面への付着性の良さ、層の薄さとを合わせ考えれば、このベンガラ漆は器胎が熱い状態の時に塗布されたものと考えざるを得ない。すなわち焼付け技法による塗装であり、漆の硬化はきわめて短時間の

内になされたものと考える。ただし、熱による漆の変色すなわち褐色化、黒色化の程度は軽いので、極端な高温状態であったとは考え難い。ちなみに、ベンガラ漆層の厚さは、土器の外面では、厚いところで20ミクロン近くにもなるが、平均的には5～10ミクロン程であり、内面では更に一層薄いものになっている。

このベンガラ漆の上に描かれた文様は、幅が1㎜前後で甲盛り状を呈しており、外観色調はかなり光沢を有する黒色である（口絵図1）。文様には所々に縮みじわも見られるなど、相当粘稠性の高い素材であることがわかる。文様線の横断面を薄片状態にして見ると（口絵図4～6）、中央部（厚さは50ミクロン程）から左右均等にその厚みを漸減しているが、層内の均質性は高い。層の色調は透明感のある黄褐色～褐色を呈していることから、外観としての黒色は純黒ではなく、暖か味のある黒色を推察してよい。これらの外観や層の様子は、漆（くろめ漆）に一致するものであり、他の素材を考慮する余地は認められない。

ところで本遺跡から出土した土器のなかには、やや時代の降った頃のものとして赤彩の認められる資料がある。その一例がC区248土坑出土の特殊脚付鉢であり、その外面には、かなり粉化した状態で赤色顔料が遺存している（口絵図7）。微量に採取して赤色顔料の形態を検鏡したものが口絵図8であり、そこにはいわゆるパイプ状ベンガラ粒子が観察される。すなわちこの土器の赤彩には、外径が直径1ミクロン強で、長さは長いものでは10ミクロンを越えるような、パイプ状をした特異的な粒子形態のベンガラが使用されている。日本においては、この種のベンガラは、縄文時代早期から古墳時代に至までの間、全国各地でその使用が確認されてはいるが、その形態の特異性から、筆者はこれがどこか限られた地域でのみ自然産出するベンガラであり、それが直接あるいは間接的に広域に流通していたものと推定し、その現状把握に努めている。前者の資料すなわち漆彩文土器のベンガラはこの種のものに該当しなかったのであるが、この特殊脚付鉢の赤彩にその使用が確認できたことは重要である。なお、この粉化した状況からは漆を使用した塗彩とは考え難く、何か別種の接着剤の使用が期待されるのであるが、今の所、その特定は困難である。

おわりに

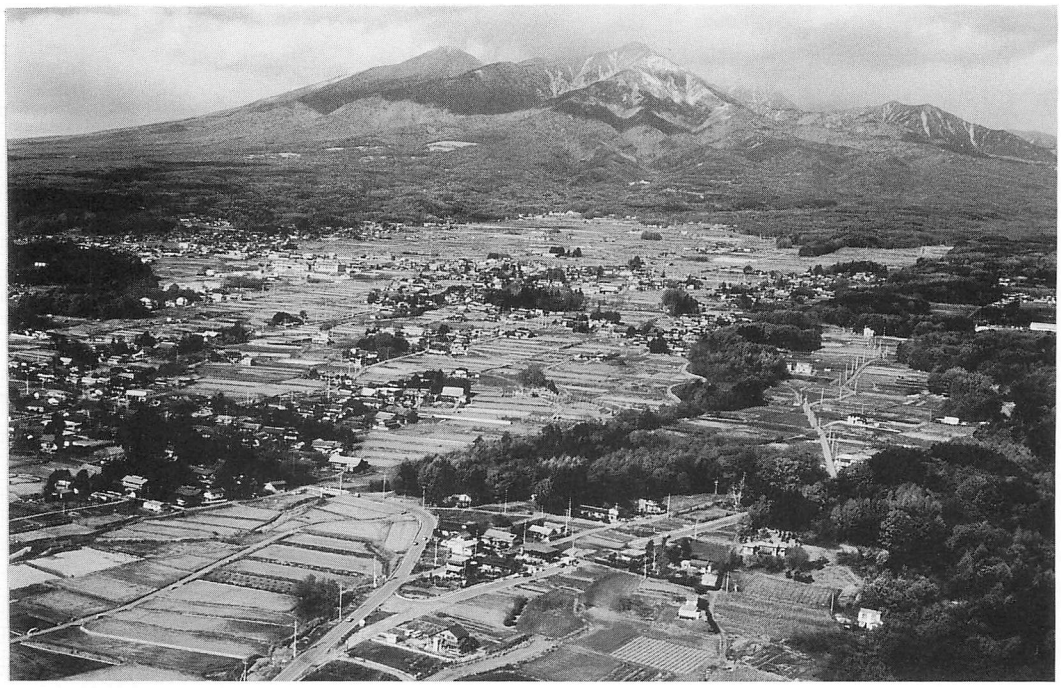
甲ツ原遺跡出土の、縄文時代前期に所属する漆彩文土器の塗装技術を調査して、それが器表面全面にベンガラ漆を焼付け塗布した後、漆（くろめ漆）で文様を描いたものであることが概ね確認できた。このことから、鳥浜貝塚や押出遺跡で出土している同種の土器についてもその塗装技術を類推できるものと考える。またこの種の土器が本遺跡から出土している事実はきわめて重要であり、しかもここで報告した土器片以外にも本遺跡並びに近隣の遺跡から同種の断片が出土している状況は、この地域における縄文名時代の文化を考究してゆく上で大きな問題を提示しているものと考える。

特殊脚付鉢の赤彩にパイプ状ベンガラ粒子の使用が確認できたことは、この土器が縄文時代中期中葉とされる事実と合わせて考えるべきである。今後、この地域の赤色関係資料をさらに追求してゆくことで、使用の時代的な広がり、使用の頻度、使用の確認できる資料の特質等を考えてゆくべきであり、また当然ながらパイプ状ベンガラの使用されていない赤色関係資料についても丁寧に把握する必要がある。

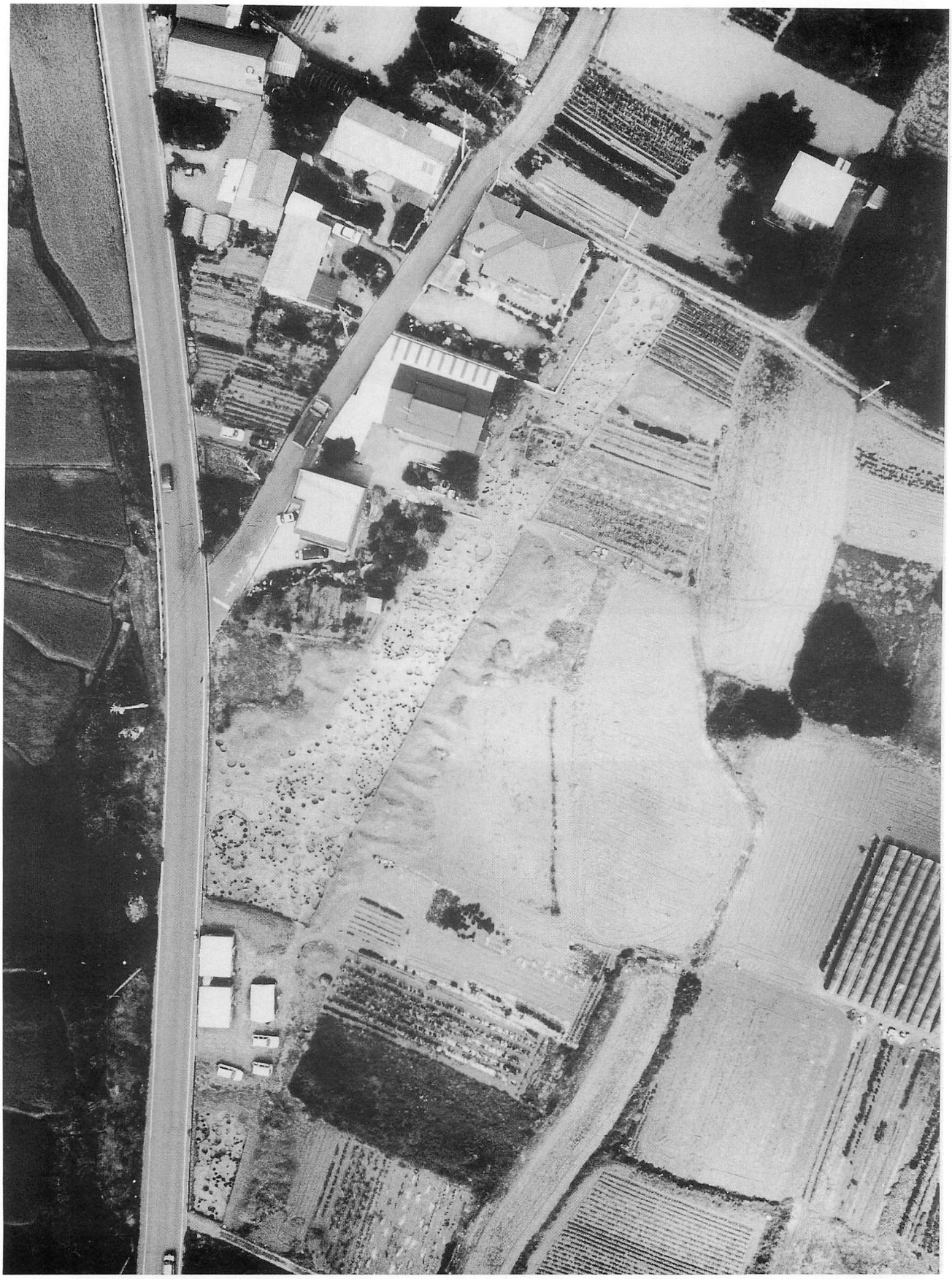
本調査の実施は、発掘調査関係者なかでも山梨県埋蔵文化財センターの方々の労に多くを依っている。末筆ながら記して感謝したい。

参考）展示図録　　漆文化ー縄文・弥生時代ー　国立歴史民俗博物館　1994年3月

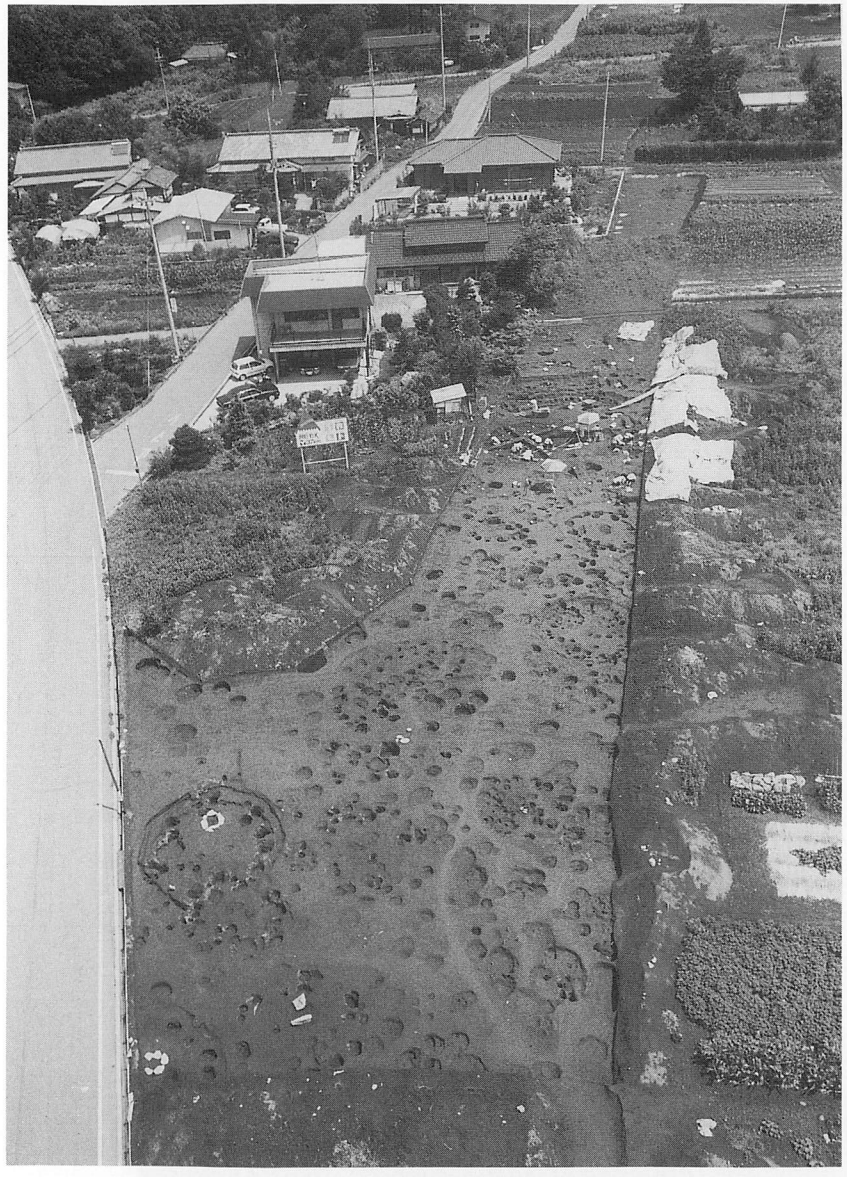
図　　版



（現道から分岐して直進する道路部分が甲ッ原遺跡調査区）

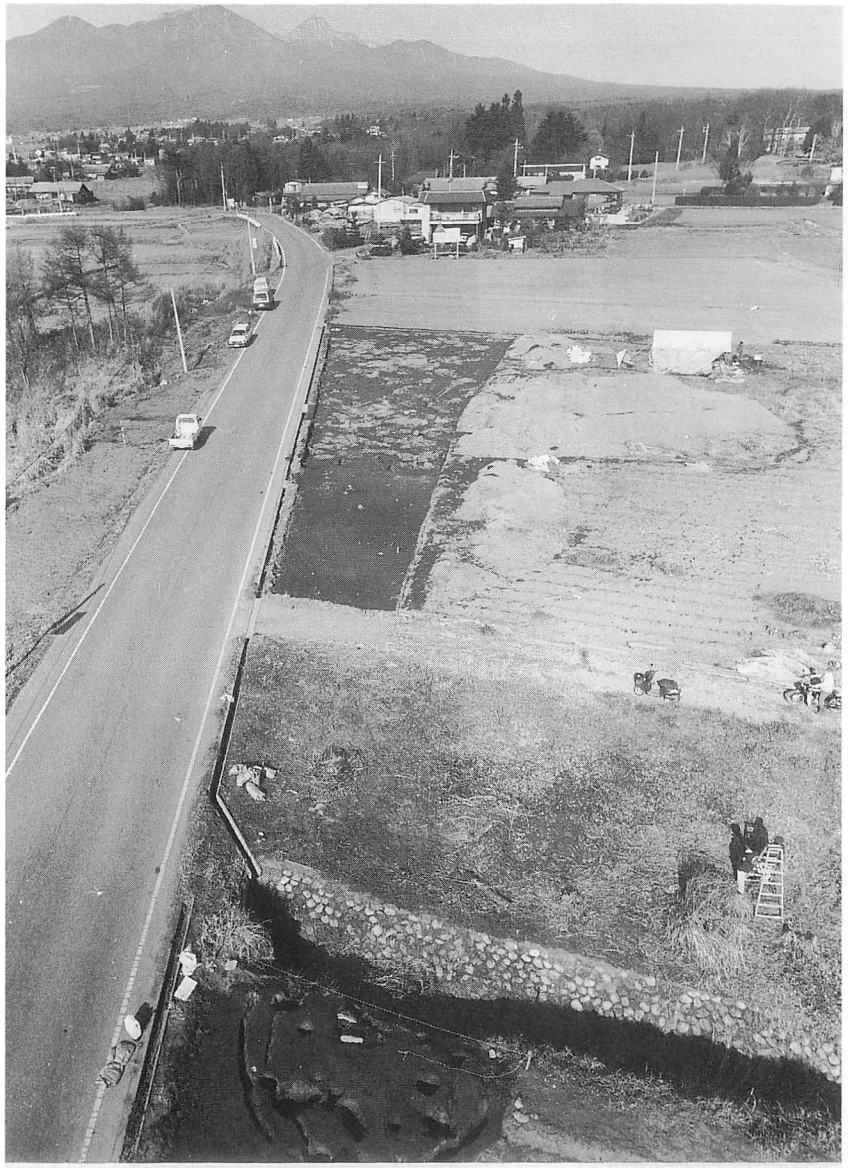


1992年度　第４次調査遺跡全体写真　（南方向から北方向）

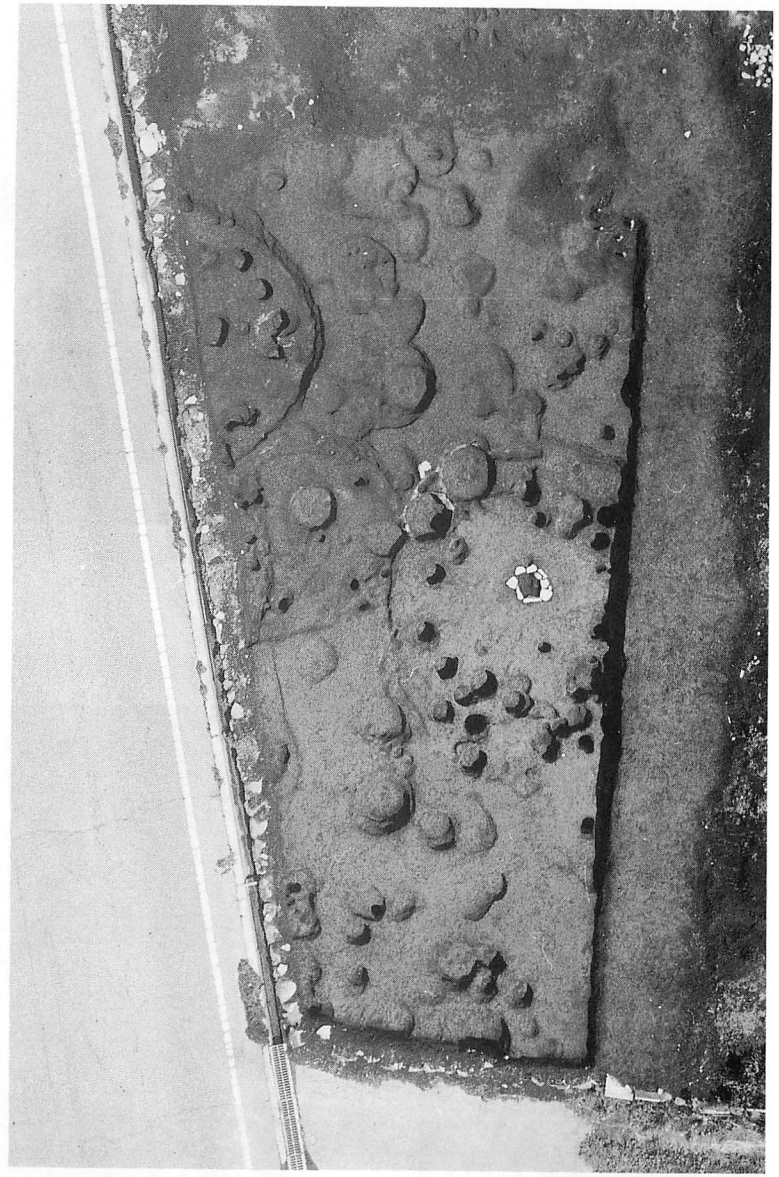


1992年度第 4 次調査Ｃ区遺跡全体写真

1991年度第 3 次調査遺跡全体写真（横断する道路より北はＡ区下はＣ区）

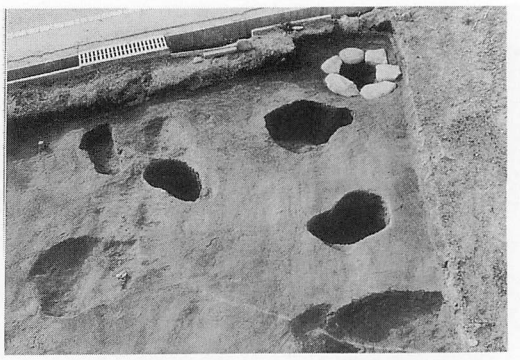


1991年度第３次調査Ｃ区遺跡全体写真（中央より上に見えるカンバン付近は1992年度第４次調査区）



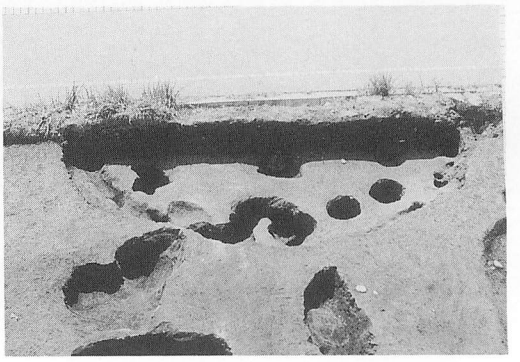
1992年度第４次調査Ｃ区（左の写真の中央部）遺跡全体写真

1 号住居跡



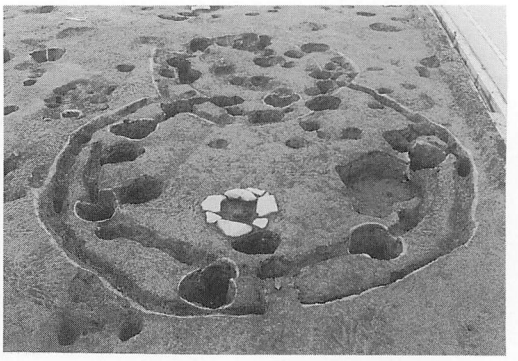
3 号住居跡

9 号住居跡



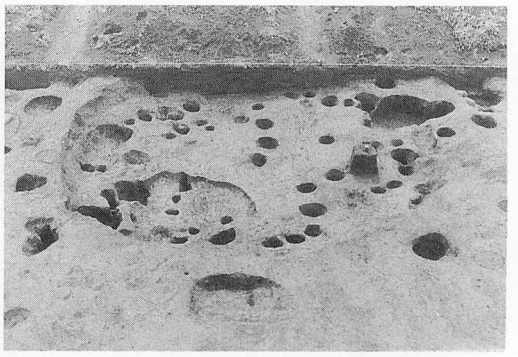
10号住居跡　奥175土坑

15号住居跡

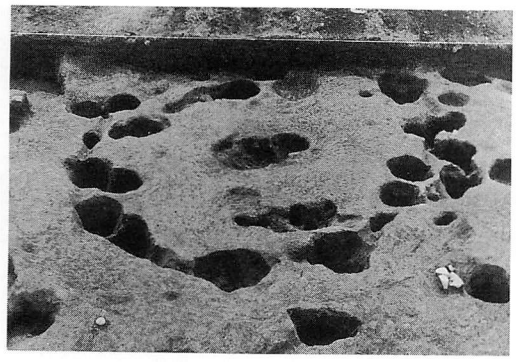


手前16号　奥14号住居跡

手前19号　奥(右)16号　奥(左)14号住居跡



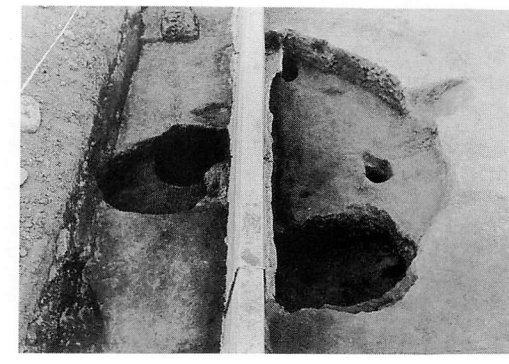
21号住居跡



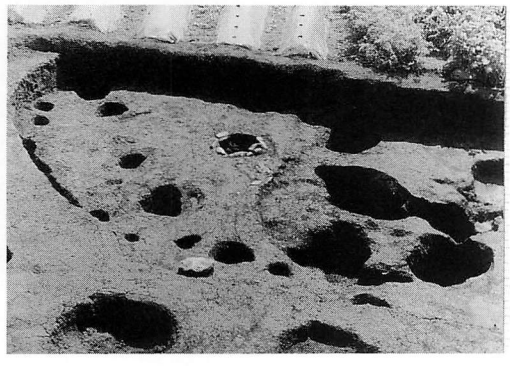
24号住居跡

31号　29号　26号　28号住居跡

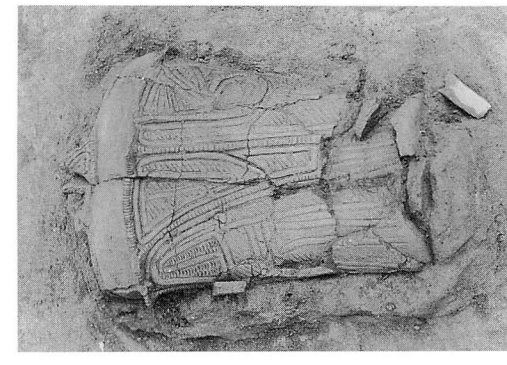
32号住居跡



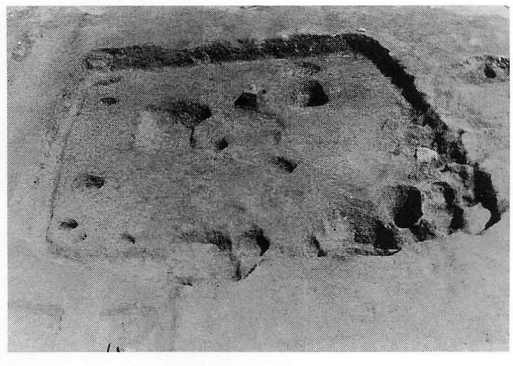
34号住居跡



(左)36号　(右)37号住居跡

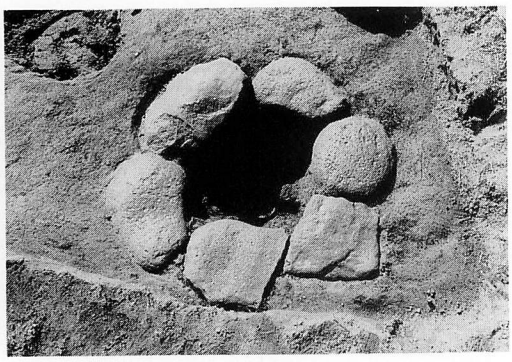


36号住居跡　遺物出土状況

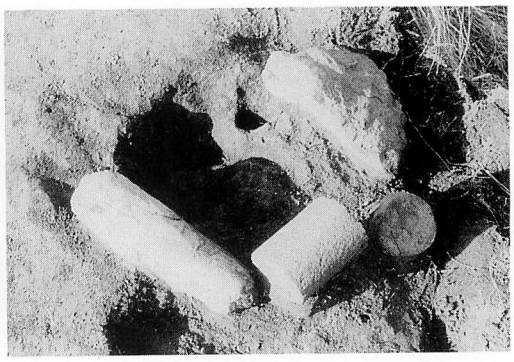


39号住居跡

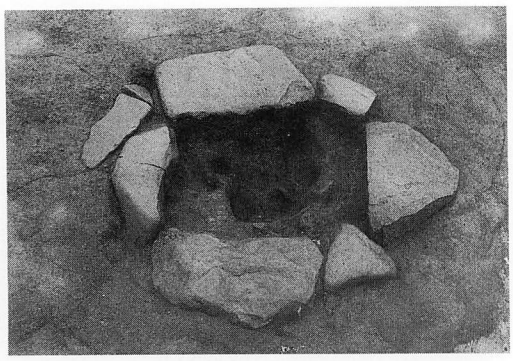
39号住居跡　遺物出土状況



3号住居跡　炉

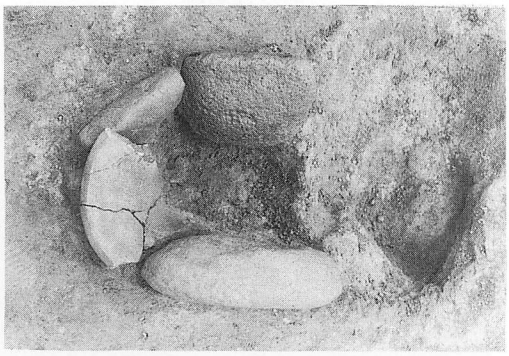


8号住居跡　炉



16号住居跡　炉

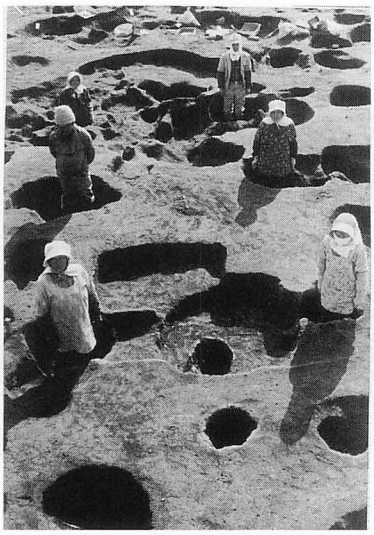
19号住居跡　埋甕炉

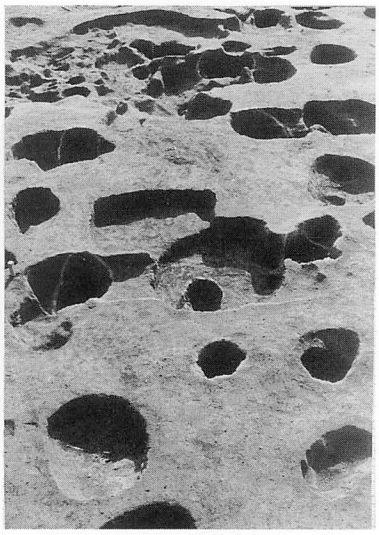


20号住居跡　炉

36号住居跡　炉

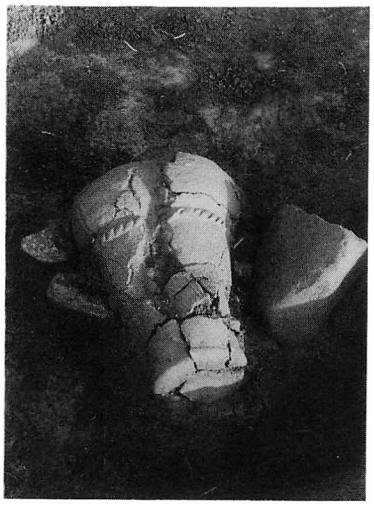
37号住居跡　埋甕炉



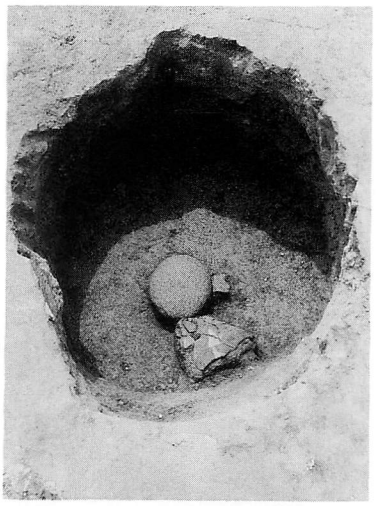


4号住居跡（掘立柱建物跡）

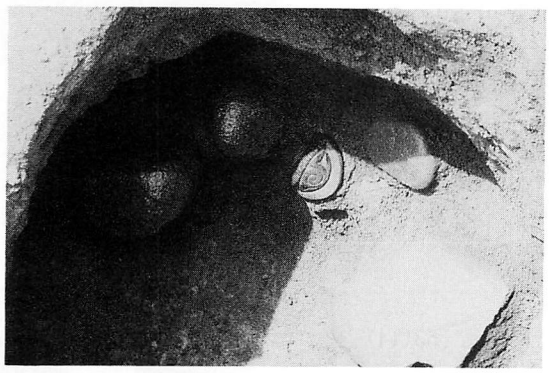
175土坑



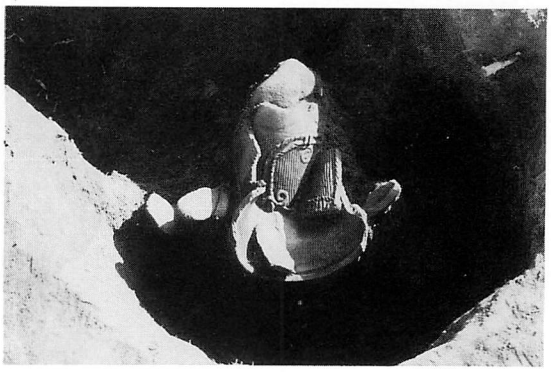
31土坑



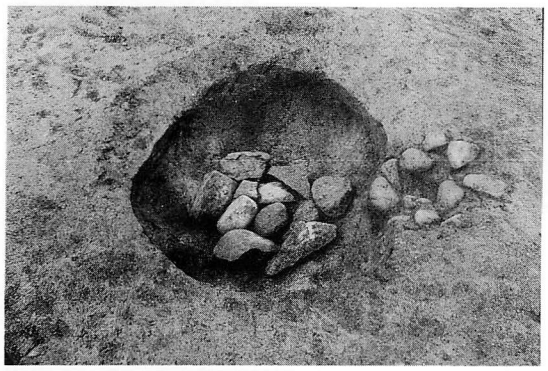
202土坑



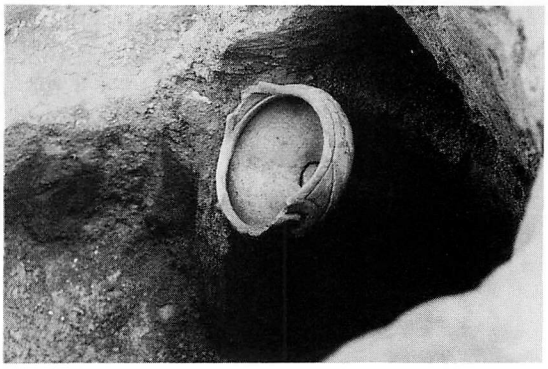
175土坑　坑底



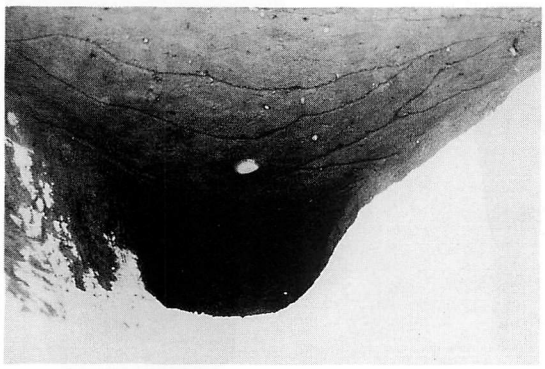
21土坑



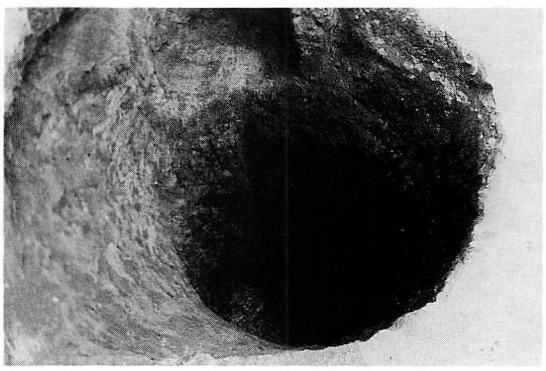
171土坑　集石



248土坑



246土坑　セクション



246土坑　完掘

5(06)

10(08)

21(09)

22(09)

53(14)

87(26)

89(26)

100(29)

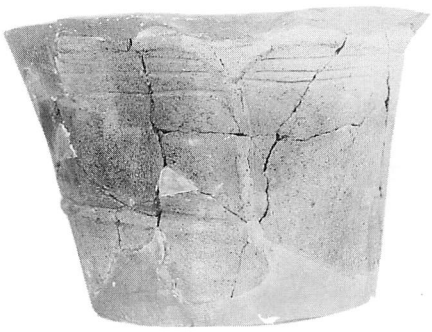
103(32)

104(36)

104(36)

106(36)

107(37)


108(37)

249土

021土

021土

135－1土

171土

16(08)

022土

64(19)

12住

12住

19住

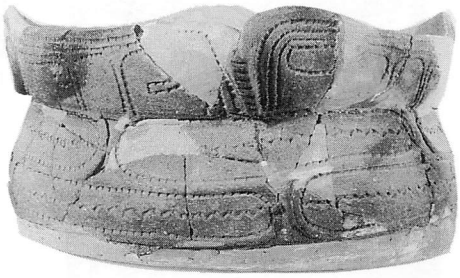
36住

131土

246土

138土

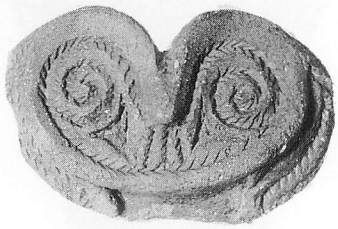
36(09)


64(19)

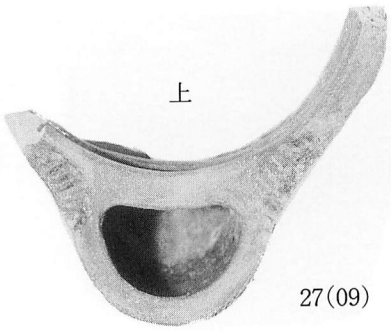
175土－2

109(39)

004土－3

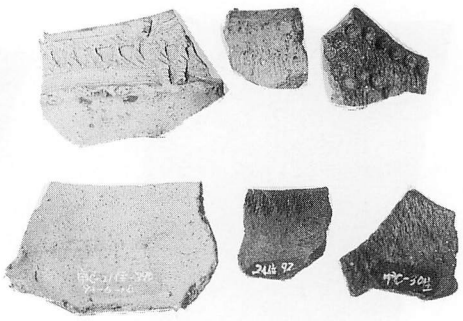


087土－1

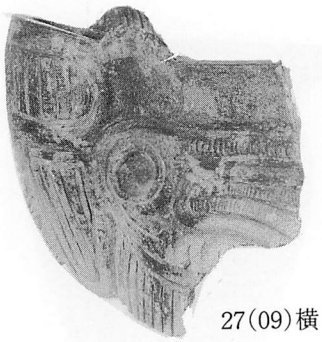


上

27(09)



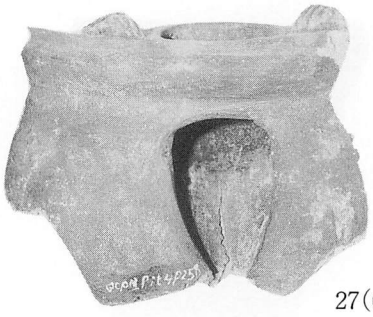
(21)　37(21)　1(29)



27(09)横

正面

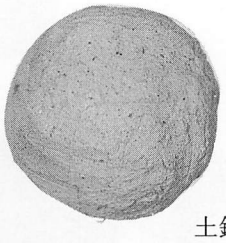
27(09)



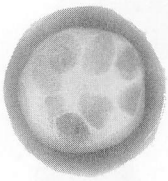
裏

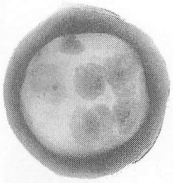
27(09)

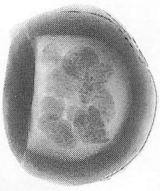
17(08)



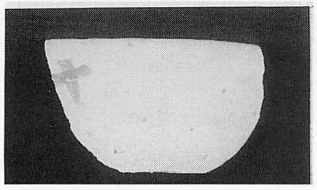
土鈴(完形)



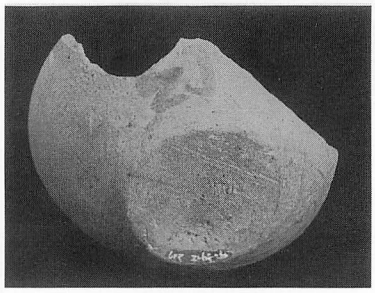




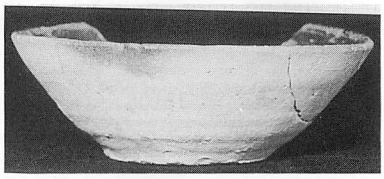
土鈴(完形)のX線写真



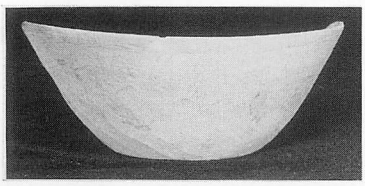
2



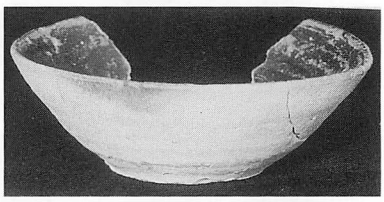
1



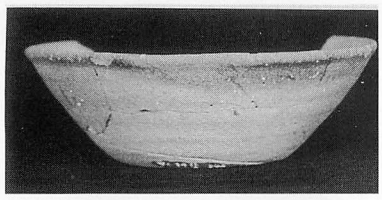
6



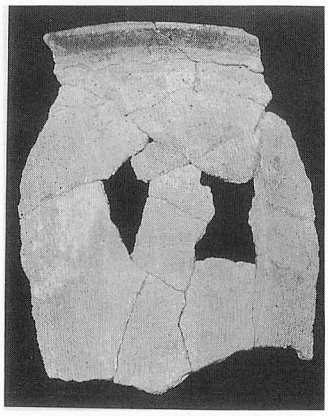
4



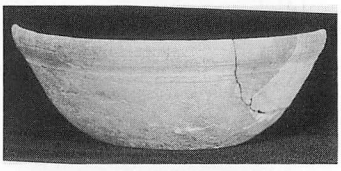
6



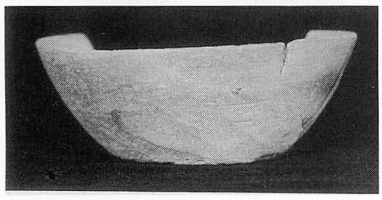
9



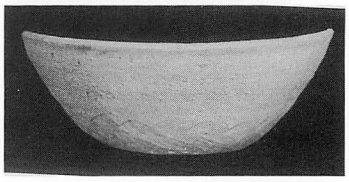
17



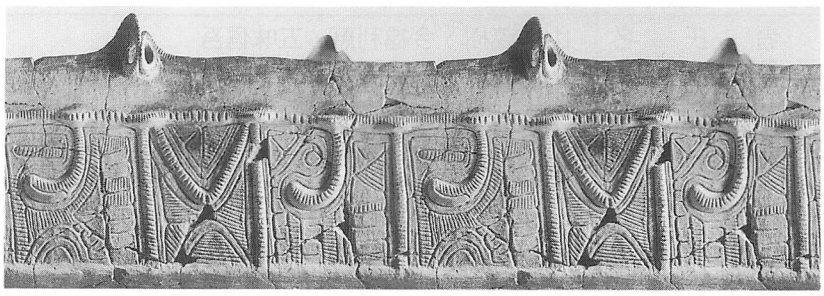
7



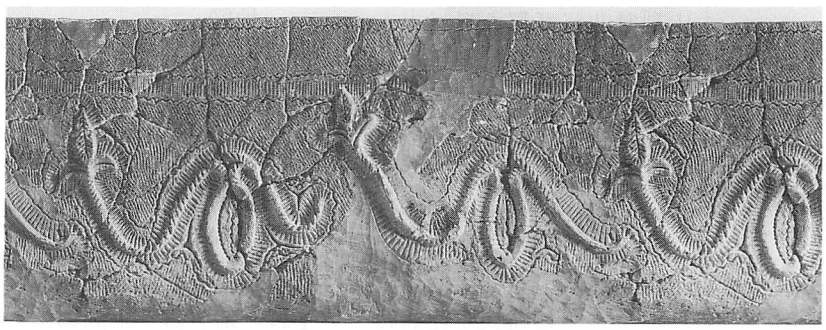
3



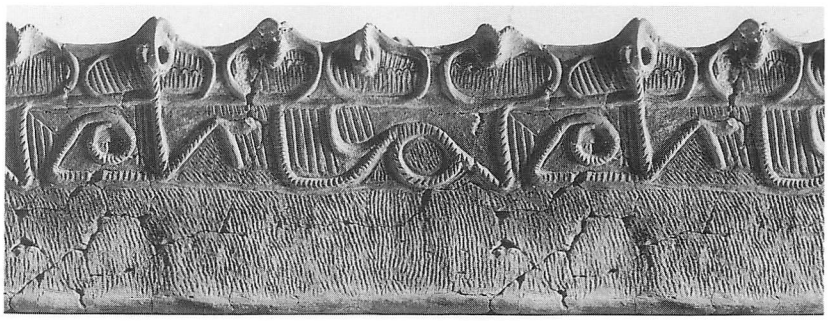
5



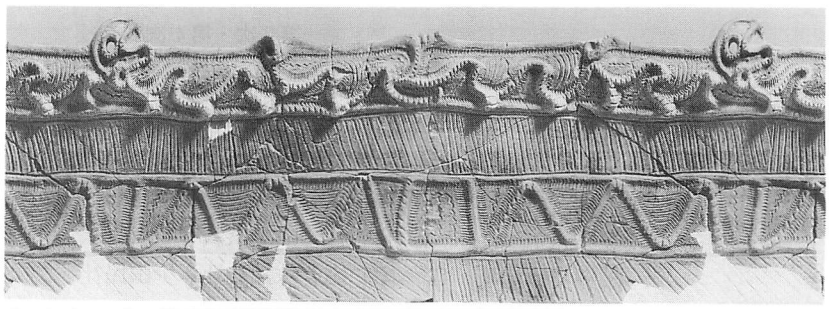
175土坑



24号住居跡



183土坑



26号住居跡

報　告　書　抄　録

ふりがな	かぶつっぱらいせき
書名	甲ッ原遺跡 II
副書名	ー第３次・第４次調査ー 一般県道須玉･八ヶ岳公園線建設に伴う発掘調査報告書
シリーズ名・集	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第114集
著者氏名	山本茂樹・今福利恵・五味信吾
発行者	山梨県教育委員会
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地	〒400－15　山梨県東八代郡中道町下曽根923　ＴＥＬ 0552－66－3016
発行年月日	1996（平成８）年３月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
かぶつっぱらいせき 甲ッ原遺跡	やまなしけんきたこまぐんおおいずみむら 山梨県北巨摩郡大泉村 にしいであざわだ・あざおおばやし 西井出字和田・字大林		全国遺跡 地図 山梨県 山梨１－42 県番号49－4	35°51′	138°24′	19910520 ～ 19911227 19920420 ～ 19921030	3,520m²	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
甲ッ原遺跡	集落跡	縄文時代 平安時代	前期住居跡６軒 中期住居跡26軒 土坑　314基 住居跡　１軒	縄文土器・土鈴 石器・琥珀 土偶 須恵器・土師器	特殊脚付鉢（赤色・黒色塗彩有り） 琥珀製垂飾

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第114集

甲ッ原遺跡 II

（かぶつっぱら）

―第３次・第４次調査―

――一般県道須玉・八ヶ岳公園線建設に伴う発掘調査報告書―

印刷日　1996年３月25日
発行日　1996年３月29日
編　集　山梨県埋蔵文化財センター
発　行　山梨県教育委員会
印　刷　株式会社　少国民社